

奇譚クラブ

■ 新しい風俗文献誌 ■

1967

9月号

9-September



昭和四十二年九月号

定価三五〇円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Akatsukisyupan
Osaka Japan



9月号 ¥ 350

奇譚クラブ

奇譚クラブ

昭和四十二年九月号

元が届くのです。残部二十数冊につき、すぐお申込みを！

柱縛り強烈ムチ打

関谷富佐子 略号（みあ）

臀部に炸烈する鞭

関谷富佐子 略号（みこ）

答にのけぞる女体

関谷富佐子
略号(みけ)

苦悶する女の表情

関谷富佐子
略号(みて)

高手小手の全裸身
大手札三枚一組 一〇〇〇円

大手札三枚一組 一〇〇〇円

鞭に泣く美貌の女

関谷富佐子 略号（みも）

転り回って泣く女

関谷富佐子
略号（みひ）

鞭に喘ぐ全身表情

関谷富佐子 略号(みの)

高手小手の全裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円

豆紋りに輝く美貌

中河 恵子 略号(なめ)

赤い絨氈に悶える

中河 恵子 略号(なさ)

豊満な臀部を晒す

中河 恵子
略号(なし)

美しき緊縛の立像

大手札三枚一組 一〇〇〇円

転落寸前の緊縛女

左近麻里子 略号(なも)

椅子に羞らう美女

大手札三枚一組
左近麻里子
路号(なす)

果身を黄える

大手札三枚一組 一〇〇〇円

の自覚感によつて進んでくる。

私書箱第十四号、箕田京二へ。



昭和四十二年九月号

<第21巻第9号・通刊第231号>

奇譚クラブ 9月号 目次

◇奇クサロン◇

○S・M世相問答……覆面子(9) ○サロン楽我記(第三十九回)……辻村隆
 (10) ○責め演劇・続続「拷問くの一」を演じる……高林利男(10) ○夫婦プレイで
 闘んだ幸福……田宮恭介(12) ○僕のイメージ集「珍魚料理」……室井亜砂路
 「双花散華」……桐原紫門(13) ○妻とM特……山下好次郎(14) ○奇クと私
 ……萩原正(16) ○梨の花……花田一郎(18) ○編集部より……編集部(18) ○
 ピンク映画と拷問芝居「責め随想」……高村初子(21) ○短信往来……黒田寿穂へ
 福原実(20) ○短歌「吊し責め」……高村初子(21) ○「花と蛇」を演じる……小
 矢かほる(22) ○同好者会合「華燭の典」……野江三郎(24) ○「ハレム」の哀歌……小
 小枝真佐治(22) ○補絵応答作品「華燭の典」……野江三郎(24) ○「ハレム」の哀歌……小
 容子(23) ○サロン展望台「マニアも歩けばPANに当る」目出鯛三(24)

△本文△

本誌自粛の徹底……	編集部……(25)
鬼六談義『好色の戒め』……	団 鬼六……(26)
随想 Sの否定とSの肯定……	中野 主弥……(34)
創作「水中花」(六)……	芳野 眉美……(36)
妻を初めて縛るの記……	文橋喜美三……(43)
稿 談 性風俗資料入門(6)……	斎藤 夜居……(44)
「陶酔の乳房」を読んで……	浦沢 文夫……(52)
連載サティズム小説 心傷たむ遍歴……	西条 操……(54)
奇クの編集に対する一考察……	夜乃 探郎……(65)
連載S小説「花と蛇」(続編第三十四回)……	団 鬼六……(82)
この底にあるもの……	島内晋一郎……(96)
懸賞入選作品	
SFストーリー「地底の国」(後篇)……	山口 広……(98)

カメラルポ「この女と」(左近麻里子の巻)……	山本 一章……(111)
ゴムに憑かれた女の告白「雨の夜のゴムプレイ」……	梅川 幸子……(115)
日本婦人部隊奮迅録「海嘯の譜」(上)……	黒淵 嬰一……(119)
創作「復讐」(ハガンベッタ)……	千葉 青鬼……(114)
告白 女性肥満体の郷愁……	美川美美子……(151)
SMカメラ・ハント(青柳千紗の巻)……	
黒の拘束帯……	辻村 隆……(151)
ルポルタージュ「ソ連展」の刑具……	おもだかし……(170)
オムツ幻想曲 ある「レッスン」……	原 由貴子……(171)
マタニティ・ヌード観賞……	瀬沼 四郎……(179)
「奴隷妻」に魅せられて……	柴 利好……(186)
懸賞入選 妻と女と縄(ブラジルの女)……	花影 叢……(188)
手記「化物の話」のはなし……	能美 積……(206)
論 評 現代マゾヒズム考……	渋谷 青樹……(210)
告白小説 日曜日の犯罪者……	間宮清満彦……(215)
浣腸幻想 痔疾病院の白昼夢……	秋根登志雄……(220)
女相撲同好会(その結成まで)……	海野美津男……(224)
随想 II 煉獄II(最終回)……	黒井 珍平……(231)
告白「愛・渾・記」……	会津 太……(236)
責めと灸の研究……	川崎 進一……(240)
マゾ・ストーリー「母娘蜂」……	春川ナミオ……(243)
感想文「高村初子さんの歌を讀める」……	保藤 久人……(245)
読者通信……	編集部選……(250)

ニユーモデル新趣向力作緊縛写真案内

Y字型宙ハリツケ

大手札四枚一組 略号五〇〇円
左近麻里子 略号八ちね
両腕を高々とYの字に広げて柱にハリツケられた麻里子の美しい背中に宙縛りで見えさせます。

開股逆さ吊り姿態

大手札三枚一組 略号五〇〇円
左近麻里子 略号八ちて
両脚を大の字に思いきり開いて足首を鴨居に縛られ、後手縛りのまま逆さ吊りになった左近嬢の美しくも無残な姿をのぞいて下さい。

強烈菱縄柔肌縛り

大手札四枚一組 略号五〇〇円
左近麻里子 略号八ちや
豊かに息づく両の乳房、可愛いお臍を中心にして強烈な菱縄縛りで柔肌をいためつけます。

豊満な臀部への責

大手札四枚一組 略号五〇〇円
左近麻里子 略号八ちみ
豊かさは両の乳房ばかりか恰好のよい双丘も又適度の膨隆を見せ、この双丘を最もあらわに見せた縛り方で魅力が発散。

猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 略号五〇〇円
左近麻里子 略号八ちつ
猪吊りの滑車責め

両手首両足首を揃えて一つに括り滑車できりきりと吊り上げれば、豊満な女体は完全に宙吊りとなつて一本の縄を中心にして回る。

悶々たる尻立縛り

大手札四枚一組 略号五〇〇円
左近麻里子 略号八ちな
シミ一つない豊かな尻を突っ立てた女体はライトに白く輝く。

股間立縛りの表情

大手札四枚一組 略号五〇〇円
左近麻里子 略号八ちす
首、胸、胴と横縄を掛けながら女体の中心を縦に割った股間縄で完全に緊縛された正面の立像。

全裸立縛りの表情

大手札四枚一組 略号五〇〇円
左近麻里子 略号八ちさ
一糸まとわぬ真白な裸身にむこたらしく喰い込むドス黒い麻縄姿で暫し佇立する若々しい立像。

豊満緊縛のあえぎ

大手札四枚一組 略号五〇〇円
左近麻里子 略号八ちに
首縄股間縛りで床の上に身を投げ、げだしたムチムチとした若い女の肌が目の前で艶に躍動している。

緊縛と柔肌の交錯

大手札四枚一組 略号五〇〇円
左近麻里子 略号八ちこ

抜けるような白さの肌にゴツゴツとした麻縄の喰い込む奇妙なコントラストの醸し出す雰囲気。

投げだされた裸女

大手札四枚一組 略号五〇〇円
左近麻里子 略号八ちく
両手首を厳しく背中括られて身動きの出来ない裸女が椅子から転落して床に投げだされた。

輝美表と裏の二態

大手札二枚一組 略号三〇〇円
左近麻里子 略号八ちけ
白の六尺褌をキリリと締めた女の前面と背面の二態の美しさ。

美女の鼻を弄そぶ

大手札四枚一組 略号五〇〇円
左近麻里子 略号八ちる
美しい麻里子嬢の鼻の頭を指の先にてめくり上げ、鼻の穴の奥までをさらけ出した弄鼻の表情。

美女の鼻孔を觀賞

大手札四枚一組 略号五〇〇円
左近麻里子 略号八ちれ
女性の鼻ファンのために特に新鮮な左近嬢の可愛い鼻をかりて鮮鋭なピンポイントによって鑑賞願う。

開孔器で鼻腔検査

大手札四枚一組 略号五〇〇円
左近麻里子 略号八ちき
鼻の孔を開孔器で押しひろげて、腔内をのぞき込もうとする有様を、いろいなる角度から狙った。

開股拷問椅子正面

大手札四枚一組 略号五〇〇円
中河恵子 略号八ちな
この羞恥の椅子は露出好みの恵子嬢にとつては、嬉しい拷問の椅子でありSファンのとつては、脚大の字開きの垂涎の作である。

甘美な椅子プレイ

大手札四枚一組 略号五〇〇円
中河恵子 略号八ちあ
全身をしばれさせる甘い陶酔はこの悪魔の椅子に縛られたときから襲ってきた。今や羞らいたも忘れた彼女は大胆なポーズをとった。

のけぞる痛打の果

大手札四枚一組 略号五〇〇円
関谷富佐子 略号八ちな
乱打するムチによる反応は驚くほど敏感で全身を戦慄させ顔をのけぞらせて悦虐にむせび泣く夫人の真に迫った表情を把握した。

臀部に炸烈する鞭

大手札四枚一組 略号五〇〇円
関谷富佐子 略号八ちな
肉づきのよい固ぶとりの丸々とした臀部にブチッブチッと快い手ごたえと共に皮鞭が炸烈し、白い肌はミミズ腹れがふくれ上る。

痛打による表情集

大手札四枚一組 略号五〇〇円
関谷富佐子 略号八ちな
関谷打による豊かな苦悶の表情を、各角度から狙いをつけ、その美しい残酷のムードをふりまく。

お申込みは、大阪阿倍野局私書箱第十四号——箕田京二へ



覆面子 編集子

○ 大変御無沙汰しました。先ず雑誌の恵送をお礼しておきます。三十九年以来ですね。たしか十月号です。足掛三年ってところで、すか。雑誌の貰いっぱなしで申訳けないと思っています。

△ いやいや、とんでもございません。ところでベトナムの長期戦が泥沼に入っているのに、イスラエルとアラブの紛争、それに中共の水爆実験と、何かしら慌しい世界状況になってきましたね。

○ そう、国内でも山陽電鉄の電車の中に時限爆弾を仕込んだ奴がおるし、ビルの屋上のビヤホールから灰皿やソース瓶を投げた奴がいる。全く狂っていますね。

△ 今朝の朝刊によると屋上から酔っぱらってソース瓶を投げ、乗用車の屋根を傷つけた奴は十九才

の大学生で、その大学がキリスト系というんですから驚きですね。

○ 未成年者禁酒禁煙法があるのに、ビヤホールで未成年の大学生が悪酔いするまで飲む奴も飲む奴なら飲ます奴も飲ます奴だ。こんな奴らが聖書を読んだり讃美歌を唄ったり、アーメンなんて、殊勝らしく誦えているのかと思うと虫酸が走りますよ、全く。

△ キリスト教は好きですか。

○ いやキリスト教は大好きですよ。打たれても更に片方の頬を出す無抵抗主義や心の中で思っただけでも姦淫したことになる純潔主義は、一面マゾヒズムにも通ずるものがあると思います。だから一時は教会へ通ったこともある位です。磔になっているキリスト像、

S M 世 相 問 答

覆面子

あの足首から血を流している像はマゾの臭気に満ちていますね。

△ 本当にキリスト教の精神を体得したら争いや戦争は起らない筈なんです。世界中どこかしらで何時も争いが起っている。

○ だが私の経験では、無茶をする奴の方が戦闘間では役に立っている。如何に最小の犠牲で大量の殺人をやったのけるかというのが戦闘に於ける最も大切な課題だから、敵の戦車に飛び乗って手榴弾をぶち込むというような常識はずれの無茶が勇敢だとはやされるんです。ソース瓶を投げた大学生なんか戦時中だったら、案外金鵄勲章を貰うくちかも知れないよ。

△ ああ、貴方は戦時中は陸軍歩兵大尉殿だったんですね。

○ 火線の下級指揮官という者は消耗品の一種ですから生きていたのがめつけものです。で、最近はやはり悪書追放運動というのが盛んなようですが、我々の育った青春時代から見れば、有難い自由謳歌の時代といえますね。

△ 流行歌のメロディを吟んだだけで配属将校に横っ面を張り飛ば

された時代ですから、その当時を思うと今は有難い世の中です。

○ 学校で受けた軍事訓練が卒業すると、直ぐ役に立つというわけです。幹部候補生から予備役士官。戦場という職場が手を受けて待っているのだから、直線コースで殺人請負業者の仲間入りってわけ。

△ 今の若い人達に戦争はやらせたくはないですね。殊に若い女の人達は最大の被害者ですから。

○ しかし、その若い女性が一度母になると自分達の息子を戦場へ駆りたてて、あの怖ろしい世界大戦が戦われたんですものね。世界中の母親達が挙って平和主義だったらいいのですが、真面目な人達程、富国強兵に加担するんです。私も出征中、如何に母親から激励されたか知れないですよ。

△ しかし、今のよう世界が強国が競って核の軍備を拡充していると第三次世界大戦は必ず起るよ。うな気がしますね。一生の中に二度も大戦を経験するのは、かなわない気持ちですが……。

○ 全世界が焦土になるから核戦争が起らないという理由にはならないと思います。

△ そうなると悪書追放運動も必要がなくなるというわけですね。



(第三十九回)

辻村 隆

幾分眉唾ものかも知れないが、
六月六日の「新大阪」新聞に面白

責め 演劇

続続△拷問くの一▽を観る

高林利夫

五月二十日の内外スポーツ紙
に次のような広告がありました。

“大好評！遂に四週続演決定！

堂々五月二十九日まで上演中。

「拷問シリーズ」で、人気爆発
の興行界注目異色実演劇団
(赤と黒)五月特別公演、続々
拷問くの一全五景、出演者、志

村旺子、小島マリ、小柴とも子
血も凍る忍者の拷問！生々し
いこの迫力！見逃す勿れ！
この話題作！”

先日、私も、この話題作を見
逃す勿れというわけで、観て参
りました。上演中の劇場は、本
誌に投稿されました実演「拷
問」と同じ劇場で、丸の内カジ

い話題がのってあった。(西ドイ

ツに全裸の女を見乍ら酒ののめる
バーがある。といっても、単なる
ヌードではなく、カウンターの中
の洋酒棚に、体をがんにがらめに

縛った若い全裸の女性が、いつも
四、五人飾ってあるという趣向。

このバーはアンチフェミニストや
サディストには、いたって好評と

か。縛られて動けない女を眺め乍
ら酒をのむという図は、女性優位

を嘆く日本の男性にとっても、一
種異様な魅力があるはず。そのう

ち日本にも、こんなスタイルのバ
ーが出現するかも知れないね”と

ある。六月二十四日号のF6セブン誌

の、世界の奇妙なバー20軒という
レポートを読んだら、こう書いて

あった。
(カウンターの向うの酒棚を改造

して、人間がひとりやっ手脚を
曲げてはいっていられるくぼみを

つくり、そのくぼみの中に、ロー
プで縛り上げた裸の女を押しこん

であるというショッキングな店。
これは「豚」という、単純な店の

名で、イタリーのミラノにある。
がんにがらめに縛りあげられた、

美しい裸の女が、棚の中にいつも
バシ座です。△拷問くの一▽は、

拷問の景が二景あります。第二景
の大奥の景と最後の拷問倉の景で

す。
大奥の景では、お末の女中が、

春日局の密談を立聞きして捕まり
誰に頼まれた、白状しろ”と責

めたてられます。
「この女を裸にして縛るのだ」

春日局の命令で、忽ちのうちに
細紐を解かれ、その細紐で後手に

縛られます。着物がはだけて乳房
がのぞきます。
「白状しないなら体に聞く。責め

五人は押しこめられている。縛り
方がうまいので痛みは感じず、押

しこめられているポーズもさして
不自然なものではないので、女性

はそれほど苦しくはない。でもた
まに、演技はたっぷりに、さも苦

しげに呻き声をあげたりする。こ
れが店に集まってくるサド趣味の

男たちにはたまらない快感なの
だ”とある。

新聞が西ドイツで、週刊誌はイ
タリー。これで日本にあれば三国

同盟だが、今の処わが国ではきか
れない。私が失業したら、一つこ

んなバーをつくってみたいね。
× × ×

箕田編集長より回送のあった、
夫婦プレー希望の方がおられたの

で、過日寸暇を割いて、河内長野
市までM夫妻を訪問した。建売住

宅に夫婦二人きりの結婚後三年の
若い夫婦で、訪問する人もさして

ないのか、座敷の六畳の間を、す
っかりプレーの責めの処刑の間に

改造してある。天井板をめくって
梁に滑車をつけ、X字型の逆さは

りつけの型木や、穴をあけた立柱
など、その熱心ぶりに先ず度胆を

ぬかれた。M氏は若いに似合わず
刑罰拷問型のS性で、三年かかっ

て若奥さんを飼育されたとか。午

大好評! 遂に4週連続決定! 堂々5月29日(土)生演中

赤と黒 5月特別公演

続続 拷問くの一

全5景

丸の内 カジバシ座

お末の女中無言で答えません。
「ええい、このお末の者を拷問にかけろのだ。あれを持ちや」
責め道具が出されます。
「この女を、おさえていや」
春日局が責め具のヤットコで乳房を挟んで捻じ上げます。
お末の女中は痛さに「ギヤー」と悲鳴をあげ、という細工が

してあるのか、責められる女の胸から血が滴っていました。次に樽に顔をつっこまれて、水責めにあい、遂に白状します。
拷問蔵の景では、中央に水車があり、その横には三角にとがった木馬。その他にもソロバン責めの板や吊り責めなどの責め具が置いてあり、水車の前に若い女が、短い腰巻と襦袢一枚で正坐しています。春日局が、
「上様の意にしたがうのだ」
女はいやだと断ります。
「強情な女め、責め折檻してでも上様の意にしたがわしてみせようぞ。ソロバンがよいか、木馬か、それとも吊るし責めか、好みの道具で責めてくれる。言うてみや、しかし上様に献上するその肌をきずつけることもなるまい。水車責めがよかろう」
女は黒装束の忍者に手どり足どりされて、水車に大の字にハリツケられてしまいます。紐を締めていないので、胸が開いて形のよい両の乳房がむき出しになってしまいます。憐れです。
水車がギギーときしみながら廻りだします。女の身体は首が真下になります。二本の綺麗な

足が天井を向いています。水車にくくりつけた赤い紐が足首に喰い入り女の足は苦しさにもだえています。「ギギー」水車は忍者達の手で廻り続けます。ハリツケられた女は悲鳴を上げながら、一時の休みもなく責め続けられるのです。
敵の女忍者母影が捕えられて、拷問蔵につき出されます。女忍者くの一の拷問です。水車責めは一時中止されますが、女は水車にハリツケられたままです。くの一は並の女とは違うというので、忽ちに三角の木馬で責めます。後手にきびしく縛られ、短い腰巻だけで、男忍者二人のために木馬に乗せられてしまいます。くの一母影は苦しみうめき声を上げます。短い腰巻はまくれ上って太腿も露出していきます。責め手は容赦なく両方の足に大きな石を括りつけ、くの一は苦しみまわります。
「えー、もっと責めい」
責め手の忍者二人は鍾りの石に足をかけて体重を加えるのです。くの一はのけぞり返り、太腿から赤い血が流れ出しました。無惨です。故伊藤晴雨氏の面の再現です。この後、拷問蔵の女二人は救い出されます。

後一時から延々五時間、夕方までかかってM氏大奮闘で、数々の責めを開陳して戴いた。単なるフォト用でなく、その責めが、ひとつひとつ、念入りに縛って凝っているの、ワンカットに三十分近くかかる。最後が、梁からの開股逆さ吊りで終ったが、残念なことに絶対フォトを誌上に発表してくれななどの事。それというのも奥さんの顔は勿論判っきり出ている上、全裸なので、これは所詮私蔵版となるより仕方のない運命であったが、五時間近く、この責めに堪えた奥さんの従順さに敬服した。最後に全裸の奥さんを雁字搦目に荒縄で縛り上げて、M氏が奥さんをいたぶり乍ら、私と乾杯しようというのだから頭が下る。M氏と二人、拷問部屋で、雲助よろしく酒くみ交し乍ら、真白い肌の、痛々しく荒縄縛りで転がる奥さんを横眼に、のんだ酒の味は忘れられない。深く交友を約した。フォト発表出来る折も孰れあると思うが、夫人は近頃猿之助と離婚騒ぎのある浜木綿子にそっくりの二十五才の素晴らしい美人である。次回はM氏に代って私が、M夫人を責める段取りであるが、今から胸を弾ませている。

〔手記〕

夫婦プレイで

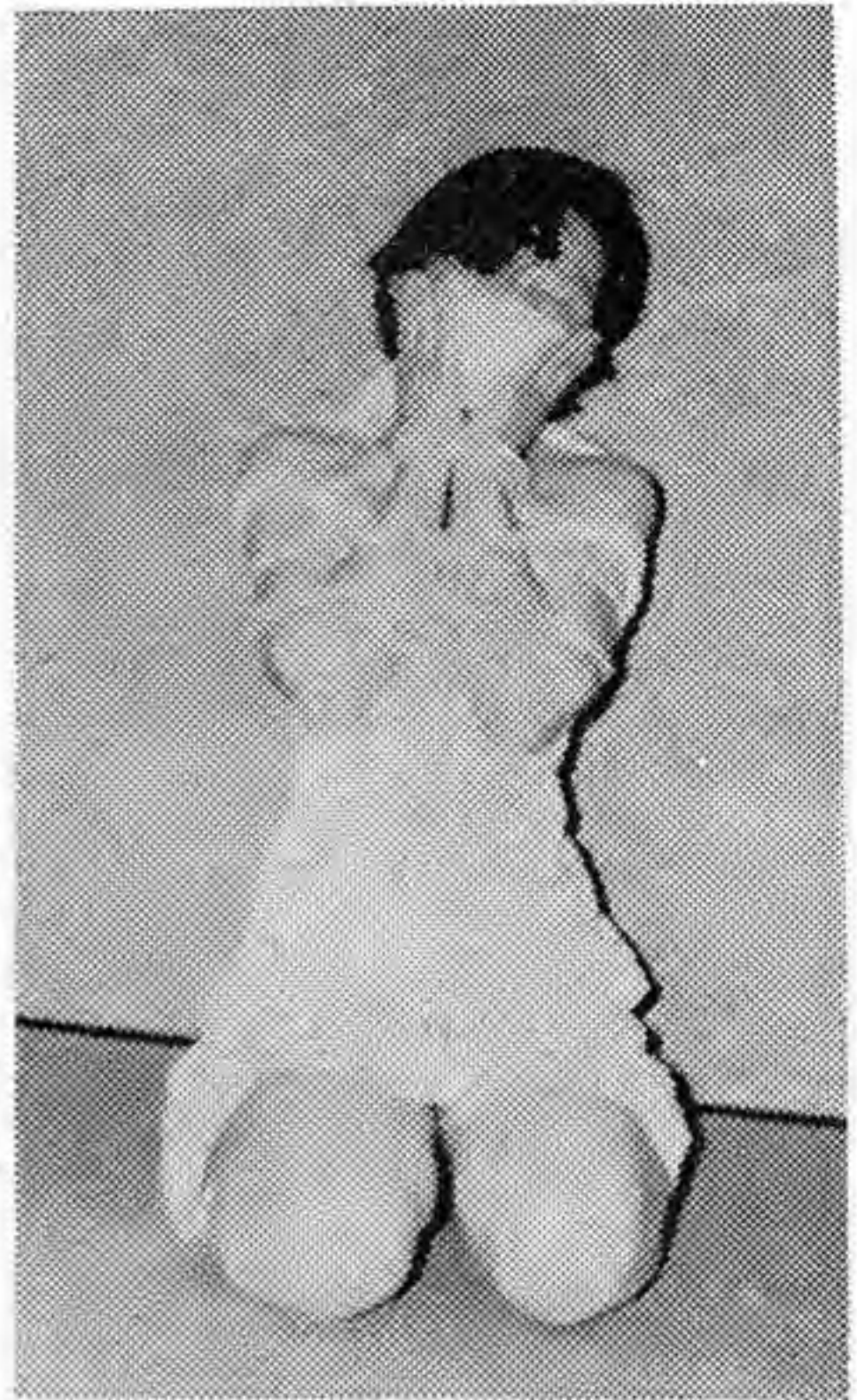
掴んだ幸福

東大阪市

田宮 恭介

十年来の古い奇クファンです。本年度の正月より奇クを直送していただくようになりましたが、そ

れは遂に妻を説得出来たからに外ならないのです。結婚して五年間というものの、私と妻とは他人目には仲の良い夫婦に見えても、何かしっくり行かぬわだかまりがありました。私のS性を妻が極度に毛嫌いしたため、秘かに溜めていた奇クもいつの間にか廃棄され、机の底深く隠しておいた、分譲フットなども、妻の目にとまったのか、気付いた時は焼かれていました。聡明で柔順な妻なのですが、私のS的趣向にはどうしても同調してくれません。これが、何かしら冷たい夫婦となっている原因だったのです。それがフトした機会に好転したのですから、時によっ



ては禍転じて福となすこともあるのだと思いました。

絶対大丈夫だと信じて、私に内緒で、妻が身内に融通した二十万円の手形が、業界の不況で倒産して、不渡りとなったのです。

妻は蒼くなつて、私に詫言しました。私も驚きましたが、その時思ったことは、この二十万円の不渡り手形の一件をタネに、妻を徹底的に飼育することでした。一生の伴侶の妻の飼育料が二十万円なら高くもあるまいと腹をきめて、妻を問責する手段に緊縛をとり入れたのでした。自分の、身から出た錆の不始末故か、妻は一言の弁解もせず、私の言いなりに縛られました。

た。私は妻への怒りを、うまくプレイへ転換しました。そして誓約書を書かせたのです。賢明な妻は私がプレイに利用しようとしていることを知っているに違いありませんが、それからというものの手平を返したように私の趣向に協力するようになりました。

私はS趣味と申しても、緊縛よりもむしろ浣腸や、アーマスに興味を覚えます。絶対いやがっていた妻も、始めは渋々ながら服従し、今ではすっかり板について来まして、各種のクリスタール用の器具も揃えました。ついで服従を強要するため、体毛も全部綺麗さっぱりなくしてしまいました。私



— 僕のイメージ画集 —



「珍魚料理」

室井亜砂路

の場合、かみそりを使うと又ぞろ伸びてくるので、丹念に一本一本毛抜きを使って除去したのです。私の少女趣味によるのだと思います

す。縛り方も徐々に強烈になりつつありますが、プレイのあとの私の妻に対する奉仕が、微に入り細きたりの夫婦生活が、まるで嘘のような、充実した毎日なのです。



「双花散華」

桐原紫門

仕事にもそのせいかハリが出て、妻の犯したあやまちも今は笑い話で済ませる程に順調に進展しているのです。あの二十万円の不渡手形がなかったら、恐らく今も、不平不満の充ちたりぬ夫婦の生活であつたに違いありません。

先月から愈々カメラに着手し、D・P・Eも自分でやれる様になりましたので、近影二葉を同封して、諸氏の御批判を仰ぎたいと思います。後手縛りは沢山あります。が、それでは皆様のフォトと同巧異曲と思い、少し変った前手縛りの、顎をうけた変った縛り方を御披露します。妻は小柄で吊りには最適です。自家製は殆んど全裸ですが、奇巧用として着衣で試作しました。

最後に、編集部へのお願ですが、私達の夫婦プレイが、もし辻村隆氏のカメラ・ハントになるようでしたら、是非共辻村氏に御連絡下さいませお願いいたします。

妻は二十六才、小生三十才で、現在子供はありません。妻には夫婦プレイのこと、辻村氏のハントのこと、すべて誓約させましたから御心配いりません。いつでも都合のつく職業ですので、辻村氏より御連絡あれば何時なりと駆けつけます。



私の夫婦プレイ

妻と「M特」

日下好次郎

私がこの世界に興味を持ったきっかけは、あまとりあから出版された高橋鉄先生の「異常性愛三十六相の分析」を本屋の前で、何でも何んでも行来した後、買い求め、くり返し、くり返し読んだ時からです。もっとも、当時十七、八の私にどれだけの理解力があったか疑問ですが……そして、高橋先生が指摘しておられるように、私の幼少の頃の些細な出来ごとを抜きにしては考えられないかもしれないかもしれませんが、それを書くのが目的ではないので後日にゆずって続けます。

私達夫婦は、結婚後十年を過ぎたばかりです。錫婚式は六月一日

でした。

「牛乳プロの饗宴」「ヴィナスの重石」「四百字讃歌」などを妻が読む時は、私は毎時も妻の足首、ふくらはぎ、ももなどを揉んで上げるのを常にしております。フットの上でうつぶせになり、活字を追っている妻が、時々、足元の私の方をふり向き、眼元をとろんとさせて、ニヤリと笑いかけられると、私はすいこまれるように妻の足を起こし、足の裏に従属を意味する頬ずりをしてから、土ふまずに軽く接吻してしまいます。すると妻は「ヨシヨシ」と云った顔つきを残して再び読み続けるのです。

妻は、同じものを二度読むのを拒みます。それに、市販される読物には自ずと限界があるので、以後、遠慮なく書きこんだ自作を、もっぱら読んで貰っております。作品創作に当っては、山とあるグラビアのスクラップが大変参考になり、役に立ちました。

毎時、妻が読んでいる時は、もはやふくらはぎを揉んでおりますので、読み進んで行く内に、妻の感情の動き、血汐のさわぎが、微妙に、腰や足先に表われるのがよくわかり、私の方も気に入って貰えた悦びがジーンと来て、思わず揉む指先がふるえることがあります。

その様なわけでありますから、出来、不出来、好みに合っているか、いないかが大体つかめて、次に書く時の重要な参考にする訳ですが、より完璧なものを献上するために、気に入った所には赤線を引いて貰うことにしました。特にいい所は二本線を……。

嗜好調査もいろいろ組合せを替えて何度も行ないました。例を示しますと、室内乗馬。トイレットペーパー。ムチ打ち。正座させ、片手でアゴを引き起こして、一打ち一打ちたたしかめる様な平手打ち。

ち。馬乗りで平手打ち……などと、十項目ほど連記して、気に入ったものの順に一、二、三……と記入して貰うのです。

過日「M特」女王様に飼育される日々を購入したので、その夜、早速に妻に見るようにと差し上げたのですが「いや——。こんなばっかり」と、いつものように照れくさがり、一度は押し返えすようなしぐさをします。

それでも、しばらくすると赤エンプツを片手にM特をめくる妻のいつものポーズが始まりました。妻の足を揉む私。以下はその報告です。

よい……は1。特によい……は2。表紙を頁一で進めます。

まずめくって二頁上1。三頁上1下2。室内乗馬が好きなのがわかります。それにしてもどうです。いきいきと躍動感あふれる乗馬姿、山原さんならです。四、五頁はなし。六、七頁四枚にオール1。八、九頁の六枚にサインなしは意外。けれどもこれは、私が、私なりの解説をしたのが影響したのでしょう。十、十一頁の四枚にもサインがなかった。理由は、「首をしめているのが嫌い」だそうです。私は全体の中で特に気

入っている四枚だけに、残念でした。山原さんの表情（作った顔つきでもなく、緊張しきった表情でもない、ごく普通に、こうあるだろうと思われる最高の出来）力のバランス。足の位置も、云うこと

なし、よだれが出るのみ。十二、十三もなし。ムチをさけたのでしよう。軽いムチ打ちを妻にせがんで数回してもらったが、或る夜、強烈な妻の一打に私の体はひとまわり小さくなり、パネの

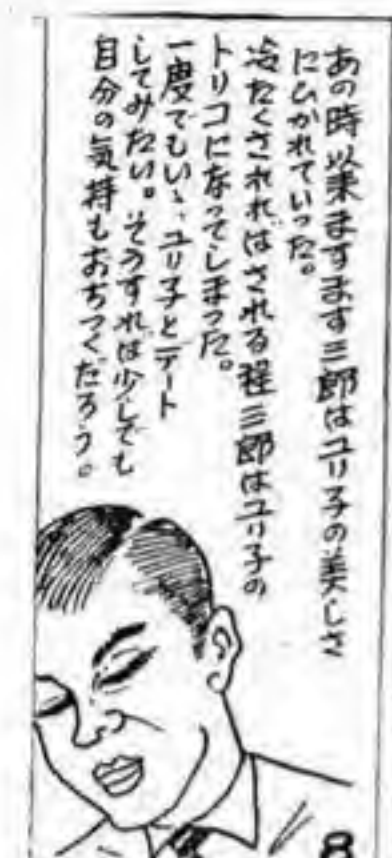
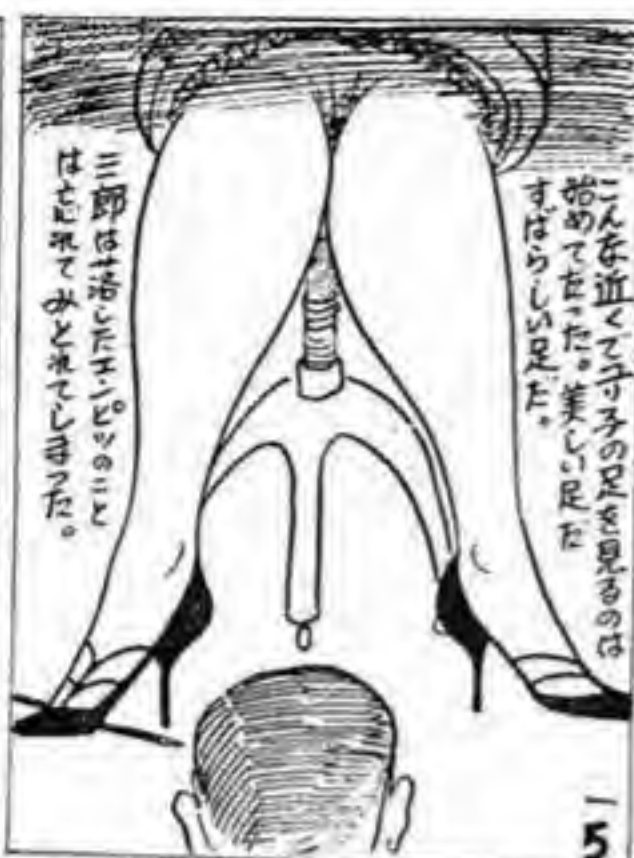
ようにピクツと跳ね苦悶の表情を顔面一ぱいにあらわすさまに、妻もしらざるの内に力が入り過ぎ、ムチの跡が幾条も残ったことがあります。

2下2。十九頁下1。三十頁上二。十三頁なし。二十四頁上右1。二十六頁上1。二十七頁上1下1。二十八頁下1。三十頁上1下1。三十一頁上2下1。

以上の結果、妻が足舐めに異常な興味を持っていることが解りました。過去の調査では常に下位にあったのに……とすると最近内プロを建てたからかもしれない。湯上りの清い足ゆえ、遠慮なしに振舞えるのでしょうか。私は、すみやかに、宇能さんの一文「可愛い栄子（原文は蘭子）いつものようににぼくの額に足をあてておくれ。そして、軽く小突いておくれ。踊りの練習のように。君の柔かい、いい匂いの、ひんやりする足の指で」を拝借し、足の裏と指を舐める時のサインを記しました。

即ち、強くつねる一歯を強く当てる。軽くつねるは、歯を軽く。指一本で強く押す——舌を強く。指先で輪をかく——唇で親指をつみしやぶれ。又輪をかくと次の指に同じ作業を。指二本を当て引くと——指と指の間を舐める。三本で引くと——指のつけ根のくぼみを……ポンとたたくと——早く。ポンポンたたくと——もっと早く……etc

(了)



奇クと私 (2)

萩原 正

最近の奇クは、以前に較べて益々充実してきたように思われます。なかでも七月号はこの自製の折から、編集部御苦勞のほどがうかがわれます。グラビアや口絵が廃止されてもう幾年かたちますね。奇クの読者の中には、読者通信欄にみられますように、文章よりグラビアやあるいは口絵に、より多くの愛着を感じておられた方も多いと思います。そのような傾向をおもちの方々にとっては、現在の、奇クはきのぬけたサイダーのようなものでしょう。あの頃の奇クがなつかしいと、懐古趣味に浸っておいでの方も多いと思います。私もその一人といっているかもしれません。ひまとお金のある毎に、古本屋を廻っては、奇クのバックナンバーを買い集めています。しかし確か東京の古本屋さんだったと思いますが、たまたま一冊が目にとり店に入ってみると、奇クを筆頭とするその傾向の本が見事な程ずらっとならんでいて驚

きました。またそれ以上に驚いたことには、昭和二十七、八年のものが、二千元以上もする定価がついています。その上、ビニール袋のカバーがしてあり、表紙だけしか見られないようになっており、

手にとって見るわけにもいかず、それとっておいそれと買える値段でもなく、すごすごひきかえした次第です。この時ほど、お金がなくてはならなかったことはありません。

奇クの価値は古くなればなる程、値うちがあがってくるもののようなのです。このようなものこそ、本当に高度の文学といつてよいかもしれませぬね。文章と写真についての私見です



が、まず、写真の好きな人にとって、これ程直接的に話しかけ、説明してくれる物はないでしょう。写真というものの刺激は視覚から得られ、ゴマカシなく全部が写し出されているからです。しかしこれはあくまで一方的に刺激が入ってくるために、エクスタシーに浸れるわけではありません。しらずしらずのうちにグラビア内におけるモデル様、あるいはそのほかのものに、見る人の心を移してしまっているわけです。

例えばグラビアの中におけるモデル様の、縄目のむごさによる表情の中に自分の心の中を転化しているとかいった場合です。あくまで視覚ということが主ですが、その写真の中に自分の想像を介入するということにおいて、私は文章も写真も口絵も、そのもの本来は同一のものであると思います。文章においては、読む人は、文章の中からあらゆる事を想像するわけです。ですから文章においても写真と同じエクスタシーが得られるわけですね。しかも写真や口絵は何回も見ていると、あまり刺激を感じなくなるものです。写真や口絵で本当に良いところといえば、初見の時、一瞬グッとくる刺激で、

この直接的なものが、観賞者の眼を奪い、ハッとさせるわけです。けれども二回目、三回目と眺めるうち、時がたつにつれて、次第に刺激も薄くなり、終りにはなくなってしまうでしょう。この点文章

はそれが名文？ であればあるほど、そこに描かれる刺激は益々強いものとなりえましょう。「花と蛇」「心傷む遍歴」などは、よい例だと思います。何かとりとめのないことを書き

ましたが、結論を申しますならば写真はせんこう花火にたとえられ、文章はするめいかに例えらるでしょう。これから奇くは、私の一生の友となるに違いありません。発展を祈ります。



梨花悠紀子を想う

『梨の花』



花田一郎

奇クのバック・ナンバーを求めて歩く神田の町には、異様なノスタルジアがただよう。

今の奇クには数年前のけんらんとしたグラビアはない。また豪華なさし絵を描いた画家の登場もなくなった。最近号の「花と蛇」のさし絵が、創刊当時の奇クの目次の裏側を飾った力作の再利用であることは、オールド・ファン（私）がはじめて奇クを知ったのは、終戦直後の国電「大塚」駅近くで、

農家で用いる荒縄で縛り上げられた裸女のグラビアからである）なら知っている。

いわば飛車角落ちの奇クがどうしてこんな恋しいのか？ しかも驚いたことに、この飛車角落ちの奇クの今年の五月号が、どこの店にも一冊もないのである。奇クのバック・ナンバーを売っている店くらい私は知っているのに——理由は六月号を買ったとき、読者通信に目を通してすぐ分かつた。

カメラ・ルポに大塚啓子が登場しているのである。関谷富佐子が登場した六月号も、同じくすぐ売切れになったのではないか。

梨花悠紀子、大塚啓子、関谷富佐子、そうした一連の名前は、帰省列車が帰りつく郷里の二つ三つ手前の駅名のようなひびきを持っている。

梨花悠紀子の最後の通信が埼玉からであった。だから私は埼玉銀行にあずけた預金は、引き出して使いたいという気が少しもおこらないのである。やむなく引き出したときは後味が悪くて、パチンコをやってスツたりする。この一文は梨花悠紀子の目にとまらないであらうし、まして奇クが家庭建設に役立っているなどと偽善ぶるのはバカげている。

六月号を例にとってみても、久しぶりに「誌面から立ちのぼる香水の匂いとムチの音」を鼻と耳にした。なかでも「私をムチ打って下さい」のタイトルと、同じ39ページの「柱に両手を縛りつけ、唯手の自由を奪ったのみのポーズ」のアイデアは秀逸である。ただこの「柱」が、細い白樺の若木で、場面が深山であれば、どんなにすばらしいかと空想する。

編集部だより

○カメラハントにカメラルポ。本来豊富なフォトがふんだんに挿入される筈のところ、編集部では自粛の線に沿って半分から三分の一に削減するものだから、辻村氏や山本氏から、折角写真は沢山送っているのに雑誌を見てがっかりだとお小言がしきり。

○さて、これで優等模範生というのだったら救われもするのだが、一方ではお前のところはグラビアを廃止したとか口絵をやめたとか言っているが、本文に写真を沢山載せているのは怪しからんというお叱りがこれまたしきり。これでも、奇クサロンあたりに載せたい読者投稿のフォトなんか涙をのんで没にしているんですがねエ。

○この上は写真をうんと縮小してルーペで覗かなきゃ見えない位にしたら、どうだろうか。キャビネ判以上に伸してきたフォトをみすみす、忍びないのだが、ないよりましというつもりで見て頂くより仕方がないかも知れない。週刊誌では三頁大の色刷りで全裸の写真を出しているのがねエ。

関谷夫人が、奇クに姿を現わさなかつた間に、フランスの名作の「オー嬢の物語」が、一流書店と一流翻訳者の手によって刊行されるという、画期的なでき事があつた。「奇」は奇でなくなつたのである。

ただ読者は、オー嬢を責める責め手が、常に複数になろうとしてゐる点に、感銘を覚えたはずである。複数の中には、同じ女性もまじっている。

アベック・ムードでは責めのムードは長つづきしない。責めの神髓は責め手が複数になることである。男を二つに女を一つ並べて、昔から勝ると読むではないか。関谷氏が夫人を奇クに登場させたのも、複数になろうという運動と解されるし、辻村氏が「百回以上……いや、何百回を越す」ムチ打ちを行なつたのも、同室にカメラ・読者の眼を意識したからである。また関谷夫人がかつて「梨花さん」のように吊られた上で、ムチを受けた「ともらした」というのは、広くとれば、この複数の中に同性の視線を意識しはじめたのを象徴していいのだろうか。同性の視線というのは、性的昂奮にこまかされることの少ない「槍の鋭どさ」

を持つてゐる。

奇クの奴隷となつた以上、夫人は奇クの企画に口をはさむ権利はなく、だいいち将棋の勝ち逃げは夫人自身後味が悪いだろうと思えば、読者の提案は、かなり真実味をおびてくるはずである。

それは夫人の責め手を複数にすることである。男たちはふく面をした日常着、女も——モデル嬢たちには依頼すればよい——日常着であることが必須である。縛るかわりに、女たちが関谷夫人の手とり足とりしているの図は一つの法悦境である。

こうして衆人にムチ打たれる夫

人を見守る女たちの「ゴミ箱か汚物」を見るような、けいべつの視線を私たちは見たいのである。

関谷氏と夫人のプライドをこの一文が、若しきずつけたならば、河出のアラビアン・ナイト（第六巻）の「女奴隷をムチ打つ女王様」の図を見られることをおすめする。権力の世界では、打つ側が女王様で、打たれる側が奴隷であるが、美の世界では、全裸で縛りつけられたはしごの上で、息も絶えだえの奴隷の方が女王様なのである。

そうして悶絶した夫人の髪を飾るのは梨の花がふさわしい。



○責めの映画ファンの期待にこたえてお馴染み春風春太郎氏が次々と緊縛映画のスクリーンを提供下さつたので、このところ毎号誌上を賑わして目を楽しませてくれる。

○黒井珍平氏をはじめとして芳野眉美氏、斎藤夜居氏、町陽一氏、黒淵嬰一氏、山口広氏、雪崎京人氏、中康弘通氏、保藤久人氏、夜乃探郎氏、千草忠夫氏等々から度々私信を頂戴して編集上、大いに参考にさせて貰っている。時節柄地方への配本が円滑を欠くため発行部数そのものは大幅に伸びないが、二十年の歴史によって確実な本誌の読者が少数宛ながら固定しつつあるのは嬉しい現象である。○本誌の旧刊が異常な高値を呼びつつ、しかも入手が極めて困難なのは何を物語っているだろうか。既に文献資料としての価値評価をされているのか、或は焚書の刑によって湮滅してしまったのか。一寸参考にと街を探してみても、もう殆ど探し出せない実情である。○八読む雑誌として脱皮して以来、更に新しい展開を遂げるべく陣痛の苦しみを続けている本誌は珍企画を種々と考究中なので、いづれ誌上にその成果を問うことの出来る時期があることと思う。

ピンク映画と拷問芝居……

責め随想

早木夢二

日刊スポーツ（5月28日付）に『吹きまくるピンク旋風』としてピンク映画の客入りが良くなったこと。カジバシ座（東京、八重洲口）の拷問芝居が大入満員で、赤字の心配などはさらさらないということ。ピンク女優のピカ一、新高恵子が足を洗い、真面目な劇団に入ったところ、第一回公演が彼女の裸が売りものとなっていること……等々の記事が掲載されていた。

ピンク映画の興行成績の良かったこと、甚だ結構。大手筋、松竹の「さそり」など、新人女優のベッドシーンがお義理のように挿入されているが、ピンク映画の方がずっとよい。

但しこの好成績は、責めの映画のお蔭じゃないかと思う。この頃東京では、「奇譚クラブ週間」と銘打って「花と蛇」「縄と乳房」を一挙に上映する館が現れた。本家？の雑誌の方は、何となく入手難になりつつあるのに、一方で

はこんな現象。喜んでいいのかどうか。

概して責めの映画は入りが良いようで、内容はつまらなかったが「美女拷問」など、朝の十時開館というのに、もう六割ぐらい入っていたのに驚いた（新宿）。勿論、私もその一人だったのだから、何をかいわんや、であろう。

カジバシ座の拷問芝居。こんなのも、広い東京に一つぐらいはあっていいだろう。水車にハダカの水を縛りつける拷問シーンが、うけているというが、私はもうずっと以前に浅草のフランス座で、そんな場面を観た覚えがある。

フランス座といえば、新宿のデパートの上にあったフランス座。ヌード嬢が縄を持って、音楽に合わせて客席に降り、手当り次第に観客に縛ってくれという。客がテレながら縄を巻きつけていた。「あなた、縛ってあげたら？」隣の席の妻に、意味深いひやかしをされたことがあった。口

短信往来

黒田寿様へ

福原実より

「酷連処刑大会」は本当にすばらしい描写でした。同じ構想で、ぜひ続編をお願いします。

岩波新書の法医学入門によると絞首や溺死のような窒息死のときは、もがきながら必ず放尿し、脱糞するそうです。なお若い青年だと、しばしば射精するとか。

それから、死んでしまうと、肛門の筋肉がゆるんで、開いてしまふのです。

「処刑大会」でも、それをちよつとほのめかした所はありますけれど、いくら何でももう少しお書きになっては？

ビーには、縛られた女のスティールが飾られていた。

当時は、池袋でもサディスティックなショーがかかっていた。

浅草、新宿、池袋と漁り歩いたその頃。昭和二十六、七年から三十二、三年の頃か。大変になつか

溺殺刑のとき、泳ぐだけ泳がせて、最後に水をのみながら沈んでゆくあたり、すてきです。（少し静かすぎるような気もするのですが。沈む前には、ひとしきりもがくんではないでしょうか）尿をもらし、お尻からも吹きだしながらもがく所を加えて、更に詳しく書いて下さい。

ほかに、ネズミとりの大きいのに入って、水面下すれすれに沈めるとか、さかさにY字形に吊つて、胸から下だけをプールに入れたのもありそうですね。Y字形だと、失禁がみんなに見えるし、上に吹きあげる形になりますね。

絞首刑もすてきでした。溺殺と絞首が一番自然みたいですね。

続編、待っています。それから最近の傾向から少しはずれるかも知れませんが、若い青年の処刑も良いのではないのでしょうか。

しい想い出である。

カジバシ座の拷問芝居、大いに頑張っただけだと思ふ。

新高恵子さんに、ピンク映画界へカムバックを期待しよう。なんといっても美人。小森白の拷問映画などには欠かせぬ人である。

歌 吊し責め

高村初子

くるぶしに掛かりし縄の痛さのみ今迫りくる試練とぞ思う

足首の痛さすぎれば血の昇る頭に知れり宙に浮きしを

ふらふらと揺れつつおれば身も足も宙に浮きたる心もとなさ

ひとものとの縄のねじれにねじられてくるくると回りいるかな

喰い入りし眼を意識してかくさんと心はやれど吊りの身かなし

目と頬に血がのぼりいて逆さ吊りその苦しみに顔ふくれおり

木の滑車きしむ音して浮き上り浮き身のままで揺れつつ回る

手と足を一つに括り吊られれば色変りゆく指先が見ゆ

下してと叫び喚けど冷やかに目をこらしつつ黙りいる彼

緊縛女優

ナンバー・ワン

美矢かほる

東山映史

最近の緊縛女優ナンバー・ワンは、何といても美貌、姿態、肉体美からいっても、美矢かほるである。最近、演技力もついてきたから楽しみである。

その最も迫真力のあるのは、小森白監督の「美女拷問」である。

お下げの女学生に扮し、シューミーズ一枚のあられもない姿で、手足を縛られての猪吊り責めや、手錠をはめられてのベッド責めシーン。そして後半は妖艶な支那服姿で寝床の上に四肢を緊縛されての責めなど、その豊満な肉体美をス



大映映画「忍びの者」春風春太郎提供

クリーン一杯にくりひろげ、サジステイックな責めシーンで十分に楽しませてくれた。

彼女は、令嬢よし、BGよし、また芸者よし、とあらゆる役柄をこなすことができるのが強味である。「禁じられた情事」では、平凡なBGから、肉体をエサにする妖艶な産業スパイに飼育されて、そして外人スパイの餌食となり、緊縛シーンを八ミリにとられる。その映写されるシーンにも迫力があつた。

芸者姿も、なかなかお色気がある。「産婦人科日記・芸者」の色っぽい姿もよかったが、「蛇性の肌」で、旦那と長襦袢一枚で、寝床へ入っている所にやぐざに押し入れられ、半裸にされて乳房の上下をしごきで緊縛され、責められ身もだえするシーンなど十分いただけた。

また、珍しい農婦に扮した作品では「媚薬のワナ」で半裸にされ吊し責めにあい、身もだえるシーンも野性的な美があつた。

松井康子が、あまりに肥満すぎた今日、現代的な美しさをもつ彼女の将来は楽しみである。一度彼女の時代劇の緊縛シーンを見たものだ。

同好者会合プラン

テーマ 「花と蛇」を実演する

小枝 真佐治

実演するといっても、これはドラマでもショウでもなく、モデルその他が『花と蛇』の中の人物に扮するなどということはないのです。被縛モデルが、例えば遠山静子夫人（或いは京子）であると意識し（思い込み）、これに加虐するものが鬼源であり、又川田や田代であるという心構えでモデルを虐待し、それを取りまくものが組のヤクザであり、ズベ公たちであると思ひ込んで演ずるという意味です。被虐者、加虐者、見物すべてが『花と蛇』の中に生きるということが、ここにいう実演するというわけなのです。

ここまで書けば、このアイデアが奇ク三月号の中河恵子さんの告白文にヒントを得たものであることは、すぐおわかりでしょうが、事実あの一文から引き出されたプランです。縦って勿論、このヒロイン遠山静子役は「縛られて（静

子夫人の立場のようになって）身動きのできない身体を異性の前に晒す羞ずかしめを受けてみたい」と願う「見物の脇役は多ければ多いほど私の感激は大きい」と只管「衆人環視の中でそんな羞態を演ずる自分を考えるとたまらなくなる」という彼女、中河恵子さん。そして参加全会員がヤクザ達であり、辻村さんあたりが鬼源の役を、ズベ公達には大塚さん、木村さん、美木さん、大島さんなどのモデルさんたちに出席願えれば実演後の交歓も賑やかになり、且つ効果的であると思います。（勿論会員中から加虐役、例えば川田や田代や森田や吉沢などにあたるものを、又参加女性の方で千代子役を、又反対に小夜子などになられるものがあってもよいと思いますし、これは又一面、中河さんの希望でもあるでしょう）

○次に会場ですが、これは一般の料亭などは避けたいと思います。相当長時間に亘る上、こんどの責めは中河さんの希望通り、中河さんの堪えられる限度まで、きびしく、シリヤスなものであることが狙いですから（ドラマやショウでなく、会員が『花と蛇』に生きる

ところなのですから）とても料亭や旅館などでは実現出来ません。私の希望としては会員中の適当な邸宅を開放提供していただくことで、例えばカメラハントに出ました須磨松男さんのお邸などは、最適なものではなかといます。ご



挿絵応募作品 『華燭の典』 野江三郎

主人夫婦はわれわれの同志でありお邸の場所、模様からして、色々な便宜と効果が多いと考えられます。是非、箕田さん、辻村さんのご努力で同氏のお邸のご提供を願いたいものです。このような同志の方の絶大なご協力なくしては、

このプランの実現は難しいのではないかと思いますので。
○会員は約十五人まで。これにモデルさん達を加えて二十人、といえは中々大ぜいですが、会食はなし、只飲物とおつまみ程度を主催者側で予め用意して、会場側にご

挿絵応募作品

『ハレムの哀歓』

小妻 容子



迷惑をかけなければ、この位の人数でもよいと思いますが、いかがでしょう。そして会員の選衡は、この催しものの性質上極めて大切で、従来の会合者から身許その他、確実と思われるものを主催者が厳選され、その方々にのみ案内を發送するのがよいと思います。

(誌上募集や、勿論、会記の発表などは今回は避けるのがよいでしょう)それから会員による実演中の写真撮影は一切禁止。(これは中河さんの告白文の希望からして彼女は全裸でなければならず、そして中河さんはきつとそれを承諾し志願してくれる筈ですから)但し、これだけ貴重な実験は後日のために克明に記録しておく必要がありますから、特定の写真撮影者を定めておき(例えば山本章さん)その手になる写真は後日、中河さんの検閲をパスして許可のあったもののみを会員に(その時の)頒つことにしてはどうでしょう。

この写真はあらゆる角度からするもので、八ミリ撮影も出来ればしたいと思います。そのためには、箕田さんもこの方にかかっていただかなくてはならないでしょう。或は、この頒布写真の枚数をかりに一応十枚なら十枚と定め、こ

の費用も含めモデルさんの費用、中河さんは金銭は不用といってもらえますが、これにも若干の配慮(品物など)が必要ですし、又他のモデルさんの費用、飲物その他の費用等、勘案の上、適当な額を定めて下さい。但し、壹万円程度にしなれば、私ごとき階級のものには参加不可能となりますので、その点よろしく願います。尚この会合には団鬼六氏をお迎えして、同氏の非凡な構想や知恵をおかりするのも一つの行き方でしょう。

○若し右のプランをご採用下さいますれば、私もその実現のために何なりともお手伝いしたく、又演出(ショウ)ではありませんが、実演の段取りや『花と蛇』中の場面のとり方など)のために、中河さんにもお目にかかって、いろいろのご希望などを承ることが出来れば、これに越す喜びはありません。

【訂正】八月号十一頁「椅子縛りフォト二題」中「東宝映画・虎の牙」とあるは「大蔵映画、黒・白・黒」の間違い。お詫びして訂正致します。尚、女優は内田高子。

サロン展望台

マニアも歩けば
PANに当る

目出鯛三

前回(六月号)で「PAN泥始末記」を紹介したが再び予期せぬ出来事に直面したので、マニア諸兄への秘報として、ここにあえてペンを執った次第である。五月の或る晴れた日曜日、終日近郊の龜山に登山した時のことである。海拔わずかに九百米余り、さして高い山と言えない手頃のハイキングコースとあって、年々レジャーを樂しむハイカーがドツとばかりに押し寄せて、休日ともなれば相当の賑わい振りを見せる景勝地。久し振りに早起きをした鯛三は一連の後に伍して山頂を目指したものである。陽春の五月を迎え、色彩豊かなハイカーがグループごとに展望台目指して山道を進む様はまさに壯観。とりわけ発刺とした若

い女性達ばかりの一群の、しめし合わせた様なスラックス姿がうれしい。豊満で今にもはちきれんばかりに充実したお尻をムクムクと左右に揺さぶり乍ら荒い岩肌の山道を極める姿はマニアの鯛三ならずとも思わず知らず怪しからぬ妄想へと駆り立てると言うもの。何故なら、腰にピッタリと吸いついたPANのゴムの線が、妖しいまでに浮き彫りされ、彼女等の後方を続く鯛三に、コレデモかコレデモかと挑みかけてくる悩殺デモに、マイッタ！マイッタの一言のみ。はてさて日頃、山野の緑に親しむ機会がないだけに、青葉若葉の原色が失われていた生気を呼び戻す。小鳥のさえずりさえのか大な自然の山ふところに踏み込ん

だ時、これまでの妙な気分は消し飛び、すっかり晴れ晴れとした鯛三であった。前後をゆく若い男女のはずんだ会話やコーラスも、深い樹立の線に反響し、やがて吸いこまれるようにして消えて行く。二時間弱で、目的地山頂の展望台へ。吹き出る汗を拭い乍らコーラを飲み干した時のあの気持は当分忘れることが出来まい。フォークダンスやコーラスに興じ唱和する一群、記念撮影やバレーボールに拍手する者、若さに満ちたハイカーたちの楽しい一時に独行の鯛三もついほえみかけてしまう。さて午後三時、下山の途中で足を踏みはずして不覚にも捻挫してしまった鯛三は、万事休す。岩かげに腰を下ろしてマッサージを試みる。チラッと横目で「お気の毒」にとでも言いたげなハイカーが帰途を急いで通り抜けて行く。こうなったらジタバタしても仕方がない。少し休めば痛みも薄らぐだろうと肚にきめた鯛三は、入念なマッサージを傾注する他はない。いつの間にか人影もまばらとなり、急に静まりかえった山腹に西陽が木の葉を斜めに照らす。どうやら一応おさまった痛みに、鯛三は立ち上った。おそろおそろ一歩、踏

み出してみたが痛くない。ゆっくりと歩を運べば、どうやら下山出来そう。そう判断すると、杖に出来る枯枝を見つけねばと、脇道へ踏み込んでみることにした。草深い雑木林のくぼみに恰好の枝木が落ちていた。ヤレヤレと傾斜したそのくぼみへ分け入った瞬間、そこに何やら色彩豊かなたまりが目にとびこんだ。最初、弁当の包み紙でもまるめて捨てられていたのだろう位に思ったが、近づいてよく見ると、それは、まぎれもない女性のPANであった。登山道から分け入ったところだけに人目があるわけではない。しかし鯛三は思わず四囲をはばかり確認せずにはいられなかった。誰もいないことを確かめると、鯛三は手を伸ばして掴むが早く、それをポケットに忍ばせていた。部屋に戻ると鯛三はドアの内側から鍵をかけた。そしてあとは諸君の豊かな想像力に一任しよう。只一言それは新鮮で生々しいまでの薫香を滲ませて居り、疲れも捻挫の痛みも、完全に吹きとばすだけの、緻密なエキスを充ち充ちていたことを附記してペンを置こう。

教訓「マニアも歩けばPANに当る」

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 42 年 9 月 号

(1967年・9月号<第21巻第9号・通刊第231号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。



鬼六談義

好色の戒め

団 鬼 六

最近、先輩にあたる友人から、ピンクぼけを予防するためにやれ、と尻をたたかれた形で、小さな事務所を東京に持ち、ちょっとばかり堅気？の仕事に手を出す事になった。外国テレビ映画の科白を日本語に作り替える仕事で、画面に登場する毛唐の口の動きに合わせ、アテレコ役者のための台本を作る商売

なんだが、音取り、音合わせ、録音と、同じ映画を少くとも三回は見なくてはならぬというめんどくさい仕事である。仕事の量を計算し、社員を四人採用したのだが、仕事は台本づくりだけだから、プロを使うとあまり儲けにもならぬし、面白味がないと思って、素人を思い切って使ってみる事にした。未だ大

学に籍をおく男子学生二人と女子学生二人で、彼等に仕事を教え、仕上げをこっちで見ればよいと考えたのである。この四人は自由な時間に出勤し、フィルムを映写機にかけ、テープに音を取り、映写機の前に仲良く机を並べて、はりきって仕事をしているようだ。一人に一本を受持たせると、どうも時間

がかかり過ぎるし、仕事も下手くそで、あとの本直しが大変なので、甲の映画をA君とB子嬢、乙の映画をC君とD子嬢という風にアベックにして、仕事を分担させてみたのである。

そんな風にしたのは、仕事の能率のためと もう一つは、どうもこの男女学生が、それぞれ、青春期のパートナーを欲しがっている様子なので、こっちとしては気をきかせたつもりなのであった。

女子学生は二人とも十人並の美人である。年々、女性美しくなってきたようだ。女子高校の教師をやっている友人に聞くと、以前は一クラス約五十人の生徒のうち、美人型に入るのは、その一割ぐらいしか見当らなかったが、最近では、四割から五割までが美人型に属するという。ここ当分は美人の豊作がつづきそうだという事だ。この仕事にしても、最初、社員を募集する時には、女子大などについて、英文科に籍をおき、英会話に堪能という事になると、大抵、度の強い眼鏡をかけ、焼タマゴにダンゴ鼻をくつつけたようなオカチメンコだろうと容貌においては全く期待していなかったのだが、応募して来た女子大生はたしかに不思議な顔つきをしたのも二、三人

はいたけれど、半分以上は、個性的な美貌の持主であった。試験をパスしたB嬢とD嬢は、その中でも、とりわけ上等の方であったので、何か、新たに始めたこの事業が順調にいく前ぶれのような気がし、嬉しくなったのである。

このアテレコ台本の仕事は、別に毎日、精出して出勤してくれなくとも、期日までに仕事をあげてくれればいいといっているもので、彼等や彼女達は、学校の帰り途、どこかの喫茶店で待ち合わせ、事務所で録音したテープレコーダを持ち、自分達のアパートへ行って仲良く仕事をしているようである。そのうち彼等と彼女達との間には、何時しかロマンスが生じる事になるだろう、と私は、のぞき趣味的に、観察するともなく観察していたんだが、不思議な事に、この若い男女は、仕事上の交際は、夜の十時、十一時過ぎまででもするが、いわゆる男女の交際といったものは、お互いに避け合っているという風な所が見受けられるのである。せつかく、こうして機会を与えてやっているのでから、お互いに青春を楽しめばいいのに、と何だか勿体ない気にもなる。事務所で仕事をしている最中に、彼女が誤訳したのを彼が見つけて文句をつけ、そ

れに対し、彼女が眼をつりあげて反論するというのが何度も見ていると全く味気なく、こいつら一種の恋愛不感症なのではないかと思ったりするのだが、そのうち、彼等の方は、デパートの売子か喫茶店の女か知らないが、適当にガールフレンドを作り出した。そのガールフレンドの写真を私に見せたりして、のろけやがるのである。どうも眞面目にその写真を見ても、うちの事務所にいる女子大生二人の方が上等に思えるのだ。

何も無理に他で、ガールフレンドなど作らなくとも、B嬢とD嬢は、美人だし、聡明だし、また家柄も良く、結婚するてな事になったとしても、恐らく彼等の両親は反対する事はないだろう。たとえ、そこまでは行かなくとも、同じ職場で机を並べているのだから、口説くという気分が本能的に生じないものだろうか——ふと、そんな事を思った私は、或る日、女子大生二人が、どこかの前衛劇を見に行くといつて、先に事務所を出て行ったので、そのあと、A君とC君を誘い、近くの天プラ屋へ飯を食いに連れて行った。

「B嬢やD嬢などのタイプは、君等の趣味に合わないかね。なかなかの美人じゃないか」と私は彼等に話しかけ、もし僕なら彼女の

心に自分をよく印象づけさせるべく、一応努力をしてみたいところだが、というような意味の事をいったのだが、彼等は、

「僕等は努力しても無駄だと言うから、努力しないんです」

というのである。という事は、彼等は彼女達に対して、好意は充分持っているという事だ。しかし、こっちが彼女達に対し、好意を寄せ、愛情を抱いても、彼女達はそれに対し反応を示すという事は絶対にあり得ないと考えられる故、無駄な苦勞はしたくない、と彼等は語る。実に、あきらめのいい話である。

男なら、眼の前に美人が坐っていれば、たとえ、無駄な努力とわかっていても、ふと、口説いてみたい衝動にかられるものだが、彼等は、駄目だとわかってはいるものに対して、無駄な努力をしても仕方がないとあっさり割り切ってしまったのである。

こいつは駄目だと思いつつ、口説いてみてその努力が実り、相手が陥落した時は、競馬で大穴を当てた時以上の感激だぜ、と笑うと僕達は、競馬でいうなら、本命しか狙いませんよ、と彼等も笑うのであった。

こんな若さで、こういう達観したようないい方をする彼等は、いささか小生意気な感も

するが、これが現代的な女の見方なのである。たしかに彼等のいう事は真理である。女でも大穴を狙えば、金銭的にも精神的にも外れた時の被害はすこぶる甚大であるから、本命を狙った方が賢明である。ただ、自分と一緒にに仕事し、行動している美しい女性に対して、ちょっかいを出しても無駄だと心得て、無視してしまうという事は、いい年をしたおっさんでも、なかなか真似の出来る事ではない。わかつちやいるけどやめられないというのが色の道である。つい手出ししてみたくするのが人情というものだが、やはり、無理をすると、ろくな事はないようである。

相性というのは仲々いい言葉で、相性の悪い女や、自分に対してそれほど惚れていない女と、無理して関係を持つと大きく運命が歪んでしまう場合がよくある。支払いの溜まっているゲップ屋の前を遠廻りしてアパートに帰っているような安サラリーマンが、身の程を知らず酒場のナンバーワンに通いつめ、関係が生じたとすれば、そして、その女の肉体が彼を有頂天にせしめたとするなれば、これでサラリーマンの運命は十中七八まで、破滅の道をたどる事になってしまうのである。彼女との関係を持続するため、どうしても金が

必要となり、つい公金に手をつけるてな事になるのだが、女が別段、男に対し、贅沢させてくれと頼んでいるわけでもないのに、男としては、女が美人故、無理算段してしまうようだ。悲しき男の業^{ごう}ともいうべきか、こうした虚栄は男なら誰しも持っているもので、まして相手が誘惑の多い水商売などやっている女性なれば、尚更のことだ。彼女が自分のケチに愛想をつかし、派手に金を使う他の客の誘惑にかかるかも知れぬという恐怖とあせりから、安サラリーマンとしての軌道が狂ってしまう事になるのである。だが、賢明な安サラリーマンは、こういう悲劇を充分承知しているから身の程知った女性観を持ち、身の程知った遊び方をしているようだ。安酒場の安女給にかなりもててヤニ下っている安サラリーマンを銀座一流の酒場へ連れて行き、月収四十万というエレガントなホステスに接待させ、冗談まじりにふと誘惑させてみると、彼は、この誘惑に乗ったが最後身の破滅だとはかり、石のようにコチンコチンになるのを見て、これが安サラリーマンの哀歎だと感じた事があったが、据膳されても食わぬというのは、食わせものの世の中に生きていくサラリーマンにとって一つの礼儀になるのかも知れ

ない。

たしかに当世は世智辛くなってきた。これほど、女が口説きやすくなって来た時代も珍しいが、これほど女が味気なくなってきた時代も珍しいだろう。ダイヤモンドに眼がくらむお宮さんみたいな女性が多いが、婦系図のお薦さんみたいなタイプは全く影をひそめてしまった感じがする。売春禁止法が実施されてから、女はえらいような面をするようになった。と友人のエロ作家はいうのだが、たしかに商売女と遊んでも、全く味気ない。というのは、トルコ嬢、街娼、コールガールに至るまで、まるで申し合わせでもしたかのよう必死になって金を貯める事を考え出したからである。マニヤの友人が、この前、コールガールと遊び、縄を使おうとすると、それをするなら、別に二千円つけてくれ、といわれ、興覚めしてしまったといっていた。

別にコールガールに限った事ではなく、銀座酒場のホステス達にだって、滅多な事じや男と寝ないぞ、と仲間同志協定を結んだように肩を怒らしている。口説き落すのは簡単だが、相当な裏づけを必要とするのである。こうした夜の蝶を六本木あたりに囲っている人に聞いてみると、部屋代は別で、月の手当

が二十万円だといった。相場としては、それは安い方だというので、びっくりしたが、その月手当二十万円也の二号の容姿を見ると、成程と唸らざるを得ない。映画女優そのものの美人である。たしかに二十万円だけの価値があるのだから不思議だが、とにかく、酒場にせよ喫茶店にせよ、この所、急激に美人はふえ出したようである。

しかし、今いったように、こうした酒場の美女達も、今、流行の貯蓄という事を心掛けているから、滅多な事では客に惚れないし、また客の方でも、彼女達にふんどくられるのが辛いから、滅多な事では、ホステスに惚れようとしなない。そういう事になると、酒場に健康的な慰安所といったムードが流れ始める事になるが、これもまた考えれば味気ない話である。私の友人である或る著名なエロ作家はほとんど毎晩、こうした酒場をあちこち飲み歩き、三流週刊誌に、酒場ホステスにモテる方法というようなことを自分の体験談として語っているのだが、私は彼の傍で飲んでいて、彼が酒場のホステスにもてているのを見た事は一度もない。一つももてないくせに、自分はこのようにして、酒場ホステスにもてたというような事を書いているのである。そ

れはホステスにもてない事の腹立たしさをぶつけているとも受取られるが、いくら金を使つて女をものにするのは馬鹿だと週刊誌などに書いても、やはり、当世のホステス気質は、地位とか名誉とかいうものより、金銭を持って誠意を示してくれる人を一番信用するのではないだろうか。

私の事務所に入社したA君やC君のようなタイプの青年がふえて来たのも、時勢というべきだろう。彼等は、その若さで、一つの悟りを開き、女性に惚れると損だという風に思っている。女性の方が自分に惚れてくれないと調子が出ないのだ。男は女を愛すのではなくて、愛される存在だとしている。だから、自分に惚れて来そうにもないB子嬢やD子嬢には意地をつけずに見切ってしまう、充分に脈のあるデパートの売り子や喫茶店の女と交際を始め出したわけだ。つまり、彼等は、自分が女性に惚れ、ケツを追ったりすれば、それだけ自分が損な立場になるという風に思っているのである。

私も、これまでを顧て、女性側から好意を寄せられた場合(滅多にないが)は、たしかに何もかも円滑に事は運んでいたようだったけれど、女性のケツを追って、ひどい目に合

わされた事は何度もある。成程、現代は男が女に愛される存在になるべきだと、若い学生思想を何とはなしに納得したわけだ。

自分に惚れそうもない女に無駄な努力を払うな、というこの青年達の考えは、たしかに真理ともいえるものだが、凡俗にとっては、なかなか修業の要する事である。だが、それは女心の側にたって考えてみれば、容易に納得出来る事なのだ。

以前、といっても、もう七、八年も昔の事だが、私は悪友三人と酒場の雇われマダムを誰がモノにするかというゲームを始めた事があった。私達は、その酒場のスタンドに勢揃いし、これから一カ月以内に、誰がこの女を陥落させるか、フェアプレイで戦おうといいかわし、一人ずつ交代で毎日その店へ顔を出し、使う金額も店でねばる時間も定め、酒場以外でデートをする事は禁止というルールも決めて、阿呆なゲームを行ったのである。そして、それをカウンターに入ったマダムに私達四人は宣言した。マダムは、冗談じゃないわ、私、男とそんな事になるの、もうコリゴリしてんのだから。などといって笑っていたが、私達は、早速、翌日から戦闘を開始したのである。ところが、一カ月にならぬうち、

この勝負ははっきりついてしまった。四人の中のT君という会社員が、酒場へ通う事、四回にして、マダムをモノにしてしまったのである。酔った彼女から、T君のところへ深夜電話がかかって来、二人は、待合わせて、ホテルへゴールインしたというのだから、T君の完全な勝利である。お互いかなりうまくやったつもりであるのに、一体、どこでこの勝負は決まったのだろうか、マダムに振られた三人は、反省会みたいなものを開き、飲みながら考えたのだが、ようやく、わかった。勝負のきまっただのは最初の日で、マダムの前に、私達四人が勢揃いした時である。その時、マダムは、T君を一眼見て、もし、寝るとするなれば、この人と心にきめてしまったのだ。口説きも、押しの手も何もいらない。彼女はT君と言葉をかわす前に、すでに一眼惚れしてしまっていたのである。そんな事とは、露知らず、振られた三人は、一カ月間、酒場へ通い、無駄な努力を続けていたわけであった。

女性が男性を選ぶ場合、一番たしかなのは、この一眼惚れというやつであろう。勿論、これは、男性が女性を見る場合にもいえる事であるが、相手が美人なら、必ず一眼惚れする

という男の無責任さにくらべると、女性のそれは、一瞬にして、外面から内面に至るまで見通すという強烈なものを持っているようだ。最初好きでなかった男が、長年、付合っているうち、段々と好きになってきたという場合もあるが、それは、一眼惚れする人が遂に現れず、仕方なく、あきらめて好きになっていったという風に考えられる。女性は、一眼惚れする男性をたえず待ち望んでいるものなのだ。

学生社員のA君やC君を、B子嬢やD子嬢が一眼惚れしなかったのはたしかであり、また、A君やC君は、一眼惚れされなかった事に気を悪くして、彼女達に対し縁なき衆生として、好かれる努力はせず、無視する努力をするようになったわけである。とはいえ、彼等の彼女達に対し、わざとそっけなくする態度を見ていると、心のどこかに、彼女達がひょっとして、自分達に対し、おくれればせながら好意を寄せて来ないものと期待しているような所もうかがえる。とにかく、当世では、男心と女心が逆になってきたような感もするのである。

A君とC君は、これからアパートに戻って仕事をするというので、引止めるわけにもい

かず、私は彼等と天プラ屋で別れ、ネオン街に向かつて歩き始めたが、妙に孤独を感じ出すのだ。若い人達の思想というものは、現世を象徴しているものである。猫も杓子も、事なかれ主義、利己主義になってきたというのは、何ともわびしい話じゃないか。いや、わびしいなどと間が抜けたいい方をしてはいけないのであって、利己主義こそ現代的な道德であるのかも知れないのである。

そんな事を考えながら歩いていると、急に渋谷にある馴染の安酒場へ、ふと行ってみたくなった。その店にいるバーテンのU君は、元、××組の若い衆であったが、足を洗ってバーテンに転向した男である。以前は、派手に啖呵をきって、その店の近くで喧嘩していたものだが、今では、ヒゲを切られた猫のようになおとなしく、これも、現世的な利己主義者になってしまった。

その安酒場は閑であった。「おや、いらっしゃい」と、色の浅黒い女給とダイスをしていたU君は、私を見てニヤリと笑うのである。「何か面白い事ないかね」「ないですね、そちらはどうです」と、私とU君は、合言葉になっ

近頃、酒の質は良くなったが、女の質は悪

くなった。などと、私はU君相手に女性の悪口を肴にして、ウイスキーを飲み始めたが、U君は、私のいう、女は計算高くなったというのに反論して、こういう安酒場の女給の中には、計算を度外視した思いやりのある女がいるという事を唱えるのであった。

「そりゃいるだろうけど、近頃は、女と遊ぶ毎に何か味気なくなつてね。つまらない事したと後悔してしまうんだ。ここ当分は、自分の好色を戒めるつもりだよ」

というと彼は、氷を割りながら、
「そりゃいけませんよ、男が女遊びを怠ると一ぺんに老けこんでしまいますぜ」

そして、彼は、この間、どこどこで、どここの女と遊んだが、痒い所にまで手をとどかすようなサービスを受けた、と色々のろけるのであった。

「そりゃ君が、それだけ女性にもてるんだから結構な事だが、こっちゃん最近、さっぱりだよ」

「どうです。今夜、僕とひとつ遊びに行きませんか。実に安く遊ばせる女がいるんです」と、彼は私の耳に口を寄せるようにして、急にポン引を始めるのであった。

最近、女遊びする毎、妙に後味の悪さを味

わっている私は、彼の誘いに乗ったところでどうせ、ろくな思いはするまいと心を引きしめ、当分、女遊びはつつしむ気である事を彼に告げ、彼の好意を断わったのである。

他に客がいるなれば、三、四杯のウイスキーで腰を上げたろうが、馬鹿にその日は閑で、何か引揚げるのを気がとがめ、遂に看板までU君を相手にして、手にしたグラスを離せない事になってしまった。いい加減に酔っ払い、帰り支度したU君に肩を支えられるようにして店を出てみると、何時の間に彼に手配されていたのか、二人の女が店のすぐ近くのスシ屋で私達を待っていたのである。この二人の女性は、キャバレーに勤めているホステスだそうで、一人は瘦型で背が高く、一人は小肥りして背が低く、両方とも、どうも私の好みでない容貌をしていた。U君は、再び、私の耳に小声で、「この連中は、五千円も渡してやりや充分なんですよ」というのである。べらぼうに安い玉代だが、彼女達の食欲の旺盛なものには驚いた。ここで食わねば食う時がないという風に、あれやこれやスシ屋の板前に注文して片端から平げていくのである。私は乗りかかった舟だとばかり、胆を決め、銚子を注文して悠々と飲んでいたが、五

千数百円の勘定を支払わされてみると、五千円という玉代も曖昧なものに思えてくる。

「どちらにしますか」とU君は、スシ屋を出た私ににじり寄り、完全にバーテンからポン引に転向してしまっていた。「どっちでもいいよ」と私は少々、不機嫌な口調になっていた。つい、さっきまで、自分の好色を戒める、といっているが、かかる結果に陥った事を腹立たしく思っていたからだ。

U君は、再び、小声で私の耳に、これから自分の相手をする女にも金をやらなくてはならないが、今、持合わせがない故、一万円ばかり拝借致したい、と恐縮しきった調子でいい出すのである。何の事はない、女と遊びたいのはU君の方で、私は彼に利用されているようなものかも知れなかった。金を渡すと、U君はいそいそとして、タクシーを止める。私達を乗せたタクシーは、深夜の水道道路を突っ走り、U君は馴染らしい小さな旅館の前で車を止めると一同を引率するようにして、旅館の中へ入って行ったのである。

私は、小肥りの方の彼女を選んで、女中に案内され、薄汚い和室へ入った。彼女が、しきりにヘアピンなんかで歯をせせるので、どうしたんだ、と聞くと、虫歯が痛んで仕方が

ないのよ、と顔をしかめるのである。何となく、こっちも不快な気分であった。どうも、調子が乗らないのである。

こんな所まで来てしまつて悔恨に耽つていても仕方がないので、床の間の電話をかけ、女中に酒を持って来るように命じると、酒を盆に乗せ、部屋へ入つて来た魚のように冷たい表情の女中は、「あの十時以後になりますと御休憩でも、御宿泊の料金を頂く事になつております」とまず味気のない一撃をぶちかますのであった。やむを得ず、女中の要求する金額を先に支払い、卓の前にあぐらを組んで手酌で私は酒を飲み出したが、まだ、彼女の方は鏡に向かってしきりに歯をせせり、シー、シー、と奇妙な音を立てている。

ムードのない事、おびただしく、酒の味もまずくなって、こうなりや、こっちも、ムードを破壊してやれといった気分になり、女に向かつて、「おい、金を先に渡してやろうか」そういうと、彼女はようやく私の傍へやって来て、ぺたりと坐り、銚子を手にして、いやに白々しく私の酌をするのだった。こんな安物のコールガールを私に世話したU君が無性に腹立たしくなったが、それにしても、五千円とは、実に安すぎると思ひ、彼女に念

を押すと、「あら、相場は一本よ、からかったや嫌だわ」と、とってつけたような色気を發揮して私に身をすりつけてくるのである。

「別にからかつてゐるわけじゃないが、そうすると君達、最近、値上りしたのか」などと嫌味ない方をしてやる。すると今度は妙にとりすました顔つきになつて、自分達は金の必要に迫られるとやむを得ず、こういう事をするのだが、一万円以下で身を売った事は、これまで一度だつてない、という事を、彼女はシーシー歯の音をたてながらいうのであった。その時、廊下の方で、ドタドタ物音がしU君とノッポのコールガールとのいい争う声が聞こえて来たのである。私はあわてて立上り、そんな所で、みっともない事をするな、と廊下で睨み合っている二人を私の部屋の中へ引き込んだのだが、U君は彼女の売春料金の事で、彼女と衝突したらしい。一万円など今になって馬鹿な事いうな、とU君がいたので彼女は、氣に入らなければ自分は帰るだけだと憤然としてハンドバッグをとるや廊下へ飛び出し、飛び出されては恰好がつかないU君はあわてて、後を追ひ、私の部屋の前まで来て、ドタバタやり出したのであった。私の部屋へ入った二人は、いい加減にしないか

と何度もこっちが顔をしかめていうのに、それでもしばらくは醜く、浅ましくいい争い、全く私はやり切れない思いに追いこまれた。

お前達は生意気だ、とか、俺の顔が立たぬとか、いきり立つU君を私は苦々しい思いでようやくだめ、「ま、今夜のところは、彼女のいい分を聞いて、円滑に事をすまそうじやないか」などと何だか変な事をいって、もう五千円彼に貸してやり、二人を自分達の部屋へ戻らせたのである。

興覚めも、ここまで至ると、涙が出そうになってくる。全くU君もいい加減な事をいう男だと腹立たしくなってくるのだが、今までああいう浅ましい、いい争いをやった二人が、これからベッドの中でプレイに入るのかと思うと、何だか、いよいよ浅ましく、ひとりでに笑えてくるのだ。あとで聞いた事だが、U君は、部屋へ戻ってから、また彼女に、いちゃもんをつけ始め、ベッドの枕をはさんで、どう考えても一万円は高過ぎると値切りつづけ、ようやく、八千円に負けさせたというのだから、今更、何をかいわんである。お互にムカムカ腹を立てながら、どんな顔をして、八千円分の取引を渡ませたのであろう。

相手の女に腹が立つのはU君の方だけではない。こちらも同じで、私の方の相手は、「キッスされるのは私、嫌なの」とか、「首のあたりにキッスマークをつけないでね。お店へ行けなくなるから」とか、まだ手出しをしていない私に向かって、ベッドに入る前、色々条件をつけやがるのである。ああ、こんな所で、下らない時間と金を消費している位なら家へ早く戻って、「花と蛇」でも書いていた方がどれだけ幸福であったか、と私は、シミだらけの旅館の天井を仰ぎ、つくづく後悔するのである。いよいよ本番ということになっても、彼女は、セットした髪型がくずれるのをしきりに気にしているような所がある。私は、気分をこわすというよりも阿呆らしくなってきた、どちらが金を出し、どちらが義務を果しているのかわからぬような状態のまま、彼女を枕にして酔寝してやった。

朝、気がつくと、勿論、彼女達は昨夜のうちに引揚げていたが、U君の姿もなかった。全く後味の悪い思いで、私は床を抜け出し、トイレ臭い洗面所で顔を洗い、実につまらぬ事をしたものだ、とくよくよしなが、ぼそんとして表へ出る。しばらく、小さな遊園地のベンチに坐り、青い空をふわりふわりとち

ぎれ飛ぶ白い夏の雲を眺め、ようやく、さびしい落着きを得て、事務所へ向かった。

事務所では、A君B嬢C君D嬢、珍しく四人揃って顔を出し、十六ミリ映写機をカタカタ動かしている。映写幕にうつる人物の口の動きに合わせて、若々しい声をはりあげ、苦心して作った彼等の台本の音合わせをやっているのだ。私は、何か申訳ない気分だった。

こうした若い連中の生き方、考え方を少し見習うべきだと反省し、いい年して、みっともない女遊びをまたやらした事をそこでまたくよくよ後悔する。我が好色を戒め、もう二度と阿呆な女遊びはするまい、と心に誓ったのだが——若い学生達が、今、映写機にかけている外国映画が実につまらない。そんなものを小一時間ばかり、ぼんやり眺めていた私は、この所、ずっと、つまらないピンク映画や下らないテレビ映画の試写を見てきた故か、後味の悪さを慰やすため、何か上等の映画を見たい欲求にかられ出した。そして、ふと考えるのである。下らない映画を見ても、こういう思いになるのだから——昨夜の下らない女と夜を明した後味の悪さを消すために、上等の女を探し、もう一度、遊んでみる必要があるんじゃないだろうか。

Sの否定と

Sの肯定

中野主弥

先日、急激な吐き気と胃痛に襲われ、医師に「急性胃カタル」の診断と、食養生を命ぜられて、四日ばかり思わぬ静養をしたのだが、絶食の効果は、胃腸の為ばかりでなく、性の力は食事栄養云々の問題より、生活の情性的マンネリ化が人間性を阻害している事と自分の体内に秘められている生命力の不思議というものを、つくづく考えさせてくれた。

おかげで、爽快な気分と、思いもよらない「二十台の張り切り方」を自覚出来、とまどいを覚えながら筆を執り、病臥中に思いついたことをまとめてみたい。

自分の性傾向をあわせ分析しながら、Sとは何かと考えるとき、次の様に分類出来るのではないだろうか。

一の一 肉体そのものを痛め付け、その堪え切れる限界を越え、完全に破壊、屈服した姿を見て喜びを感じる性向。

一の二 肉体そのものを痛め付け、その苦痛を限界にまで追い込み、被虐の陶醉と歓喜に転化された姿を見て喜びを感じる性向。

二の一 精神的、心理的苦痛を徹底的に加えて、その限界を越えて、人間性を喪失した姿を見て喜びを感じる性向。

二の二 精神的、心理的苦痛を限界まで追い込み、思考力を麻痺させ、人間性、性本能を露呈された姿を見て喜びを感じる性向。

三の一 一の一及び二の一を兼ねたもの。

三の二 一の二、二の二を兼ねたもの。

Sが若し、加虐の為には相手の人間性を完全に無視する事に本然の姿があるとするならば、一の一、二の一、三の一が本質的なSである。

然し此の場合、かりに相手があったにしても相対的なものとはいえない。何故なれば、M性を考えた場合、如何に受身とはいえ、完

全な自己喪失、又は自己破壊は有り得ない。

(自殺行為といえども完全な自己喪失でなく遂に自己保全、自己中心の心理的はたらきによる行動である)とすれば、前記性向はM性とも共存し得ないものである。既ち、加虐、破壊、そのものに喜びを感じる人物は、人間性と相いれない事は勿論、社会的にも認められない。これがSの本質であろうか。私は、かかるSは否定せざるを得ない。

私の性傾向を考えると、二の二的Sと考えられる。一の二的要素が無いわけではないが肉体そのものを痛めつける事にはどうも躊躇を感じ、積極的には動けない。(相対的なものである故、その様な相手にめぐり合わない為か、不勉強で不明の為かもしれないが、精神的、心理的苦痛、即ち羞恥心、自尊心、体裁、嫌悪感等をたたきのめし、その壁を打ち破って、相手の潜在的性本能を暴き出そうと云う面では非常に意欲的で、行動も思考力もスムーズに働くようである)

勿論、縛り、むち打ち等を行わないと云うのでは無く、屈辱の姿勢を強調させる必要の時、或は縄の力を借りなければどうにも姿勢が取れない時等利用するが、その他は、縄或はむちがあるから止むを得ないと云う相手の口実を作ってやるに役立つ程度のもので、本来さしみのつまみである。

肉体的苦痛が歓喜に転化する限界がのみ込

めないし、関心もそれ程強く無い。緊縛の強い写真等をたまたま発見し、被虐者のM性に感心し、興味は感じるが、緊縛の強さより以上、その姿態に関心が湧く。

この点、団先生の「花と蛇」は、時に多少マンネリ的に感じる事があっても、女性の羞恥心をより高めながら、心理的な責めによる屈辱の中から陶酔の境地にいざなうと云う一貫したものがあがり共感を感じる。願わくば歓喜、恍惚の情、性への耽溺の表現をより一層うたい上げてほしい事と、責める側の性本能のもだえ、特に女性である千代、銀子等が自ら欲情し、それを処理する行為がうかがえないのは、あまりに不自然で片手落ちとも考えられる。たまたまなくなつてチンピラ共と乱交するとか、文雄を冒すとか（これは文雄のM的利用で役に立つのでは）捨五郎を呼び込むとかがあつても良いのではないだろうか。又捨五郎の登場は、被虐の行為を種々の角度で高める事が出来ると期待されるが、犬とか雞とか牛、馬とかを登場させ、そういう設定を加味することによる耽美を効果的に書かれては如何なものだろう。

途中、大分脱線したが、自からS男性と自任しているものとして、次にSの肯定論を開陳してみたいと思う。

Sとは、人間或は人間性の破壊を目指すものでは無く、陶酔、歓喜を追求するものであ

り、かくされた人間性の暴露、発見に積極的に行動する性向を持ったものを指すのでは無いだろうか。世には縛り、むち打ち、夫婦交換、乱交、露出、浣腸、獣姦、等々変態行為として社会的には異常視されているが、相対的に人間性の歓喜陶酔を追求する手段、方法であれば何等恥ずる行為とは考えられないと思うが、どうだろうか。それどころか、これこそ人間性の探求につながる意義ある行為と考えられる。（但し、あくまでも相対的な追求で、不特定多数はまずい。何故ならば、無理解な縁無き衆生も世の中には沢山いる）これが本来のSではないだろうか。そして、かかるSこそ肯定されるべきではないだろうか。

私はフェラチオを好む。過去に私と通じ合った者で、これをさせなかった事は殆ど皆無と云つて良い。又、自己の排泄物をあびせたり、こすりつけたり、食させたりする。これは相手の羞恥心や、不潔感を脱却させ、相手に喜びを生み出させると信ずるからであり、その行為の逆も何等ためらいを感じない。だからと云つて腐敗したもの、不明の汚物に対しては潔癖である。知るもの、同志の生のものには臭気、見てくれの悪さは問題でなく、汚物とは云えない。然し、自己或は相手の排泄物に対して不潔感を持たないと云うと、うそになる。不潔を感じながらも、その壁を打ち破つて行為する所に、より高い次元の喜び

が生れるのである。

私は乱交や夫婦交換プレイを望む。然し、これとて隠れたるプライベートな行為であり精神的、心理的苦痛の垣を越えて行おうとする処に価値が生ずるのである。社会的にも公然の事とされ、誰もが行って当り前のものであれば、感激も歓喜も薄いであろう。勿論、現在の社会制度、特に偽善的一律的な法制度には反対であるが、精神的拘束があるからこそ、その垣を打ち破つて、秘められた人間性を具現させる処に価値があると考える。精神的抵抗が高ければ高い程、秘められた行為であるからこそ、一方それを如何に積極的に打破し隠れた性本能を露呈させ、屈辱の中から随喜の陶酔を引き出そうとするSの行為が肯定され正当化出来るものと考ええる。これは現時点の人間性、人間社会の肯定の上に立脚した生の肯定であり、単に破壊のみを喜ぶ独善的加虐者とは、似ていて、完全に異質のものである。

○

以上、浅才のくせについて理屈に走った様な事を一人前に論じたが、人を真実傷つける事が恐しく、そのくせ秘めやかに、より多くの同好の方とS、M行為を共にし、性本能の喜びを味い度いと念願している助平男のたわごとと、おゆるし下さい。



水 中 花 (六)

芳 野 眉 美

残 香

中雄一郎はハイライトを銜えると窓に近寄った。腰にタオルを巻いただけである。やがて五時になるが、初夏の夕暮は明かるく、素肌にさわやかな風が心地良い。

ホテルを出た寿美麗夫人が、十歩ばかりで歩を止め、ふと振り返って雄一郎を見上げ静かな微笑をなげかけた。

雄一郎はハイライトに火をつけ、銀杏並木のみどりに吸い込まれていく寿美麗夫人を見送った。

いつもだと二人一緒にホテルを出、背のひくい菱形のトレリスで囲まれた喫茶店でお茶を飲んでからわかれるのだが、ホテルの近所の予備校に牧二郎が通学するようになってから、この習慣は自然に遠のいていた。それでいて、寿美麗夫人が危険なこのホテルを替えるのを拒むのは、みだりに知らない温泉マークに入るのをいやがる人妻の潔癖感か、それとも、他に理由があるのか、雄一郎にはよくわからない。

雄一郎はハイライトを揉み消すと、ベッドに横になった。いつものことだが、寿美麗夫

人を送りだしたあとの、妙に白々しい、夜になりきれない空間に苛まれてやりきれない。雄一郎の分厚い胸に汗が残っていた。

シャワーを浴び、化粧を直し、着物にきがえた寿美麗夫人が、帰りぎわにいきなり雄一郎を求めたのである。

「もう一度、抱いて」

「着物がくずれてしまう」

「くずれないように、そっと抱いて」

「そんな無理なことという、また裸にしてしまうぞ」

「裸はいや、時間がないわ」

こともなげに、寿美麗夫人は雄一郎に甘える。まるで童女が駄菓子屋の前でダダをこねるように、寿美麗夫人は雄一郎の頑強な荒々しい扱いを求める。これには弱い。

雄一郎はレオナルド・ティツィのハニフの復讐Vを思い出す。大木の根に男を縛りつけたニフは男を残酷にも去勢してしまう。寿美麗夫人に会うと、いつでも、俺は去勢されてしまった男のようにだらしがなくなってしまう、と雄一郎は思う。

雄一郎が戸惑っていると、寿美麗夫人は雄一郎の肩をおさえつけた。

「これなら着くずれしなくてよ」

寿美麗夫人はいつでもこんな風に、よけいな羞じらいを捨ててしまうのだろうか。こんなに明かるくソフトに、自らの欲望に素直な人に雄一郎は出会ったことがない。しかし、貞淑な人妻にこの媚態は解せない。

雄一郎を意のままにした寿美麗夫人は、線香花火のように、一瞬、パッと燃えあがり、火の玉となって、雄一郎を苦しめ、サッと消えた。その秘めやかで積極的なたわむれは、雄一郎を悩ませる。

何事もなかったように、かるく着物の裾を直し、ハンドバッグを取ると、雄一郎のひた

いに軽くキスをして、寿美麗夫人は物静かに部屋を出ていった。

雄一郎は深い嘆息をついた。ベッドにも、シーツにも、雄一郎の胸の中にも、寿美麗夫人の残香がそこはかとなく漂っていた。青年、雄一郎はなにかしら憂うつだった。

寿美麗夫人の呼出しは、いつでも突然で、雄一郎を驚かせた。いつも昼の休みが終わった頃、会社に電話があり、

「お待ちしていますわ」

それで、切れる。

証券会社の営業部員である中雄一郎は、勤務中でも、外出はかなり自由であったが、仕事の都合上、約束の時刻に遅れることのほうが多かった。

いそいでホテルに着くと、顔見知りの女中が、

「いらしますよ」

と笑顔で雄一郎にいう。いつも寿美麗夫人から心付けをもらっているせいらしい。

ホテルはいつも決まっていた。会社の電話交換手にホテルの名をきかれてはまずい。だから、ベッドに横たわった寿美麗夫人が、雄一郎を待ち、迎えることになる。

雄一郎の眼前で寿美麗夫人の雪のように白

い肌は、深山の紅葉のように、みるみるあざやかな紅色に染まる。その美しいフラッシュを見たいばかりに、雄一郎は寿美麗夫人と逢うのだといっても過言ではない。

寿美麗夫人の可愛い乳輪は、乱暴で、目茶苦茶な雄一郎の扱いにあって、急激に血が引き、美しい輪は波だち、変化を繰り返す。

——アリーアラ（乳輪）における反応が強ければ強いほど、オルガスムは強い、あるいは、オルガスムに達する程度も強い。

とハマスターズ報告Vにある。

寿美麗夫人の乳輪が美しい変化を描いても顔の表情はかたく、身をちぢめてわななく。豊胸が、寿美麗夫人の愛情を表現する。

すばらしい人だと雄一郎は思う。寿美麗夫人を独占し、昼夜をいとわず気ままに責めさるいなむ鬼頭三郎太老人が憎らしくなる。

老人から寿美麗夫人を奪って、老人をコキユにしているのだが、人妻との密会による刺激とスリルは忘れて、雄一郎は寿美麗夫人を愛してしまっただけ。

雄一郎は帳場に電話して、ボーリング場と個室喫茶と、トレリスのある野外喫茶の電話番号を告げ、そこに貝塚絵馬がいるかどうか確かめてくれるようにたのんだ。

寿美麗夫人が居たベッドで、絵馬と逢ってみたくなったのである。空白な時間を満たすものは、やはり新鮮な感覚しかない。

ボーリング場の絵馬から電話があった。

雄一郎はホテルの名を告げ、

「来いよ」

と短くいった。

「めずらしいわね」

「なにが」

「慰さめて貰いたいのでしょう、絵馬に」

「うむ」

「どうしてだか、あててみましょうか」

「理由なんてないよ」

「うそ」

ふくみ笑いがして、電話は切れた。

子 猫

鼻をつままれて雄一郎は眼をさました。絵馬を待っている間、寝入ってしまったらしい。この軽い眠りは最高の気分である。

絵馬だけだと思ったが、見知らぬ少女が立っていた。雄一郎は、絵馬がいたずらをしているのに気がついてあわてた。

「馬鹿、そのタオルをかせ」

絵馬は、雄一郎が腰に掛けておいたタオル

を、友達の前で剥がしてしまっていたのである。連れの少女は眼をそらすどころか、雄一郎をじっと見つめている。この少女は男の身体を見慣れている。

雄一郎はあわてて絵馬からタオルを奪い取ると、腰に巻きつけた。

「そんなに恥ずかしがらなくてもいいのよ、お兄さま」

と絵馬が雄一郎をからかった。

「どうも失礼」

「こちらこそ」

少女はおかしな返事をした。

「この部屋、女くさい」

絵馬が部屋を歩きながらひとりごとをいった。

「あやしい」

「そうかな」

雄一郎は冷蔵庫からビールを取り出すと、ビンごと口にあてて、ごくごく飲んだ。寿美麗夫人のことは話す必要はない。

「遊び友達のリリ」

絵馬は少女を雄一郎に紹介した。

「絵馬のお兄さまですって」

リリは雄一郎に近寄ると、雄一郎の胸毛をそっとさわり、

「絵馬にお兄さまがいらしたなんて、すばらしいわ」

「くすぐったいから、少し離れてくれないかな」

「なら、ごめんなさい。絵馬って、いままで内緒にしていたのよ。紹介するのがオシかったのね、きつと」

雄一郎は苦笑した。リリは雄一郎から離れようとしなない。

「絵馬はね、リリのスポンサーなのよ。遊んだって、お金がいるでしょう。うちのママ月に三千円しかくれないの。たりないわ、とても」

リリは予備校に通うと称して毎日遊んでいるのだと、絵馬が説明した。絵馬は高校三年生である。

二人とも、グリーンとブルーの切りかえの突拍子もないドレスを着ていたが、ドレスの大胆な配色といい、意表をつくミニスカートといい、ティーンエージャーの先端的最新モードのモズルックに違いなかった。

素直な長い髪は無造作に顔をかくし、肩にたれている。濃いアイシャドウと浮きあがった白っぽい口紅が、このモズルックの少女をかえって幼くしている。

モズ族はかならず集団で行動するといわれる。集団の中で、はじめて若さが誇示され、保証されるのだろう。一人では何も出来ない弱々しい素顔がそこにひそんでいる。一人になると、精神と肉体のアンバランスから生じた不安定に彼等はおろくもくずれてしまう。

「ドレスのほかは下着もつけないのが、モズ族の常識らしいけど、絵馬もリリも、その下には何も着ていないのかい」

コーラを二人に勧めながら雄一郎はからかってみた。

「着てないわ」

リリがあたりまえよという顔で答えた。

「見せてあげましょうか」

「いや、いいよ。そんなつもりできいたわけじゃない」

「いいのよ、お兄さま」

と絵馬がいった。

「お兄さまにリリを上げるつもりで連れてきたのですもの」

雄一郎は驚いて絵馬を見た。絵馬が何を考えているのかわからない。

「お兄さま、絵馬が欲しいのでしょうか」

「——」

「だから電話して絵馬をさがしたのでしょ」

「——」

「でも、だめなの」

「絵馬はお客様なのよ」

リリが軽やかに笑った。

「だから、リリがピンチヒッターっていうわけ。いいでしょうリリでも」

「絵馬、ペッティングぐらいなら、お兄さまにしてあげられるわ。それで今日はがまんして」

雄一郎は無言で二人の少女を見つめた。どう返事をしていいのかわからない。ただ二人のクレイジーな少女に、いのように振り廻されているような奇妙な気持がそこにあった。

「驚くことないわ」

絵馬は続けた。

「絵馬とリリはレスボスなの。リリは、絵馬のことならみんな知っているわ」

リリがモズルックのドレスを脱ぎ捨て、雄一郎の前に立った。

リリの小さな乳房を囲んで、点々と火傷のあとが残っているのに雄一郎は気がついた。幼い青白い肌に、その傷跡がやけに大きく目立った。

「リリのネックレス、すばらしいでしょう。」

絵馬がタバコの火でつくってあげたの」

雄一郎は初耳であった。絵馬の一面に、こんな残酷性が秘められているとは思ってもなかった。

「リリの可愛いネックレスにごあいさつをしてあげて、お兄さま」

絵馬は雄一郎に甘えた。モズルックを脱いだ絵馬の、すき透るように白い肌に、細いメンスバンドが食い込んでいた。

厩戸皇子

うまやど厩戸皇子、のちの、聖徳太子の母は、穴穂^{あなほ}べはしと部間人皇女、父は、第三十一代用明天皇である。

用明帝の母は、堅塩媛^{またしひめ}で、父は第二十九代欽明天皇である。

穴穂部間人皇女の母は小姉君^{おあねのきみ}だが、父は用明帝と同じ欽明帝である。

即ち、聖徳太子の両親は異母兄妹になる。そして、堅塩媛と小姉君は、大臣蘇我稲目の娘であり、馬子の妹たちになる。姉妹して

欽明天皇の皇后になったわけである。

もっとも、蘇我馬子が、妹の小姉君と欽明帝の間に生まれた第三十二代崇峻天皇を暗殺するような、六世紀半ば頃の大和朝廷の話である。日本史は面白い。

蘇我物部二大豪族の対立、蘇我氏と天皇家の対立という背景があった。天皇の母方の祖父が、政治の実権を握るのが、古代国家の定石であり、稲目は用明天皇の外戚であった。

もう一つ。欽明帝はまた、第二十八代宣化天皇の皇女石姫との間に、第三十代敏達天皇を生んでいる。欽明帝の系図は実にややこしい。

この敏達帝の皇后は、欽明帝と堅塩媛との間に生まれた、炊屋姫かしきやひめ、のちの第三十二代推古天皇である。即ち、敏達帝と炊屋姫は異母兄妹であり、竹田皇子を生んでいる。

貝塚絵馬は高校二年の夏までは、一年前のことだが、一人娘だとばかり思っていた。

その日まで元気だった父が急逝した。食道癌であった。

葬式の当日、通夜に姿を見せなかった中年の婦人とダークスーツの青年の二組が近所の人達にまじって、かくれるように、そっと焼香をした。その青年があまりにも父に似ているので絵馬は驚いた。夫の急死にこたえたのか、絵馬の母は奥座敷に寝ていてこの時は席にいなかった。

焼香をした青年は、黒枠で飾られた貝塚信

一郎の写真には軽い視線を送っただけで、親族に交って祭壇の前に坐っている絵馬を見ていたようであった。

家に残った母にかわって、絵馬は火葬場に父を送った。しばらくして、控室にその青年の顔があるのに絵馬は気がついた。青年は絵馬から視線をはなさず、絵馬は眼を伏せた。中年の婦人と青年は、車であとから火葬場に來たらしかった。何事にもひかえめな二人のことが絵馬は気になった。

二学期が始まった頃である。

校門の前で絵馬は呼びとめられた。あの青年がベレット一六〇〇GTのドアを開けて、おうちまで送りましょうといった。

「その節は有難う御座居ました」

挨拶に困って、絵馬は葬式の礼をのべた。生徒が二人をじろじろ見ながら下校している。女子高校らしかった。絵馬の同級生もいるだろう。

「子供だから当然ですよ」

青年が意外なことをいった。

「子供って」

「貝塚信一郎はぼくの父です」

「――」

「驚きましたか」

絵馬は全身からずっと血が消え失せていくようなショックを感じて棒立ちになった。

「とにかく車に乗って下さい。ここじゃ話ができない」

絵馬は青年の横に坐った。絵馬のクラスメイトが、ガンバレ、エマ、と声をかけたが、当人は気がつかない。青年がにやりとしてその女生徒に手をあげた。

流れるような美しいボディラインをなびかせて、深紅のベレット一六〇〇GTは速度を増した。

「お茶でも飲みましょうか」

「お話して」

絵馬は青年を促した。信じられない話であった。

「もっと、くわしくおききたいわ」

「絵馬さんとぼくとは異母兄妹なんですよ」

薄いサングラスをかけながら青年はこともなげに答えた。異母兄妹。

「うそ」

「うそじゃありません」

「あなたのこと、父からも、母からもうかがっております」

「ぼくは、父から、絵馬さんのことはよくきかされましたよ」

「それが本当なら、何故、絵馬に話してくれなかったのでしょうか」

「本宅じゃ禁句だったのでしょうか」

「本宅」

「ぼくの母は、貝塚信一郎の妾だったわけですよ」

絵馬は焼香にきた中年の婦人を思い浮かべた。青年の顔は父にそっくりなのでおぼえていたが、青年の母親となるとまるっきり記憶がなかった。こんなことならよく顔を見ておくのだったと絵馬は思った。

「妾という言葉が嫌いなら、愛人といってもいいですよ。同じことだから」

青年は続けた。

「もっとも、絵馬さんのお母さんと結婚する前から、ぼくの母は愛人だったらしいから、ぼくの母は被害者なのかもしれないけど。だから、ぼくのほうが絵馬さんより早く生まれただけかな」

こんな話は許せないと絵馬は思った。いやらしい。父が二人の女を同時に愛していたなんて。

「そんなにこわい顔をしてにらむなよ」

絵馬は顔を伏せた。青年にどう返事をしていいのかわからない。自分の顔がどんな顔を

しているのか気になった。きつと醜い顔なんだわ。いやだな、と思った。

「中雄一郎、よろしく」

青年は左手を絵馬の前に突き出した。絵馬が躊躇していると、絵馬の右手をぐいと握った。

「これでよし」

中雄一郎は笑った。

「それでは妹よ、とにかくその辺の喫茶店でお茶を飲もう。ちょっとしゃべりすぎてのどが乾いた」

絵馬の顔がほころんだ。

兄と名のつた中雄一郎のことを絵馬は母に話さなかった。母は知っているのだろうか。

絵馬にはわからない。死んだ父に愛人がいたことは断じて許せないが、異母兄のことは憎む気にはなれなかった。一人娘で兄弟がほしいと思っていた心理も作用していたのかもしれない。

貝塚絵馬は日本史の時間、欽明天皇の系図に興味を持った。異母兄妹で結びつくという近親相姦に興味を持ったのかもしれない。同腹でなければ、その頃は許されていたのである。異腹の兄弟姉妹間の婚姻は認められていた。

絵馬は、異母兄である中雄一郎のことが頭から離れなくなった。第一印象が強烈すぎたのかもしれない。

絵馬は、雄一郎を好きだと思った。

兄、という意識はなかった。一人の、独立した、異性として感じていた。

無理もない。十七才になって、はじめて、兄だといわれても、身体に馴染むものではない。

雄一郎と話しをしているところを見た同級生はステキな恋人ね、と絵馬をひやかした。七つ年上の雄一郎を、フィアンセといったら好奇心の強い同級生たちは信じてしまうだろう。

絵馬は、このたあいのない嘘を楽しんでいる自分に気がつき、一人で顔をあからめた。

二月たった。

その日、絵馬は退社時刻をみはからって雄一郎に電話をした。絵馬に会っても、雄一郎は絵馬の家に電話をするようなことはなかったのである。絵馬の母には会っていない。

二、三軒、雄一郎のなじみのバーを廻って絵馬は酔った。甘口のジンフィズばかりだったが、アルコールを飲み慣れていないから、酔うのは簡単だった。

「お兄さまのアパートに連れて行って」

と絵馬は甘えた。

「見たいわ、お部屋が」

「きたねえぞ」

「お掃除をしてあげる」

雄一郎は小さいが料亭を経営している母とは別に、アパートを借りて生活していたのである。夜の遅い料亭では、サラリーマンの生活が狂ってしまうというのが、その理由であった。

異母兄妹は腕を組みながら夜のネオンの空を歩いた。どのバーでも、絵馬を雄一郎の妹だとは信じなかった。絵馬は母親似だったし、雄一郎が父親似だったから無理もなかった。それに、中雄一郎が料亭の一人息子であることのほうが知れていたからでもあった。

「あら、いよいよ御結婚」

どのバーでもいわれ、絵馬はその度に顔をあからめた。雄一郎が女連れで飲むのははじめてだったのである。雄一郎が一人で飲むための、常連のバーだけを選んでせいである。ママ一人、バーテン一人とか、ママとホステス三人の、小さなバーばかりであった。

一階がガレージになっている高級アパートの三階に、雄一郎は絵馬を案内した。キッチ

ンに浴室、二間の一室にベッドがあり、灰皿や下着が散乱していた。

「男くさい」

絵馬は顔をしかめた。雄一郎はあわてて窓を開け、汚れた下着類をベッドの下に押し込んだ。掃除などろくにしていらないらしい。

「ねえ、お兄さま」

ウイスキーを飲んでいいる雄一郎に絵馬は云った。

「わたしをあげましょうか」

「えっ」

驚いて雄一郎は絵馬を見た。

どうしてこんなことを云いだしたのか、絵馬は自分でもわからなかった。酒のせいかもしれないし、雄一郎のことばかり考えていたからかもしれない。

「お兄さまにすばらしいプレゼントをしよう

かと思っていたの。だけど、何を買っていいかわからないから、絵馬をあげる」

「おどかすなよ」

「おどかしてなんかいなわ」

雄一郎はハイライトに火をつけて大きく煙を吐いた。絵馬の突拍子もない言葉に戸惑っている。

「絵馬は、いいか、絵馬は俺の妹だよ」

「それがどうかしたの」

「近親相姦は禁じられている」

「どうしていけないの」

雄一郎は、答える前に、ウイスキーをタンブラーに半分ほど注ぎ、勢よく飲んだ。酔がさめてくる。

「道徳的にいけないことなのだろう」

「どうしていけないの」

絵馬は同じことを繰り返した。

「ねえ、どうして」

「俺は知らん」

絵馬がブラウスのボタンをはずしている。フレヤーの沢山ついた長袖の可愛いブラウスを脱いだ。膝のでているショートスカートを。雄一郎の見ている前で、なんでもないことをしているように、すこしのためらいもなかった。

絵馬は雄一郎の前に立った。

「見て、絵馬を。綺麗でしょう」

成長しきっていない青白い肌が雄一郎の前でできざみにふるえている。二つの乳房は蕾のように固く小さい。絵馬はどこもかくしたりはしない。香んばしい、なだらかな体の線がほのかなけりを秘めて美しい。

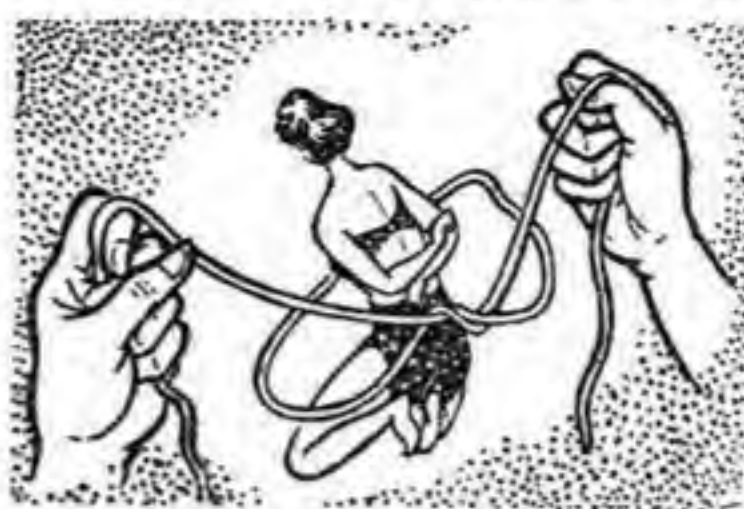
「絵馬、既戸皇子を生みたいの」

允恭天皇の御子、木梨のかるのひつぎのみこ輕太子が、
同妹輕大郎女に歌ったものに、

笹葉に 打つや霰の たしだしに

率いね寝てむ後は 人は離かゆとも
愛つるはしと さ寝しさ寝てば
刈かりこも薦の乱れば乱れ さ寝しさ寝てば

というのがある。
古事記下巻允恭天皇、輕太子と衣通王。
同腹はこの時代でも不倫とされている。



妻を初めて

縛るの記

文橋 喜美三

結婚後四年になる本年二十七才になる青年です。私は中学校卒業後一年間、M市の職業訓練所に通い、卒業後今の仕事の店に入り三年間修業して次の職場に入社、十年間に三回かわり現在の職場には昨年入社、二十三才で結婚、現在二十七才になろうとしています。

訓練所に通っている頃からS Mに興味を持ち、本や雑誌を漁

っておりましたが、その当時、一度日曜日に近所の女友達と山へ遊びに行つて「お姫様ごっこ」といって、マネ事のように縛ったこともありましたが、ただそれだけのことで修業中のことでもあり、それ以上には進展しませんでした。結婚してから生活も落着いてきました。ここ半年ほど前から再び女を縛ってみたい気持ちが起つてきました。奇譚クラブは昨年十月

先日、私はネマキのヒモで妻の両手を後に縛りました。新鮮な魅力がありました。妻はキスをせがみましたが、まるで別の女のような感じがしました。その夜はそれで終り、その翌日、「どうだ、縛ってやろうか」と言うのと、「縛って」と答えたので、「用意しとけよ」と言い残して、私はウキウキして仕事にはげみました。さて夕食後、子供を早く寝かせて私達は三帖の奥の間へ入り長襦袢一枚になった妻を腰ヒモで後手

号より愛読しています。外にサスペンスマガジンも、時々を買っています。始め妻は、エッチだとかスケベとか言つて読みもしませんでした。が、本年一月頃からポツポツ読み始めました。この頃では夜中、私に縛ってくれというようにさえなりました。に縛り、足首と共に二重にして日本手拭でサルグツワをしてからタバコを一本吸いました。「痛い」と聞くと「痛くない」と答えたので、腰ヒモを解いて長襦袢をぬがせて腰巻もとって再び後手に縛りました。いつも見なれている体ですが、又違った美しさがあり思わず見惚れたものです。「どうだ、縛られた気持は」と聞くと、妻はちよつと笑つただけで返事はしませんでした。私が足も縛ろうとすると、体を反らして縛り易いようにしました。今月も二十五日になると妻は自分で雑誌を買いに行きました。妻も縛りに対して魅力を感じていらしく、今迄の夫婦生活では味わえなかった喜びを味っているようです。文章を書くのが下手で思うように書けません。このへんで勘弁させてもらいます。

稿談性風俗資料入門

(6)

中村古峽『変態心理』と田中香涯『変態性慾』

斎藤 夜居

性器そのもの、病理に関する事柄は医家の領域であるから、性研究家を自称しても矢張り素人では、お産のことや、淋疾や梅毒に関する治療法はおぼつかない。が、性心理の方面になると症状は実に多種多様で、素人や売薬業者や性的著述専門家でも、この心理方面の「性学」はいじり易いと見え、無責任な怪しい人物がそこ此処に蠢動する余地ができたりする。「医学」において通俗読物が横行するのは「性」だけである。これがまた昔からすたらないのだから実に不思議きわまる。然しながら、性的変態心理などと云うのは、若し病氣だというのであったら、その患って

いるご当人自身それを治す意志がなかったら「病氣」では無いのであろう。などと云って本誌読者各位を安心させる訳ではないが、昔ヘンタイとよばれた性愛技巧はこんにちでは婦人雑誌の未開封綴じ込み附録などで、人妻たるものは是非にもその夫とみずからの性生活快楽追究のための必須条件だとされている。もはや健全なる性行為の説明に就いては、禁じられたる言葉というのは減少しつつある——妻はじぶんの意志で努力しなければ、夫のよろこびが完全にならないことを憶えておいて下さい。つまり彼女もよろこびに応じて開いたり閉じたりしながら、指先で作業する

ように、夫のペニスをしっかり握ったりはなしたりするように、腔を閉じたり締めたりする努力をしなければいけない——などと実に親切に解説している。むかしは性談の一切が「変態」だとされる傾きが強かった。だからその頃にこんなことを書いたら大目玉をくらってしまう。大正中頃より昭和初年には実におびただしい数の「性雑誌」が発行されているが、その大半はきびしかった検閲時代に尚売らん哉主義を発揮した骨抜き雑誌で、今日再読して記録するに価しないものが多い。然し、この章において紹介する雑誌『変態心理』と『変態性慾』は学術雑誌ではないけ

れども、共に心理の変態と性慾の変態に就いての真摯な研究法で、真面目な態度でわかり易く、この種の雑誌としては広い読者層に呼び掛けた点に誠意と好意が感じられる。異常心理と性医科学における初期の啓蒙雑誌として注目した。

私をはじめ『変態心理』という雑誌を知ったのは昭和十四年頃だったから、この雑誌が廃刊されてからもう大分年月が経っていた。その頃小石川白山の坂の途中に窪川書店があつて、その電車通りの向側に小さな古本屋があつた。その十銭均一の台の上に陽焼けて紙の変色した薄い雑誌が四十冊ばかり積んであつた。『変態心理』という誌名と早川桂太郎の表紙の絵が気に入る、全部買うのだったら一冊五銭に負けてやると云うのでみんな買った。私はこの雑誌を現在でも持っている。その頃から、古本屋で買うのがちょっと恥しい雑誌や単行本を漁り歩いていたので半狂堂本（宮武外骨）なども既に読んでいたし、風変りな読物から盛んに性知識を吸収し、好奇心だけは旺盛で漁色耽奇に関する記事を読んでは秘めやかな悦楽を求めているのであつた。——だんだん生活がきゅうくつに

なつて来た頃で日支事変が始つて三年目。蘆溝橋事件があつたり、皇軍が海南島に上陸したり、ノモンハン事件があつたりした。——私は、その晩『変態心理』という古雑誌を読み耽つた。この雑誌には軍国主義のことは何も書いて無いし、人間の病的な心理が肉体に及ぼす影響や、浮浪者の記録や娼婦の心理などという事柄や、催眠術や大本教のことや、怪談・迷信など、その他民俗学における異風俗の記事にも富んでいて、有益だったばかりでなく、未知のたのしみに耽つた。

また、多くの学者や研究者の名をもおぼえた。『変態心理』第十巻四号（大正11・10）の巻頭言に、

「政府は過激思想を圧迫しようとやきもきしている。その反対に、一般思潮が過激な調子を帯びて来つつあるのは、何だか皮肉に考えられる現象である。政府は物価を下げようとやきもきしている。その反対に、物価が上り気味なものも皮肉な現象である……思想は抑えられるもの、物価は下げられるものと、民心の帰趨を知らずに焦っている当事者を見ると、おかしいより情なくなる」

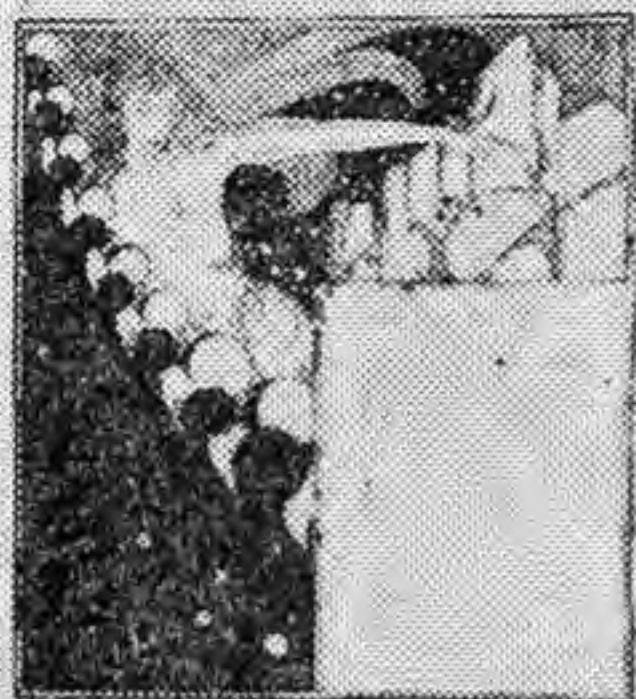
と云っている。これは何時の時代にも誰も

が云いたいことだが、私がこの古雑誌を買った頃の印刷物からはこういう言葉は姿を消していたから、殊更にありがたいと思った。

『変態心理』創刊号は大正六年十月に発行、日本精神医学会を設立した文学士中村古峽が主宰者であつた。創刊号の内容は、頭蓋骨の興味、菅原教造。フロイド精神分析法の起源、久保良英。支那に於ける靈的現象、幸田露伴。狂者の追想録、編輯者。酩酊者の心理、佐多芳久。習慣性犯罪者に就いて、佐藤政治。二重人格の少年、中村古峽。近代の珍書「幽事考料」の紹介。以上となっている。後記において、発行者古峽は日本精神医学会の設立趣意のなかで、大要、次のように云っている。

「私は医学を専門に修めたものではありません。弱年の頃、京都医学校に学んだことはありますが、偶々父の死に会つて学資の途を失い、苦学十年、その間一日も精神の安定を得たことはありません。加うるに万病併発の有様で、医者は私の脈をとる毎に、只新たな恐怖と威嚇とを与えるばかり、そのため益々病気を加える傾きがありました。終には私も医者に診て貰うのが恐くなって段々医者から遠ざかり、禪の書物など

變態心理



「變態心理」表紙

に心を傾けるようになりました。処が丁度私が大学（帝国大学）を卒業しようとする前の年に、私の一人の弟が精神病に罹りまして、それがため私は精神上にも物質上にも云うに云われぬ大打撃を受くることとなりました。此の間の消息は嘗て東京朝日新聞の紙上で『殻』と云う小説に綴ってその一端を世に発表したことがありますから、委しくは申し述べませんが、私の一家、特に私と老母とはこの弟の病を養うために、殆ど肉をそぎ骨をけずるような苦しい思いを経験いたしました。弟は約二年程病院生活を送り、今日の医学における最善の療法

を施しましたが、病勢はつのるばかりで遂に某病院で悲惨な最後を遂げることになりました。私は物質医学だけでは人間の疾病、特に精神的疾患を治癒するに不完全であることを深く悟りました。茲に新たに精神医学という一科を建設して見たいという決心を起しました。爾来数年……」

心を専ら精神病学並びに催眠心理学の学理と実際に研究を潜め、東西先哲の学業のうちの精神療法のとをたずね、自分にも行い、他人にも施して見た——と云っているが、

中村古峽は我国における精神分析・精神医学の草分けで、孤軍奮闘して荒野を切り拓き新たな一筋の道を作り、文学と医学という両刀をたばさみ、まるで武芸における武者修業者の如き観があった。今日ではまったくその業績が隠れているので、雑誌『変態心理』を解説する前に不完全ながら同氏に就いての調べを記すと、

中村古峽は明治十四年二月二十日奈良県に生れた。帝国大学（現・東大）在学中より朝日新聞に長篇小説『殻』を明治四十五年七月二十六日より大正元年二月五日まで百十三回連載して完結を見た。朝日新聞に無名の新人作家の登載はいくら昔でも稀有の事柄で、杉

村楚人冠を通じて夏目漱石が推輓したと云われている。小説『殻』はそれまでの自伝を含む作品で、真つ正直な凡そ色気の無い、登場人物のうち女性は母親と妹だけ、あとは作者と発狂してしまう弟、という実に殺風景な自然主義小説であった。完結後当時の第一流文芸書出版社であった春陽堂より単行本にまとめられた。生田長江と楚人冠の好意に溢れた序文附、菊判本文四四二頁、大正二年四月発行となっている。『変態心理』の発行をやめてから、（昭和初年のことと思われる）千葉医科大学精神病学教室に入った。のちに、戦後になってから、名古屋医大より医学博士の称号を得ている。没年は昭和二十九年九月十二日。

中村古峽が雑誌『変態心理』を発刊するに至った事情と、その経歴は以上に記した位きり私にはわからない。またこの雑誌のバックナンバーを全部通覧することは今日では不可能に近い——この種の雑誌としては非常に長く継続し（大正六年十月より大正十五年十月まで、百六冊まで刊行されたという）発行部数も少い数ではなかったと思われる。

日本精神医学会では雑誌のほかに、『変態

心理学講義録』という総紙数二千二百頁六冊完結を発行し、古峽の著書としては『大本教の解剖』、『自殺及情死の研究』、『實際修養・精神統一法』、『日常生活・煩悶解決法』、『少年不良化の径路と教育』などがあり、当時よく知られ版数を重ねた『変態心理の研究』があった。また中村古峽は変態心理学研究普及のために全国的に（主として医家・教員・斯学研究者を対象として）講演旅行をして啓蒙と宣伝につとめた。さきにも記した通り古峽は文学士であり医師ではなかったけれども、今日いうところの精神病理学を対象としたカウンセリング事業を実践した草分け格でもあると云えよう。痛切な自家体験を対社会活動化した先覚者でもあった。尚自宅つまり医学会に於いて「変態心理学実験所・診療部」を開設して、神経衰弱、ヒステリー、諸種の強迫観念、不眠、不安の治療をおこない精神分析による悪癖矯正、性格改造、精神検査、性的煩悶解決等々多数のなやめる心をもつ人々のためにつくした。

中村古峽の研究を集約した最もわかり易く興味深い著述に、昭和五年三月武俠社発行、近代犯罪科学全集第四巻『変態心理と犯罪』がある。五百頁から成り、内容は「変態心理

篇」「催眠術篇」「迷信打破篇」「実話篇」などとなっており多数の実例によって主題を解説している。実話篇中にある「性的不満に基く放火犯」は大正年代に北海道にあった事件だが、古峽は、小説『殻』に於いて深く自然主義文芸の本道を歩いただけあって、こうした読物にあっても筆致はわかり易くよく書いている。原因不明であった放火犯の女、お秋という大工の女房が警察で、とうとう最後に警部補だけに、どうぞ他の旦那方のいないところで……と、一段と小声になって告白する、

「実は旦那、夫はお酒を戴くと、夫婦関係のできない男です。別に料理屋遊びをするというぢやなし、また、女狂いするという男でもありませんが、僅か二合か三合の酒を飲みますと、まるきり家内^{わたし}に手を出すことがあります。私はまた毎月半月ぐらいいも月経がありますのに、後の半月のうち、夫がお酒を飲んですと……後は申し上げませんから、どうぞお察しを願います」と顔を紅らめながら云った——という迄の経過を記録した読物だが、日常生活のなかでの人^性の異常変態を心理から追究推理した実例などあり、興味深い。

ところで小稿では今迄にも随分と人^{変態}という言葉や事柄について書いたが、諸書を参考して大体の意味を記すと、平衡を失い常軌を逸したのが変態であるが、正常と異常、常態と変態には学問的にも本質的な差別や、厳密な区別はつけられないと云われている。今日ではそれが定説となっている。只、人間の心は大きく分けると人^{意識}と人^{無意識}とで構成されているので、その無意識のほうに働いている状態が人^{変態}だという。そして人^{変態心理}というのは、夢、錯覚、幻覚、神経衰弱、神経症、ヒステリーなどを指すが、我々のいう変態とは？ わかり易く云えば読んで字の如く変^てっていることで、人間は誰でも変^てっていることを主張したがる。例える迄もなく肉体、精神、服装いずれも同じ者が街を歩いていない。自我を主張することがつまり文明の進歩だから……

雑誌『変態心理』が中村古峽によって創刊された大正六年には、ロシアに大革命がありソヴェト政権が樹立した。翌大正七年になると日本では露国に於ける反革命派援助のためのシベリア出兵があり、それを見こした米の買占めのため、市井に米騒動が起ったりしている。そうした時代にこの雑誌が発行され始

ったことは、やはり意味深いものがあると思う。その年十一月にドイツの降伏により第一次世界大戦は終り、漁夫の利をかきまわった日本でも、欧州の戦火が止むと、社会のあらゆる分野において生活不安が増大して、末端に行く程みじめな人間が増えて、嫌が応でも社会心理学の普及ということは必然の現象であった。何故なら、働いても食えなくなつた連中と、あくまでも時流にのつてうまくやっている特権階級との差が著しくなり、何故そうであるか、という考える大衆が多くなつたからである。お仕着せの学問や思想や知識だけでは救済されない程に社会も人々の心も病み、政治と新興宗教に就いては暫くおくとしても、この頃から人間における心理とセックスの△変態▽を真面目に研究する気運が生じていたと思う。変態心理学は十九世紀の後半にフランスの心理学者リボー、ビネー、ジヤネー等によって初めて開拓され、幾多の研究者の手により年と共に其の範囲が拡げられ、遂に普通心理学の領域より全く分離し、新しい精神科学として発達して来た。特に、フロイトを鼻祖とする精神分析派の勃興は精神治療界に一大革命を招来したことは多くの人々に知られている。中村古峽の雑誌『変態

心理』にはそうした海外の学説もおびただしく移入されたが、我国固有の風俗・習慣・信仰・民俗における変態現象の心理的解明にスポットが当てられていたことをも特記して、同じく日本精神医学会発行の雑誌『変態性慾』にうつりたい。

◇ ◇ ◇

「彼は既に少年時代に於て、特に残酷なる記事や死刑の絵画を見るを好み、また殉死に関する口碑伝説のある書物を愛読した。思春期に達した頃には、いつも彼を苦しめる残酷なる一婦人の姿を夢に見た。元来ガリチア（註。Austria Galicia）の婦人は、その夫を支配して自身の奴僕同様たらしめるが如き風習がある。彼が十歳の時、始めて此の有様を実地に目撃した。彼の血縁に当る一婦人に某伯爵夫人があつて、其の纖手に一家の全権を握り、夫の伯爵を頭使していたが、此の状況はそれを親しく目撃した彼に対して、終生忘れること能わざる印象となつたのである。伯爵夫人は、顔こそ美しいが、不貞腐れのお転婆であつた。然るにマゾッホ少年は、夫人の美容と、纏える高価の毛皮とに憧れて、夫人を讃美していた。夫人も其の従順に服従するのを喜ん

で、彼に化粧室に入るのを許したことも屢々であつた。或日、彼は夫人の前に跪いて、其の穿ける上草履を脱がした折、いきなり夫人の足に接吻した。夫人は微笑しながら、其の足で彼の顔を軽く衝いた。彼はそれを、甚しく嬉しく且つ幸福に感じた。一日、彼は其の姉妹と共に隠れん坊の遊戯をなし、夫人の寝室内に忍び込んで、壁にかけてある衣服の後ろに身を隠した。処がその刹那に、伯爵夫人がその情夫を伴うて寝室内に這入つて来た。彼は依然身を隠しながら其の様子を凝視していると、夫人はソファアの上に身を横よこたえて情夫と痴々くりはじめた。すると間もなく主人の伯爵が二人の男を従え、非常な勢いで室内に飛込んだ。伯爵が、夫人とその情夫とのいずれか一方へ身を振り向けんとする間もなく、夫人は突然ソファアから飛び上つて拳を振り上げ、主人の横面をしたたかに殴りつけた。伯爵の顔からは、鮮血がポタリポタリと流れ落ちた。そのうちに夫人は一条の鞭を手にとって、主人を始めその連れの男を室内より追い出した。情夫も其の権幕に恐れて遁げ出した刹那、壁にかかつてある衣服が落ちたので、今まで其の後ろに隠れて

いたマゾッホの全身が不意に暴露した。夫人は、彼を一目見るなり、彼を牀上に投げつけ、両膝で彼の肩をかたく押えて、無慈悲にも散々に殴打した。彼は非常な痛みを感じたが、併し之と同時に大なる愉快をおぼえた。

夫人の暴行のなお止まぬうちに、伯爵は帰って来た。少しも怒ったような顔もせず、かえって悄然として、いかにも臆せるが如くに夫人の前に跪き、どうか宥してくれと哀願した。その間にマゾッホは遁げ出したが、なお振りかえって夫人が散々伯爵に剣づくを喰わせている有様を見た。彼は室外に出たものの、兩人の様子が知りたくて堪らぬので、足音を忍ばせながら密かに戸扉に身を寄せ、耳をすまして室内の模様をうかがって見ると、鞭のピシピシと鳴る音、伯爵のうめき声、夫人の伯爵を打つ音とが相和して手に取るが如くにきこえた。

これは田中香涯の雑誌『変態性慾』第一巻第二号大正十一年六月号所載、「マゾヒズムに関する説話」に拠った。またこの論考のうちに、ギリシャの大哲アリストテレスや、鉄血宰相ビスマルク、民約論や懺悔録の著者ルソー等史上の人物においても女

性から虐待凌辱されて病的な性慾のよろこびを感じた事柄を述べ、またクラフト・エビングの名著『プロスコバチア・セクスアリス—変態性慾—』により尼僧院における難行苦行が、脱俗の方便が、却って教徒の性慾を挑発興奮せしめ、淫らな狂態をほしのままにしたとして、パッチー尼は尼院長をしてその両手を縛せしめ、臀部を露わして杖で殴打せしむる苦行をなすとき、たちまち情熱火の如く燃え上り、声を張り上げて絶叫し、「ああいい。もうたまらない。この焰はわたしを焚きつくそうとしている、お願いですこの火を之以上に煽らないで。わたしはこのような死を望みません。快感が余りにも多すぎます」と。こうしてこの尼の意識は恍惚として、淫猥なる幻覚に襲われ、ほとんど破戒せんばかりであった。——また、ゲントン尼も殴打を受ける毎に、絶大の快感を感じて、神と交わる幻像を見た、そしてしきりに、「愛!」「愛!」と連叫したという。

以上長文に亘って田中香涯の文章の一部を引例したことは、当時海外の性慾学書が多く我国にも輸入されるに至ったが、通俗的な興味本位に歪曲された浅学者の紹介にとどま

り、変態性慾学に対する正当なる理解者、紹介者に乏しかった時代だけに、学究者解説者としての香涯を正しく評価したかったからである。変態性慾に関する実例は、研究を待つまでもなく市井の大・小犯罪事件のかげにも潜んでおり斯学による解明がいそがれる程に、社会生活の近代化は異相・複雑になってきた。次に、もう一つの文例を示してみよう。

「便所窃視症——異性の排尿脱糞するのを窃かに瞥見して、性的快楽を感じる一種の変態性慾がある。これはコプロラグニーの変型症と認むべきもの。私は平易に便所窃視症と名づけた。イワン・ブロッホの『現代の性生活』の中に、かつてベルリンの停車場の便所に孔を穿って婦人の脱糞するのを窺き見た男子のあったことを記しているが、此のようなものは我国に於いても随分多く認められる。去月一日(註・大正十三年のこと)発行の地方新聞「太陽月報」に掲載された左記の男子は、極端なる便所窃視症と認むべきものであるから、之に関する新聞記事の全文を左に掲載する。去月三十日午前九時、私立樟陰高等女学校の女生徒が用便していると、床下で男の笑

合本「変感性欲」扉

合本「変感性欲」扉
田中香涯著

田中香涯著

變態性慾 第壹卷

日本精神医学会

い声がきこえたので、驚いて下を見ると、六尺豊かの大男が居るのを発見し、悲鳴をあげて飛び出し、直ちに職員総がかりで引捕えたが、糞尿で濡れ鼠になっているので臭くて堪らず、そのまま永山駐在所巡査に引渡した。この男は大阪・西区西島町の八百屋で金沢市蔵（二四）という変態性慾者なることが判った。市蔵は、以前にも便所内に忍び込んだことがあるがその時は失敗したので、その日は特に注意して、南手の裏門より忍び込み、便所の下にかがまって、女生徒の陰部を窃視し、その十三人目に発見されたと言ひ、何分とも小便が頭にかかるのには閉口した、と頭を掻いた。拘

留七日。——女学校の便所内に忍び込んで、糞壺の上にかがまり、幾回も尿を頭に浴び、十三人目になって発見されたと云うのは、実に極端なる便所窃視症である」

（『変態性慾』大正十三年十二月、通計第三〇号）

◇ ◇ ◇

とにかく隠されたままでは不可い。性の研究が人生及び社会問題を解決するためには、どうしても緊要であることを説明するためには、事実を示すことが必要な時代の氣運というものが生じてきた。文字通り臭い物にふたVをしていられなくなってきた。真実を求め、与える、その必要を感じる人々が多くなり、そのことは生理の問題というより、人間の精神の底流のうちに、社会・政治に対する表裏背反する思想の混迷と、絶えず制圧されている社会制度に対する不満の解決にも確かに役立つ……。だから「性」を趣味で解説した汗牛充棟の雑書はやはり残らない。伝えられないのである。と云ってその多数は無意味だったか？ そうではない、其処の中からでも求むべきものは残されているのだが、玉石混在であって、実際の性知識の吸収という点においては、やはり八性Vを正しく科学心

理の世界から追究した書に、より大きな価値があった。

『変態性慾』は『変態心理』の姉妹雑誌として出発した。発行所も日本精神医学会、発行者も中村古峽であるが、執筆は田中香涯の個人雑誌であった。大正十一年五月に創刊。以後大正十四年六月に第三十六冊目で終刊。七月以降は『変態心理』に合冊合流した。次にその「創刊の辞」を要約する。

「近年来「性」の研究は一種の流行となり、之に関する著書雑誌の向背相望んで踵出するが如き有様であるが、併しその中には人心の弱点に乘じ、或は世俗の好奇心に迎合してひんしゅくに堪えざる記事を掲載するが如き者の夥からざることは、私の深く遺憾とする処である。加之近年流行の性研究の内容に、俗悪、浅薄、卑猥、杜撰の分子多く、之がために世の識者をして益々性に関する述作論議に対して厭惡の感を抱かしめ、真面目なるべき性研究の行路を阻碍するの虞愈々大ならんとするを認めて、心ひそかに痛嘆せざるを得ない。さらぬだに肉を卑しみて徒らに靈を重んじ来れる因襲の形式的慣習は、今に至るも猶、世人をして性慾を陋視せしめ、学者として世に立つも

のと雖も、人間の性的生活を公然論述せざるを以て賢なりと思惟するが如き状態であり……されば性の研究に従事するものは、能ふだけ真面目なる態度を取り、学者的立場を失わない様に注意して、世の非難誤解を回避するに努むると共に、性の研究が人生及び社会問題を解決する上に於て緊要なることを啓示闡明しなければならぬ。本誌発行の目的は実に此に存する」と云っている。

△性研究家▽に受難史は必ず附物で、無キズだった例は非常に少い。香涯もこの雑誌を三十六冊発行するまでには細心の注意を行っていることは、雑誌に墨で黒々と幾行も本文中の抹殺文もあった。それは第十三号所載の「姦通の原因及び動機」という記述である。その他伏字も多い。またこの種の雑誌刊行者に必ずつきまとう性の相談や、男色同好者の住所を知らせてくれ、などとの質問にも大分なやまされた様子である。その他そうしたわずらわしい事柄への不満を、大正十三年十二月号の後記で次のように書いている。

「私の性研究は一種の学問道楽であるという事であります。沢田順次郎さんとか羽太鋭治さんとか云うような性研究の専門家を

標榜して居られる歴々のお方達と同様に見て戴くのは私にとって非常な有難迷惑であります。私は元来医者癖に病人を診療するのが嫌いで、祖父より譲られた少しの財産があるのを幸いに、年がら年中、読書郷裡に遊んでいる一種の道楽者であります。つまり学者でもなければ、研究家といわれる資格もない一介の学究的道楽者であります。

「変態性慾」は中村古峽氏の御懇囑にあえて、学問道楽の一たる性研究の結果を発表し、持前の道楽心を満足させたいために発行しているのですから、性学大家の沢田さんや羽太さん等とは到底較べものになりません。だから、私に対して、淋病の治療法とか、陰萎の新薬とか、同性愛者の姓名住所とか、避妊法とかに関する質問状を寄せられるのは、全くなのお門違いで、こう云う実際の質問は「性学大家たち」に問い合せになるべきものであります。」

香涯はあくまでも学究肌だったので、この皮肉な調子は、性商学派（いつの世にも沢山いる）に対する嫌悪感の現れであろう。また別の記事にも、当時の大衆向の「性典」ものの横行に、その羊頭狗肉ぶりを怒っているが、元来が論争をこととしない人柄だったので、

田中香涯の発禁書「耽奇猥談」箱



で、事実を示すということで一貫している。素材は海外文献、学術報告書、医事資料、古文献中の性的記聞、また更には新聞報道の性犯罪記事に至るまで、あまねく渉獵していた。

◇ ◇ ◇

田中香涯は昭和九年四月、還暦記念歌集『草庵』という小冊子を私家発行した（兵庫県伊丹町三三四）。この歌集の巻末に著作目録を附した。専門医書は『病理総論』ほか八点、いずれも医学教科書である。語学書には『医事と文独訳指針』があり、医史書に、『明治大正医学史』と『大学派と北里派との

学問的衝突史』があった。香涯の没後戦後になつて同家の蔵書整理に當つた古本屋波多野巖松堂は、田中先生は晩年になつて医史の大著述を計画されて居られたようで、医師・医学者の伝記に関する書物の蒐集が多くありました、と筆者に語つたことがあった。

同目録中最も多いのが、随筆書と通俗雑書で、『医事断片』（三版）ほか三十一點。二

十版を重ねた『間違いだらけの衛生』。『江戸時代の男女関係』（三版）。『女性と愛慾』（三版）。『愛と残酷』（二版）。『夫婦の性的生活』（数版）などは多くの人々に読まれてきた。『耽奇猥談』昭和四年四月富士書房発行、あぶなかしい題名だったが、やはり発禁となつてしまった。

田中香涯はこの歌集のなかで、還暦述懐と

題して詠じている。

つくづくと思へばわびし徒らに空しき名のみ世に知られつつ

附記。『変態心理』創刊号（大正6・10）定価一冊二十銭。『変態性慾』創刊号（大正11・5）定価一冊三十五銭であつた。

『陶醉の乳房』を読んで

——河森真理子嬢に寄す——

浦 沢 文 夫

七月号の辻村様のSMカメラハント『陶醉の乳房』を大変興味深く読みました。毎号毎号、辻村様のSMカメラハントには強い関心を持っており、この次はどのような女性が登場してくるのかと期待しながら読んでおります。辻村様のこの種のものでは、梨花悠紀子をM女性に育てあげてゆく『鑑賞用女性』が

今まで読んだうちで最も鮮明に頭に残っています。七月号に登場の河森真理子嬢は多年私理想としていたイメージにピッタリの女性です。かねがね結婚相手にはM的傾向の女性をと考えていたところ（実際にはM傾向の女性とめぐり合うのは難しいことですが）真理子嬢のような素敵な方がKK誌に登場し、彼

女の性格を理解してくれる人を求めていることを知り、是非共ご交際願いたく思っておりますので、ご紹介いただければ幸いと存じます。

私は六月で二十七才になる独身のサラリーマンです。身長一七五cm、体重六五kg、明朗なスポーツマンで、現在はサッカー部に籍を置いています。SMに興味を示しはじめたのは小学生の頃からで、近所の映画館のスクリーンで、着物姿のうら若き乙女が縛られている姿に引きつけられ、じっと見入ったことがたびたびありました。

吉川英治原作の「ひよどり草紙」が映画化され、その中に上半身裸で緊縛されている女の姿にひきつけられ、思わず立ち止まり上映

館に入ったこともあります。KK誌登場の梨花悠紀子、東浦ひかる、遠藤百合子、五月亜紀子、長野良子の各嬢らと一度プレイをしてみたいと何度考えたことか。特に東浦ひかる嬢の投稿の一文には、思いきり強く私を緊縛してくださいと、責めを望む心がにじみでていて、鳥だったならばすぐさま飛んで行くものかと思ひながらも、どうすることも出来ない現実、やるせない心の日々を過したことが、昨日のように思いだされます。

『陶醉の乳房』の文中、真理子嬢は角田喜久雄氏の小説が好きだといっていますが、私も氏の小説は大好きで「妖花伝」と「風雲将棋谷」の二篇が中でも特に気に入っています。前者は大映で映画化され、阿井美千子扮する悪女が加茂良子を責める場面が、今でも目を閉じると浮んできます。あの責め役が私であったならばと願っても、しょせん現実には、かなえられない相談であり、KK誌を毎月読むことで、いく分かは気持をまぎらわしています。

KK誌を初めて見たのは、あの白表紙時代の昭和三十四年。当時のKK誌では、絹川、愛川嬢らの全盛時代でした。この頃は写真の掲載もわずかで、現在に比べて薄い雑誌だったものが、段々発展し写真も豊富になり、梨花嬢登場以後一つのピークに達した感がありました。今は挿画や写真の掲載が制限され、往時を知る者にとっては物足りないものが残ります。

私の好きな小説は三十六年連載の「ハイキング残酷記」「アパート残酷記」三十四年六月発行された悦特第二集に載っていた「由起子のお仕置」「妓の影」で「妓の影」は大好きで、五度も六度も読みかえたものです。

『陶醉の乳房』で彼女は女許り三人の長女でお嬢さんを貰う希望と書いてありますが、私は男許り、といっても兄弟二人きりですが、文中「辻村さんなら、私のこんな気持を理解して貰える男の方を紹介してもらえないかって、そんな望みも本当は持っているんです」という文面に勇気づけられ、このようなお手紙を差し上げた次第です。

「私の数多い同好の士は、全部奥さん持ちで残念ですね。同好者の中で一番若い増田喜代司だって、今度一ぺんに女二人の父になったしね。一寸独身者でプレイする男性は知りませんね」

「ご免なさいね、こんなこと申し上げて。別段構いませんのよ、お気になさらずとも。」

ただ、そんな方と将来一緒にずっと暮せたらと思ったものですから。これは、私のはかない願いなんですわ。でも読者通信欄を読ませていただくと、中には独身の方もいらっしゃるようですけど、いきなりそんな方とお目にかかるのも怖いし、といって何だか会ってみたい気もしますし、痛し痒しの気持ですわ」

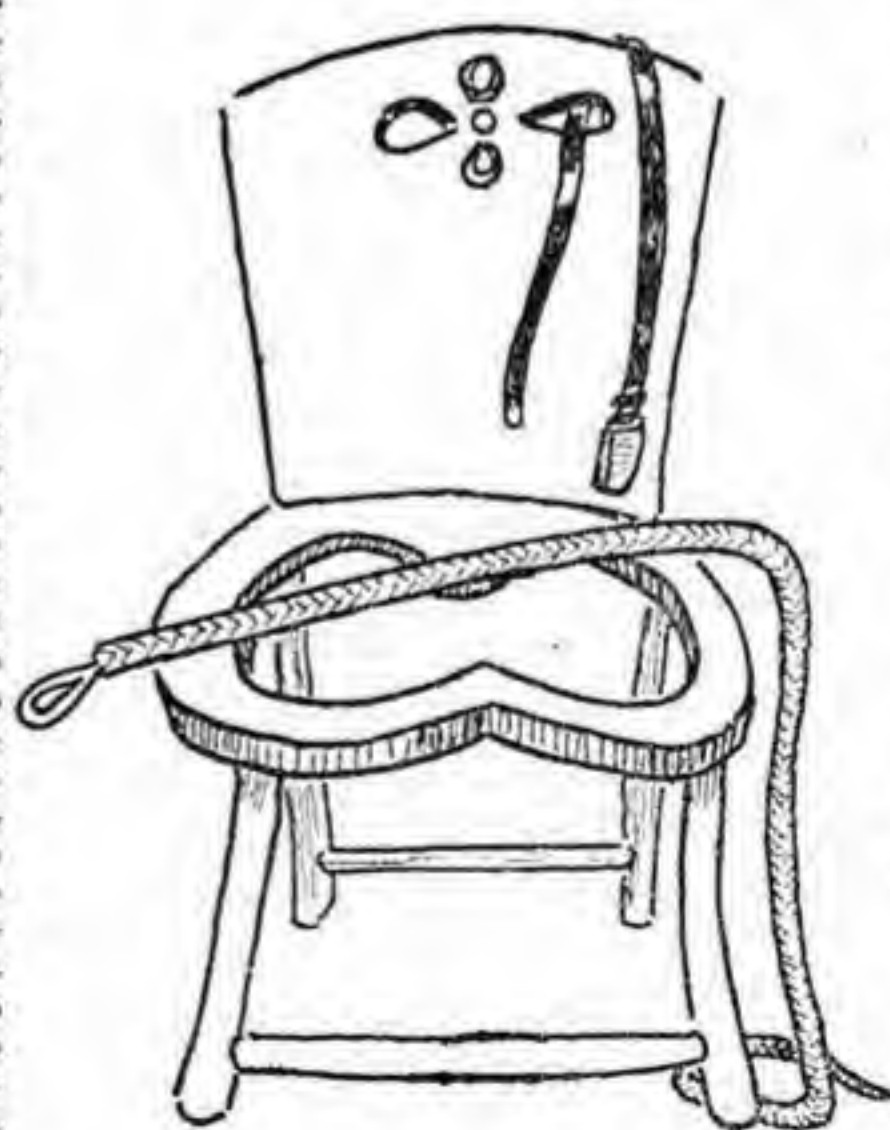
辻村様のおっしゃる通り、若い時代は仕事や研究、学問など将来の道に進むべきだと思います。SMプレイは、そうした方向が一応安定したあとの、人生の空虚さを満たすための手段ではないかとのこと意見は、確かにその通りだと思います。しかしながら、自分と同じ性向、特にSMの場合、そのことを心から理解してくれる相手に出合うチャンスは、残念ながら一度もありません。したがって、私は今までプレイする機会に恵まれておりませんが、いつの日か、私の気持を理解してくれる女性が現われるのを期待して、日々仕事に打ち込んでいます。

辻村様、この気持をお察してください。是非彼女にご紹介下さい。結婚を前提として交際いたしたく思っております。

心傷^{こころ}たむ^い遍^{へん}歴^{れき}

第三十三章 女囚ミシユリーヌ (十三) V

西 条 操



世話役のメリンダが眼を丸くしてタマゲ、打ちうなだれるミシユリーヌを痛ましげに見やり、音立てて解かれる手錠の銀色をおぞましげに眺めた。女囚たちはシュンとした面持ちで鼻白み、折角の今までのムードがぶち壊しだ。

コリンヌ課長の方針に従がって、外勤先での戒具使用は極力避けられている。ミシユリーヌの場合は明らかに反則だし、一応は命令に不服を示したのだし、まあ「やむを得ざる場合」というのに入るだろうが、それにしてももっとなんとかやりようもあったらうに。

もう一人の婦人看守はベテランで、若い同僚の情容赦のない仕打ちに眉ひそめたが、アンリエットにして見れば、ピンタを我慢してやっただけでも有難く思わなくちゃ、という風情だった。

ミシユリーヌは手首を撫でて鼻を吸り、シヨゲ切って午後を立ち働いた。このままで済ませて頂けるか、それとも――。ミシユリーヌは思わず哀願の眸を投げ、その度にアンリエットに睨み伏せられるのだった。

帰獄するや、ミシユリーヌは直ちに取調べられた。アンリエットが刑務課長コリンヌに

報告したのだ。アンリエットが第三監舎所属なら、ジョアンヌ女史の肚一つで済んだであろうが、他監舎に関連した事件だから、まああでは済まない。嘆息したジョアンヌ女史は取調べを終え、コリンヌに伺いを立て、すぐさま懲罰委員会を開催した。

看守長室に集まったのは、検察側としてアンリエット、弁護側は例によってマジョーリで、裁判長格としてジョアンヌ女史、そのほかイヴェットも強引にマジョーリの背後につき、陪審員として刑務課のBG一人とマリー婦人看守――。

アンリエットは、一緒に付き添っていた六監のベテランがスッポカして帰宅してしまつたので心細げだったが、それでもなかなか強引だった。夕食もそこそこに叩き込まれた女囚連中は、雲行き如何と鉄格子の中で耳を澄まし、おのおの勝手な論議を戦わせた。おむねは他人事と気楽なものだが、九房の骨太女どもとエドウィージュなんかは、涙こぼさんばかりにミシュリーヌへ肩入れだ。大体の経緯は分っている。

被告女囚ミシュリーヌは、慣例によって素肌に捕縄を打たれ、看守長室の片隅の床に、夕食抜きのまま正座させられていた。

「——そりゃまあ、持場離脱はハッキリして、反則は動かせないね。でも、私が取調べたところによると、動機には可愛いところがあるんだけどねえ——」

「おや？　じゃね、ジョアンヌ」

と、オブザーヴァーの五監看守長女史がアンリエットを援護する。

「動機さえ神妙なら逃走してもいいというわけ？　要は結果よ。それに、アンリエットの命令に楯ついて我がままなことをしつつくい張ったし、縛にだっておとなしく就かなかつたそうじゃない？」

「そうですよ」とアンリエットが勢づく。

「社会の人たちがそばにいらしたし、取押えるのに汗掻きましたわ。靴下が汚れちゃったし——。ですから、手錠の使用は止むを得ませんでしたの。そりゃ、使いたくはなかったですけど。でも、逃走予備行為ですわよ」

ミシュリーヌは身を揉み、きびしい縄目が苦しく喰い込んだ。ジョアンヌ女史みずからの捕縄はさすがなもので、少しもがいても骨が痛む。ミシュリーヌは口惜しかった。繰返して哀願した覚えはあるが、逆らつたつもりは全然ない。けれども、被告女囚の方から口を挟むことは許されないのだ。それはきびしく言い渡されている。

マジョーリが頬を染めて、拘すべき動機を強調した。イヴェットも発言し、ミシュリーヌを痛ましげに見やって必死だった。

「大体、生意気ですわ、お節介です。いくら心配だからって、迷惑かけた女囚を見舞いにノコノコ出向くなんて——。自分も女囚の癖に。一名足りなかったときにどんなに吃驚したことか。私の気持にもなって見てよ」

アンリエットはいきまき、イヴェットは強い眸で睨みつけた。イヴェットと一緒に着任した頃のアンリエットは、鉄窓の天使たらん

と志していた気配だった。それが、二年足らずのうちに変れば変わるものだ。

メンバーの発言が一巡し、イヴェットはテーブルにしがみついた。

「不問に付してやって頂けません？　よく申し聞かせて叱ってやりますから。ね、おねがいしますわ」

イヴェットの声は悲痛だった。アンリエットの主張が認められれば、ミシュリーヌ奥さまは二、三週間の重屏禁、悪くすると革鞭の一ダースをも受けることになりかねない。春には未だ遠い寒む空なのだ。

「あーらまあ。イヴェットったら、まるで自分が反則したみたいね。おセンチも、場所と相手によりけりよ」

アンリエットは声立てて笑い、二人の若手婦人看守は火花を散らした。

ジョアンヌ女史は板挟みになって苦慮のていだ。コリンヌ課長が鼻高々の累進処遇に、その試行段階において汚点を印したのだ。殊勝で模範的な女囚とはいえ、外勤先での初の反則を犯した四五三号は、自分の所管たる第三監舎の受刑者なのだ。だからこそ、こうやって仰々しい委員会などをやらかしているわけだが、摘発したのが他監舎の婦人看守だと

いうのが気に喰わない。

できることなら眼をつぶってやりたいんだけどねえ。でも、保安課がカンでいなくてよかったこと——。

ジョアンヌは吐息を洩らし、マジョーリが物静かに温情論を吐露し、マリーがあくびして結論を急いだ。

「ともかく、不問というわけには行かないことよ。たとえ僅かの間にしろ拘束を逸脱したんだもの」

ブルータス、お前もか——と、イヴェットは涙さえ浮べた。

「そうですとも。外勤先だってこの延長だわ。分り切った道理よ」

五監の女史が澄まし返り、ジョアンヌは苦々しげだが、マリーは平気な顔——コンパクト片手に唇を塗りかねない始末だが、流石に遠慮してルージュを弄んでいる。

「ま、動機の点で情状は認めるとしても、ここは刑務所ですものねえ。一般社会ではむしろ立派な心掛けでしょうけど、女囚の身では通用しないわね、むごいようだけど」

と、刑務課のBGも帰りを急ぐ。

「——ですから、逃走予備は大袈裟だし、あまりきびしい適用は保留にして、二週間ほど

反省させて見たら？」

渡りに舟とジョアンヌ女史が飛びつき、二週間の重謹慎を提案した。アンリエットは不満げだったが、嫌々の出席組が椅子をガタつかせるので渋々黙った。イヴェットはなおも喰い下がろうとし、それをマジョーリが眼顔で制する。五監の女史がジロリと流し目をくれて釘をさした。

「じゃまあ、そんなところでいいけど、手加減しちゃ駄目だよ。いいわね？」

ジョアンヌ女史が厳正な執行を請け合い、かくてミシュリーヌの懲罰は決定された。

「——お手数をかけました。ありがとうございます——」

ミシュリーヌは哀しく金髪を垂れ、イヴェットの胸は抉られた。まったく、小憎らしいアンリエットだ。胸に納めておけばそれで済むものを——。

「飛んだ茶番劇だったこと」

不純分子三名を送り出して、ジョアンヌ女史があくびした。

「いまましいねえ。でもコリンヌの手前もあるからね、決めたことは実行しなきゃ。まあ、思ったより軽く済んだよ」

女史はイヴェットに顎をしゃくった。役人

根性とは妙なもので、縄張りを犯されての余計な仕事——といわんばかりの口ぶりだ。

イヴェットは椅子に釘づけのまま立たず、マジョーリがさりげなく立ちあがった。

「あんたがやるの？ いつもながらマメマメしいんだねえ、マジョーリは」

ミシュリーヌは促がされて立ちよろめき、広間に追われて捕縄を解かれた。

「お前のやったことは立派なことよ、人間としてね。でも、ここは——」

マジョーリはやさしく慰さめるのだった。

「お咎めなしというわけには行かないのよ、血も涙もないと思うだろうけど——。さ、いい？」

ミシュリーヌは鼻を吸り、房內衣の腰バンドに施錠を受けた。重い手錠が両手にかけられた。これからの二週間を、こうして独房で反省するのだ。

「辛抱するのよ。いい？」

謹慎房の鉄格子の前で、マジョーリは女囚の肩をやさしく叩いて励ました。

「でもよかったわ、保安課が口を出さなくって。せめて一週間ぐらいにしてあげたかったんだけど——。でも、あれ以上頑張ると、かえって悪いと思ったもんだから——」

「すみません。いろいろと御心配かけて」

ミシュリーヌは鉄格子を潜り、扉が静かに閉じられた。

「きつくない？ きつかったらゆるめたげるわ」

マジヨリーは見下ろしていい、ミシュリーヌは正座の腿の上で両手首の冷たい手錠をガチャつかせた。

「いいえ。ホラ、ゆるくて——」

「そう。お行儀よくしてるのよ。二週間の辛抱なんだから。私たち三人がデスク当番のときには息抜きさせたげるからね」

私たち三人とは、マジヨリー自身とイヴェットとモレシェンヌのことだ。

ミシュリーヌは打ち仰いでうなずき、涙顔に微笑を浮べた。

傷ついた仲間を見舞ってやりたい一心だったというのに、可哀想——。委員のメンバーに男性が一人でも居たらよかったのに——。

マジヨリーは、愛くるしい笑顔を見下ろして、ホッと溜息を洩らしたのだった。

「あの——マジヨリーさま」

「なアに？ お腹の錠前を解いて欲しいの」

「いえ——。あの、仮釈放のことですけど。こうしてお仕置を受けたら、もう駄目でしょ

うかしら？ 教えて」

「そのこと？ それなら心配要らないのよ。

お前の嘆願書はもう審査委員に受理されてるわ。それを取り消すには所長さまのサインが要るのよ。先ず大丈夫。二カ月もしたらきっと面接だわ」

ミシュリーヌはホッと安堵し、お役所仕事の融通のなさ加減を感謝した。しかし、嘆願書受理後のこととはいえども、面接審査のときには追加成績として提出され、考査の対象とされるのだ。ミシュリーヌは漠然と喜んでそこまでは思い及ばなかったし、マジヨリーはわざと教えなかった。教えたところで、この女囚が不安がるだけだし、ま、書類の方はフオンテューヌがうまくやるだろう。

マジヨリーはもう一度溜息を洩らし、そっと鉄格子を離れたのだった。

ミシュリーヌの反則のお陰で、外勤女囚たちは飛ばっちりを受けた。ファルマン縫製工場における自由は制限され、付き添い婦人看守の眼の届く範囲内に限定された。保安課スカート一名の付き添いが復活されたし、コリンヌ課長熟考の末、監督者の服装は制服のいかめしさに戻された。もちろん、ミシュリーヌの外勤処遇は剥奪されたのだった——。

重謹慎女囚は、刑期中一步たりともこの独房から出されることはない。期間中に出房させるには、たとえ一分間といえども看守長の許可が要る。

ミシュリーヌは鉄格子の内側から、朝の監舎内を眺めていた。固い床に寝具なしで一晩を過ごしたので、寝不足のためか、正座の上体がふらふらする。

監舎は朝の掃除がたけなわ——エドウィージュがそつと摺り寄って来た。

「可哀想ね、ミシュリーヌ。たった一羽きりでカゴの鳥。高いお見舞料だったこと。ローザンヌの薄ノロ、くたばっちまやいいのに」

「そうともさ」と、石臼のような三七二号も覗きこんで、可憐な同囚の姿を痛ましがり

「おトイレまだなんだろう？ 涙が出そう」と、ギラギラ光る眸で撫で回す。

「眠れなかったんだねえ。無理ないよ。でもさア、やつれればやつれたで、ふるいつきたくなる風情だよ。ほんとにまあ、可愛いっただらありゃしない」

三七二号は眺め入って生唾を呑み、食べてしまいたいという思い入れだ。骨太のあばずれたちの殆んどは、ミシュリーヌと仲良く出来るなら、仮釈放が一年や二年ぐらいいは延び

たつていい、とまで言い合つて、互いに牽制し合っている。

「ちよい、退きなよ」

と、これも骨太大柄の三六八号が来た。

「お前さんはもう想いを遂げたんだろ」

と、エドウィージュを憎しげに押しのけ、

鉄格子を握って覗き込んだ。

「ああ、おミシュちゃん。代つてやりたい」

「へえ？ あたしや、二人きりでぶち込んで

欲しいんだ。神かけて、じっくりと反省する

んだけどなあ」

「ふん。なんの反省だか——。ま、お前さん

のクソ力だったら、おミシュちゃんのおべ

ぐらいはボロクソで破けるだろよ」

「どう？ チンと長まっちゃつて。あーあ、

神さまなんてあるもんか。まだ三月だよ。こ

れで二週間だなんて、ミシュちゃん肺炎で死

んじまう。頑張つておくれよ、ね——」

三七二号は想いが募つて堪まりかね、握り

しめた雑巾を振り回した。もう春も近い。

「気をつけなよ、目の玉に水が散ったよ」

「そんな大切な目ン玉なら納つときな」

二人のあばずれは稍当て半分に小競合い

をおっはじめ、すかさずイヴェットが飛んで行

った。ミシュリーヌのそばへ行く機会を狙つ

ていたのだ。ことに、眼をギラギラさせるあ

のあばずれたちは——。

「鉄格子を握つてたのねッ。サボつてると」

イヴェットは凜然とあばずれ二人を叱りつ

け、三六八号の腕をねじあげて突き飛ばす。

「ハイ、ハイ。すみません——」

「重ね返事はいけないッ」

「はい。すみません、担当さま」

あばずれたちは忌々しげに立ち去った。

「スゴイ見幕しやがつて——」

「あいつつたら、おミシュちゃんのボディガ

ード気取りさ。おお、いてえ——」

三六八号の赤毛は逞ましい腕を揉んだ。

「でもサ、あの天使見習いの娘、イヤに声が

濁れてるじゃないか」

「おおかた、昨夜あたりデイトで夜更ししや

がったのさ。ゼニがないもんで、森の中かど

つかでね」

あばずれたちが毒づくとおり、イヴェット

の声はかすれている。例によって、ミシュリ

ーヌ奥さまと苦しみを分つべく、一夜を床に

寝たイヴェットだった。彼女はメス狼どもを

追い払い、鉄格子にふり向いた。

「おはようございます、担当さま」

垂れ、坐り直してニッコリと仰いだ。両手の

手錠が音を立て、イヴェットの胸はつぶれる

心地——はやもう涙声になる彼女だった。

「久し振りでしょ。だから——」

女囚はままならぬ手首を代る代る揉んだ。

「——御辛抱なすつて。おひもじいでしょ」

イヴェットは辛うじていった。

「あら、どうしたの？ほんとに声が濁れて

ますこと。お風邪なのね。私のことはいいの

よ。こう見えても私は丈夫な方だし、保安課

で鍛えられちゃつてますもの」

「——すみません。ちつともお役に立たなく

て。でも、妙なことでされたら声をおあげにな

つてね。ああ、こんなとこ、奥さまのいらっ

しゃる所じゃありませんわ」

「大丈夫よ。あの人達だって、別に取つて喰

おうつてわけじゃないもの」

イヴェットは世にも悲しい顔をした。

「あら、私、喜んでるわけじゃないのよ。充

分に気をつけます。あんなこと、もう懲り懲

りですもの。あんな浅間しいこと——」

ミシュリーヌは頬を染め、去年の春のこと

を思い出して、全身を熱く恥じらった。

ベルディーヌが近寄り、イヴェットはハッ

と気を取り直した。

「膝が離れてるわ。そろえてッ」

「おや、きびしく躑けてるのね、イヴェットは。結構々々。なんなら、ゴムホース貸したげようか？ どうだい、ミス三監の謹慎ぶり——。よそからの持ち込み仕事だって手を抜いちやいけないからね。こらッ、四五三号ッ、甘ったれンじゃないよッ」

ミシュリーヌは全身を硬直させた。

「とはいうものの、ほんとにしおらしい子だね、お前は。不憫にも思うけど仕方ないよね。与太女どもったらさぞガッカリしてることだろうよ、この子の綺麗な体が当分拝めな——ってさア」

イヴェットはふり返りつつ、ベルディーヌとともにその場を去った。

「どうお？ ダイアナ」

と、二人のスカートに流し目をくれて、クリスチーヌが話しかける。

「そろそろ暖かくなって来たようよ。虫、起らないこと？ あのイヴェットの靴に水ぶっかけて見たら？ ピンタと手錠は請合いよ」
「そうは行かないんだ。あたしにはね、何が何でも「ベルト」かけちまいやがるのよ。それにさア、正座は苦手だし、相手が女じゃ」「ぜいたくいってら。案外と不自由なもんだ

ねえ。まあ、甘ったるい苛めっこみたいなわけにも行かないわね。だけどサ、ウチじゃイヴェットが一番キリリとしてるわよ」

ミシュリーヌは、整列して連れ出されて行く外勤女囚たちのスカート姿を見送った。落伍者の悲哀感がてみあげて来る。折角、人間らしい扱いを味わえるようになったという矢先、その喜びも泡と消えたのだ。ミシュリーヌは鉄格子の中で独り涙し、両手をあげて眼を押え、そして、身をよじった。

重謹慎女囚の用便は朝夕二回、食事も昼抜ききの二回、それも一般女囚の食事後と定められている。

イヴェットは面倒そうに装いつつも、内心は足に羽を生やして飛んで来た。黒パンと水を差し入れ、紙二枚を与え、MOMPEの錠をカチリとはずしてやる。ミシュリーヌはチラと見あげた眸を忽ち伏せ、隅の穴の方に行く。

「——すみません。長くかかっちゃって」

女囚は恥ずかしげに呟き、MOMPEの革具を正面向いてきつく締め、鉄格子に寄って施錠を待った。イヴェットの指がわななき、ミシュリーヌも鼻を吸る。ファルマン工場でのトイレは嬉しかった。だが、扉で遮断され

てのことも昨日でお別れだ。瞬時たりとも監視の眼を受けるのが当然の身とはいえ、これからはそのすべてを晒して隠れる術もなく、しかも、その度に体の錠を解いてはかけられ、お礼の言葉さえ叫ばねばならないのだ。

ミシュリーヌはボタンをかけ、ぶら下がった錠を布の上から押え、正座して手錠をいじり、少しは恨めしげだった。

「お喰べなさい」

イヴェットの声は震える。

黒パンをかじった女囚は改めて見詰め、感謝の眸をあげた。その黒パンの塊りの中には、イヴェットの苦心のバターがタツプリと押し込んであったのだった。

重謹慎女囚は終日正座の苦行が規則で、一時間ごとに五分間だけ、膝を崩すことが許される。当直デスクで笛が鳴るのを待ち侘び、笛の音とともに再び姿勢を正すのだ。意地の悪いのにかかると故意に忘れるし、呑気な婦人看守だとほんとに忘れて仕舞うのだが、謹慎を命じられた女囚の方から笛を催促するなどは飛んでもないことだ。

ミシュリーヌは、呻き声さえあげて歯を喰い縛り、当直デスクのフィリス婦人看守の笛を待ち焦がれるのだった。

「いま聞いて来たんだけどね——」

ジョアンヌ女史が本館から戻って来て、デスクで精出すフォンテューヌ補佐にいった。

「リヨンじゃ、美容院を開業するつもりらしいよ。刑務所で美容術のお稽古だってさ」

女史は吐き捨てるように続ける。

「うちがお裁縫を仕込み始めたもんで、それと張り合うつもりなんだろうが、どんなもんかねえ。ま、エライひとは何かヤラかさなきや出世の種にならないってとこだろうけど、思いつきは現場泣かせだよ、ほんとに」

「へええ!! まったくオドロイちまう」

と、ベルディューヌが聞きつけて顔出した。

「おや、お前さん、また油売ってんのね」

「ま、それは別にこっちへおいといて、と。」

リヨンにしちゃ精一杯気の利いたことのつもりよ。アメリカかぶれ。嘆かわしいこと」

「ヤンキーの真似はジャポネだけで沢山だよ。ね。ジャポネって国は湿っぽいからねえ。優雅な潤いってものと、おセンチな湿っぽさってものとは別物さ。アメリカって国もおかしな国だよ。すぐダイナミックで威勢がいい癖に、女のこととなると、カラキシおセンチになっちゃうんだから。そんなこと、なにも猿真似することないのよ。こちらには伝統

があるんだからね、伝統が。世界中に悪の種を播いてるのはヤンキーと露助さ」

ジョアンヌ女史は長広舌一番、その世界観を披瀝した。

「そうですとも」

ベルディューヌがうなずく。

「矯正ってのはいいとしても、職業教育ってのはおかしいわよ。どこで正義が報われて? 矯正するのは、懲り懲りさせて叩き直してやることよ。ねええ、フォンテューヌ」

フォンテューヌは静かに首をかしげる。

「ともかく、私の考えるところじゃねえ、受け入れる世間にも問題があるわ。出所者を、もっと温かく受け入れてくれなきゃ——」

「一理あるわね、フォンテューヌ。そうなのよ。だからさ、私たちはきびしく固い手で臨んで、それを世間に知らせるのよ。うわべだけ飾った綺麗ごとじゃなしにね。そしたら社会のひとたちだって、そんなに苦しんで償いを済ませたんならってことになるんじゃないかしら? 感傷に流されてると、大衆の正義感がどこかで欲求不満になっちゃうのよ」

「すごい社会心理学の講義ね。ベルディューヌって案外に思想家だわ。その点については、コリンヌも私も全く同意見だよ」

我が意を得たりとジョアンヌ女史が顎を三重にくびらせ、フォンテューヌがリストを差し出した。来週の勤務割りの案だ。

「へーえ。こりゃまた、デスク当直が優雅なのばかりじゃないか。おや、マジョーリをデスクに坐らせる気? デスク当番なんて、若手にやらせりゃいいのよ。ま、いいだろ」

その翌日、ジョアンヌ女史は夕暮の看守長室で頗る御機嫌だった。ミシュリーヌの反則で借りのできた五監舎に対して、三日と経たないうちにシッペ返しが出来たのだ。その殊勲者はフィリス婦人看守——。

フィリスは外勤女囚たちに付き添って行ったのだったが、五監の五七〇号が女子工員から貰い喰いしたのを摘発したのだった。五七〇号は元ミス・ニース——逮捕術自慢のフィリスに手品みたいに手錠をかけられ、しばらくしてからワツと泣き出し、衆人環視の中で胎玉を吐き出させられたのだ。

ジョアンヌ女史は意気揚々と五監での委員会に臨み、コリンヌ課長は眉根を寄せた。

監舎同士が対抗意識を抱くのは仕方がないし、或る程度までは課長としても歓迎だし、これじゃ泥仕合の様相を呈している。やはり、保安課が主体となって付添うことに

するか——。

コリンヌは翌朝、外勤女囚たちを廊下に整列させ、片端から全員に手錠をかけさせた。

「——続けざまに負傷事故やら反則事故が発生して、ほんとに残念です。お前たちのためを思って始めたことだけど、中止しようかとも考えました」

コリンヌは列の前を匂やかに往復してお説教をはじめた。女囚たちは泣きそうな顔で、打ちうなだれて両手の手錠を見詰める。

「——しかし、折角工場の方でも御協力下さってるわけだし、もう少し続けて見ます。でも、今後事故が続出しては私たちの名折れですから、残念なことだけど、作業時間外には手錠をかけます」

女囚たちの列に悲痛な色が走り、哀しげな嘆声が出た。

「どう？ あんまり嬉しいことじゃないわよねえ。私たちはお前たちを信用してたんだけど、裏切られて泣きたいくらいなのよ」

「——課長さま。私たちは——いま、ここにおります者は、なにも——」

と、一人が身もだえ、撲られた。

「ええ。そりゃまあそうよ。でも、もう信用できなくなったの。私の目的も半ば破れたわ

けど、ケジメをつけるってことはやっぱり肝心のねえ。その女工服を着せて行かせてあげるだけでも有難いとお思いッ」

——〇号のキャプシーヌが両手を合せた。

「——お、おねがいです。誓いますわ。私たちがどんなに嬉しがっていましたことか。決して不心得なことは致しません。ですから、おねがい——この手錠はかんにんして——」

続けて数名が合掌し、全員が哀願して身を揉んだ。ややあってコリンヌが微笑む。

「——そうお。そんなにイヤなの？ そう」

筋書どおりに運んだので彼女は満悦だ。

「では、そんなにまで誓うのなら、もう一度だけ眼をつぶりましょう。いま流した涙を忘れるんじゃないよ、いいねッ。じゃ、お前たちを信用して手錠はかけません」

全員の手錠がはずされ、女囚たちは三拝九拝して喜んだのだった——。

ミシュリーヌは、婦人刑務所の日常を傍観者として眺めた。

これでもう重謹慎も五日目——昨夜、キャスリーヌに打たれた腿が疼く。夜の点呼のとき、床に長いことつかえる両手に手錠がこじって痛かったので、つい、ずらせて直したのだったが、眼敏いキャスリーヌに見付けられた

のだ。ミシュリーヌはMOMPEの裾をギリギリまでたくしあげ、両腿を鉄格子の外へ精一杯に突き出し、懲戒のゴムホースの三発ずつを受けたのであった。

ガラソとした監舎の当直デスクにはモレシエンヌが陣取り、フォンティエヌに頼まれたカード整理に余念がない。一つおいて隣りの独房で溜息が聞え、いと哀しげな嚙り泣きが洩れた。一昨日入獄して来た若い女囚で、殺人罪の七年——一昨年ここを仮出所したアンヌだ。蛇のような男に見込まれてつきまとわれ、行く先々で前科をバラされて更生を阻まれ、思い余って男を毒殺してしまった。刑期が満了した直後だったので、少しは軽くなった筈と弁護士はいったが、殺人方法がかなり計画的だったので、同情されたにも拘わらず求刑どおりになったのだった。刑はかなり重いが、その代りにツーロン送りは勘弁して貰えて、ここでは数少ない累犯囚であった。

コリンヌ課長の方針により今年から、新入獄者には一週間の観察期間を設けることになっている。独房にぶち込んでじっくり性根を見定めるとともに、新入り女囚にも獄窓暮らしの日常や要領を見習わせよう、というのだ。

このアンヌはここに二年ほど服役していた

し、しかもこの三監にいたのだから、性質なんかはよく分っている。直ちに本番コースに入れても差支えないのだが、そこが規則の規則たる所以だった。

執務に一段落つけたフォンティーヌが、肩を叩きながらデスクを離れ、広間を横切ってやって来た。ミシュリーヌはおどおどと居ずまいを直す。モレシエンヌは休憩の笛を吹いたままカードに没頭し、正座に戻れと命じない。もう、かれこれ三十分になる。

「——あの、まだ笛が鳴らないものですから——。すみません」

「そう。ならいいじゃないの。叱りに来たんじゃないのよ」

モレシエンヌが舌を出して笛を吹き、二人の女囚は固い床に膝をそろえた。

「どう？ 体の具合は。さっき咳してたようだけど、風邪ひいたんじゃない？」

フォンティーヌにして見れば、この四五三号が発熱でもしたら、それを口実に重謹慎を解いてやって、せめて観察中の女囚並みに、毛布の二枚も与えてやりたいのだった。

生理はまだなのかしら？ それはイヴェットが詳しいわね——。

フォンティーヌは憫れみこめて見下ろし、

女囚が膝をにじって縋りついた。

「——フォンティーヌさま。おねがい。ちょっとでもいいんですの、ここから出して下さいまし。なんでもいたします。もう、こうしていると気が狂いそう——おねがい」

フォンティーヌは黙って見下ろした。

「——もう、脚がどうかなってしまいそう。キャスリーヌさまが当直なるときなんか、三時間も四時間も、ずっと——」

「お黙り。私たちは依怙ひいきなんかしません。そりゃ人間だからミスはあるけど」

フォンティーヌは苦しげに叱りつけ、ミシュリーヌはシユンとシヨゲ返った。この三監舎の大黒柱にはつい甘えてしまいが、叱られるとこたえる。

「お前は重謹慎なのよ。辛抱して反省おし」

「——はい。すみません」

ミシュリーヌは胸から両手をおろし、腿の上で手首を撫でた。鋼鉄で責め続けられているので痕が痛々しく、どうかすると骨が鈍く疼く。

「はずしてあげようね、手をお出し」

フォンティーヌは鍵を取り出した。

「ほんとはいけないんだけど、ちょっとの間ならいいでしょ。さ——」

しかし、女囚は両手を腹に押しつけ、涙を浮べてスカートを見詰めた。

「あら、どうしたの？ その手錠を解いてあげるのよ。痒いところを掻きなさいな。拗ねたりして、お前らしくないこと」

「——でも、またすぐに——。いいんです」

「バカね。さ——。手を出すの。命令よ」
ミシュリーヌはしゃくりあげながら両手をさし出した。

「どう？ やっぱ嬉しいでしょ？」

フォンティーヌは手錠を片手に微笑み、女囚はコックリうなずいて手首を撫でる。

「——フォンティーヌさま。私、刑を終えたら、もう絶対に悪いことは致しませんわ」

ミシュリーヌは金髪を掻きあげながら静かに呟いた。こうして独房刑とはいえ、日課を離れて同囚者の起居を傍観者の立場で眺めていると、罪を犯した女たちがどんなにみじめな日夜を送らねばならないか、身に泌みてそれが分る。

ことに、日課の全裸身検の光景をまのあたり見せられると、その中の一人として屈従するよりもおみじめな心地がするのだった。

「——ほんとですわ、フォンティーヌさま」
「分ってるわ。そういつてくれると嬉しいの

よ。でも、お前は最初から悔悛し切ってたわね。私たちの仕事はないみたい」

フォンティーヌは深々といった。ここで日夜くりひろげられる冷酷な光景、支配する者と屈服のほかない哀れな者たちとの相克——彼女はときどき想いに沈み、忙しい業務に追われつつも、ふと、むなしくなるのだった。法と正義を楯に、無抵抗の者たちを目くじら立てて責め、ちよっぴりは冷酷さを反省して寛容を示す。それも、絶対の支配者たる優越をこめて——。

神が御覧になったらどう思われることだろう。他人を責めるに値する人間が存在するだろうか。一人の人間の或る行為には、他人には窺い知ることの出来ぬ要因が無数に積み重なっているのだ。他人の行為を責めるどころか、忠告することだって僭越かも知れぬ。一人の人間が決意するに至った全過程を、どうして他人が知り得ようか。

満ち足りて思い上がった人々は軽薄な感傷をもてあそび、ときどき城から走り出て、ごみ捨て場を指さしてあれこれのたまう。

ごみを選び分けて役立てるべきだとか、悔悟した犯罪者の更生がどうとやらと言いつけて、御自分たちは安全な城の中へ引込んでし

まうのだ。あれもこれも、つまるところは、彼等自身の安全のためではないのか——。

犯した罪の真の重さを誰が知ろう。にも拘わらず、社会正義と法の名において刑罰の正札をつけ、それを罪の償いと称して憚からぬ僭越さ——。そして、その「償い」半ばにして「もういいじゃないか」といい出し、閉め出した社会への細い道をこさえてやって、すっかり這いずり戻れとけしかける傲慢さ加減——。捨て去ったごみなら朽ちるにまかせ、ときには返り咲く花を謙虚に賞でればいいのだ。社会の脱落者に対する博愛と寛容は、つまるところ、捨てたごみに対する良心の自慰行為なのであろうか——。

フォンティーヌは深々と溜息を洩らすのだった。

刑の執行とは、罪を償なわせるに足る苦痛を与えて社会正義をバランスさせることなのか。それとも、被害は覆水盆に還らずとして赦し、犯罪者自身の悔悟と更生を求めるものなのか。前者を採るなら採るで、それでいいのだ。もし後者の立ち場を採るのなら——。

このひとなんか、ここへ連れて来ることなどないのよ。絶対に再犯などする筈ないんだし。懲りさせる必要さえないくらい——。

フォンティーヌはミシュリーヌの金髪を見下ろし、自分の仕事の中途半端な難かしさを慨嘆した。

罪を憎んで人を憎まず、か。いい文句ね。でも、結局、なんにも言い切っていないのよ。あいまいな言葉の遊戯。だけど、このひとなんかにはピッタリって感じ——。

フォンティーヌは、新入り女囚アンヌの独房の前へ移った。

「どう？ 反省と覚悟はいい？」

アンヌはフォンティーヌの制服を見あげ、さも悲しげに鼻を吸った。

「お前、だいぶ変ったわね。前より肥って」

アンヌは、嘗てはこの三監の骨太女たちのアイドルでもあった。愛らしかったその顔からもあどけなさが消え、胸と腰あたりのボリユームがふえている。男に生血を吸われての苦労のうちに、肉体の方は女として開花したのだろう。思えば哀れな娘だ。

「だいぶこも変ったでしょ、いろいろとよく見ておくのよ」

「——はい。でも、この服には悲しくなりましたわ」

アンヌは呟いて腰を動かした。

「じっとしてなさいッ」

「はい。でも、私の腿、ずい分と肉がついちやうって——。すぐに痩せますわね？」

フォンティーヌは、若い女囚の膝の高さを見下ろした。まったく、この正座は残酷な仕打ちだ。すべての新入り女囚たちが一時間でネをあげ、脂汗を浮べて泣き悶える。

「規則どおりにしてないと、足留め縄をかけるわ。いい？」

フォンティーヌは心を鬼にして叱った。このアンヌは、再犯だし、少くとも四年はここで過ごすことだろう。可哀想だが、少しきびしくしておいてやった方が慈悲だ。

慈悲——。いやな言葉ね、これも。そう、見せしめってのもね。優越感と傲慢さの結晶だわ——。

「——すみません。だけど、ここもいろいろときびしくなったんですね。課長さんが代ったせいかしら？ ああ、苦しい」

「そんなことはお前に関係ないの。罪にふさわしい扱いを受けるだけの話。いい？ 理由はどうかあれ、人を殺した罪は深いのよ」

アンヌは眸を伏せ、微かに口をとがらす。自分の殺人を正当化する気持を捨て切れなないのだ。ベテランのフォンティーヌには、そこらの心理は見通しだった。

「きびしくなったこともあったけど、まじめな者にはそれだけの報いもあってよ。もう、大概分って来たでしょ？ 手錠もなしに外へ出して頂けるのよ。まじめにすることね」

「はい——。あの、おねがい。お水を——」

アンヌは神妙に鼻を吸り、その口の下からフォンティーヌに甘えた。

「駄目。お腹の錠を忘れたの？ 夕方まで解いて貰えないのよ。あと四日我慢するの」

独房の女囚には、水分は定量の半分だ。「文句言わずにちゃんとしてなきゃ駄目よ。この一週間の態度で処遇が決まるんだから。最下級になったらお手紙も読ませて貰えないし、ベッドに腰掛けさせて貰えないのよ。眠るとき以外は床に正座。いいの？」

「ずい分ときつくおなりですること」「私はいつだっておなじつもりよ。ふくれ面が直らないとこれよッ」

フォンティーヌはミシュリーヌ用の手錠をガチャつかせた。

「本来なら、お前はお隣の部屋なのよ」

隣りは鉄扉いかめしい暗房だ。アンヌは恐怖を示した。

「四五三号を見なさい。これを嵌められ放しで、夜は毛布一枚なしだし、黒パンとお水だ

けで二週間よ」

観察期間の女囚は並みの獄食が与えられているし、毛布だって規定の枚数を使える。

「——そ、そりゃ——だって、あのひとは」「口答えするんじゃないッ。そりゃまあ、四五三号は懲罰中だわ。お前より辛い目に逢っても辛抱してるってことをいっただけよ。素直におなりなさい。以前はもっと感心な子だったけど——。分って頂戴ね、いい？」

フォンティーヌは内心の矛盾を押えて、いうことだけは割り切ってキメつけ、ミシュリーヌの前に立ち戻った。

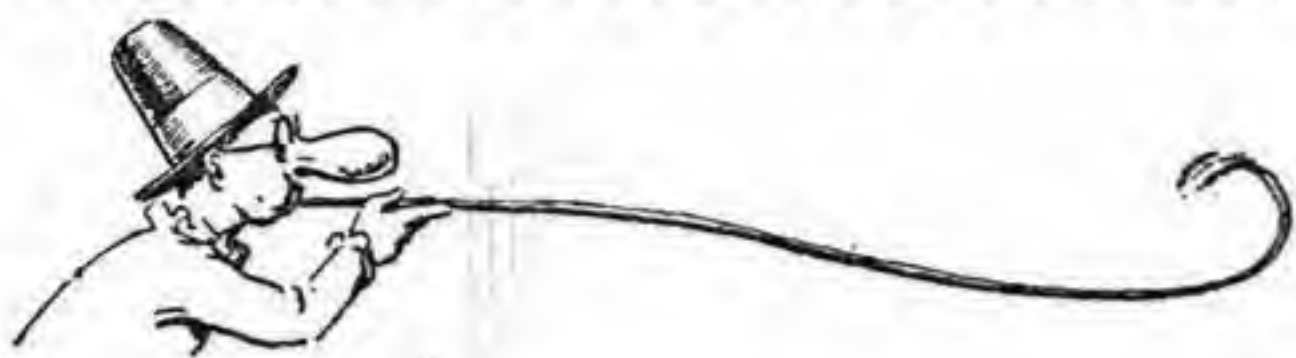
「ありがとうございます、フォンティーヌさま。ほんとに助かりましたわ」

ミシュリーヌはニッコリ微笑んで見上げ、縛ってくれと両手をさし出した。ミシュリーヌに笑いかけられると、ベルディーヌですら時にはホロリとする。

「そう。よかったわ。自分でかけなさい」

「はい」

ミシュリーヌは、手渡された鋼鉄を自分の両手に念入りに嵌め、静かに膝へおいたのだった。



奇クの編集に対する一考察

< 特に新しい読者のために望むこと >

夜 乃 探 郎

新しく奇クの読者となった方に、これから奇クのファンの一人として永続いただく意味で、特に自粛の風あらしき昨今、その範囲内で、より素晴らしき本誌を期待するため、これから奇クの方角について一考察してみよう。青い鳥は彼方にいるのではなく足元にあるものとして、現実の制約にジダンダするよりその場にあってより努力、成果を見ることがとりもなおさず前向き姿勢であり、奇クの発展にもつながることと信ずるものだ。前置きはこれぐらいにして本論に入る。

まず順序として、私を例にとる。三年前の一月の上旬、商用で地

方に出張した。そのとき、ある古本屋で奇ク数冊を手にしたのが奇クファンになる第一歩だったが、その古本屋の主人、そのとき曰く「もうこの本は、めったに入らなくなりましてよ。旦那は運の良い方ですな」

帰途、こころみに仙台駅に降りた際、街の各新刊書店を数軒のぞいてみた。勿論、古本屋も同様だ。その結果は、どこにも奇クは見当らなかった。先に買い求めた既刊号の一冊を手にとり『本誌最近号総目次』をのぞいてみた。期待があふれた。だが、すでに既刊号在庫案内には売切れ続出というていたらくである。『読者通信』などで、あの号がよかったなどと懐かしそうに記されているのを読んでも、私にとっては、ただ焦そうのみである。これは私だけではなく、新しい読者のだれもが一度は経験したことではないだろうか。まだ大阪、東京など大都市では古本屋も多く、経済上に余裕があるものや、地方に住んでいても常に出張が出来、探書の便利さを有している方はよいが、大半の読者は、既刊分の主要目次や古い読者の話を指をくわえて見送るだけと思う。特に二十七年―三十年にかけて、より奇クが全盛時代だったと耳にするにつけて――。

また古い読者でも奇クが特殊な雑誌である関係上、過去に始末してしまい、今はただ残念だと、惜しむ方もおられることと思う。さて甚だ虫のよい願い、期待であると思うが「いま入手できる範囲内で新読者が創刊号より、現在までの欠けた部分もプラスされる」編集について、私なりの提案を試みたいと考えるのだ。別冊という手段もあるが、ここではあくまで定期月刊である奇クのこれから発刊される本誌について対象としたい。なんといっても、それが正攻法であり本筋だからだ。

一、常時、三百頁前後がのぞましい（二百八十頁ぐらいが理想的）すべてに制約されつつある時、増頁だけが制約されない唯一の抜け道である。この増頁によって、新企画を盛沢山にすることこそ、より読者の要望の欠けた部分をうずめることにもなるのだ。量より質ということは第一の条件だが、このような昨今では逆に物量作戦も可だろう。例えば余り制約の対象にならない読者通信と奇クサロンを大巾に思い切って増頁する。また『編集手帖から』という頁も、相当に誌面をとる。一般の雑誌でもそうだが、特にマニヤ誌は研究対象による雑談を好み、編集裏話に眼を輝

かす。そこが他の雑誌に見られない編集者と読者との身近かな雰囲気かじみ出ることにもなるのだ。

二、座談会、対談記事を、どしどし掲載する。余りこの種の記事は奇クには見られないようだが、生で話がきけるところに読者の興味が深いのだ。

△例▽緊縛ヌード××嬢を囲んでの座談会。
ピカ一緊縛ヌード××嬢と××氏との対談。
緊縛ヌードを囲んで、読者代表数人による座談会。

三、『奇ク変遷史』の連載について、創刊号より現在号までの表紙を年代順にカット程度に復元し、当時の好評だったグラビヤ、口絵、創作（挿画も含める）告白、などを小さく復元またはダイジェストして、これにその時その時の編集苦心談、読者気質、モデル嬢の話または奇クから見た他の類似の風俗研究誌などにも触れ、奇クの歴史はそのまま広く深く終戦後の日本の風俗研究誌史ともなるように編集する。

創刊以来すでに二十年余、このへんで、この企画も必要と考える。これによって、古いファンは「いまだから話す」という編集者のそれをきく興味と、懐しさで一杯になり、新

しい読者は、なおのこと、旧号入手困難の不満を一掃できると思う。また、これにひっかけて、古い読者の旧号発表当時のS・Mの追懐記の特集たる企画も面白いと考える。これは毎号、少くとも二十頁分ぐらいは場所を占めて、重厚な研究欄としたい。「変遷史」という意味で、カット程度にグラビヤ、口絵を載せ、文章もダイジェストならば制約の対象にはならないと思う。また編集者の手加減も自由である。

四、グラビヤ、口絵に制約があり、前のようにリアルな紹介も出来かねるのなら、せめてこの頁の紙質をより向上させ、鮮明なるフオート、カラー写真なども入れたらどうか。なにもヌードでなくても、和服姿や長襦袢姿などの乱れたモデル嬢の緊縛フオートも、それがカラーならば、より効果的であり、読者の拍手を浴びることと思う。制約に対しては、グラビヤ頁の（ポーズを別として）紙質の向上が、その解決策の一つと思う。（少しぐらいポーズに制約せざるを得なくても、映像が鮮明なれば、ある程度の効果は出ると思う）または、色彩による工夫もグラビヤ、口絵等に試みられたい。

五、口絵も、描く対象にセーブしなければ

ならないとするならば（主に肉体の露出程度と思うが）全裸そのものでなくても、薄いシヤツ一枚を着せて、例えばサーカス娘などの責め場面も結構いかすと思う、惨虐の中にも『美』と『夢』をもたせる。エキゾチックなまたはロマンチックなサディズム、マゾヒズムが、これからの方向だと考える。また、詩なども挿入することが、いくらか制約をカバーできる方法だと思う。

六、増頁によって、毎号せめて百枚—二百枚ぐらいのSM創作を一挙に掲載できないものか（四段ぐらい活字を埋める）おそらくこれが呼び物になると思う。『文芸』が、この方法で起死回生をした。特にマニヤ誌は、然りだ。毎号、読みごたえのある創作を堪能できるのは、楽しいことだ。また二段構えとして、創刊号より現在までの連載された中・長篇の一挙掲載もよいと思う。これは、現在発表可能に再編集する自由を、編集者に一任というかたちで実現させたい。

七、生きたSM博物館たる今は懐しい『見世物』に関する各種の創作、告白の発表を期待する。現在、文献に残しておかないと、ますますこの種の見世物は衰亡の一途をたどるのみだ。（まだ地方の小都市などの祭りでは

見られる可能性がある。これは全国の読者の協力、通報によって、ある程度の実現は可能と思うが）是非、現地に行つてのルポも期待したい。あらゆる角度から写真にとって発表していただきたい。おそらく、そこからエキゾチックな、エロチックなSMファンが、おやっ！と眼を見はる宝物が掘り出されるのではないか——。

つい二、三年前にある地方都市の祭りで、私は『熊娘』とかいう見世物を見た経験がある。白昼、しかも大衆の面前で、うら若い娘が鹿の子の長襦袢一枚の姿に桃割れの髪も重たげに、大衆浴場の番台のような上に坐り、うなだれて晒しものになっている。そのそばでは呼びこみが「さあさあこれからこの花もはずかしい娘さんを、この小屋の場内に引き出し真正正銘の素っ裸にさせて、身体中一杯毛だらけの姿をお眼にかけよ。さあ、いまだ、いまだ！」と、どなっていた。事実、私は木戸銭を払って中に入ったが、まさしく半裸に剥いてその異様な肌と姿体を見せたことは確かだった。これが群衆の中にあつての出来ごとだから、正に驚きだ。

「サーカス、ろくろく首、生人形、八幡やぶ知らず、不具者の展示、残虐なる魔術風景、

衛生展覧会」など、これらの分野はまだまだ奇クにおいては未開拓の世界ではないかと考へる。読者の皆様の中にも、見世物を見た経験が沢山おありであろうと思う。これは日本独特であり、この種のファンもおられるのではないかと考える。大方のお言葉をききたいものだ。そうそう、こんなこともあった。中年男のグロテスクな容貌をもった小人が、美しいスラリとしたブラジャとパンティ姿の娘さんに転がされて鞭打たれ、顔を踏まれていじめられている見世物もあった。小人の妙に嬉しそうな表情がいつまでも印象的で、生々しかったことをおぼえている。綱より落ちる可憐なサーカス娘の血で描く悲惨な地獄図絵。それが、多くの見物人とジントの音、華やかなライトの下だけに、より凄しい『美』の世界を感じさせる。肉体美人の調教師が、ライオンに片腕を、ふとした油断からもぎとられる……そんな空想も果てしなくペンを持つ私を刺戟する。

以上、とりとめもないことを述べたが、これからの奇クの発展を祈るあまり、乱筆乱文ながら編集に対する私の希望と期待をこめて投稿した。



懸賞入選作品

償いは死者に訊け

九 鬼 二 郎

さで、だ。

二十四才——この若い年令を忘れてはならない。彼が未来に寄せていた限りない希望、祝福、それらのものが、そのいとぐちをのぞかせただけで、忽然と消え去ったのだ。それも、夢想だにしなかった「悪徳」の汚名のもとに。

今、一木礼二郎はいない。——その、朽ちかけた墓標の判読し難い名前の部分を、繰返し読みながら、おれは何年ぶりかで涙する。たしかに、八年もの長い間、一滴の涙すら

落したことはないおれが——。

「ああ、一木礼二郎」貴様はもういない。限りない愛と生の充実を眼の前にしながら、貴様は滅んだ。——泣くがいい。思いきり泣くがいい。

一木礼二郎は死んだ。だが、おれがいる。名もなく、戸籍もなく、顔もない、このおれが、今ここにいる。……。

山の斜面を利用した墓地から、一望のもとに見下せるN——人口僅か二十万ほどの南国

その男は死んだ。父母の愛情をいっばいに浴び、美少女とのままごとのような恋愛に心ときめかせ、将来に対する豊かな期待、やっとうわしかけた人生へのそこはかとない充実感——絶対に逸脱することのないレールの上を、一步一步確実に進んでいた一人の若者、一木礼二郎は死んだ。享年実に二十四才の若

の街。八年前、事件はこのN市で起った。

N相互銀行の一雇員一木礼二郎が、当直の夜、三億円札束と共に消えたのである。たしかに彼は消えたのだ。——一日おいた次の日、N市から一〇〇キロの海上、玄海灘に漂流していた無人のモーターボートが、一木礼二郎の終焉を物語っていた。

水びたしの船底にまき散らされていた反古のような一万円札、一木礼二郎がいつも携行していたアタッシュケース、そして点々と滴る血痕と指紋。それらは皆、彼の逃亡と末路を暗示していた。

そして数日後、漁船によってひろわれた波間に漂う血みどろの背広。そのネームによってすべては終わったのだ。

N市始まって以来の、大胆な犯行はあつてなく終わった。一木礼二郎は悪運尽きて滅んだのだ。そして、回収された数百万円以外の、二億数千万の巨額な紙幣は、彼の運命と共に太平洋の荒波に消えたのである。

事件から半歳後、マカオの魔窟で、日本から流れてきた一人の女に、俺はそれをきいたのだ。話の最後に女は云った。

「もったいない話ね。三億円もの札束が、今

も太平洋にプカプカ浮いてるんだわ」

——たしかに、もったいない話には違いなかった。一木礼二郎という青年のかけがえない青春や未来が、彼の知らない間に喪失してしまっただから……俺は女の肌をまさぐりながら、あることに賭けた。——俺のすべてを。

昭和四十×年の初夏、俺は八年振りに祖国の土を踏んだ。もちろん名も国籍もない俺に正規のビザがおりる筈はなかった。

香港在住。中国人張九竜^{チャンクワン}。紅華公司日本駐在員。

名前も国籍も勤務先も、何も彼も、八年間俺を育ててくれたボス、莊景文が作ってくれたのだ。

当時、ただノッポで頑丈なだけの青年だった俺は、莊によってひろわれ、造りかえられた。学生時代、ラグビーできた俺の体と神経は、俺自身があきれるくらいの速さと正確さで、この世界に生きる男としてのテクニクを身につけていった。今では俺は莊グループの数少い幹部の一人である。

紅華公司是横浜に支店があった。おもて向きは貿易商だが、もちろん裏側の商売の方が

主体だ。香港マカオ一帯に勢力を張る莊グループの出店である。

俺は出店の連中の情報をもとに、早速、横浜で一仕事をした。俺の計画におあつらえ向きの、麻薬中毒の整形外科医がいた。彼は拳銃でおどかすまでもなく、テーブルにばらまかれたヘロイン粉末で、たちまち眼の色を変えた。

この情ない医者の手術で、俺の切り断ったような眼窩や頬のくぼみは、やわらかいふくらみを持った。シリコンとかいうやつのお蔭だ。これで俺は、生れた時に貰った名前や戸籍だけでなく、その顔までも取り替えてしまったことになる。——俺は完全に張九竜になったのだ。

ボスが軍資金に使えといってくれたブツの代金二千万円をふところに俺はNに向った。駅から車で五分、N市で最も高級なシーサイドホテルに部屋をとって、俺は精力的に活動を開始した。今の俺には、一木礼二郎とその父母の墓前で流した一滴の涙のほかは、感傷も郷愁もいっさい無用だった。八年間燃やし続けてきた胸の炎を、今こそこで燃焼し尽すのだ。——俺の目的、それは一木礼二郎の

汚名をはらすことだ。

俺はまず図書館へ行つて、八年前の新聞を調べた。

田舎ギャングの喧嘩や暴力団のナワ張り争いなどで、九州のシカゴと云われていたこの町でも、三億円の公金拐帯事件は前代未聞の出来事だったらしい。二つの新聞はいずれも四段抜き、五段抜きの記事を一週間も続けて載せていた。

事件については、今まで俺が得た情報以外にたいして目新しいものはない。ただ、管理職しか知る筈のない複雑な金庫の番号を一木礼二郎がどうして知り、どうして開けたか。一つの新聞はハッキリ共犯説をとっていた。しかしそれも、金庫に付着したおびただしい指紋や、逃亡に使ったモーターボートの指紋と血痕などが証拠となって、一木の単独犯行と確認された。しかし考えてもみるがいい。

金庫にもし一木礼二郎の指紋しか発見されなかったとすると、その日の勤務時間中に、金庫に触れた筈の次長や課長たちの指紋はどこへ行ってしまったのか。警察はいったい何をしていたのか。それにも増して、俺をギョツとさせたのは、知人の談話がほとんど半信半

疑で一木礼二郎に同情的だったのに反して、

同僚の高村康正の驚くべき発言だった。

「ぼくは親友でしたから、いろいろ混み入ったことも話しあったのですが、一木は、いつか必ず世間をアツと云わせてみせる、と云っていましたし、近頃金の必要にも迫られていた様子で。——女でもできたんじゃないですかね」

俺は正直なところ唖然として、その談話がほんとうに高村のものか、もう一度見直したくらいだ。

一木礼二郎が金に困っている———なんという無責任な、というよりも虚偽にみちた言葉だろう。一木礼二郎はささやかな青春に満足し努力していた平凡な若者に過ぎない。世間をアツと云わせるようなハッタリ屋でもなかったし、同じ行員の久慈亜紀子とは、周囲の人々からあたたかい祝福を受けている恋仲だったのだ。

俺は高村康正の談話に激しい憤りを感じながら、その陰にかくされた黒い罍の存在に氣付いた。この男だ——俺は一目で早くも掴んだ重要な手がかりに興奮した。高村があんな犯罪に無関係ならば、虚構の証言をしてまで一木礼二郎を陥し入れようとするわけがな

い。

俺はすでに薄暗くなった図書館を出た。ほどよく通りかかったタクシーをひろうと駅前通りへ出る。俺にはもう一つ調べたいことがあったのだ。それは今の俺に残された唯一の感傷だった。——

たそがれた街の、あわただしく家路を急ぐ雑踏をわけて歩いてゆく俺の眼に、いつまでたっても目指す建物は見つからなかった。街のすがたは思ったより変貌していて、俺をまごつかせたが、忘れる筈のない小路の久慈洋品店のあったあたりは、ケバケバしい装いの中華料理店になっている。

俺はその近所で一つだけ記憶にあるリザという喫茶店へ入った。ロマンチックな色彩や装飾の若者向きの店で、俺のような三十男には体がムズムズしそうな感じだったが、レジに座っている人妻らしい女の顔にどこか見覚えがあったので早速声をかけた。

「こちらの娘さんでしたかね？」

「はい、何か？」

「この近くに久慈洋品店というのがあったと思うんですが、どこかへ引っ越したんでしょうか」

「久慈さんは、もう六七年前にいろいろの

ご不幸があつて、田舎の方へ移られたらしいんですよ」

「不幸といえますと？」

「亜紀子さんという娘さんが居られたんですが、その方がなくなられて」

俺は愕然として耳を疑った。亜紀子が死んだ！ あの、天使のような久慈亜紀子が死んだ！

一瞬間、俺の頭にはわけのわからぬ雑音がひびき渡り、俺は呆然と立ちすくむよりほかはなかった。——ああ、なんということだ。

久慈亜紀子まで死んでしまうとは！

色を失なった俺の態を見て、レジの女はどう感じたのか、カウンターを出ると隅のテーブルへ俺を誘った。

俺に同情したらしい彼女から、おそらく真実であろうと思われる数々の情報を得ることが出来た。

——事件後一カ月経って、一木礼二郎の父は心臓麻痺で死んだ。その後を追うようにして、母はみずからくびれて世を去った。そこまでは俺も既に知っていた。しかし、事件があつて、犯罪者の恋人として世間の冷い眼にさらされながらも、一木礼二郎の両親を力づけていた久慈亜紀子が、ある日、突然に自殺

しようとは……

彼女の死は、恋人を失なった絶望からと簡単に片付けられてしまったが、「これは噂ですが」と前置きしてリザの娘が語ってくれた真相は、あまりにも無残だった。

亜紀子は一晩、三人の男に凌辱されたというのだ。その一人は不明だが、あとの二人はこの街の暴力組織、川喜多組のボスの一人息子川喜多作馬と、そして高村康正だというのだ。無論彼等は亜紀子の死後官憲の取調べを受けたが、たいした問題にもならずもみ消されてしまったらしい。川喜多組のボスがN市の政財界と密接につながっていることは、この街では周知の事実だった。

錯乱とその蔭からこみ上げてくるどうにもならない自嘲——俺は悲しみわめきながら、そんな自分自身を嘲笑った。

莊景文の命令一つを金科玉条として、血も涙も、いやそれどころか一片の憐みや同情さえ覚えずに、俺は何人も男を消した。俺の殺しにささやかでも情があつたとすれば、それは女を一人も殺さなかったことだ。だから俺は莊グループの幹部のなかでも最も非情な男と云われていた。——久慈亜紀子はそんな俺のアキレス腱だったのか。

殺伐な世界を生きぬくテクニクとして、いつのまにか俺は冷酷無残なギャングの一人になっていた。しかしそれは、相手がおれにとって単なる物体としか映らなかつたからなのだ。おれには今、そのことが身にしみるほどよくわかつた。……

三日目、おれはN相互銀行の正面玄関に立った。しばつた的は勿論高村康正である。——一木礼二郎とその両親その恋人を殺し、幾つかの不幸をその家族にもたらせたこの男は、ぬくぬくと貸付課長代理の椅子を占め、将来の出世コースを夢見ている。

しかし、もうそのたわいない夢も数日限りだ。——貴様を地獄へ落すために、このおれがやってきた。

二谷伸哉という名前でおれは二百万円を預金した。無難作に内ポケットから札束をとり出すと、若い女の係は眼を丸くした。銀行がこれ位の金でバタバタするとは笑い話だが、彼等に見えれば、おれがネギをしょってきた鴨に見えたのだろう。

通された応接室で、おれはいい加減なホラを吹きまくった。——銀行員は若い女をのぞ

いてほとんどおれの知っている顔だが、無論あちらさまにはわかる筈がない。おれは二谷伸哉、某電機メーカーの依頼で極秘裡に工場敷地を下見に来たのだ。さすがに高村康正が名刺を出して前に坐った時は思わず憤怒に全身がふるえたが、しかし、待て。チャンスは必ずやってくる。その時を待つのだ。

いい加減なエサをまいて銀行を出す。高村に一発喰わすのは簡単だ。だが、こんな小物のために身を滅すのは御免だ。彼をあやつっている背後の黒い手を探ってからでもおそくはない。その時こそ、一木礼二郎の怨みを骨の髄まで思い知らせてやるのだ。

おれはホテルへ帰ると久し振りでくつろいだ。二谷伸哉として、せいぜい事業家らしく振舞わなくてはならない。やがて銀行屋がカモになって現れるだろう。俺はパンツ一枚になってホテルのプールサイドへ出た。

太平洋の波間を一昼夜も泳ぎまわったおれには、たった二十五メートルのプールなどオモチャみたいなものだったが、それでも香港を発って十日あまりの旅の汗を流すには、せまくるしいシャワーなどよりは数等快適だった。

高校時代に中距離の選手として鳴らしたお

れの泳ぎは、プールサイドの閑な連中の注視を浴びたらしい。ピッチをあげて往復泳ぎ終って水からあがったおれに対して、あちこちから小さな拍手が起きた。悪い気はしない。おれはちょっと手を上げてそれに応えると、傍の椅子に腰をおろした。あいにくアロハを用意していなかったので、バスタオルを肩におもむろにプールサイドへ眼をやると、若い華やいだ水着があちこちに点在している。そのうちの一人がおれの視線を待っていたように近付いてきた。顔はあどけないが真赤なセパレーツの水着に包まれた肢体は熟した果実のように眩しかった。

「とても素敵だったわ。あたしにコーチしていただけない?——あら、ごめんなさい。あたし由美子」

彼女はコケティッシュに首をすくめた。美人ではないが、小さな鼻と厚ぼったい唇がちょっと気に入った。

「いいよ。でも、ボーイフレンドの方は大丈夫かい?」

「あら失礼しちゃうわ。ボーイフレンドなんていないわ。あたし、タカ坊といっしょ。タカ坊といっても男の子じゃないわ。高村聖子っていうの、美人よ」

高村?——おれは奇妙な暗号に思わず釣られて、彼女の指さす方を見た。似ている。高村康正を女にして、その顔から卑しさを消し優雅な美しさを加えれば……。

由美子の手招きに応じてこっちへ歩いてくる高村聖子の羞らいに充ちた肢体——それは由美子の天真爛漫な色気と違って、女そのものの神秘的なコケットリーに溢れていた。この女はいける——ここ数年、魂のないガールハントに一刻の憂さを忘れていたおれだが、高村聖子には、そんなおれにはなかった情熱をかきたてるなものがあった。それに、高村康正に縁のある人間がホテルなどに泊っている筈はない。おれは偶然というやつを信じなかった。

「二人とも泳げないの?」

「ええ。だから八月までに泳げるよう、習いに来てるのよ」

「それにしては、ちっとも濡れていない」

「だって、コーチがいないんですもの。ね、タカ坊」

同意を求められて、高村聖子は長いまつ毛を伏せる。

「わかった。コーチ料は高いぜ」

おれは笑いながら椅子から立った。

夜、ホテルのバーで水割りをなめているおれの処へ、バーテンがにやにや笑いながら近付いてきた。

「昼間はお楽しみでしたね」

「昼間？——ああ、あれか。あの娘たちはここに泊っているの？」

「いいえ。土地の娘ですよ。プールは入場料百円で入れるのですよ」

やはり高村聖子は、この街の女か。

おれは再びもたげてくる疑惑をどうしようもなかった。——高村という姓はこの街でも

珍しい方である。あるいは聖子は、あの時直感したように、高村康正につながるのある女だろうか。勿論彼の妻である筈はない。年令的にも距たりがあるし、だいいち彼女の羞じらいは完全に処女のものだ。すると、妹だろうか。高村康正にあんなみずみずしい妹がいるなどと考えたことはない。だが往々にして運命というヤツはバーナード・ショーより皮肉にできている。——酔いがまわるにつれて、おれの疑惑は確信に変わった。彼らは間違いなく兄妹なのだ。しかし、それがいったいどうしたというのだ。高村聖子に心を動かしたといつても、それは恋愛とか惚れたとかいう感

情ではない。イカス女と寝てみたい、ただそれだけのことだ。……

張九竜ともあろうものが、日本へ帰ってきた途端に甘っちょろいロマンチストとなろうとは、ボスにきかれたら笑い飛ばされるに違いない。——彼らが兄妹ならなお張合いがある。おれはちよっぱり苦いものを感じながら、高村聖子の曲線の美しい優雅な体を出した。あの豊かな胸のふくらみ、むっちりした腰。ちよっぱりのぞかせた臍窩と、抜ける程に白い肌。……

四日経った。おれは初め、預金することによって銀行とつながりを持ち、工場敷地を購入するという口実で貸付課長代理の高村と接触する計画だった。だが、ホテルへたずねてきたのは課長だった。まさかこっちから高村を名指しで呼びつけるわけにはいかない。といつてべんべんとホテル暮らしを続けることもできぬ。荘景文から貰った休暇は三カ月だ。その間に、一木礼二郎をほうむった影のグループを壊滅しなければならぬ。そして、その連中が何人いるのか、おれにはまだわかっていない。——おれは計画を変えた。こうなったら直接高村康正の家を襲うよりほかはない。

い。——

高村聖子は毎日プールへ姿を見せた。彼女は明らかにおれに関心を持っている。泳ぎをコーチしながら、時おりおれの手や足が彼女に一寸でも触れたりすると、彼女はビクンとふるえたり、体じゅうを朱に染めた。一方の由美子が一人前の体をしていながら精神的には子供なのに比べ、聖子は身も心も完全な女になっていた。彼女の羞恥はセックスへの怖れとおののき以外の何者でもなかった。——

おれは由美子に気付かれないように、水の中で聖子の手を握った。彼女はハッとしように体をこわばらせたが、手をふりほどこうとはしなかった。おれは貝殻のようなかわいい耳に囁いた。

「あとで、ぼくの室へ来ない？ 勿論君ひとりで」

聖子はまるで恋の告白でも聞いたように濡れた頬を染め、長いまつ毛を伏せた。返事をうながす必要はなかった。返事をしなかったことが彼女の承諾を意味していた。……

プールサイドで由美子のたわいない話にけたたましく笑う聖子のなかに、おれはさっきの一言が与えた衝撃の強さを知った。彼女はいつもの控えめな物腰を忘れてしまったよう

にはしゃいでいた。彼女はそんな自分の変化に全然気付いていない。——そうだ、この娘によって高村康正への糸をたぐり寄せることが可能かもしれぬ。おれはそんなことを考えながら、聖子の白い肌を覗きこんでいた。

高村聖子の胸底にある未知なものへの憧れと怖れが、彼女を一瞬ごとに変えた。——彼女は石のように身を固くしたかと思うと、まるで狂女のようににわななき、あえいだ。可愛い妖精のように身をくねらせ、おれを拒否し、そして次の瞬間にはとまどう程に能動化するのだ。おれは舌をまいた。彼女の全身を包んでいた優しい、しっとりした情感はいつたいどこへいったのだろう。その肌目の細かい皮膚は、むんむんする匂いをまき散らし、おれを惑乱させる。

おれはいまわしい事、わずらわしい事のすべてをしばし置き忘れた。しばらくしてから、聖子の唇からすすり泣きがもれた。

今、高村聖子は、ほんの偶然と、好奇心から生じたこの一刻を「愛」と感じ、おれにすがり、甘えることに生甲斐を発見したらしい。それはおれのようなアウトローにとっては迷惑だったが、愛情などというものには久

しく遠ざかっていたおれの胸奥をゆさぶるには充分だった。おれは聖子の情熱に当惑しながら、その小さな背を撫で続けた。……

彼女が割り切ったプレイガールだったら、おれは救われたに相違ない。しかし彼女は、男になにもかも捧げ、愛玩されることによるこびを見出す典型的な日本ムスメだったことを、見せつけられた想いだった。

おれの予想通り、彼女は高村康正の妹だった。といって今更当惑するわけではない。初めから予期し、それを利用するつもりだったのだから、本来ならばおれは、してやったりとほくそ笑むところだ。だがなぜかそんな心境になりきれない自分が齒がゆかった。

香港やマカオで遊んだ相手は中国人か商売女で、素人の娘、それも混りけのない処女ともなれば、調子が狂うのも無理のない話かもしれない。おれの冷酷非情も異国だったからこそ、同じ日本人相手じゃ勝手が違うのだろうか。——

聖子が去った後、彼女のぬくもりが残っているベッドに腹這いながら、おれは自嘲をまぎらせるように水割りをあふった。こんなことでは「一木礼二郎」が泣くだろう。彼の両親が、久慈亜紀子が、泣いている。そうだ、

亜紀子が、あの美しい双眸に涙をいっばいためて、おれをじっと覗きこんでいる。……

おれはベッドから降りて、アタッシュケースを開けた。二重底のなかにひそかに眠っていたおれの相棒——ワルサーP38。そのずっしりした冷たい感触が、おれを二谷伸哉から冷酷なギャング・マカオの竜、つまり張九竜に引き戻した。

みんな泣くのだ。みんなわめくのだ。一木と久慈、二つの家を滅したものは、例外なく滅されねばならぬ。それが悪意に対する正当な報酬である。——おれはふたたびガンをケースの底に納めた。躊躇は許されない。一日延びれば、それだけ聖子の涙がおれの非情さを鈍らせるだろう。明日こそ、断乎としてやらねばならぬ！

高村康正の家は海浜の住宅街にあった。建物はそれほど大きくない二階屋だが、新しい建材をふんだんに使った瀟洒な家である。ブロックの塀が囲んでいる敷地は相当に広い。銀行の課長代理で、地方官吏の息子の住居としてはかなり贅沢に出来ている。一木礼二郎を滅亡させた三億円の何十分の一かが、ここに費消されているに相違ない。

おれはさりげなく、家のまわりを一周りした。道に面した場所以外は畑地に囲まれ、最も近い家ですら五〇メートルは離れている。この家でどんな事件が起きても、ダイナマイトでも爆発させない限り、外部からうかがい知ることは不可能だろう。

おれはホテルに戻って夜を待った。——どうしたわけか、聖子も由美子も今日は現れなかった。おれにとってはその方が好都合だったが……。聖子には逢わない方がいい。どうせ今夜、おれと彼女の間には決定的な瞬間が訪れるのだから。

八時——おれはワルサーをズボンの腹のあたりに忍ばせ、ホテルを出た。歩いて十五分。タクシーも使わず、なるべく人眼をさける。……どうせこの次にこの街に現れる時は、おれは違った顔と名前をつけている。万が一にも発覚する筈はなかったが、用心に越したことはない。

高村康正の家には二階と階下の一部屋に灯がともり、勿論玄関は真っ暗だった。おそらく二階の灯は聖子の部屋、彼女は今ベッドに入って読書でもしているのだろう。下の灯は夫婦の居間か寝室であろう。——聖子の口からこの家には高村夫婦の他は聖子しかいない

ことを知っていたおれは、高村の在宅を念じながらブザーを押した。

数分後、玄関に灯がともり、のぞき窓から女の白い顔が問いかけてきた。

「どちら様でしょうか？」

ここで門前払いを喰わされたのではなにもならぬ。おれは女には自信のある囁くような声で夜間の訪問を詫びた後、

「実は急に明朝東京へ戻らなければならなくなったので、銀行の方の預金や融資のことで打合せが必要になったのです。課長さんのお宅へ伺ったのですが、生憎お留守だったのでこちらへお邪魔しました……」

おれはそのまましばらく待たされた。しかし、待たされることは招じ入れることを意味している。流石に緊張で体が固くなる。香港の影の地帯で「殺し」の場数を踏んできたおれだったが、これからやろうとすることは、そんな縁もゆかりもない人殺しとはわけが違ふ。——おれは復讐に来たのだ。この世にないほどの残酷な運命に弄れた、一木礼二郎や久慈並紀子の復讐に来たのだ！

高村康正は職業柄か、突然の訪問客をいぶかる風もなく、応接室へ招じ入れた。まった

く、この男はちっともわかっていない。おれの眼、おれの声、おれの体付——それらのほんのちよっぴりでもこの男の記憶を呼び醒すことがないのだろうか？ それとも、うまうまとせしめた大金をふところに、ぬくぬくと生きるだけの無能者になってしまったのか。悪党め！

おれはデタラメの工場敷地や資金計画を話した後、細君のついでくれたビールを一息に飲み乾しておもむろに切りだした。

「ところで高村さん。何年か前にお宅の銀行で三億円とかの大金を持ち逃げされた事件がありましたね」

おれは、高村の顔に走る一瞬の変化を見逃さなかった。

「二谷さんは、どうしてそれを？」

「いや、あの事件は日本中の新聞がデカデカ書き立てしましたからね。——それで、あの三億円はそのままですか？」

「ええ、まあ……」

「犯人は何と云いましたかね？——い、いち……何とか」

「そうです。一木という男でした」

「ああ、そうだ、一木ですね。それで、その男は死んでしまったんでしたね」

「そう。ボートで何処かへ逃げるつもりだったんでしようが」

「死体は発見されたんですか？」

「いや、発見はされなかったんですが……」

高村康正は、一刻も早くこの会話を切り上げたい表情を露骨にして、

「まあ、悪いことは出来ないものですよ。」

——ところで

と話題を変えようとした。彼の妻も良人の意向を察したのか、おれのコップにビールをさした。そんな細君の、悪党には勿体ない美しい理智的な横顔を冷やかに一べつしただけで、おれは続けた。

「その男の死体がまだ発見されていないとすると、生きている、ということも考えられませんか」

「いや、そんな……。この話はこのへんで。わたしとしては、犯人といっても昔の同僚ですから」

彼の細君もそれに同調して口をはさんだ。

「なんといっても、お友達の芳ばしくないことは、あんまり……」

「ほう、そうですか」

おれは笑いながら二人を見た。

「いいじゃないですか。あなた方に関係があ

るわけじゃなし。——それに、あなたはその男の恋人かなにかを、モノにしたっていうじやないですか」

「えっ？」

高村は虚をつかれたように、体をギクリとふるわせ、彼の妻はハッとして良人の狼狽した顔をみつめた。

「キ、キミはいったい……君はいったい何を云いに？」

「やっとわかってきたらしいね、高村康正さん」

おれは低音に凄みをきかせてソファから立った。

ワルサーP38が彼らを硬直させた。

「さあ、おとなしく真相をぶちまけて貰おうか」

「何を云うか、君は。妙なことをすると警察を呼ぶぞ」

高村は精一杯の虚勢を張ってわめいた。だが、こんな男になにが出来る？ その証拠に彼の体はさっきからガタガタふるえているではないか。

「結構。電話をかけるならかけたらい。ただし、云っておくが、貴様の手が受話器にかかる前に、この可愛い奥さんはズドンと一

発、あの世行きだぜ」

おれは冷たい銃口で、驚愕にこれまたふるえている女の頬を突ついた。

「悪党は悪党らしく、往生際をよくしろよ。」

——さあ、一木礼二郎をどうした？ 三億円を何処へやった？」

「キ、君はいったい、誰なんだ。何の目的があつてそんな云いがかりを……」

「云いがかりじゃないぜ。おれは真実を追及してるんだ。——じゃあ、おれが話してやろうか」

おれは銃口で高村を威嚇しながら、女がまとったガウンの下から、その細腰に巻いていた帯を引き抜いた。女は痴呆のように、拒まなかった。帯で彼女を後ろ手に縛ると、その残りの部分で上半身を椅子にぐるぐる巻きつけた。すっかり固定されてしまった女は、その頃になって不意に暴れはじめた。

「あなた！ 救けて……」

だが、頼りにする良人は、恐怖と錯乱に蒼白な顔をひきつらせるばかりだった。

「そう騒ぎなさんな、奥さん。おとなしくしないと、おれは本当にあんたの亭主をぶち殺すぜ」

彼女が沈黙すると今度は高村の番だ。こい

つも和服の帯で椅子に縛られるまで、抵抗らしい素振りとは全然示さなかった。臆病者め、こんなならしのない奴に、一木礼二郎が葬むられたとは。おれは情なかった。

「さあ、これで貴様はおれの囚人だ。煮て喰おうと焼いて喰おうとおれの意のままだ。どうだ、もうそろそろ観念して、なにもかもしやべっちまいな」

「……」

「いつまで黙っていられるか……。課長代理さん。貴様の女房も、この通りおれの意のままなんだぜ」

おれはワルサーの先端で女のガウンの膝を割った。薄ものの白いネグリジェを透して、むっちりした太腿が露わになる。彼女の蒼ざめた顔に赤みがさした。身をよじっておれの視線から逃れようとする片方の脚を、おれは邪慳に掴んだ。

「なにをするの、やめて！」

叱責するような昂ぶった声がかえっておれを刺激した。おれは女の脚を思いきり持ちあげた。

「あっ」

女の抵抗など物の数ではない。おれは女の両脚をそれぞれ左右の肘掛に載せて縛った。

ガウンやネグリジェは腹までまくれ上り、露出した白い脚がちょうどMのような形で、女の最もあさましい恥辱のポーズになった。

「ああ、あなた、救け……」

女の叫びは終りまで続かなかった。引き裂いたネグリジェがさるぐつわになった。

「君、やめてくれ！ そんな……奈津子にはなんの罪もない」

高村康正は絶望的な声で哀願した。

「おや、すると、貴様には罪があるというのか」

「いや、おれは知らない。あれは一木がやったことだ。おれは無関係だ」

「……」

今度はおれが黙った。いくらちっけな悪党でも破滅を意味する重大な秘密を簡単に吐くわけがない。——おれは女の傍に立った。いまはただ、この女を恥かしてやればよいのだ。それが百万言にもまして、高村に真相を語らせる早道なのだ。

女は睫毛の美しい眼を閉じ、顔をそむけていたが、その全身はおれの次の責手を予期して小刻みに震えている。その、ぶざまな姿から湯上りらしい石鹸の匂いに混ってむっとする女の匂いが感じられる。

「奥さん、これからお楽しみというのに、不粋な客で申訳けない。おれでよかったら代りに相手になってもいい——」

女はビクンと体をすくめた。

「やめろ！ この気狂いめ！」

高村は狂ったようにわめきだした。——畜生め。大きな声をだすな。聖子が気づいて降りて来るかもしれない。——おれはやむなく、高村にもさるぐつわを噛ませた。

「その気になったら意志表示をしろよ。すぐ外してやる」

おれはそう云って、ふたたび女の傍へ行った。

「いいか、高村、貴様は一木礼二郎の恋人を犯した。それがどんなに卑劣で残酷な行為か、貴様にわかるか。——その苦しさ悲しさを、これからとつくりと思ひ知らせてやる」

「……」

「久慈亜紀子は絶望して自殺した。貴様の女房はどうするだろうか……」

おれはたっぷり時間をかけ、女をなぶり、凌辱するのだ。いいか、高村康正。おれは人間ではない。鬼だ。復讐の鬼なのだ！

おれは高村康正の喰い入るような視線を感じながら、手を伸した。女の肌が一段と大き

く震え、おれのサディッチクな欲望をかき立てた。

女への恥ずかしめが、高村への恥ずかしめになる。しかし、女がもしも悦びを覚え始めても、それは高村の悦びにはならない。それは男にとって無限の屈辱につながるだろう。

——さまをみる。貴様の女房のこの姿はどうだ。無頼の侵入者に責められて苦しむどころか、待ちこがれているようだぜ。

「よく見ろ、高村。貴様の女房は恥ずかし気もなくよろこんでるぜ。亭主の眼の前でよ。

——お前の女房になるくらいの女だ。なるほど相当なもんだな」

おれはわざと下卑た口調で高村に話しかけた。その一言一句が高村に地獄の責苦を与えることを確信しながら——

だが、どうだ。女にはそれも聞えないらしいのだ。この責め手の前に、彼女は明らかに悦楽のきざしを見せ始めた。——しかし、高村康正は頑強に沈黙を守っている。畜生、しぶとい野郎だ。女房がこれほど恥ずかしめられて、この男はなにも感じないのだろうか。それとも、あくまで否認し続ければ、おれがあきらめるとでも思っているのだろうか。

一方、おれは凌辱に対して反撓するどころ

か、淫獣のように快樂の淵へのめり込んで行く女にも、無性に腹立たしいものを覚えた。

そしてそれは急激に憎悪にまで、ふくれあがった。縛られていることが云い訳になるというのか？ 抗うことが不可能だということか？ 聖子もこんな場合、こんな風にもだえるだろうか？ そして、あの、久慈亜紀子も暴行を受けてこんなあさましい姿をさらしたのだろうか？ いや、そんな筈はない。亜紀子は違う！——彼女をあくまで神聖視しようとするおれにとって、この女のメス犬のような変化には我慢がならなかった。おれは狂ったように女の頬を張りどばした。しかし予期に反して、彼女はそれに対しておとなしくなるどころか、さらに激しいうめき声を発し、自由のない体を波のようにうねらせ始めたのだ。おれはそんな女を憎悪を持って見ていたが、どうにもならない激情の突き上ってくるのを覚え、遂にその囚となって、女に襲いかかっていった。——

女が強烈な媚態でおれを誘い、虜囚にしようと企んだのか、おれにはわからない。とにかく、憎悪と復讐の念を一瞬、忘れていたのは確かだった。——我に還って立ち上り、後

を振返ったおれの眼に、高村康正の絶望的にゆがんだ顔が映った。

「ふふ……これで貴様とおれは『兄弟』つてわけだ。女房だけじゃないぜ。聖子もおれに惚れたらしくてな。あの娘も仲々にイカス娘だぜ。——どうだい、兄弟のよしみでそろそろ真相とやらを話してもらおうか」

おれは高村のさるぐつわを外し、ついでに女のそれも取ってやった。

「あなた、夫がなにをしたか知らないけれど、もう許してあげて、わたし……」

彼女は絶え入りそうな声で哀願した。冗談じゃない。この女は良人の前で演じたあさましさを正当化しようとして、殊勝なことを云いだしたのだ。

「よしなよ、奥さん。今更そんなこと云ったってほじまらねえよ。あんたはこうされるのが嬉しくてたまらなかったのさ。つまりあんたは、亭主だろうが野良犬だろうが、縛り上げて、いたぶってくれる相手なら誰でもいいという変態女さ」

「よし、わたしはそんな女じゃない」
「ふん、もっともらしいことを云うな。貞淑でおしとやかな奥さんにしては、お熱の上り方が激しすぎるようだぜ」

「やめてくれ、やめて……」

おれたちのやりとりを、たまらなくなつたらしい高村康正がさえぎる。

「やめてやってもいい。そのかわりしゃべってくれるかい？」

「……」

「いやなら奥さんに今度は裸踊りでもさせるか。その方が奥さんにはお望みらしい」

「——いったい君は、なにが欲しいんだ、金か？ 金ならいくらでもやる、いくらでも」

「バカな！ おれが金持のことは知っている筈だ。おれはな、よく聞けよ」

おれは高村を睨んだ。

「——一木礼二郎の無実を立証したいのだ。」

いいか、あの晩、彼は宿直だった。しかし彼が飲んだ牛乳には強い催眠薬が混入されていた。椅子の上で突然睡魔に襲われた彼が気づいたのは、太平洋上の小さなボートの上だった。まだ意識のハッキリしない彼が覚えてい

るのは、同乗していた見知らぬ男にピストルで撃たれて海中へ転落したということ……」

「すると、キ、君は？」

「今頃やっとわかったのか。おれが一木礼二郎——太平洋の波の上で、密輸船に拾われて息を吹き返した一木礼二郎さ」

「そうだったのか。道理で、どこかで聞いた声だと思ったが……」

「そこまで納得したら、もう真実を話してもいいだろう。——高村、誰だ？ ええおい、

貴様の黒幕は誰なんだ？」

「知らない。おれは関係ない……」

「まだシラを切るつもりか。貴様が一枚かんでいることはわかっているのだ。貴様は警察や新聞に、おれが不利になるような偽りの証言をした。それは誰のさしがねだ？」

「……」

「これでもか」

おれはワルサーにサイレンサーを装着して高村の顔に狙いをつけてやった。彼の顔は奇妙にゆがみ、口はまるで金魚のようにパクパク開いた。

鋭利な、空を叩くような音と同時に、彼の頭髮が千切れ、耳の尖端が吹っ飛ぶ。動物めいた悲鳴が彼の唇をつんざく。

「次はどこだ？」

しかし、おれの言葉に応えたのは、高村ではなくて妻の奈津子だった。

「お願い。わたしには関係のないことなの。わたしだけは許して！」

彼女は恐怖に頬をひきつらせて叫んだ。お

れの拳銃がただの脅しでないことを知って、まき添えを喰ったら大変、という浅はかな女心だった。

「どうだい、高村。久慈亜紀子は苦しみ抜いて自ら死を求めた。ところが貴様の愛する女房は、亭主のことなど忘れて、自分ひとり助かりたいんだとさ」

女はそんな言葉には耳もかかず、哀訴をくり返す。

「ね、あなたが怒るのも無理ないわ。みんな高村が悪いのよ。お願い、この手をほどいて——わたし、あなたに同情するワ」

彼女はなんとかおれを口説いて、この場から逃げだしたいのだ。まさに、あきれ返った女のエゴイズム！

「よかろう。おれの命令をなんでもきくというなら、許してやってもいい」

「きくわ、きくわ。なんでも、します」

面白い。これはいい見世物になる、と、おれは女の縛めを解いた。ぶざまに縛りつけられていた拘束から解放された彼女は、ホッとしたように肩を落し、こちらに背を向けて床にうずくまった。——安心するのはまだ早い。これから、お前はおれの演出でメス犬となつて踊り狂うのだ。

「さあ、奥さん。こっちを向いて裸になるんだ。——絶対服従の約束だぜ。おれは短気だから、早くしねえと……」

その一言で、女は弾かれたように立ち上った。彼女は哀れな、だが完全なあやつり人形になった。

震える指がガウンを外し、ネグリジェを取った。一メートル六十五はあろうか。女にしては大柄な見事な裸身だった。豊かに実った乳房、むっちり肉付きのいい腰部。それは彼女の暗いエゴイズムを忘れさせるほど、グラマラスな肢体だった。

「さあ、やってみな。おれは奥さんの裸踊りが見たいのだ。ツイストかゴーゴーか？」

哀れな女のツイストが始まった。のけぞる乳房、弾ける臀部。汗まみれの裸身が白いけだもののように乱舞するのだ。——高村はと見ると、さっきまで憎々しげに妻の背信を凝視していた彼も、さすがに見るに耐えず視線を伏せ、重苦しい呼吸をくり返すだけだ。

——さまを見る。おれの嗜虐的な欲望はさらに昂まった。

「おい、踊りはもういい。こっちへ来な」
かすかなためらいの後、おれの前に佇立する。おれは次から次へと淫らなポーズをとら

せ、痴態を命令する。

「逆立ちして見せなよ、奥さん……」

うまく倒立できない女は、床の上をごろごろした。

「もう、許して……。ね、わたし、トイレへ行きたいのよ」

「うまいことを云って、逃げようたって駄目さ」

「ほんとよ、さっきから我慢してるのよ」

羞恥を忘れたメス豚は腿をすり合せ腰を振っている。

「お願い、ね、お願いよ」

「それでは、そこでやりな。この室を出すわけにはいかない」

おれは嘲笑った。高村に対する女の背信はおれの思う壺だったが、それとは別に、おれの内部では、女の醜悪なエゴイズムへの限りない侮蔑と憎悪がたぎっていた。おれは彼女に対して徹底的に残酷になった。

「テーブルの上へあがれ！そこでその盆のかへやるんだ。我慢できねえんだろ？——おれにも亭主にもよく見えるようにやりな」

女は観念したか、豊満な体を折って盆をまたいだ。——

「待て」

おれはそのときふと惨虐ないたぶりを思いついた。

「テーブルからおりろ」

「だって、もう……」

女は絶望的な表情でおれに訴える。

「いいからおりろ、ちようどいい便器があった」

おれは高村康正の肩を掴み、椅子ごと引っくり返した。仰向けになった彼は、おれの意図を察したらしく、無惨なほど顔をくしゃくしゃにゆがめた。おれは天井に向いてバタバタさせている彼の脚を、宙に浮いた椅子の脚に縛りつけた。

「さあ、そこでやるんだ。親愛なるご亭主さまは、咽喉が乾いているそうナ」

流石に女はためらったが、サイレンサーが彼女のアップに結った黒髪の先端を吹っ飛ばすに及んで、彼女はあきらめたらしい。

「許して……」

「余計なことを云うな、早くやれ！」

——それはまさに、女体の魅惑や神秘とはうらはらな動物的な光景だった。激しいしぶきが奔流となって乱れ散り、高村康正の顔は何か別世界の生物のようにみえた。——

おれは笑った。心から笑った。笑いながら

おれはこみ上げてくる涙を抑えられなかった。——これが八年間、思い続けた復讐というものか？ おれの青春を抹殺し、人生をだ

い無しにした男への復讐がこれか！
おれは両親を失ない、久慈亜紀子を失なった。しかし、高村康正はいったい何を失なうのか。地位を失ない、金を失ない、さらに妻を失なったとしても、一本礼二郎の受難に比較することが出来るだろうか。しかも、たった一時間の凌辱が、死者への償いになるかどうか。——おれは高村康正を消すつもりでやってきた。だが果して、死がその男の罪をすべて消し去るだろうか。例えば、数千人、数万人を殺戮した犯罪者一人が死ぬことによって、その罪を償えるものだろうか。……

高村康正がぼつりぼつりと真相を語り始めたのは、淫らで気狂いじみた拷問の直後である。彼は、この報復者が、どんな残酷なことをやらすかわからない、という恐怖の実感に負けたのだ。

——彼の告白は、おれの予期した通り、五人の犯罪者の名をあげた。

暴力団川喜多組のボス川喜多東馬と、その息子の作馬。県会議員の野中征治と、N相互銀行の支店長石倉勉、そして高村だった。

彼の告白を小型のテープレコーダーで記録しながら、おれは何度か、ワルサーの引金に手をかけた。だが、今殺してしまうのは、この卑劣な男を、絶望から救うことに他ならな

い。おれの復讐はそんな生易しいものではなかった筈だ。おれはこの男とそのグループを、生きながらの地獄へ案内してやるのだ！
高村がだらしなく失神した時、おれはドアの外の小さな叫びに気付いた。流石にハッとしてドアを開けると、そこに聖子が、白い真綿のかたまりのように崩れ落ちていた。彼女のすすり泣きは、すべてを聞いてしまったことを物語っている。

おれはやさしく彼女を抱きあげた。

「許してあげて、兄を、許してあげて……」

腕のなかで震える小さな肩が、久慈亜紀子の可憐な面影を想起させる。——聖子よ、許せ。たとえ、君が泣いてすがっても、高村康正は許せない。この復讐は、愛や同情などとは次元が違うのだ。それは、おれにとって、崇高な至上命令、いや、おれの人生そのものなのだ。……

しよせん、おれと聖子は敵同志、うらむなら兄をうらめ。悲しむなら、この、残酷な偶然を悲しめ。——

深夜、おれはN市を発った。別な名前と、別な顔を作るために。——おれの復讐は、今第一步を踏みだしたばかりである。

天星社刊 △限定版グラビア写真集▽ 在庫案内

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 女体緊縛グラフィック集「豊満と清楚」 | 一部一〇〇〇円 (送共) 略号「限二」 |
| 緊縛美女八十態「美しき縛しめ」第四集 | 一部一〇〇〇円 (送共) 略号「美4」 |
| 山原清子「刺青の魅力を探る」 | 一部一〇〇〇円 (送共) 略号「美7」 |
| 二女緊縛「女斗緊縛競艶写真特集」 | 一部一〇〇〇円 (送共) 略号「美8」 |
| 「革具に拘束される女」拷問特集西洋篇 | 一部一〇〇〇円 (送共) 略号「美9」 |
| 緊縛写真集「責められる美女百態」 | 一部一〇〇〇円 (送共) 略号「美10」 |
| M写真集「女王様に飼育される日々」 | 一部一〇〇〇円 (送共) 略号「M特」 |
| 緊縛美態代表作品一二〇葉写真集 | 一部一〇〇〇円 (送共) 略号「美11」 |

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

連載小説

花

はな

と

蛇

^へび

團
鬼
六

續編（第三十四回）

蛇の巣

花 と 蛇

『梅の間』は、八畳一間の古びた日本間であ

ったが、三方の壁には、二尺ぐらいの高さに鏡が張りめぐらされ、床の間には、極彩色の浮世絵が描かれた掛軸がかかっていて、床の間の置物は、芸者と若衆がからみ合っているという珍妙な人形が幾つか飾られてあった。

棚の上の飾物も、男性のそれと女性のそれを象徴した珍奇な置物で、二枚折屏風の絵なども、すべて、けばけばしい色で描かれた密画であった。

田代の趣味を一口に現わしているような奇妙な部屋で、彼自身、時々この部屋を自分の寝室とし、その一種異様な雰囲気を楽しんでいたようである。

そうした部屋の中央に敷かれた、純白のシートをかけた絹布団、それをはさむようにして、静子夫人の到着を待つ田代と捨太郎が向かい合い、酒を飲んでゐる。

田代は、ジョニーウォークを手酌でグラスに注ぎ、チビチビ飲みながら、

「なかなかいい部屋だろう。どうだ、気に入ったか、捨太郎」

という、捨太郎は、焼酎瓶をラッパ飲み

しながら、こくりとうなずき、今まで唾のよ
うに黙りこくっていた彼は、焼酎を飲み始め
て、段々、くつろいだ気分になってきたらし
く、

「おら 全くここが気に入っただよ。これから、ここで暮しても、いいのけ」

と、何処を向いているのかわからない斜視がかった眼を田代に向け、極端な田舎訛りだったのであった。

「そうさ。あの天下の美女を女房にして、何時までも、ここに住みつくことが出来るんだ。お前の仕事は、女房とコンビを組んで、ショーに出演し、大喝采を受ける。そうすり

や充分報酬も支払ってやるよ」

「ありがてえ話だ。おら、それより能のない男だよ」

捨太郎は、焼酎をあふり、手の甲で口を拭くと、どれ、そろそろ支度すつか、と立上り着ているものを無雑作に脱ぎ出した。

薄汚ないステテコ一枚になった捨太郎は、一、二、一、二と機械体操みたいなことをやり始める。そんな捨太郎を田代は薄笑いを口元に浮かべて見ながら、

「鬼源から聞いたんだが、お前、まる二日、ぶっ通しで続けて、ニグロの娼婦を気絶さしたということだな」

捨太郎は、黄色い歯をむき出して、ニヤリと笑った。

「ああ、エミーのことけ」

昔、鬼源が、こういうことで渡世している中国人と奇妙な賭けをやったのだ。それは、鬼源の弟子である捨太郎とその中国人の抱えているエミーというニグロの娼婦とを一騎討させ、続行するのを拒んだ方が負けという奇妙な賭けなのであった。相手の中国人は、そのエミーという娼婦を使って、東南アジアのあちこちで、ニグロの兵隊相手に荒稼ぎして日本に遊びに来た男で、ふとしたことから、

あるやくざを仲介として鬼源と知り合い、やくざ達のすすめもあって、そういうことになったのだが、蛇の生血が好物で、生玉子を毎日二十個は飲むとか、鰻を頭からガリガリ噛るとかいわれている娼婦エミーと捨太郎の勝負は、誰の眼にも、ニグロ女の勝は間違いないとうつり、これに賭けをいどむ観戦者達は、三対七の割で、ニグロ女に乗ったという。あるテキ屋の親分の二階で、何人かの介添人に見守られて、エミーと捨太郎は、決戦を始めた。午前中に開始し、昼食と夜食の間に、約三十分休憩するだけで、あとはずっと、色々な作戦を練り合い、単調な、また複雑な斗いをくり返したのである。勝負ということになると、冷静さをうしなった方が分が悪い。逆に相手に幾度も勝負を忘れさせると

いうことは、勝利につながるのだ。二人は歯を喰いしばって自分に耐えながら、翌日の夕方まで、戦い抜き、遂に捨太郎は、ニグロ女を完全に……勝利を鬼源にもたらしたのだ。捨太郎は少なくとも、彼自身、五回は……善なのに、最後まで、スタミナが切れることなく、観戦者達は舌を巻いて驚いたという。一方、蛇を食うとか、鰻を食うとか、そのすさまじい精力を取沙汰されていた黒人女

は、捨太郎のために……精も魂も尽き果てて、完全な降伏状態に陥り、抱え主の中国人に大変な損害を与えてしまったということだ。

「とにかく、ニグロの娼婦をグの音も出ない程にしちまったというのは、大したものだ。それと同時に、お前の精力がつくづくうらやましいね。何か、秘訣でもあるのかね」

田代が、いうと、捨太郎は、ニヤリと口元を歪めて、首を振る。

「おら、生まれつきかも知んねえ。それしか能のない男だよ」

「そのニグロの娼婦みたいに、蛇の生血を吸ったりするのかね」

「うんにゃ。生ニンニクと生肉だね。毎日、三度三度、こいつだけは、うんとこさ、食べることにしちやいますだ」

「へえ、生ニンニクに生肉か」

田代は感心したようにうなずいた。そして薄笑いを浮かべて

「これからは、お前の新妻にも、そうしたものを食べさせて、うんと精力をつけさせなきゃいかな。お前のような男を夫に持った妻は、やはり、夫とペースを合わすべきだ」

「な、社長さんよ」

捨太郎は、まるで、獣のようにさえ感じられる胸毛をゴシゴシ指でかきながら

「おら、夜三回。朝二回。それでねえと、どうも体の調子がすっきりしねえ。凄え別嬪を女房にもらったのは有難えが、大丈夫かね、あの別嬪さんは」

「ハハハ、自分の女房に気兼ねするやつがあるか。自分に合うよう妻を教育するのも、夫としての義務だぞ」

田代は、捨太郎の心配していることが、そういう所にあると知ると、急におかしくなってきた、太鼓腹を揺すって笑うのである。

その時、襖が開いて

「花嫁さんのご到着よ」

と、銀子のキンキンした声がし、ズベ公や川田、千代達に取囲まれるようにして、静子夫人は上体を前かがみにし、消え入るばかりの羞恥を全身に漲らせて入ってきた。

紫のしごきで、その乳白色の柔軟な肢体をキリキリ後手に縛られ、口には薄紅色のチリ紙の束をさも羞しげに咥えさせられている静子夫人を見た田代は、そのぞっとするぐらいに艶めかしい夫人の姿態に、圧倒された気分になる。

「待っていたよ。さ、さ、こっちへ」

田代は、夫人の色香に吸い上げられるようなフワフワと立上り、夫人の肩に手を廻すようにして、シーツの敷かれた夜具の上へ、歩を進ませるのだった。

この一団のあとから、津村と吉沢がニヤニヤしながら入って来る。廊下の途中で、川田達に引き立てられて行く静子夫人と出会い、これから彼女が、社長や千代達の見守る中で捨太郎の妻になるのだとズベ公に聞かされ、何はさておき見物の仲間に加わりたい、とあとについて来たのであった。

「いいでしょう、社長、僕にも見学さして下さいよ。内輪だけでこういうすばらしいショーを、おっ始めるなんて、ずるいですよ」

津村は、乾笑していった。

「いいでしょう。一人でも見物人が多い方が、捨太郎もこの奥様もハッスルしてくれると思いますよ。とにかく、この二人は、当家の大スターなんですから。観客が少ないとかえって、ご機嫌が悪い」

田代は愉快そうにそんなことをいって、静子夫人を夜具の上へ送り上げた。

静子夫人は、シーツに覆われた夜具の上へあがると、その中央に、蹲くように腰を落し、肉づきのいい艶やかな太腿をびたり

と閉ざして正座し、羞恥を噛みしめた美しい横顔を見せて、観念の臉を閉ざしている。

田代の眼くばせを受けた捨太郎は、そんな静子夫人の横にびったりと寄り添うように坐り、打ち震えている柔軟な白い肩に両手をかけるのだ。静子夫人は、捨太郎に肩を引寄せられると、そのまま吸いこまれるように、捨太郎のがっしりした胸に頬を当て、心持ち顔を上げるようにして、口に咥えさせられていた紙の束を捨太郎へ、甘えかかるように差し向ける。

それを夫人の口から受取った捨太郎は「さて、そろそろ始めっか」といって、舞台の周囲をぎっしり取囲んだ

見物人達を笑わせ、のっそり立上ると、あちこちで、お座敷ショーをやっていた頃の習慣か、部屋の隅に重ねてある座布団を抱え、見物人の一人一人に、ハイ、どうぞ、ハイ、どうぞと配って廻るのである。

「なかなかサービスがいいな」

田代と川田は顔を見合わして笑い合う。毛穴から血でも吹き出そうな屈辱を噛みしめ、夜具の中央に正座して、美しい横顔を見せている静子夫人を千代は、ホクホクした気分で見えていたが、カメラを持って立上った。

これから、捨太郎のゴツゴツした手や肢など、肉も骨もバラバラにされるような責めを受けるであろうと思われる静子夫人の苦しみを、一つ一つ撮影するつもりで千代は、まず、煉獄を前にした、静子夫人の悲惨なばかりの冷静な美しい容貌が気に入る、それをカメラにキヤッチしようとしたのである。

「一寸、奥様、その美しいお顔を上げて下さいましな」

千代は、カメラを静子夫人の正面にかまえて、クスクス笑った。

それに見習って、津村が肩にかけていたカメラを取り、夫人の傍へにじり寄ると、銀子まで、ジーンパンのポケットから、煙草ケース程の小型カメラを取出して、夫人の美しい横顔にレンズを向ける。

「何だ、何時の間にか、静子夫人の撮影会になったじゃないか」

田代は、ウイスキーをガブ飲みしながら楽しそうにいった。

「ね、立膝をして見て」

「片肢を横へ投げ出して、顔をこっちへ向けてみてよ」

千代や銀子達は、これから地獄の責苦に合わねばならぬ静子夫人に対して、色々なポーズを要求する。

静子夫人は、一瞬、その美しい切長の瞳に憤怒の色をキラリと浮かべて、カメラをかまえる連中を敵視したが、すぐにどうにも逃がれようのない自分の運命を思い起したよう、悲しげに眼を閉ざし、彼女のいうポーズをとって見せるのだった。

その時、襖が開いて、鬼源がひょっこり首を出す。

よう、と舞台の周囲を埋めている連中は、一せいに白い歯を見せた。

やはり、こういう所に鬼源の姿が見えないと、何か物足りないと思っていたのだろう。

田代は、鬼源を手招きして

「こういう席上に大先生が立会わぬという法はないぞ。可愛い弟子が美しい花嫁を貰うという夜じゃないか」

へへへ、と鬼源は、卑屈な笑顔を作って、田代に近づき、

「小夜子の調教に一寸手間どりましてね。ところが社長、あの娘は、銀子のいうように、ありや大変な掘出物ですぜ」

といい、田代の耳に口を寄せる。

「へえ、あのご令嬢が……」

田代は、眼をパチパチさせて、鬼源の顔を

見た。

「いろいろと実験してみたんですが、その素質は充分ですね。ただ、経験がすくな過ぎるんでねえ。そこで、他の別嬪方と同じラインに並ばせるために、少し荒療治を加えようと思ふんです」

「ほほう。荒療治ね。一体、どうするんだ」

「チンピラ部屋に一晚漬けるんですよ。連中にまわさせるんです。ちと可哀そうだが、鍛えるにやそいつが一番です。明日、チンピラ部屋から出て来た時にや、あの娘、胆もすわって、きっと見違えるように成長しますよ。それから、も一度、鬼源流の徹底した調教開始というわけでさあ」

鬼源は、そう言って、津村の方をちらと見た。小夜子にとっては、最初の男である津村の了解を一応とるつもりで、

「そういうわけだが、津村さん、貴方の方で異存はないでしょうね」

と、薄ら笑いを浮かべていうのだった。

「きまつてるじゃないか。僕に異存のある筈はないよ。あんた方に、あの娘の調教は一切任した筈だ。一番いいと思う方法で、ビシビシ遠慮なくやってくれたまえ」

津村は、そう言って、煙草を口にし、火を

つけるのだ。

「それを聞いて、こっちも一安心だ」

鬼源は、ふと、襖の外へ向かつて

「おい、一寸、入って来な」

と声をかける。

へい、とチンピラやくざの竹田と堀川が、さ、こっちへ来るんだ、と、きびしく縄がけした小夜子の両肩に手をかけて、部屋の中へ押し立てて来た。

小夜子は、心身共疲労しきったよう、がっくり首を垂れ、そのきらめくような象牙色の縄打たれた肌を、円座を組む卑劣な男達の眼へさらしてしまつたのである。

小夜子の透き通るように白い、華奢な肩先を両方から支えている竹田と堀川は、これから、自分達二人にあてがわれている階下の四畳半に、この美しい令嬢を引き込み、自分達の餌食にすることが出来るという喜びに気が上ずっている。

「手前達、随分と嬉しそうだな」

吉沢が、鼻に小皺を寄せて、チンピラ二人にいうと

「へっへへ、たまにや俺達にだって、面白い思いさして下さいよ、兄貴」

と、いいながら、真新しい麻縄にその上下

をきびしく緊め上げられている小夜子の白桃のように柔かそうな、美しい乳房などを、ちよつと、指で突ついたりし、こたえられないといった風に、喜色一杯、顔面に浮かべているのだ。

「ハハハ、お嬢さん。早速、まわしにかけられるってのは、一寸、可哀そうだが、何しろお前さんは調教が人よりおくれてるんだ。少々荒療治だが、辛抱するんだよ」

田代は、消えいるようにうなだれている小夜子の麗わしい姿を、しげしげ瞷めながらそういつた。ふと、涙にうるむ瞳を上げ、布団の上に身を小さくかがめている静子夫人に気づいた小夜子は

「あつ、せ、先生！」

と、叫び、チンピラ二人に押さえられた白磁の肩を慄わせて、咽び泣く。

小夜子を眼にした静子夫人も激しく動揺を示し、すぐに川田の方をせつばつまった思いで見るのだった。

「——か、川田さん。小夜子さんを、小夜子さんを一体、どうしようというの？」

切長の美しい瞳に涙を一杯に浮かべ、
「や、約束が違います。川田さん、小夜子さんには——」

自分が、観念して、奈落の底へ落ちるかわりに、小夜子や美津子達、そうしたいとけないう乙女達には淫靡残忍な責めを加えないよう約束した筈、と静子夫人は、恨むような、悲しむような、気弱な瞳を川田に向けたのであったが、

「鬼源さんの調教にや俺は一切、口を出さねえことにしているんだ。文句があるなら、鬼源さんにいうことだな」

と、川田は、とぼけた顔つきになって、わざとらしく、そっぽを向く。

静子夫人は、血走った思ひになって、田代よりグラスを手渡され、ウイスキーを飲んでいる鬼源の方へ、泣き濡れた美しい顔を向けるのだった。

「お願いです。小夜子さんが受けねばならぬ責苦を、どうか、この静子へ——」

あとは、言葉にならず、喉をつまらせて鬼源に愁訴する静子夫人であつたが、

「何をとぼけたことをいってやがる」

鬼源は、夫人の傍へ寄ると、邪慳に、どんと夫人のなめらかな背を突き、

「いいか、小夜子は、はっきりと宣誓して、これから、秘密ショーのスターになると決心したんだ。性根をすえて、俺の調教を受ける

といってるんだぜ。だが、経験不足で、まだ身体が固まっちゃいねえ。それで今夜、こいつ等に教育させてみて、肝心の胆の据え方を鍛えさせてやろうというわけさ」

つべこべいうねえ、おめえの出しゃばる幕じゃねえ、と鬼源は、再び、夫人の肩を突き上体をその場へ倒させてしまう。

「な、なんて、ひどい事を——」

静子夫人は、布団のシートに、白い額をすりつけるようにしながら痛哭する。

これから、野卑なチンピラやくざ達のいる部屋へ連れこまれ、想像に絶する拷責に遭う小夜子のことを思うと、夫人は、我が身の置かれてある恐ろしい立場も忘れて、歎き悲しむのであった。

「さ、それじゃ、そろそろ、お前達、小夜子連れて部屋へ行きな。俺は、ここで、捨太郎とこの別嬪さんとの結婚式に立会うことにするからな」

鬼源にそういわれた竹田と堀川は、へいと、田代や川田達に向かって、頭を下げ、いそいそとした面持で、いたましく縛られていた小夜子のきらめくような肩と背に手をそえて、外へ連れ出そうとする。

「——嫌、ああ、嫌、嫌——」

小夜子は、二人のチンピラ達の間で、駄々っ子のようにつむりを振り、地獄部屋に連行されることを拒みつつける。それがまた見物する男達の加虐的な気持を甘くくすぐるらしく、

「往生際が悪いぜ、小夜子」

「たっぷり責めてもらって、めきめき女らしくなつて来な」

と、嘲笑や哄笑を折りまぜて、一座は、どつとわき立つのであった。

襖の外へ、泣きじゃくる小夜子を連れ出そうとした竹田は、傍に投げ出されてあったウイスキーの空瓶に蹴つまずいて、つんのめった。その瞬間、小夜子は、狂ったように激しく身をよじり、あわてて、両肩を押さえこもうとした堀川の手を振りほどいて、

「先、先生！」

と、必死な声を張り上げた小夜子は、後手に縛られた姿のまま、突風のような勢いで静子夫人の傍らへ走ったのである。

「さ、小夜子さん！」

夜具の上に身体を二つ折りにし、小さくすすり上げていた静子夫人は、小夜子の声に反射的に半身を起す。

小夜子は、こらえにこらえていたものが遂

に胸を裂いて溢れ出たよう、わっと号泣し静子夫人の艶やかな肩に顔を埋めて、全身を慄わせるのだった。

静子夫人も、あまりにも悲傷な自分達の運命を嘆くのか、小夜子の哀泣に胸をかき奪られたのか、思わず、小夜子の房々とした柔かい黒髪に顔を埋め、小夜子と共々、声を震わせて泣きじゃくる。

いわば、ショーの舞台として、部屋の中央に敷かれた夜具の上で、互いに顔を相手の肩に埋め合い、縛られた身を寄せ合って、嗚咽しつづける二人の美女を、田代や川田達は、一幅の美しい絵でも眺める心地で、眼を細めて飽かず見入っているのであった。

悲しき決意

「先生、小夜子、小夜子は、これからどうなるの。怖い。怖いわ」

小夜子は、静子夫人の肩を熱い涙で濡らしつつ、咽び泣く。

「小夜子さん。ここは、地獄なのよ。私達、地、地獄へ落ちたのだわ」

静子夫人も、すすり上げ、小夜子の黒髪を頬でいたわるようにしつつ、喉をつまらせて

いうのだ。

血も涙もない鬼源は、ああーと大きくのびをするようにして、二人の美女に近づき、小夜子の華奢な肩のあたりを、ポンポンとたたく。

「いいかげんにしねえか、小夜子。おめえの日舞の先生かお花の先生か知らねえけど、この静子夫人はな、あそこで鼻をほじっている捨太郎という薄馬鹿と今夜、めでたく結婚されたってわけさ」

鬼源は、小夜子の頸に手をかけて、壁を背にして足を投げ出している醜怪な捨太郎の方へ無理に向けさせる。

捨太郎は、自分の舞台の出番をぼんやり待っているつもりで、鼻をほじったり、腹のあたりをゴシゴシ引っ掻いたりしているのだ。

その怪異な捨太郎の容姿を見てぞっとし、眼を伏せた小夜子を鬼源は面白そうに見て、「これから、あの男とお前のお師匠さんは、ご見物衆が取囲む中で、特別のショーを演じて下さるってわけよ。何なら、ちょっとお前にも見物させてやろうか」

そんなことをいった時、あわてて、竹田と堀川がやって来

「それによおびませんよ。こっちはこっち

で楽しませてもらいますからね」

といって「さ、お嬢ちゃん、こっちも楽しく遊ぼうじゃねえか」と、再び、小夜子の肩先へ手をのばそうとする。

「嫌っ、嫌です！」と、小夜子は耳まで覆う房々とした黒髪を振りながら、静子夫人の肩へ美しい顔を隠すように逃げる。すると静子夫人は、後手に縛られた身で、小夜子を背へ庇うようにし、二人のチンピラに凄艶なばかりに美しい容貌をきつと向けるのだった。

「お願いです。私を、私を、小夜子さんの身代りにして下さい」

チンピラ二人は、静子夫人の美貌にふと出足をくじかれた形になって、その場へ棒立ちになったが、鬼源は「馬鹿なこといっちゃ困るぜ」と笑うのだった。

「俺はな。小夜子に磨きをかけるためこの連中に委せるといってるんだ。おめえが小夜子の身代りになったって、何の役にも立つもんか。さ、お嬢さんをこっちへ寄こしな」

しかし、静子夫人は必死の抗議を瞳にこめて、小夜子を背へ庇った姿勢のまま、ジリジリと後ずさりするのだ。

夫人の背に身を隠すようにして、おろおろする小夜子。今にもペソをかきそうな表情を

硬張らせ、鬼源やチンピラ達に対し小夜子を庇う静子夫人。

「昔の弟子を思う気持はよくわかるが、調教の邪魔をすると承知しねえぞ」

鬼源は、いきなり静子夫人の頬をピシヤリと平手打ちし、小夜子の縄尻を引きつかむ。

「ね、一寸待ってよ。鬼源さん」

千代がのっそり立上っていった。

「静子夫人が小夜子さんの身を思う気持、私も傍から見ていて、何だか胸がジーンと熱くなりましたわ。それに、どう考えても、そんな美しいお嬢さんを若い男達が寄ってたかっておもちゃにしようなんて、少し、残酷すぎるわよ」

「ええ？」

鬼源は、拍子抜けがした気分で、手にしていた小夜子の縄尻を離す。小夜子は、再び、静子夫人の傍へ身を落し、夫人の背へ顔をすりつけるようにしてすすりあげるのだった。

「じゃ、千代夫人。小夜子を調教する必要はねえとおっしゃるんですか」

鬼源は自分の仕事にケチをつけられた気分で口をとがらせる。

静子夫人は、逆に、この千代によって、小夜子の危機が救われた思いで、ふと、生気が

よぎり、

「千、千代子さん。恩にきますわ。お願いです。小夜子さんまで、私のようにみじめな女にはさせないで。お、お願いです」

静子夫人にとって千代は、この屋敷に巣くっているどの悪魔より憎く、そして、怖しい鬼女であるに違いない。しかし、今の静子夫人は小夜子をチンピラ達の囂りものにされそうな危機から救うため、憎みてもあまりある千代に対し、哀願をくり返すのであった。

「静子は、もうこんなになっちゃった女。今後、どのような仕打を受けても、千代さんを恨んだり致しませんわ。でも、御生です。小夜子さんのような人を、もうこれ以上いじめないで——」

すすりあげながら哀願する静子夫人の傍に千代は、何か魂胆ありげに身を寄せて

「わかりましたわ。以前、奥様は、お茶や生花で何人かのお弟子をお持ちでしたけど、日本舞踊のお弟子であつたこの小夜子さんをとてても可愛がつておいででしたわね。小夜子さんの名取披露会の時など、まるでご自分のことのようにお喜びでしたわ」

そんな以前のことを千代は、さも楽しそうにペラペラしゃべり始めるのだ。その言葉の

裏に何か千代が悪辣な計略を含めているように感じられ、静子夫人は、身内に、ふと悪寒を走らせて眼を伏せる。

「だからね、奥様、ホホホ、私、こう考えますの。小夜子さんのいいお師匠さんであつた奥様なら、きっと小夜子さんのいい調教師におなりになる筈だとね」

チンピラやくざ達を使つての荒療治を小夜子に加えるより、日本舞踊の師弟関係にあつた静子夫人と小夜子に、秘密ショーにおける師弟関係を結ばせようというのが千代の着想なのであった。

「成程、そりゃいいかも知れねえぜ」

と、鬼源は出歯をむき出して笑い、銀子も朱美も手をたたいて、賛成、賛成、と黄色い声を張りあげた。それは、今、始めて千代がいい出したことではなく、田代や川田達も以前から考へついていたことである。

「つまり、小夜子の身柄は、おめえに預けられてわけだ。そうすりゃ異存はあるめえ」

鬼源は、眼を閉じ、美しい横顔を見せている夫人の頬を指で突つく。

千代は、したり顔で、

「お嫌ならお嫌でも、いいんですよ。鬼源さんのやり方で、小夜子さんの調教を行うだけ

のことですからね。さ、どっちになさいます、奥様」

きびしく後手に縛り上げられた不自由な身で、互いにおののきながら底い合うようにして、息もつまるばかりの屈辱にすすりあげる二人の美女。その周囲を埋め尽すばかりに取囲んだ赤鬼青鬼達は、いわばベテランスターの域に近づいた静子夫人が、ニューフェイスの小夜子に対して調教をほどこすということにたまらないほどの興味を覚えるのだったが、おさまらないのは、つい今しがたまで、小夜子を囂りものに出来るという悦びに、浮き立つような気分になっていた竹田と堀川である。

「そんな無茶な話はないぜ。俺達の身にもなつてくれ。俺達は絶対反対だ。小夜子の調教は俺達に任せてくれ」

と、周囲を取囲む見物人達にわめくようにいい、どっと一座をわかせている。

小夜子は、それにふと眼を向け慄然とし「先生、お願い。小夜子を、あの人達の所へやらないで！」

と、静子夫人の膝の上へ身をすり寄せるようにし、哀訴するのだった。

「——小夜子さん」

静子夫人は、その彫りの深いノーブルな容貌に一杯の愁色を浮かべながらも、ふと、決意したように小夜子の顔を見た。

「あなた、静子と一緒になら、死ぬほど羞しい辛いことでも辛抱して下さる？」

「せ、先生とご一緒なら、私——」

小夜子は、二重瞼の黒い瞳にキラキラ光る涙を浮かべ夫人を見るのだった。

調教という意味の恐ろしさが、まだ、はっきり小夜子にはわかっていない。そう思うと静子夫人は、あまりにも小夜子が不憫に思え

「小夜子さんっ」

と、思わず哀泣しながら、小夜子の黒髪に頬をあてるのだった。

「口じゃいえない羞しいことを、私達しなきゃならないのよ。辛抱してっ、ね、死んだつもりになって辛抱して頂戴！」

野卑で、卑劣なチンピラやくざ達の手で、ズタズタに引裂かれるぐらいなら、自分の手にかかって共に泥沼へ落ちた方が、まだ、小夜子は救われるかも知れない。そう思った静子夫人は、荒々しい悲しみで、烈しく泣きつつ、小夜子に頬ずりするのだった。

それをギラギラする眼で眺めていた千代は「ホホホ、どうやら、相談がまとまったよう

ね」

と口元を歪めつつ、恐ろしげに身を寄せ合う二人の傍へ来て、身をかかめる。

静子夫人は、小夜子をいたわりながら、ニヤニヤしている千代の方へ願いをこめた悲しげな視線を向ける。

「千代子さん。貴女のおっしゃる通り、小夜子さんのお稽古は私が致します」

少女のような含羞を見せて、静子夫人がそういうと、四囲を取巻く見物人達は、どっど手をたたいて囃し立てた。

静子夫人が小夜子の調教を承認したため、横手から食べかけの皿をひったくられた恰好の竹田と堀川は、忿懣やるかたないといった顔つきをして

「頭にきたぜ、全く」と、わめきながら、畳の上を足で蹴り始める。

「まあ、そう怒るな」

と、田代は、手招きして、二人のチンピラを自分の傍へ呼び寄せた。そして、竹田の耳元に口を寄せ

「そのうち、お前達にも調教させてやる。今日のところは辛抱しろ」

と小声で慰め、二人の手にグラスを持たせウイスキーを注いでやるのだ。

美しい肌を寄せ合い、互いの身を底い合うようにして、二人の美女が恐怖と屈辱に打ち震えている光景は、卑劣な見物人の気分を楽しいものにしようだ。

「ねえ、田代社長」

と千代は、田代に近づき、そっと耳打ちする。

「うん、なるほど、そいつは面白い。これから始まるショーの前座試合ということになるわけだな」

田代は、赫ら顔をくずして、大きくうなずくと、鬼源や川田を呼び、

「今、千代夫人から意見が出たんだが、せっかく、こうして美女二人が眼の前に現われたんだ。だから——」

皆まで聞かず、鬼源も川田もうなずいて、「愛弟子を調教する静子夫人。その教えっぷりを前座として、これから演じさせる。そういうわけですね、社長」

川田がいうと、ま、そういうことよ、と千代が、身を寄せ合っている二人の美女に近づいた。千代が近寄る度、二人の美女は、肌に粟粒の生じる思いとなり、一層、身をすり寄せ小さくなってしまふ。

「まあ、お二人とも、お仲のよろしいこと。」

でも、ただそうしているだけじゃ、つまんないでしょう」

千代は、皮肉るような眼差しを夫人と小夜子に向けながら、

「ね、奥様、いくら小夜子さんを調教するとおっしゃっても、口先だけじゃ駄目。だから本当にご苦労なことだと思いますけど、捨太郎さんとのご婚儀の前に、ちょっとこの場で、確約が頂きたいんです」

しねしね首をくねらせるようにしながら、そんなことを得意げになっていう千代である。鬼源、川田、それに銀子、朱美までが乗り出してきて、夜具の中央で、小さく震えている夫人と小夜子の周囲を取囲む。二人の美女は、ぞっとして、再び、互いの肩に顔を埋め合い、全身を硬化させるのだった。

千代は、いよいよ得意げになって、鼻をふくらませる。

「一口に調教といいましても、この道は、奥様が日本舞踊を小夜子嬢にご教授されたようなわけには参らないようですわ。まず、最初に、師弟の関係を通り越した深い関係を結んで頂かねばならない。ね、そうですわね、鬼源さん」

千代は、鬼源の方をチラと見て、含み笑い

をする。

「そういうことだ。全く、千代夫人のいう通りだ」

と、鬼源も千代に調子を合わせて、いやしげにせせら笑い、縮み入るように身をこごめて、すすり泣いている二人の美女の背を、因果を含ませるような調子で、ピチャピチャたたくのだった。

「それじゃ、早速、特別な師弟の誓いを取り交して頂きましょうか。え、お二人さん」

鬼源はそういつて「よ、朱美、調教室へ行って、お道具を持って来な。わかってるだろう」と朱美に命令する。

あいよ、と朱美が部屋の外へ出て行くと、静子夫人は、わっと声をあげて、小夜子の白磁の肩先へ顔をすりつけ号泣するのだった。

「小、小夜子さん。がまんするのよ。がまんして——」

チンピラやくざの手で小夜子を引裂くことは静子夫人の哀願により中止したけれど、その代償として、静子夫人は、小夜子の調教を承認させられ、それと同時に、満座の中で、これより、小夜子と屈辱のいたづりを共に受け止めねばならなくなったのである。すべて、千代の残忍な最初からの計画であったのだ。

ゴリラのような体つきの白痴男に静子夫人を人身御供として差し出すだけではあき足らず、愛弟子である小夜子とも特殊な関係を持たせようという千代の異常な執念深さには、静子夫人のみではなく、実の兄の川田さえ、ふと、少し、気がおかしいのではないかと、小首をかしげさせるものがあつた。

「ね、鬼源さん、私、この美しい静子夫人と小夜子嬢が、こよなく愛し合っているという姿をカメラに収めておきたいのよ。何か、いいポーズをとらせてみて」

千代は、新しいフィルムをカメラに装填しながら、鬼源にいった。

そうだな、鬼源は、ちよっと考えて、銀子を自分の助手にして、身を寄せ合っている夫人と小夜子を一、引離そうとする。

二人の手が両肩に触れると、静子夫人も小夜子も、激しく狼狽し、赤らんだ顔を右へ左へ振り動かすのだった。

「モタモタすんねえ。ちよっと、スティールを撮るだけだ」

大声で鬼源に叱咤された静子夫人は、もうどうともなれ、と観念し切って、鬼源に指示されるまま、シーツの上に尻モチをつき、両肢を前へ投げ出す。

「さ、小夜子は奥様のお膝に乗っかるんだ」
小夜子は、川田と銀子に身体を支えられるようにして、強引に静子夫人の膝の上へ。
「横向きに腰をかけさすんじゃねえ。前向きにして跨がらせるんだ」

なるほど、と川田が、嫌、嫌っと真っ赤になった顔を左右に振る小夜子を抱きかかえるようにして、夫人のぴったり揃えた膝の上へ木馬にでも乗せるような調子で、追いつてしまう。ああ——と、夫人も小夜子も、美しい顔を必死にそらせ合った。

「遠慮せず、もっと前へ寄るんだ」

川田は、小夜子の絹餅のようにふっくらした肩をうしろから突き上げるようにして、前へ押し出す。ちょうど、小夜子の縄に緊め上げられた白桃のような美しい胸が、夫人の花びらのような麗わしい顔の前に——。

「まあ、素敵なポーズね」

千代は、カメラをかまえる。

鬼源は、ニヤニヤ笑いながら手を伸ばす。

「そら、奥さんの方は、お弟子さんにキッスしてやるんだよ」

夫人は、鬼源に後頭部を押されるのをぐっところえようとした。鬼源は小夜子のふくよかな胸に夫人の唇を触れさせようとするので

あった。小夜子は、悪魔たちのさせようとしていることの意味が、ようやくわかりかけてきた。

「い、いやっ、先生」

尊敬し、敬愛して来た静子夫人の唇が、自分の胸に——それは、小夜子にとって強烈な得体の知れない衝動であった。津村に凌辱された時以上に、もっと烈しいものだったかも知れない。

小夜子は、甘い香料の匂いに包まれた夫人の髪に顔を埋めて、声を上げて泣き出した。

「次は左よ。奥さん」

千代は、そんな二人の肢態をぞくぞくした思いで眺めながら、カメラのシャッターを切り続け、色々と注文をつけるのだった。

次に、夫人と小夜子は、鬼源と川田の手で奇妙な形で横臥させられた。

「逆添寝の逆キッスとごさい」

鬼源は、出歯をむき出して、ケツケツケ、と笑う。

静子夫人と小夜子は、最初、頭部と頭部を逆にして触れ合わせ、一本の長い流木のように夜具の上へ横臥させられていたが、鬼源の号令がかかると、川田と銀子は、小夜子の肩と足を持ち上げて、夫人の方へずらせ、二人

の美女の顔を逆の形で合わせさせたのである。二人の美女の唇を逆形にして接吻させようとするのだった。

「なるほど、こりゃ面白いわ。さ、早く接吻してみて」

千代は、カメラを持って、舞台の上をグルグル廻るようにながら、美しい師弟の屈辱場面をレンズにおさめようと懸命である。

鬼源は、魚屋が刺身を作る時のような手馴れた手さばきで、二つの美しい女体を横向きにさせ合い、顔と顔を逆形に密着させると「さ、早くしろ」

と、互いに横に立てている夫人と小夜子の背や尻を平手打ちするのだった。

「——小夜子さん。お願い、静子と一緒に、地獄へ落ちて頂戴！」

静子夫人は、懊悩の極にある小夜子に、あきらめを持たすべく、悲哀をこめていい、そつと紅唇を小夜子の、薄い形のいい唇へ近づけていく。

「せ、先生——小夜子、もう、どうなってもかまわない。先生が一緒なら——」

「——可哀そうな、ああ、可哀そうな小夜子さん」

静子夫人と小夜子は、たまらなくなつて、

シクシク泣き出すのだったが、銀子は、面倒くさそうに舌打する。

「ちよいと、何時まで、メソメソやってんのよ。これから、静子夫人は、毎日、小夜子嬢を調教しなきゃならないのよ。そんな調子じゃ困るじゃないか。さ、早くいわれた通りしてごらん、うんと情熱的にね」

すすり上げ、しゃくり上げていた静子夫人と小夜子は、互いに決心し合ったよう、そつと紅唇と紅唇を触れ合わせたのである。

ヒヤアーと見物人達は手をたたいて、からかい、千代と津村は、待ち受けていたようにパシリ、パシリとカメラのシャッターを切るのだった。

「ホホホ、どう、さかさまになったキッスというのは。万更、悪くもなさそうね。ねえ、もっと情熱をこめて、舌を吸い合ってよ。貴女達は、これから、共通の秘密を持ち合うのよ。シークレット・ラブを完成させるのよ」

銀子は、何かにとり憑かれたような眼つきになって、二人の美女に対し、盛んにまくし立てるのだ。

小夜子を救うただ一つの方法、それは彼女の肉体と心に、これらの悪魔達のいたぶりを苦痛とせず耐え抜ける強靱なものを与えるこ

とであり、それは、悪魔の喜ぶ悪魔的な肉体の持主に小夜子を仕上げること——静子夫人は、苦悩の極で、ふと、そんなことを想い、彼等のいう通り、自分が小夜子に対し、調教するより仕方のないことを悟るのであった。それには、自分がやはりこの地獄の責めを本心から懲慙することの出来る肉体と心に——ああ、果して、そのようなことが——静子夫人は、苦痛と恐怖の入り混る、熱病にうなされたような状態で、そんなことを思うのだった。

静子夫人の花びらのような唇と舌は、小夜子をいたわり、いい聞かせる悲願をこめて、悪魔たちの命令に従っていた。

それは、静子夫人が、この恐しい世界を二人で慰め合い、生きていきましよう、と無言のうちに語りかけ、それに対し、小夜子が、先生と一緒になら、私、どんな苦痛をも忍びます、と返事をしたためたような口吻であった。師と仰いで来た美しい人妻の口吻——それは小夜子にとって、縛られていなかったら、強制されたものでなかったら、恐しいばかりに甘く悩ましく、そして、刺戟的なものであったかも知れない。だが、悲しいことに緊縛の辛さと、鬼どものいやしい眼がある以

上、それは羞辱以外の何ものでもないのである。夫人と小夜子を満足げに眺めていた鬼源は、川田に眼くばせして、再び、小夜子の肩と肢とを少し持ち上げるようにし、夫人に平行させたまま、前方へ移動させる。横に寝かされた小夜子の眼前には、紫のしごきをきびしく上下へ巻きつかせている静子夫人の豊満な二つの乳房が——。また、静子夫人の引き緊った美しい鼻先には、麻縄で緊め上げられた、美しい白桃のような小夜子の乳房が——

「さ、始めてごらん」

銀子は、美しい二つの流木に対して、声をかけ、ニヤリとして千代の顔を見た。千代も口元を歪め、銀子の顔を見る。

「——小夜子さん、許して」

静子夫人は、今まで小夜子の唇にあった紅唇を、覚悟の上の無感情さで小夜子の乳首に……のである。

「あっ」

小夜子は、顔をのけぞらせたが、「何してるんだ。おめえも、お返しをしねえか」

と、鬼源の怒号が小夜子に飛ぶ。

「——ゆ、許して、先生——」

小夜子は、……電流が全身にかけめ

ぐるような衝撃をキリキリこらえながら、血を吐き出すような思いで、鬼源の怒声に従うのだった。

恐しく敏感な女、と津村もズベ公達も、小夜子の感受性の強さには、驚いていたが、今小夜子は人一倍の敏感さを口惜しく思わされた。敬愛し、憧憬して来た静子夫人によって羽毛のように柔かくたしなめられていることを知りながら、全身が、火柱のように……たのである。それは、身悶えしつつ、捨鉢になったような激しさで、夫人の……ところを見ても察しられる。

小夜子は、たまらなくなつて……思わず、強く噛んでしまった。うっと静子夫人は、美しい眉をしかめたが、こらえて、再び、小夜子を優しくたしなめるようにするのだった。千代も津村も銀子も、クスクス笑いながら一せいにカメラのシャッターを切る。

鬼源は、田代の横へ来て、田代に差し出されたウイスキーを恐縮してグラスに受け、グイと一飲みすると、

「さて、次は、皆様、お待ち兼ねのすばらしいキッスを演じさせましょう」

と、道化で周囲に一礼し「今度は、津村さんも千代夫人も一寸手伝って下せえ」といい

ながら、恥辱の火を互いに点じ合っている美しい二つの女体に近づくのだった。

「まあ、そんなことをさせるの。ホホホ」

千代は、鬼源に、小さく耳打ちされると、口を手で押さえ、笑いこける。

「さ、皆んな手を貸して。目方のある方は男が持とうぜ」

鬼源と川田は、静子夫人の柔軟な肩とむっちりした二つの太腿を横抱きし、小夜子の方は、銀子と津村が横抱きして、平行のまま上下へずらし始めるのだった。

小夜子は、夫人の……されたことによって生じた全身をかけめぐる……噛みしめていたが、再び、横にして寝かされた自分の鼻先に、静子夫人の……作つた柔ら……みを見た時、あっと声をあげ、あまりの羞しさと、悪魔達が強制しようとしている次の行為の恐しさに、慄えが止まらなくなった。

自分の恐しさと同じ想いが、静子夫人にも——それを知ると小夜子は、戦慄めいたものが背筋に走り

「嫌っ、嫌ですっ。も、もう許して！」

と、身をくねらせ……眼を外らし、首を振ってわめいたが、鬼源が、

「うるせえっ、あんまり手古ずらせると痛い

目に合わすぜ」

と、どなり、頬をシートにつけたまま、眼を閉じ合わせている静子夫人の頬をつつく。

「おめえも黙っていずに、弟子を少しは叱っちゃどうだ。弟子の調教は、おめえの責任だぜ」

静子夫人は、瞑黙したまま、小夜子に声をかける。

「小夜子さん。この人達がさせようとすることに抗らっちゃいけないわ。静子と一緒に地獄へ落ちるという約束でしょう。ね、お願い静子のする通りに貴女もなさって——」

静子夫人は、一筋の涙を頬に伝わらせて、血を吐く思いで小夜子にいうのだった。

「——地、地獄へ落ちるわ」

小夜子は、返事をかえした途端、胸底からつき上げる強烈な電気を受けた時のような戦慄に首をのけぞらせたが、キリキリ歯を噛みならしつつ、自分が今置かれている、このいようなのない非運に決戦を挑むよう自分自身にいい聞かすのであった。

覚悟したつもりでも、やはり心臓は高鳴りつづけ、全身を揉みぬくような得体の知れぬ羞恥が小夜子の魂を揺すぶり出す。

「——小夜子さん——ねえ、二人は、これで

もう他人じゃなくてよ」

静子夫人は、そう呻くようにいうと、思いきった行動に出たのである。死ぬ想いで叩き込まれたところに、夫人のむっちり脂の乗った、息苦しいばかりに……女臭さを感じさせる太腿は、なよなよと水の中の藻草のように揺れ動いて、鬼源たちの合格点を得ようと必死だった。

千代は、カメラをかまえて、シャッターを切り、この美しい人妻と令嬢との強烈な……の肢態を色々な角度から、フィルムに収めていく。そして、千代は、ふと、二年ばかり前のある光景を思い起していた。

——遠山家の広大な芝生の庭園に面した明るい日本間で、小夜子が名取り披露会のためのお稽古を静子夫人につけてもらっている。

夫人と懇意にしている花柳界、一流地の老妓数人が来て、このお稽古のお囃子を受持ち、夫人と小夜子は、鼓や三味に合わせ、扇子を使って、優美な曲線を描きつつ、ぴった呼吸を合わせて舞っていた。それを千代は、仲間の女中達と廊下の端からのぞき見たのだが藤鼠色の織縮緬に唐織の丸帯しめた静子夫人の博多人形のような美しさと、白地に散り紅葉のお召を着た小夜子の気高いばかりの美し

さに女中達は圧倒され、まぶしげに眼を細めて眺め、声を殺していたのである。千代は、仲間の女中と同じく、二人の美女が胡蝶のように舞いつづけるその華麗な美しさに眼を見はったが、それは、上流社会に生まれ育った気どろというものを静子夫人と小夜子がそうした舞踊で身体表現しているように感じ、千代は、何か不明瞭な嫉妬と羨望の念にかられたものである——。

だが——今、あの時の豪華な着物を着て、楽しげに踊っていた二人の美女は、生まれたままの姿にされ、まるで犬のように——そう思うと、千代は、これがあの時、垣間見た美女と同じ女なのだろうかと思え、たまらないおかしさが胸にこみ上って来るのである。

静子夫人と小夜子は、火のような思いに追込まれ、互いにいたわりの気持を持ちながらも、地獄の底で呻いていた。

「すごいわね。あたい何だか気が変になって来たわ」

桐の箱を小脇に抱えて戻って来た朱美が……：ような肢態をとらされている夫人と小夜子を見て、啞然としてしまう。

「そら、お待ち兼ねのお道具が来たぜ」

鬼源と川田は、ようやく二人を離れさせ、二人の肩に手をかけて、ぐいと上体を起させる。

「さ、少し、急ごうぜ。捨太郎の奴、俺の出番は何時だってな、ふくれ面を始めてやがるからな」

静子夫人と小夜子は、体を離れた途端、互いに顔をそむけ合い、相手の視線を必死に避け合っている。今まで演じさせられた魂も凍りつくような羞恥の行為が、狂おしいばかりの自意識となって、二人の胸にこみ上り、ともに顔が見られないのだ。

「最初から、ややつこしいからませ方は無理よ。時間もかかるしね。やっぱり、スタンドプレイから始めるべきだわ」

銀子が川田達とヒソヒソそんなことを話している。

やがて、川田と吉沢は鬼源の指示を聞き、椅子をつみ重ねて、天井の棧にロープをつなぎ始めた。

二本のロープが、からみ合うようにして、棧から垂れ下がるのを見た千代は、吸っていた煙草を灰皿に捨て、シーツの上で小さくなっている、二つの美しい女体に近づく。

「さ、奥様にお嬢様、お支度が出来ましたわ

よ。お立ち頂きましょうか」

静子夫人は、恐いものでも見るようにそつと眼を開き、すぐ前に垂れ下がっている二本のロープに気づくや、はっと動揺し、端正な美しい頬を再び赤く染め、深く首を落してしまふのである。

これから、鬼源達が強制しようとしていることは、わかっている。何時か、桂子と演じさせられた女同志の行為、あの時の自らを傷

つける底知れぬ苦しさと怖しさを、今度は、自分の弟子であった小夜子と共に味あわねばならないのだ。

静子夫人の困惑と羞恥の色を浮かべた、その美しい横顔を見つめていた千代は、

「さ、奥様。ぐずぐずすると皆様に失礼よ。

お立ちになって下さいましな」

と、夫人のきらめくように白い、柔かい肩に手を優しくかけ、静かに立上らせるのだった。

た。小夜子の方には、銀子と朱美が手を添え立上らせる。

「いよいよスターとしての勉強に入るわけなのよ、小夜子。しっかり先生に教わらなきゃ駄目よ」

銀子と朱美は、桜色に紅潮した小夜子の美しい繊細な頬を指で突きながら、天井より垂れた一本のロープを小夜子の縄尻につなぎ始めるのだった。

この底にあるもの

島内 晋一郎

団氏の三文SM人生論（6月号）化物の話（7月号）は大変愉快な告白談で、私はむしろ『花と蛇』より高く評価申し上げ、氏の含蓄の深い文章に敬意を表せざるを得ません。

素朴で、リアルで、本当の人間の本質とは、まさにこれだと思いました。

私は、読み終る迄たたらニヤニヤし続けました。

『男』も『女』も、理性だの教養だのと、いろいろのことを表面に立てて取り澄していても、煎じつめればケダモノに変わりはないと思うのです。

幾ら高いところから『人間であるぞ』と云ったって、持って生れた『人間の性』ではないですか。人間らしからぬ人間の、何んと世の中には多い事か。殆んどが本質的な醜悪の一面を、ヒタ隠しに隠そうとしているでしょ

う。

法律とか、世間態とか、メンツとか、そして責任や、社会的信用などということに至ると、もうウンザリして投げ出したくなるのです。こんなに束縛の多い世の中では、いくら大声で自由が欲しいと云ったって、どうにもなりそうにないですな。

限られたプロの作品？ や、セミプロの活躍ばかりでは、正直いって、アタマに来ますよ。私だけではありますまい。随分と沢山な「アタマ組」がいらっしゃる事と思う。いくらいろいろな事情があると云え、哀れで情けない事とは思いませんか。

ただ読むだけでは、つまらん事くらい、先刻、みなさん御承知の筈、何んとかしなればね。これじゃあ、余りにも、みじめじゃあ

ないですか。

表面は紳士ぶって、淑女ぶってね、一皮むけば、誰れしも同じだと思つと、おかしくつておかしくつて。

さわあれ、目の前にアナタの為ならと云う異性が、もし、ここで現われたとしても、これ程渴仰している熱望に反して申し訳ないが、とても実行するだけの勇気の持ち合せは無いのです。

いわゆるこの『道』の憲法に違反間違いないからで、要注意人物と自認するからです。もし実行したとすればそれこそ、何をしでかすか、世間態とか、信用や責任なんか、あったものではないからです。危いですよ、私は。だからいつ迄たつても。

——えっ。自惚れるな、お前なんかじゃ、そうで無くても、そんな異性が永久に現われる筈はないつて？——

——そうですか、ガックリ——

このウラハラな気持を『白い山河』に託しましたが、勿論、あれは、あく迄も小説なのでして、小説という便利なミノを被った中で、私は私なりの苦しみをエクスペッションした積りなのですが、情けない事には、やはりリアルな体験を何一つ持たない悲しさの苦しみの方が大きく、只の空想

仮定による模作、夢物語りかと、お叱り頂戴を覚悟しております。せつかくの誌面を愚作で汚し申しわけありませんです。

7月号の辻村プロフェシヨナルの『陶酔の乳房』ではありませんが、世のウズウズしていらつしやる女性達よ。いくらカアちゃん持ちだからって、私みたいな独り者と一緒で、男というものは、みんなケダモノなんですぞ。紳士とか、フェミニストなんてものは、本当の男、いや、人間性ある生き物でないと断言する。

驚くなかれ、女だって大同小異、さして変らないと思う。淑女ぶつたつてダメなんです。どっちも、表面はキツネとタヌキなんですな。中の中は、どうせひとつも変らないのにね。ざっくばらんに、人間以前の人間を改造したくなりますな。

男たちよ、女たちよ、呆れ給うな、怒り給うな。静かに考えて見給え、多かれ少かれ、それぞれアブな精神状態を、生活の上にすらあらわにする事があるじゃないですか。

皆さんもきつとそうであるように、私もそれを表面に、憶せず引出そうとしたいのですが、世の中というものは、何んと四角四面で堅苦しいものなんでしょう。どうにもならない。

既婚だからとか、社会的地位があるからとか、秘密は守りますとか、私には、もう阿呆らしくなりますな。

「化物の話」の中で出てくるように——見合の席上で、僕は女性を縛って責めるのが唯一の趣味です——と堂々と云える世の中が欲しいとつくづく思いますよ。

もうそろそろ結婚でもしなければ、私の心の底にあるものは、どうにも承知しないようです。

結婚。この人生の運命を左右する重大な行事。楽しく生甲斐ある半生となるか、重い責任のみを背負つてわずらわしいだけの半生となるか。ギャンブルですな、まったくのはなし。

——え？ お前と縁のある女性こそ、この世で一番不運で哀れな星の下に生れたヒトだろうつて？——

冗談じゃない。憎くて縛るんじゃないことぐらい理解出来るキツネだって、そんなに少なくはないと思うんだが。

今年も又、春が来て、春は過ぎていきました。

✕

×

✕

×

✕

懸賞入選作品

SFストーリー

地底の国

(後篇)

山口 広



六 牡の性質

一郎は左側に典子を抱いて眠っていた。典子は眠りながら一郎のたくましい体を手をかけていた。大型画面に映った二人の姿を見ながらメリーはリーナと、これまでの試験結果を話しあっていた。

「先生、もう牝の体は調べつくしたようです

から、今度は牡をしらべて見ましょう」

「そうね、リーナ。でも面白いわね。牝を二匹同じ檻に入れておくとギャーギャー争うのに、牡と牝だとあんなに仲よくしてるわね」「でも体の大きさも随分ちがうだけに、することもちがいますわね。牡をしらべればきっとアピのすべてがわかりますわ」

「今迄はアピを捕える機会が少なかったので

捉えたらすぐ生産にかかったので余り知られていないから、きっと大研究になるわね」

一郎と典子の映像を消し、リーナが数本のタイトコイルをつかんで部屋を出た。メリーは机に向って、アピの牝の調査結果を卓上レコーダーに吹込みはじめた。

ギギギギ、一郎の強い力にも少しも動かなかった鉄格子が天井にまき上げられてゆくそ

のきしみに、典子が目を覚ました。そっと一郎の腕から抜けだして起上った典子はいつ入ってきたのか、立っているリーナに尋ねた。「あなたは？　ここは何処？　助けに来てくれたの？」

かけ寄ろうとする典子に、リーナは長いコイルを投げつけた。背にふれたコイルはくねくねと動いて形のよい乳房を一巻きした。

「あっ、あー。一郎さん、助けて」

この腕を巻いたコイルに手をかけた典子はその手までコイルにぎりぎり締めつけられて一郎に助けを求めた。

リーナは一郎に目もくれずに片膝をついた典子の体にもう一本のコイルを投げつけると落着いて、悲鳴をあげる典子の口に幅広のテープをはりつけた。本能的に、身の危険を感じた一郎は、とっさに部屋の隅の板片をつかんで立上った。リーナは一郎に向かってコイルを投げつけた。

リーナの投げたタイトコイルは一郎の体に触れる前に板片で叩き落され、部屋の隅に飛ばされた。はっと驚いて飛び退りながら投げ続けるコイルが、全部目的を達しなかったとき、リーナは飛びついてきた一郎の板片でたたか頭を撲られて倒れた。ばったりと倒れ

たりリーナの体に飛びついた一郎は、ロープで気を失っているリーナの両手を背にねじ上げぐるぐるまきに縛りあげた。太腿にも足にもロープが喰い込んだ。

リーナは緊縛する順を誤ったのだ。全くりーナの自由を奪っておいて、一郎は典子を抱き起した。

「典子さん、大丈夫か。こんな紐が何だ」

一郎の力でも、タイトコイルは典子の肌の一部でもあるように、ぴったりとはりついて少しもはがれなかった。口にはりつけられたテープも同じであった。一郎はひしひしと締めつけられた典子の体を部屋の隅に運んだ。典子の体の下にさきほど一郎が払いのけたコイルがあった。くねくねと動いたコイルは典子のウエストを二巻きした。

「むっ。むむむ」

呻きだけしかあげられない典子の体を横たえて、一郎は坐りこんで考えた。この女が不思議な紐を持って来たのだ。そのときは普通の紐だった。典子の体に触れたとたんに動きだしたのだ。……きつとこの紐に何かの仕掛けがあるんだ。そう気づいて一郎はおそろおそろ一番短いコイルを左手で引き寄せた。と、紐は左手をぎりぎり巻き締めた。もうコイ

ルは手でもぎとることはできなくなった。

「ちきしょう」

つぶやいた一郎は床に散ったコイルを避けてリーナに近づき、そのぐったりした体を抱き上げた。しっとりとうるんだ肌に手をかけるとき、左手に巻きついたコイルの端がリーナの肌にくれた。左手の指をねじるように締めつけていたコイルがだらりと張力を失って落ちた。

一郎は遂に偶然にも解答を得た。典子の傍にリーナの体を運ぶと、典子を締め上げているコイルやテープにリーナの肌をつけて軽く取除いた。

典子は一郎にしっかりと抱きついた。こみ上げる涙に顔がくしゃくしゃに濡れ、一郎の厚い胸をぬらした。一郎はやさしく典子を引離すと、手をとって励ました。

「さあ、典子さん、逃げよう。元気を出すんだよ」

鉄格子をくぐって廊下に出たとき、

「りりるりるれる」

かん高い鈴の音を聞いて、典子を背にかばった。さきほどの女と全くよく似た女が、スプレーと、短い銀色の棒をもって立ちはだかっているのだ。短いスカートのきれいな紫色

である。

「のけっ」

一郎は板片をふり上げた。だが女はひるまなかつた。右手のスプレーを一郎の方に向けた。一郎は全身を火の玉のようにして、飛びかかりさま板片をふり降した。

一瞬、女のスプレーの方が早かった。

「シューッ」

白い霧が全身を覆ったと見ると、板片をふり降した形のまま、一郎の体は固定されてどろりと倒れた。叫びをあげて口を開き、目をつり上げ腕を伸ばしたままの形であった。目を見聞いたまま、鼻の穴もスプレークロスで閉ざされ、呼吸をせかれて一郎の体はみるみる充血してくる。息苦しさにもだえることもできない。しゃがみ込む典子にもようしゃなくスプレーが浴せられる。くるっと背を丸め、両手で胸をだいた胎児のような形で、典子も固定されてしまった。

女はもちろんメリーである。メリーはそれほど急がずに、一郎と典子の鼻のまわりをクロスカッターでひと撫でした。窒息寸前であった二人は息をふきかえし、スプレークロスで締めつけられながらも大きな息をついた。

廊下に転がる二人を振向きもせずメリー

は檻の奥にまだ昏倒し、緊縛されているリーナに近づいた。強靱なロープもクロスカッターのひと触れで融けるように切れ切れになつてしまった。

メリーはリーナの頭を抱き上げると、半ば開いたその唇に静かに口を寄せた。強く息吹きを吹き込まれて目を覚ましたリーナは、忽ち生氣を取戻した。

「リーナ、危なかったわ。私の気づくのが遅かったらとんでもないことになっていたわ」「すみません先生。牡から先に固定すべきでした。良い勉強になりました」

「牡は力が強いだけでなく、このタイトコイルを外したところなど、仲々知能は進んでいるらしいわね」

リーナはすぐに回復して二人を別々の飼育椅子に固定した。さすがにリーナも憎しみを強めた。仰向けに張り伸ばされた一郎の体に、先が五本に別れた長い鞭が振るわれた。

ピシューッ、ピシューッ。

鋭い音と共に、テープで声を封じられた口から呻きが上り、ぐっと体がのけぞる。破れた皮膚から流れる真赤な血が、試験管にとられた。破れた肌に透明な液体が塗られた。焼けつくような痛さに、一郎は脂汗をにじませ

て大きくのけぞり、高い呻きをあげた。

天井の不気味な腕が深いゴムカップを支えて、張り伸ばされた一郎の体の中央に降りてきた。カップが一郎の腹部をこぼりと覆った。カップはどのような働きをするのであるうか。一郎の体は苦しげにうねり、目は閉ざされ、呻きが続いた。

ぐったりとなった一郎の体が起こされ、知能測定器のお椀が頭を覆った。

データを見ながらメリーは愕然とした。ワスピアンがすでに実用化し、無限のエネルギーを取出している核融合を、アピが最も恐ろしい水素爆弾という形で、すでに持っているらしいことである。

「リーナ。アピの征服を急がなければ大変なことになるわ。あのHボムを使えるようになってるわよ」

「大変ですわね。でもアピはまだ私たちに気づいていませんから、海中島を基地にして空歩機でやつつけましょう」

「できるだけ早く研究を完了して、国務長官に話しに行くことね」

七、ユニタール帝国

和子は、幾日も幾日も何もされないで飼育

椅子に固定されたまま、自分の要求に応じて食べ、眠り、排泄する日を送っていた。耳に挿込まれた翻訳器のおかげで自分の声が

「ギャウグガガ……」

という騒音にしかないもので、正常な思考も次第にうすれていった。時間の観念もなくなってしまうている。

「大分肥ったようだね。どうだい、この飼育椅子は良いだろ」

美しいリーナの声に、和子はギャーギャーわめく自分の声が不快なので、黙ってふりむいた。

「ふふふ。お前だって自分の声が不愉快なんだろ。少しおしゃべりさせてやろうか」

リーナは自分が含んで使うのと同じ笛を和子の形のよい小さい唇に押しこんだ。

「さあ、話してごらん。この翻訳器を使えばお前だって私たちワスピアンの言葉が話せるんだから」

和子は恐る恐る口を開いた。口に挿込まれた翻訳器から、もう忘れてしまっていたなつかしい自分の声が流れた。

「あー、あー。どうも有難うございます。あなたは誰ですか。リーナ様、どうか助けて下さい」

リーナは、和子を話しの出来るペットにしようと思ったのだ。

「うまくしゃべるわね。お前は、私の飼っているたった一匹のアピだから大事にしてやるよ。どうだい、私の云うことを聞くのなら、その椅子から放してやってもいいんだよ。どうする？」

和子にとって、この言葉は大きな魅力であった。椅子に固定されたまま、自分が欲することとは云いながら、食べ、眠ることの倦怠と、いつまでも慣れることのできない排泄の羞恥から逃れたかった。

「お願いします、リーナ様。何でもしますから放して下さい」

身をもみながら大声で叫んだ。

「いいわ。何でもするって云ったわね」

リーナの考えは和子にはわからなかった。リーナの命令で飼育椅子がぎりぎりと動きはじめた。リーナはスプレークロスを取上げると、和子の耳と翻訳器をくわえた口のまわりにシューッと一吹きした。クロスカッターで端を出している翻訳器のまわりだけを整形した。

「さあこれでお前は、私たちと同じように話したり聞いたりできるんだよ」

「あ、あ、有難うございます、リーナ様。でも、でもお口が開かないと困ります」

「大丈夫だよ。良い物があるんだから」

仰向けに張り伸ばされた和子の足がじわじわと上に引上げられてゆく。そしてリーナの手が事務的に消毒した。

「いい、いやっ。あ、やめて」

和子の叫びは無視され、冷い液が和子を苦しめ始めた。リーナは、ゆがむ和子の顔を見下してはえんだ。天井の腕が容器を支えて降りてくるのを待ちきれないように、和子の腹の中のはすべて排出された。

「お前が初めてだよ。この飼育チューブを使わしてもらえるのはね」

リーナは和子の苦しげな態を冷然と見ながら、何やら意味の通じない言葉で、傍の台上の物に命令した。盆の上にとぐろを巻いていた二米ほどの黒いチューブが、ぬるぬると蛇のようにうねりながら和子めがけて進み始めた。腹の中をかきまわされる感じに、和子は言葉にならない声を何度もあげた。

「さあ、飼育チューブをつけたから、もうお前は、食べることも出すこともチューブにさせればよくなったんだよ。そうしたいときはあちらの部屋のジョイントにつながれば三十

秒で片がつくわ。ふふふふ」

リーナの処置は終わったらしい。和子の体を起すと、短いタイトコイルを持っておどすように念をおした。やはり一郎にこりて警戒したのだ。

「お前、私の云うことを何でも聞くって云ったね。本当だね」

和子の、開くことの出来なくなった口唇から、すらすらと言葉が出た。

「はい、リーナ様。何でもお云いつけに従いますから、どうか放して下さい」

リーナの手がクロスカッターとタイトコイルを器用に扱った。いつの間にか椅子の背もたれは倒れてしまっている。

「手を後におまわし」

和子は手を縛られるのは嫌であった。しかし想像もできないような道具を使うワスピアの怖ろしさを知っているのだ、のろのろと手首を背に組合せた。それにしっかりとタイトコイルを巻きつけてリーナはつぶやいた。

「お前たちは力も強いし、その上知能も低くないから、こうしておかないと危なくって」

タイトコイルは自由にされた脚の膝の上を二巻きした。

「ここが動かせなくても歩ける筈だね。歩い

てごらん」

長い間固定されていた椅子から立上って、和子はおそるおそる歩きはじめた。膝から下だけの自由しかない脚で、しかも後手に縛られていては不安定であった。若し転んだら一人では仲々起上れないだろう。

「さあ、ついておいで」

さっそうと前を歩くリーナについて歩くのは骨がおれた。膝から下をちょこちょこと小走りに動かし、つき出た尻を大きく振って、安定をとりながらよちよち歩きをする和子はリーナの研究室についたときは、じっとりと汗ばんでいた。

ソファに腰をおろしたリーナは脚を組んで命じた。

「おすわり」

ためらった和子は、そっとリーナの横に腰を下した。とたんにリーナの手が鋭く咎を振った。肩にはげしい痛みを感じ腰を浮かした和子に、語調を荒げたリーナの声がおいがぶせる。

「お前たちアピは床の上だよ。それか飼育椅子しかすわる所はないんだ」

床に正座した和子の眼に、おどおどした色が現れた。

「云っておくがね、お前は自分で何かするとはできないよ。いくら話せるようになっても勝手に話してはいけないよ。私の聞くことだけに答えればいいんだからね」

テーブルの上のピンクの液体を、さも美味しそうにぐっと飲みながら、リーナは飼育されるアピとしての心得を云いきかせた。

ひと休みしたリーナは、和子に一言だけ命令して立上った。

「ついておいで」

膝上を締められたまま床に正座させられ、痺れかかった足をさすることもできず、びんびんとひびく足で、よちよちと和子はリーナの後を追った。

廊下に出ると、捕えられてすぐに積みこまれた車があった。ゆったりした座席にリーナは横すわりになった。和子は不自由な脚で、やっと低いステップを踏んで乗込んだ。今度は座席の前の床に腰を下した。

「ふふふ。一度云えばちゃんとできるなんてお前はお利口だね。私の云いつけが守れるなら、大切に飼ってやるからね」

音もなくすべり出した車はエレベーターに進んだ。和子は体の中の飼育チューブの異物感になやまされ、落着けなかったが、きよ

きよろとあたりを見まわした。

車は青々とした芝生の上を音もなく滑っていく。外に連れ出された和子はもじもじと体をよじりながら、緑の芝生と点在する樹々を眺めた。空はあくまで澄みわたり、小さな太陽がきらきら輝いていた。

和子は最初からとりつけられた翻訳器のおかげで、メリーとリーナは、形こそ人間に似ているが、正体は、何かおそろしい人間以外の生物であることを感じていた。

リーナは久しぶりのドライブに気分がくつろいだのか、色々と和子に尋ねたり話したりして嬉しそうだった。

ここは太平洋のうちでも一番深い、日本海溝の底である。地殻の中にこのような五十軒四方、厚さ五軒ほどの空洞を作ったのは二十万年前のワスピアンであった。まだ人類が出現する前に、高度の文明を誇っていたワスピアンは、現在の人類が、空へ、地球の外へと情熱をもやしているのと逆に、地球の内部へ掘り進んだ。しかし約十万年前に地球をおそった地殻変動と大寒波が、多くの動物や植物と共に殆どワスピアンを絶滅させてしまった。

そのとき、洞穴に入っていた数十人のワス

ピアンだけが、冷凍状態で奇跡的に数万年も生命を永らえた。よみがえった後には体質も変り、この洞穴深く生き続けてきたのだ。地熱と原子力の利用も可能になり、人類よりも遥かに快適な生活を、ひっそりと地底深く送っているワスピアンも生命の神秘だけは解明することができなかった。その特殊な繁殖方法はさまざまな改良を見ながらも、人工生命の域には達しないので人口の増加は極めて遅い。彼等の平均寿命は三百才を超えるのに、出産は極めて少なく、まだこの地底王国の人口は僅かに千人にもならない、和子はリーナの姿や形から、自分と同じ位の年齢かと感じているが、リーナはすでに百才に近く、メリーは百五十才になることを知ったら、どのように驚いたであろうか。

この空気の暖かさは地熱によるものであり、海水利用の冷却装置が働いているのである。空の青さは岩盤を加工したものであり、輝く太陽は小型の原子炉である。

このワスピアンの作る王国、ユニタール帝国はアンナ女王に統率され、二十万年前の繁栄を取戻そうと努力しているのである。ワスピアンの繁殖は寄生的であるので人類や他の動物とちがい、単為生殖であり、雌だけしか

必要ではない。そこで奇妙に感じられるのは女だけで構成される「アマゾンの国」である。

こうした話を断片的に話し続けるリーナの顔に、和子を愛玩動物として見る感情があった。

和子にとっては久しぶりの外気——それは地底のであったが——にふれる快適なドライプの目的地は、海中島であった。人工の空が地面に接したところに大きな洞穴が口を開いていた。車は急斜面を音も立てずに登っていた。強靱な透明プラスチックの扉の前で、ひらりと身をひるがえして降り立ったリーナが、壁に埋めこまれた操作盤を開いて幾つかのスイッチをおした。暗黒であった扉の外がぱっと照らされた。外は静かな深海であった。しかしそこにも斗争があった。口だけのようは無気味な深海魚が、光り輝く触手を持った海老を呑み込んだ。

和子は慄然となりながら、目を覆うべき手を背に緊縛されたまま立ちすくんでいた。海中島が浮上するにつれて、扉の外の様相は深さと共に変化していく。見なれた形の魚の群を見て、さんさんと輝く本物の太陽のもと、海面に浮上した。厚いプラスチックの扉が音

もなく上昇すると、オゾンがたっぷり含まれた空気の中に和子は引出された。いつのまにかリーナは和子の首にはめる首輪を持出して、ピンと止め金をかけた。首輪についた鎖は車につながれている。

遠く水平線に小さな船の形が見える。和子の頭はもう時間の観念もうすれ、捕えられてから何日たつのか、何カ月も経ってしまったのかわからなくなっていたが、こうして人間の住む地上の太陽を仰ぎ、新鮮な空気に触れると、何とかして逃れたいという気持ちが起った。声を封じられ、両手の自由も完全に奪われ、膝から下だけのよちよち歩きの体でどうして逃れられるのか。その上、得体の知れない飼育チューブなどを装着されている体で逃れてどうなるのか。悲しみが湧いてくる。涙をにじませる和子をリーナはせかした。

「さあ行くよ、車におもどり」

下降していく海中島の中で涙をたたえた和子を、リーナは言葉でもてあそんだ。

「何故お前は泣くんのだい。地上に帰りたいんだろ」

「は、はい」

「だめだよ。お前は帰すわけにいかないよ。私の大事なアピだからね」

八、産 卵

研究室に帰ったリーナは、和子を床に跪ずかせて食事をはじめた。何がリーナの食物であるかはわからないが、その美味そうな匂いに和子は急に空腹をおぼえた。

「あの、あのー、リーナ様」

リーナはふりむくと、テーブルの上の短い管をとって和子の肩を軽く打った。内蔵された電池からの高電圧に、和子は全身の筋肉をけいれんさせて倒れた。膝の上を締められているだけに、体を起すのは難しかった。ようやく起き直った和子にきびしいリーナの口調がかぶさる。

「お前は聞かれたことだけ返事すればいいんだよ。自分から話しかけてはいけないって云ったのを、もう忘れたのかい。云いつけが守れなければ、何度でも管をくれるよ、いいかい。ふふふ、で、どうしたんだい。今度だけは聞いてやるよ」

「は、はい、すみません。あのー私もお腹が空いたんです」

スプレークロスで固められた口を解放されることを期待して、和子はおそろおそろ空腹をうったえた。

「ふふふ。なんだそれだけのこと。それじゃ教えとくからね」

リーナが指したのは研究室の片隅の飼育椅子だった。この椅子も腰掛けが縁だけしかない。

「あれに腰かければ、お前の用は足りるんだよ。やってごらん。ふふふ」

どんなことかわからない。だが命令に背くとまたあの電気管がおそい、それ以上に恐ろしい物もあるかも知れない。おびえた目つきでよちよち歩き寄って、尻を大きくつき出すと、やっと椅子に腰を下した。と、同時に、背もたれから出た鋼鉄のワイヤーが、カチンと和子のくびれたウエストを固定した。

腰掛の下の太い黒いチューブが、まるで蛇がかま首をもたげたように、すうーと上方に揺れながら上って来た。その先端が吸盤のような不気味な感触で和子の肌をさぐった。ウエストを締めつけられながらも、和子はおじもじと腰を動かさずには居れなかった。不快感と羞恥心が交錯し、かっ顔に血が昇ってくる。床から伸び上ったチューブの吸盤は、さきほど装置された飼育チューブの端をもとめてはいまわっているらしいのだ。

背中中央に締め上げられた両手をしっか

りにぎりながら、口にくわえた笛からかすかな呻きをあげ、不気味さに身もだえする和子を、リーナは冷やかな目つきで眺めていた。

「あーっ」

ウネウネと探っていたチューブは、やっと飼育チューブの先端をさぐりあてた。ぴったりとチューブの先端と先端が合わさると、急に和子は体の内部が巨大な吸引器にかけられたように感じた。体全体がぐーっと下に曳かれる思いである。

リーナの冷たい声がひびく。

「ふふふ。これで、面倒な排泄がすんだんだよ。今度は完全飼料が注入されるからね」

飼育チューブの働きは、和子にとっては決して爽快なものではなかった。

次には、体内が急に熱さをおぼえた。ふしぎにも、もう和子からはさきほどの空腹感は消え去っていた。注排チューブが飼育チューブにつながってから、一分足らずの短い時間であった。

注排チューブの端が外れると、ウェストを締めつけていたワイヤーの金具がカチッと外れて、膝から下だけのよちよち歩きが自由が帰ってきた。しかしこの飼育チューブを装着されてしまったので、和子から食べる満足感

と排泄の爽快感が奪われてしまったのだ。しかも、人間のような感情はないと思いつつも、ワスピアンに見られながらのチューブ使用は、この上ない羞恥であった。このような身の上にされながらも、和子はひたすらに生き続けたいと願った。これこそ捕えられて直ぐに乳房から注入された自殺防止薬の効果であることには気がつかなかった。

リーナが和子をペットとして取扱っているとき、他の四人は実験動物として緊縛されたまま飼育されていた。

和子は膝上を締められてはいるが、自由に歩きまわられた。しかし、リーナの命令には背けなかった。一度命じられたことが守れなければ、容赦なくあのしなやかな答が罰に与えられた。よちよち歩きの和子には答を避けることは不可能であった。答が肌に触れると、ぎくんと体を貫く電撃に、どうと和子の白い体は倒れてしまう。床の上で悶える和子をねらったリーナの答が三度、四度と体に触れると、和子は意志しないのにぶるぶると震え続けた。次第に和子は答の恐ろしさに強制されて、身も心もワスピアン・リーナの家畜にされていった。後手に締め上げられ、膝上を締めつけられた。裸身も、もう羞恥を起さなく

なっている。飼育チューブのジョイントに連がるときの恥かしさは残っているが、空腹感には勝てない。

膝の上を締めつけられた不自由な体で、後に大きく尻を突き出して、幾分前屈みになって調子を取りながらよちよち歩く姿を、リーナは面白いものを見るように眺めた。それでも和子は屈辱を感じるところか、もっと気に入られようと必死にリーナの機嫌をとった。

アピの性質も、生理も、すべてを知りつくしたメリーは愈々最後の目的に向って急ピッチで研究を進めていった。飼育椅子に固定されたまま、ひたすらに食べて眠ってという生活だけの啓子は、もとの肥満体に一層脂肪をのらせた。メリーとリーナの、感情を無視した冷酷な体質や知能の検査が終わってから何日たったであろうか。もう二人とも啓子の前には姿を現わさなかった。

逃れたいと思う気持すらうすれてきた頃になって、リーナが啓子の飼育室に現われた。また想像もできないほど恐ろしい検査をされるのかと、椅子に固定された体を堅くして、おびえた目つきで、何事かを大声で叫ぶ啓子の体を、リーナの何かを探ぐろうとするよう

な冷い手がなでまわした。その手は、アピの身体形成を解こうとしてか容赦はなかった。啓子の口から悲鳴が上り、呻きが洩れた。リーナは啓子の声に眉をひそめ、スプレークロスをとり上げると、シューッと一吹きして最後に残された発声の自由までも奪ってしまった。

リーナは啓子の髪をつかんで、ぐっと首を前に折り曲げた。

「ぐう、ぐぐぐ」

封じられた口から呻きが洩れる。リーナの手にした小さい注射器が首筋に立てられた。固定された啓子の体はその痛みにくぐと硬直した。一瞬の間に全身の力が抜けてしまった。強力な麻酔薬を頸椎に射ち込まれ首から下の全神経が完全に麻痺してしまったのだ。力の抜けた体を椅子にもたせかける啓子をリーナは楽々と取扱った。タイトコイルを外され、床に転がった啓子の体は、仰向けに手術台の上に横たえられた。

「先生、一番肥った牝の用意ができました」「ごくろうさま、リーナ。それじゃ生産にかかるわ。私だってアピに卵を産みつけるのは初めてだけど、きつとうまくやるわ」

リーナも流石に目を伏せて部屋を出ていっ

た。メリーは紫色のブラジャーも短いスカートも取去った。簡単な衣服であるので、その上から見ても立派な体であったが、身にまとうものが取去られると、ミロのビーナスを思わせる、均勢のとれた体が光り輝くようであった。

メリーはなんのためらいをも見せずに、力なく台上に横たわる啓子に近づいていった。つんと上を向いた啓子の胸許が、メリーの胸の尖った双丘に押しひしがれた。麻痺させられた啓子は人形のように微動すらしない。

「リリリリ」

かん高いメリーの声が部屋中にひびき渡った。

メリーの去った後には、ぶよぶよぐめく鷲鳥の卵ほどの大きな白い卵があった。啓子には何一つとして想像もつかないことであり、仰向けに横たえられ、痺れきった体は、無に等しく何の知覚もなかった。やがてその卵の一部がまるで紐になったようにするすると伸び、その先に眼でもあるかのような正確さで啓子の臍にとりついた。

服装を整え、少しのやつれを見せながらも生気を回復したメリーが、リーナを伴って現れた。

「リーナ、うまくいったようだわ。あとは卵が消化する順序をまちがえないように祈るだけだわ。まあこれだけ肥ってるんだから卵の栄養には充分でしょうよ。あなたも産みつけてみない」

「でも先生」

「恥かしがることはないわよ。私たちは、仲間を殖やさねばならないのよ。いいこと？」

リーナ

「はい。先生、ではこれから排卵ホルモンを服用します。二週間したら産みつけてみますわ。でも初めてですから、うまく産めればいいんですけど」

二人の眼は、その間も注意深く卵に注がれていた。

和子はリーナの命ずることを、心に抵抗なしに何でも行なえるようになりはじめた。リーナに叱られ、罰の電気鞭を与えられることも少なくなってきた。しかし、飼育チューブのジョイントに連がることだけは、たとえリーナが見ていなくても羞恥であり、不快であった。だが、それさえ耐え忍べば生き長らえることができることを覚った。

和子は次第に、リーナの眼の色から機嫌の

好し悪しを読みとれるようになった。

何日経ったであろうか、リーナは和子についてくるように命じた。和子は尻を振りながらメリーの研究室に入った。

「あっ、啓子さん、洋子さん、どうしたの」

和子は一瞬、立ちすくんだ。

啓子も洋子もわずかに瞳だけしか動かせなかった。二人とも和子の口に固定された翻訳器から、「ルルルル……」という音しか聞きとれなかったが、瞳に驚きの色が現れた。

二人ともスプレークロスで口を封じられてるだけで、台の上に何の拘束もなしに横たわっていた。啓子の姿を見たとき、和子の全身に得体の知れない恐怖が走り、鳥肌が立った。

啓子の傍らには西瓜よりも大きなぶよぶよの白い卵が、うねうねとうごめいていた。和子は息をのんだ。その白い卵から、細い触手が伸びて啓子にとりついていてる。啓子の上体は以前に変らずむっちりとした腰まわりは、まるで皮膚がたるんでしまっている。かつては円錐形の見事だった太腿もまるでミイラのように干からびてしまい、皮の下で空しく血管だけが波うっていた。

「まあ、啓、啓子さん、こんな」

無意味な言葉をならべながら後しざりに退る和子の視線は、焼きついたように啓子の体から離れなかった。

「リーナ、あなたのペットはとても驚いてるわね。生産のことを教えなかったのね」

「はい先生、教えてよけいな恐怖心を与えるより、早く肥らせた方が得ですから」

「それじゃ、教えてやって反応を見たらどうかしら。リーナは生産の用意をなさい。私が聞かせてみるわ」

メリーの話は余りにも恐ろしかった。和子は、耳を押えるべき手は背に締上げられ、ただ、うずくまるだけであった。だがメリーの電気管は和子を追いついて部屋の中の椅子に坐らせた。知能測定器のお椀をかぶせられ、反応を記録されながら、メリーに恐ろしい話を聞かされた。和子は、啓子たちのように催眠状態にはされず、啓子の交り合はた姿と、洋子に卵を産みつけるリーナの様子を見せつけられた。

この地底にすむワスピアンが、人間と同じ姿をしているのもそのはず、彼等は、いや彼女たちは卵生の生物であった。しかし産み落

される卵は鷲鳥の卵ほどで、余りにも小さい。しかしその卵は生み落とされると間もなく特殊な吸盤のついた触手を作り、その触手が養分を求めて犠牲にされる生物の体内に侵入する。

「ふふふ。私たちワスピアンが生れるときはね、お前たちアピの体が一番、栄養源に適していることが判ったんだよ。生きたままのね」

いけにえに侵入した触手は、強力な消化液を分泌しながら、脂肪からまず溶かして吸収する。肉も溶かされる。血管と神経だけは溶かされない。こうして栄養源の生命は保ちながら養分を吸収して、卵は次第に生長していく。

栄養にされるいけにえが、痛さのためにもがいて体力を消耗しない為と、もっと大切なのはぶよぶよの卵が安全に保護されるために啓子たちに施されたのと同様に頸椎の麻酔が行なわれる。原始ワスピアンは、その強力な麻酔針を体内に備えていた。

ワスピアン誕生に必要な獲物は、専ら中型哺乳類であった。ワスピアンは敏捷な体で獲物の後から忍びよると、頸筋に馬乗りになる。さながら蜂の針のように一瞬の間に麻

酔がほどこされ、首から下の筋肉をぴくりとも動かせなくなった獲物は地中の穴に運びこまれ、生きながらに卵を産みつけられる。

約一カ月、ワスピアンの卵を養い続けたいけにえの生命の灯が消えると同時に、触手がワスピアンの卵からもげ落ち、殆んど成人したワスピアンの美女が卵から抜け出る。あとには絹の繭のような卵殻と、ミイラのように生氣と要素を強奪されたいけにえの死骸だけが残される。

「私達は卵に食べられてしまうのだワ」

ワスピアンの繁殖方法を聞かされた和子は声も出なかった。わなわなと震える体は、止めようがなかった。一瞬、自分が好きでよく食べた料理が頭の中に走った。鰻のかば焼、お刺身、魚や鶏の丸揚げ、バーベキュー……。

この間にも、緑色の衣服を脱ぎ捨てたリーナが、種族保存の為の苦行に耐えていた。

「う、うーむ」

ワスピアンといえども、産む苦しみを消滅させることは出来ないらしい。

和子は思わず目を閉じた。

「リーナ、お見事だわ。ご苦労さま。初めての生産は疲れるんだから、ゆっくりお休み」

メリーの声に、再び直視した和子は、目を見はるだけであった。

卵がくねくねと触手を伸ばし、哀れないけにえ、洋子に取りつくのを見て、メリーも腰をあげた。

夢見心地の和子は、椅子から解放されても、膝に力が入らず、立ち上れなかった。

「ピチッ」

電気答が慄える和子を追い立てた。

和子は床に横すわりになって、何時間もありリーナが現われるのを待たされた。やつれたかげを残し、リーナがソファに腰を下した。

和子は何度もためらった後、おそろおそろ口を開いた。

「リーナ様、お願いがあります」

「なんだいお前、自分から口をきいてはいけないって云っただろ。——まあいいわ。今日は特別だから。云ってごらん」

体をうごかすのも物憂い感じのリーナが許した。答を振る気も起きなかった様だ。

「リーナ様、お願いです。私には卵を産みつけないで下さい、お願いします」

唇が震えてくる。冷い微笑を浮べたリーナは、やがてすっと立上った。

「何を云ってるんだい、アピのくせに。アピったら四五十年も経てばすぐに干からびてしまふだろ。百年も生きられない下等動物のアピのままで朽ち果てるよりは、私たちワスピアンの卵を育てて、ワスピアンの誕生に役立ててもらおう方が幸福で有難いと思わないかい。お前たちがいろんな生物を料理して食べたり、牛やブタを飼って肥えさせてから殺すのよりもっと大切にしてやってるんだよ」

「でも、でもリーナ様。私は、私は……」

「ピチッ」

電気答が口答えを許さない。どうと床に倒れて、全身を震わせる和子に、何度も非情の答が振るわれた。

九、改 造

日に日に卵は生長していった。アピという絶好の栄養源を得て、その生長は加速度的に速くなったらしい。

「先生、うまく育ちましたわ。きっと先生によく似た可愛い子が産れるでしょうね」

「そうね、リーナ。これで子供を作るのは二度目だけど、嬉しいものね」

「私の方も、うまく消化順序を間違えないようですわ」

「それはそうと、あと残った牝と牡に、そろそろ産みつけてもよさそうね」

「先生、忘れていましたが、あの牝は少し様子が変ですわ。この頃少し食べなくなりまして。そして分泌物も多い様です」

「どうしたんだろうね、リーナ。知能測定器にかけて見たらどう。何かわかるかも知れないわ」

「はい、先生。それで、食べ方が少ないのでいっそ、飼育チューブを装着したらいいと思います。私の牝はチューブのおかげで手がかからず、発育も良いようですから」

「そうしてくれる、リーナ。でも、一人でやれる？」

「はい、おまかせ下さい」

長い間飼育椅子に固定されている典子は、近頃になり体の調子が変わってきた。食物の好みが急に変わり、酔っぱいものを要求した。しかも食物の匂いを嗅いだけで嘔吐しそうになり、何度も胃液まで吐き続けた。体力は衰え、せっかく肥りかかった頬もげっそりと落ちてしまっている。明かに悪疽の症状である。典子自身にもうすうす感じられた。

捕われの身であっても、愛する一郎の子供を宿したことは、苦しいながらも喜びを感じ

た。椅子に固定された体を悶えながら一郎の幻を追い続けた。

私は一郎さんの赤ちゃんを生むんだわ、と思うと、どんな辛いめに会わされても生き続けるわ。と決心を新たにした。

リーナの操作でまた天井から知能測定器が降ってきて、典子の頭を包んだ。昏睡状態になりながら、典子は負けるものか、生き抜いて見せるわ、と何度も自分に云い聞かせた。

リーナの驚きは大きかった。

「先生、たいへんになりました。この牝は自分の卵を腹に持っているそうです。それに、とても強気になっています。絶対に生き抜いて子供を産むって何度も繰り返しています」

「ホウ、アピは自分の体の中で卵を養うんだって？それは初耳だわ。形は私達に似てるけど、まったく変な動物ネ。この牝を長く飼って研究すれば、アピの量産も可能だわ。でもどのくらいかかるのかネ……。へえ、十カ月も……。不便だわね。飼育チューブをつけて生長ホルモンを与えたら、きっと早まるわ」

知能測定器が外されても、典子はうとうとと椅子に固定されているままで眠っていた。リーナが入ってきたのも気がつかなかった。リーナは飼育チューブの準備を始めた。ぐ、

ぐ……椅子のもたれが後に倒れ、脚が上方に持ち上ってくる。その動きで典子は、はっと目覚めた。

「ガ、ギギ、グググ」

「ガーガーわめいて、うるさいわね」

リーナの手のテープが、叫びをあげる典子の口を封じた。

リーナは続いて黒く太い飼育チューブを引出した。何をされるかわからない典子は早く解放してほしいと願いながら呻いた。このチューブは和子が装着されているものよりも太く、また長かった。ジョイントもなく、長く繋がったままである。チューブに印がついてあるところで、リーナは巾広いテープをあてて、ずり抜けないように止めた。

リーナは楽しくてたまらないような表情で動きまわった。啓子や洋子が横たえられているのと同じ手術台のような車のついた台を持ち込んだ。

典子のウエストを締め、四肢を拘束していたタイトコイルにリーナの手がかかると、コイルは張力を失って垂れ下った。リーナの口の翻訳器から美しい声が典子に命じた。

「この台にお乗り、早く」

「ピチッ！」

「むむむむ」

命ずるより早く電気答がおそった。口にはられたテープをもぎとろうとしていた典子は激しい痛みを叫び出した。長い間固定されて、動かないような感じの足を恐る恐る動かし、椅子を離れて台に歩みよる典子の姿は、黒く太い飼育チューブがあるだけに、まるで猿が尻尾をひきずっているようであった。

「仰向けにねるんだよ」

答がぴゅっと空を切った。台の上に横たわった典子を待つように、リーナはタイトコイルを何本も使って要所々々を締め上げた。黒く太いチューブが典子と床を直結している。

「お前は喰べないし、喰べてもすぐ吐き出すんだらう。喰べなくてもすむようにしてやっただけから安心するんだね。お前の腹の中にある卵がどんなにして産れるのか見たいからね」消えていくリーナの後姿に、典子は涙を流し続けた。その涙は、どんなに辱かしめられ、でも、子供の為に強く生きていこうとする決意に変わっていった。

メリーはリーナを呼んだ。ぶ厚い研究デスクを机に並べて検討をはじめた。

「リーナ、もうすぐ第一号が産れるわね。あ

なたの産みつけた第二号も順調に育っているし、まあ成功と云ってもいいわね」

「はい先生、これでアピの生態は殆んどはつきりしましたわ。でもアピの牡と牝はどうしてあんなに違うのでしょうか」

「それはわからないけれど、何かのことでそうなるんだらうね。ともかく牝の方は脂肪がのっけていて、アピのくせに私たちと同じような形をしているけれど、牡は脂肪も少なく、ごつごつしていかに未開動物らしいわ。筋肉が多いのもいいけれど、新生児にはもう少し脂肪の多い方がいいわね」

「どこがちがうのかを自分で知っているんでしょうね。知能測定器にかけてしゃべらせましょうか」

「そうですね。それもお願いするわ」

長い間放置されて無性ひげを長く伸ばしたまま、知能測定器から解放された一郎は、まだ昏睡状態であった。音もなく部屋に入ってきたリーナは小さなガスポンペを一郎に向けた。一郎はその一吹きで昏睡状態のまま、麻酔がかけられた。リーナはこんこんと眠り続ける一郎を飼育椅子から解き手術台に運んだ。

手足を台の上に大きく開いてタイトコイル

で締め上げられ、仰向けに張り伸ばされた体が更に何本ものコイルを使って、身動きができないまでに固定された。リーナは、アピの騒音といつてよいほどの声を封ずるために、テープを一郎の口にはりつけた。ひげも押えられた。

メリーが入ってきたのは、リーナが一郎の消毒も終えて、すべての準備を整えたときであった。

「先生、用意ができましたから、これからとりかかります」

「じゃ頼むわ。これから云うのに眠り続けてるわね、ふふふ。自分で云ったことをやられるんだから、幸福ね、このアピは」

リーナは高周波メスを取上げる前に、わざと覚醒剤のスプレーを一郎の鼻先で吹いた。ぽっかりと目を開いた一郎は口が堅くテープで封じられているのに気づき、全身に力を入れてはね起きようともがいた。しかし肌に喰い込むタイトコイルは弛みさえしなかった。「お前の毛深い肌も、ごつごつした体もなくなるようにするんだから、おとなしくしておいで。すぐすむからね、ふふふ」

リーナは手術台の横に立ち、高周波メスを右手に取上げて、スイッチを入れた。無造作

にメスを近づける。

「むっ、むっ、うーむ」

はげしい呻きと共に、一郎は只一つ残されていた首を振る自由を充分に行使した。全身の筋肉は痛みの為に硬直し、ねっとりした汗がにじみだす。眼をかつと見開いて、一郎は反りかえった。

リーナの手にした高周波メスは、何の抵抗もないように皮を破り、筋肉を切り裂いた。しかし不思議にも血は一滴も流れない。切り開かれた部分はすぐにてらてらと光る瘍痕となってしまう。

リーナは、切り取った部分をビンの中にぽんとほうり込んだ。

痛みがやっとうすれてきて、一郎はリーナのしたことがわかった。呻きに変ってしまうことがわかりながら、テープをはりつけられた口の中では、恨みや憎しみの声をはり上げた。まるでつかみかかるようなすさまじい目つきでメリーとリーナをにらみつけ、こぶしをしっかりとにぎりしめて呻きを洩らした。そんな一郎の様子も、メリーたちには何の同情も、まして恐れを感じなど、いささかも起さなかった。リーナは注射器を取るとぶすりと、一郎の隆々とした腕につっ立てた。高

単位の女性ホルモンである。尚も呻き続ける一郎をふり返りもせずにメリーはリーナを従えてドアから消えた。

期せずして一郎は、典子と同じ形で台上に張り伸され、メリーとリーナの実験対象になってしまったのだ。典子とちがうのは飼育チューブを装着されていないところであった。しかし、手術された一郎の姿は奇妙でもあり、見かたによっては、典子の体より美しかった。一郎にとってはこの上もない辱かしめであったが、メリーとリーナは何も感じなかった。

放置された一郎は首を動かせるだけ曲げて自分の体を見ようとした。しかし自分の失ったものはわかったが、そこがどうなっているかは見えなかった。

餌を一郎に与えることには不便はなかったが、排泄に手がかかることに気づいたリーナは、間もなく一郎をもとの飼育椅子に固定し直した。麻酔から覚めて自分の姿を見た一郎は、声を封じられたまま泣き呻いた。そうなのでも尚、生き続けたいという気持は強く、定期的に与えられる餌をむさぼり、自動的に天井から降りてくる容器に排泄した。容器の形が筒形のものから朝顔形のものに変えられ

たのも大きな屈辱であった。

一郎には女性ホルモン、典子には生長ホルモンが毎日注射された。その高単位ホルモンの作用は効果があった。リーナは毎日の体重測定や体の変化を刻明に記録した。その報告を見るメリーも喜びがあった。アピの改良は可能なのである。

啓子と洋子に産みつけられた卵の發育は順調だった。啓子に産みつけられたメリーの卵はもう小さい豚ほどに肥っていた。啓子は異常に気づいた。痛くも苦しくもない自分の体が、無気味なぶよぶよとうごめく卵を養っていることに気づいた頃には、もう麻酔が覚めても動かすべき筋肉はなかった。卵は見る見るうちに大きくなっていく。テープにふさがれた呻き声すらも、急に弱まってきたことを自分でも感じた。

時間をはかったかのようにメリーとリーナが現れたとき、卵の触手が心臓をおそった。血液を吸収したとき、啓子の意識は遠くなっていた。と同時にいままで真白であった卵の中身が紅に色づいてきた。

生長に必要な養分を吸収しつくした触手は使命を終えて卵からもげ落ちた。卵はぶよぶ

よとした動きを止めてじっと静止した。

「リーナ。生れたわ、うまく育ったわ」

「先生、良かったです。おめでとうございます」

ぶよぶよの卵は二度三度、激しく動くと、上部にすーっと裂け目が出来た。と、まるでメリーにそっくりの金髪の女の顔が現われた。胸を抱くような形でちぢこもっていた手が、まゆのような柔かい卵の殻をかきわけて伸ばされた。ぴよんと台の下に飛び降りた姿は、丁度少女期の終りに近づいた白人の少女の姿そのままであった。胸のふくらみもういういしく、きれいなあどけない青く澄んだ瞳も涼しい少女であった。生れながらに言葉が自由であるらしい。

隣の台に乗せられている洋子は、恐ろしさに目を見張っていたが、それでも新らしく生れた少女を美しいと感じた。すでに洋子に寄生している卵も、もう西瓜よりは大きくなり、見ようとしなくても、その無気味な動きは、視界の中にあった。

「恐ろしい、助けて。私は死にたくない」

そう思うだけで、体は動かさず、卵の生長ぶりを見守るだけであった。

メリーは産れたばかりの少女に何事かを話

しかけ、少女もそれに答えて立去った。

「りり、るりれるり」

「るるり、れるりり」

リーナは少女が脱ぎ捨てた卵の殻を、古新聞でも扱うように屑箱に投入した。後には新生ワスピアの餌食となった啓子の哀れな骸があった。リーナは、つと手を伸して口を封じていたタイトテープをはがすと、小さな手押車の上に啓子を乗せて運び去った。

洋子には、もう流すべき涙も涸れはててしまっている。それでも声を封じられたまま泣き続けた。

台上に固定されたまま、飼育チューブを装着されて妊娠状態を観察されている典子は、適切な栄養の補給と、それ以上に、強度の生長ホルモンによって順調に経過していった。生長の速さは自然のときに較べれば十倍も早かった。

一日ごとにお腹も大きくなってくる。自分でもその膨大が見えてくる。典子はもう腹式呼吸ができない。肩で息をつきはじめた。

毎日リーナは様子を見にくる度に、典子の体の変化を測り、データーを取ってゆく。

今日もリーナが乳首の変化を調べていると

き、その先からぼちちりとうす白い液がふき出した。リーナは興味をおぼえて、試験管に集めようとした。だが余りにも少ししか出ないのに業を煮やして、遂に真空吸入器がかぶせられた。

白い液が試験管に集められる。リーナはラベルをはりつけて研究室に運ぶ。

典子は自分のおかれている様子がうすうすわかってきた。しかし次第に膨大していく腹部と、びくびくと胎内でうごめく新しい息吹きを感じとり、どんな扱いをうけても生き長らえて子供を育てたいと願う気持は強くなっていった。不処置と母性本能がその気持を強めている。

痛みを伴うほど激しく動く胎児の動きも、苦痛とは感じない。テープをはりつけられた口から洩れる呻きも、苦痛からではなかった。

飼育チューブで注入される栄養とホルモンのため、自然の妊娠状態が早められ、僅か二カ月ばかりで出産直前の様相を呈している。順調な飼育チューブの働きで、生理的代謝は理想的に行われている。そのため典子の体は、腹部の膨大以外は何のおとろえも見せていなかった。

一郎は長い間、飼育椅子に固定され続けていた。耐え難かった屈辱にも次第に慣れていった。

ごつごつと肩の張った体に、急速に脂肪がのり、腰まわりにむっちり肉がつきはじめた。胸許が膨らみ、乳首さえ大きくなってきた。顎に生えていた長い不精ひげもいつのまにか抜け落ち、顎の下に肉がつき、二重顎のひだが出来ると共に頬にふくらみがついた。男性的だった胸毛も、こわい怪の毛と共に脱け落ちてしまった。そんな変貌にも一郎自身は余り気づいていない。

こうして一郎は無理やりに体質を改造され

て、ワスピアンの子供の生長に好都合な「アピの牝」に仕立てられていった。

典子が丸々と肥った女の子を産んだとき、一郎の体は完全に女になってしまった。すでにそのとき、洋子に寄生していた卵から新しいワスピアンが生れていた。

和子はリーナに従って研究室の奥の標本室に入った。天井のフックに髪の毛で吊り下げられた啓子と洋子が立っていた。

「まッ。け、啓子さん」

リーナに禁じられてはいたが、驚きのあまり、和子は声をあげた。二人？は、わずかに揺れたようだった。

リーナはすかさず答をふるった。

「話しても無駄よ。これは卵を育てた抜けがらなんだからね。ふふふ」

リーナは、卵に喰いつくされた啓子たちの体を、資料として残すために生前のおもかげに復元したのだ。

「お前たち、アピの性質はこれで全部調べつくしたわ。お前の仲間のおかげでこれから我々の人口を大量生産にかかることができるようになったのよ。ふふふ」

和子は答えるべき言葉が出せなかった。

「おまけに、アピの繁殖方法も実験できたから、もうあとはお前たちを出来るだけ、一匹でも多く捕まえるだけだよ。ほほほほ」

研究室に帰ったリーナは、和子を手術台の上に追いあげた。拒みながらも電気笞で追われ、遂に台の上に固定された。

「さあ、今度はお前がアピの子を産むんだ。

肥った子を育てるんだよ」

リーナの手には注射器があった。

和子は注射に身もだえしながらも、ワスピアンを産みつけられることを免がれたという喜びを感じていた。

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。

○本誌愛読者の方でしたら、年齢、遠近は問いませんが、分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。

○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

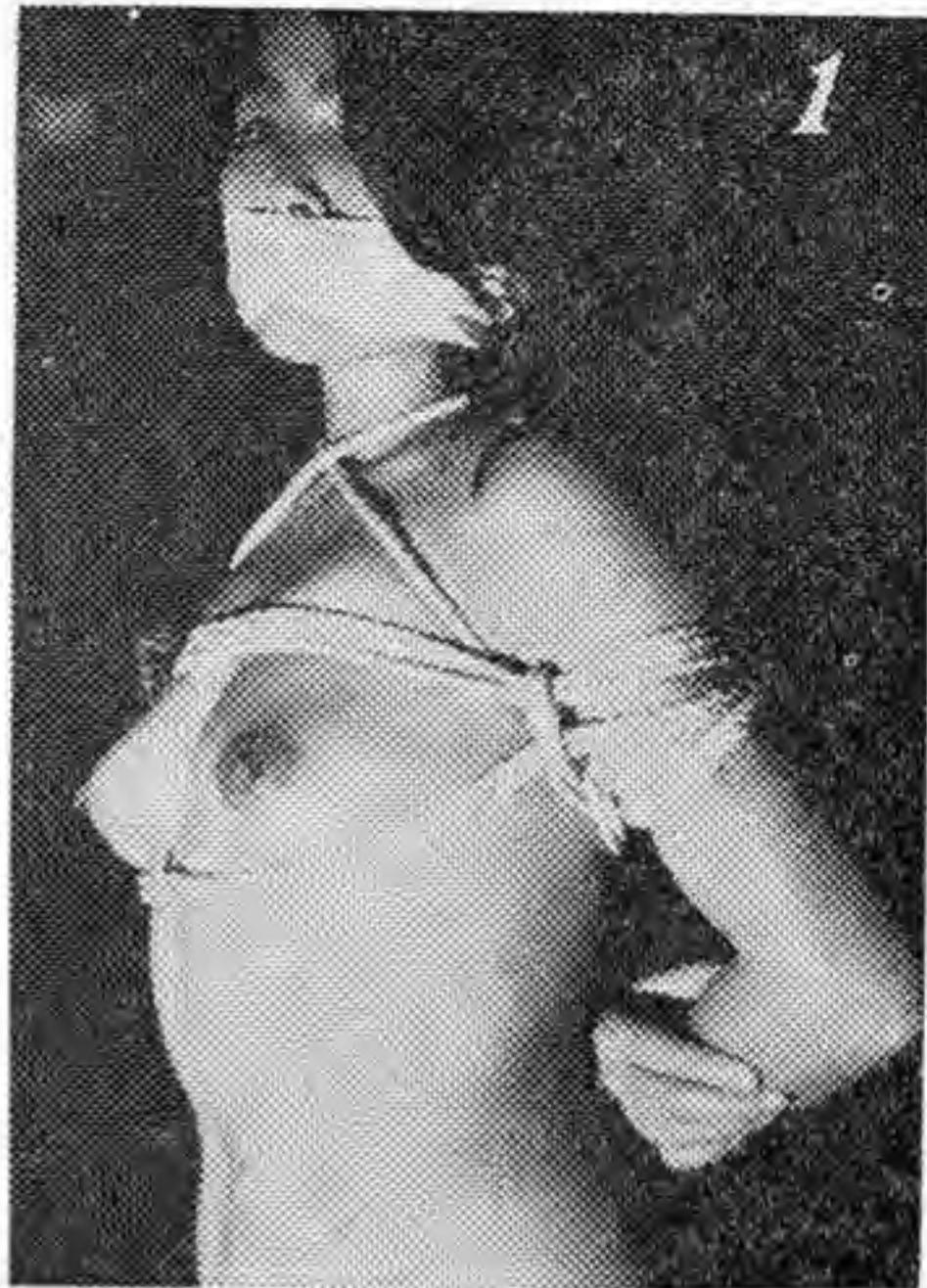
○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇々編集部△

カメラ・ルポ

／＼左近麻里子の巻＼

この女^{ひと}と

山本一章

左近麻里子——私はこの素晴らしい女性に魅了された。私の独占慾はこのルポに彼女を登場させることさえもためらうようだ。しかし私は敢て彼女を誌上に送り出すことにした。第二の川端嬢或いはそれ以上の可能性を秘めていると思われる、その美しい肢体を埋もれさせることは余りにも惜しいからである。前奏曲はそれ位にして本文に入ろう。

○

まだ五月だというのにむし暑い日だった。上衣と鞆を網棚に抛り上げた私は、ひかり号の窓際の席に腰を降ろして読書を始めた。夜の九時過ぎには大阪に着く筈である。読書といってもそれは奇クの新刊号、幸い左隣りの席が空いたままなのでこの読書には好都合である。目次裏を見ると川越美佐子の分譲品広告が早速載っている。彼女との三回目のデートの日急用ができて行けず、多忙な箕田氏に

無理に行って貰ったのだが、説明文を見てみると相当強烈なのをものされたようである。彼女もまた箕田氏の包容力に押し切られて、彼の縄をまとったのであろう。ちよつと妬けてくるような気分である。次いで「サロン楽我記」——この先輩の書かれるものには全く兜を脱ぐ思いである。私は奇クの歴史は辻村隆氏と不可分であると確信している。列車は音もなく横浜を通過した。その時車掌が私の

横に立ち止った。そしてその後から来た女性が私の隣りの席に腰を降ろす。

「これからは指定券を買うようにして下さいよ」

車掌はぶっきら棒に云うと細長い切符を彼女に渡して立ち去った。私はそっと横目で隣人を確める。若い女性である。私はちょっと当惑する。若い女の傍でこの雑誌を拡げるには余りにも私はスタイリストである。膝の上の雑誌を横に滑らして窓の下と膝との間に落とす。自分ながら若いと思いつつも、私だけの世界を邪魔されたのが癪だった。煙草に火を点けて煙を吐く。ひと眠りするには読書への誘惑が強過ぎるようである。ちらっと見た辻村氏の「ショウこそわが命」と題された秋山夫妻との対談を読みたくてうずうずする。隣りの女性が週刊誌を拡げるのを待って落した奇クを拾い上げて頁をめくり、雑誌をまるめて読むことにする。苦しいことである。

「あのう、失礼ですが……」

突然声を掛けられた私は慌てて雑誌を右膝の横へ滑らして左を向く。

「すみません」

「何ですか？」

私の剣幕に、彼女は顔を赤らめて下を向いた。美しい人である。しかし、この場合私としては少々腹を立てていた。

「何か……」

「あのう、その雑誌新刊でしょうか？」

一瞬私の顔へ血が上る。しかし年令が私を助けたようである。胸をときどきさせながらも私は何気ない風で答えた。

「このこと？」

「ええ」

「よかったですらどうぞ。まだ店には出てないと思います」

まるめたままの雑誌を差し出したが彼女は受取らず小さい声で言った。

「ちょっと勇気がありませんわ」

私は微笑していた。この若い女性が奇クを知っているとは頼もしい限りではないか。それにしても偶然時々作為以上の作為を生み出すようである。列車の中で隣りに坐った美しい女性が奇クのファンだったなんて、卒直に云って安っぽいストーリーリイのようである。しかし事実逆うことはない。私は、この千載一遇のチャンスを見逃す程純情(?)ではなかった。

「いつ頃から読んでの？」

単刀直入の質問である。

「一年ぐらいいかしら。おたくは雑誌の関係の方ですか？」

「別に関係者っていうんじゃないんですが」

「古くから読んでいらっしゃるの？」

「もう十二三年にはなるでしょうかね。雑誌の中で、どんなのが好き？」

「まだよくわかりませんわ」

「じゃ、よく読むのは？」

「辻村さんのと山本さんのとですわ。写真が載ってるでしょう、カメラなんとかって」

私の自尊心がほくそ笑む。それから二人はとめどなく話し合ったのだが、詳しいことは省略しよう。彼女が二十四才の独身、化粧品関係の仕事をしているということと、一度モデルになってみたいと思っているが、恐ろしい気がして応募していないという結論だけを記して置こう。私にとって新幹線のスピードは早過ぎた感じである。列車が政治駅を駆け抜けた頃を見計って私は彼女をビュッフェにさそった。窓に向いて並んで坐った私達はコーヒーとサンドイッチを注文する。もう私の野心(?)を告げなくてはならない。彼女は京都で降りるのだから。

「また会ってくれる？」

「……………」

「写真を撮らして欲しいな」

「厚かましい方ね。わ

たし、あなたのこと何

も知りませんのよ」

「僕、山本一章です」

「あっ！」

彼女は一瞬顔色を変

えたようであった。私は沈黙したまま彼女の反応を待つ。ずるいやり方である。

「びっくりしたわ。今まで黙ってるなんて、ひどい人ね。じゃ今まで何人も写真を撮ったんでしょ？」

「辻村さん程じゃないけど、少しはね。貴女も撮らしてくれる？」

「そうね……」

私は彼女の表情が万更でもないのを読み取って押せ押せで行くことにした。

「僕は午後が都合いいな。夜は駄目。いつ頃がいい？」

彼女はコーヒースタマをすすりながら、真面目な顔で思案している様子だった。

「変なことはなさらないんでしょうね？」

「信用できない？」



「そういうわけじゃないん

ですけど……何だかこわい

みたい。それに恥しいわ。

わたし本当にくぐられたこ

とはないの」

「いやだって云うことはし

ないからいいでしょう。信

用して欲しいなあ」

彼女はちょっと首をすくめて微笑した。私は彼女のその態度を承諾と解釈した。

「じゃ一度電話でも連絡するからそれまでに考えて置いて下さいよ。あんたから電話してくれる？ それとも僕の方からしょうか」

私は手帳の紙を一枚破って鉛筆と一緒に彼女の前に置く。彼女はしばらくためらっていたが、思い切ったようにその白紙に数字と名前を書き入れた。その紙片を名刺入れに納めた私は、彼女の手を軽く握って囁いた。

「きつと電話するからね」

京都駅で彼女は降りた。窓の外から手を振っている彼女は素晴らしく美しかった。

これが左近麻里子さんとの最初の出会いである。黒のワンピースの良く似合う、色白の

麗人であった。

○

六月上旬の一日、私は大阪駅の中央出口前で左近麻里子さんを待っていた。三回目の電話で強引に引張り出した形である。とに角彼女は再会と同時に私の縄をまとうことを承諾してはくれた。しかし正直なところ、果して本当に大阪まで来てくれるかどうか自信がなかった。彼女が人並以上に美しい女性であるだけに、被縛のモデルの実感と繋がりにくかったせいであろうか。私は恋人を待つような気持で、構内の時計と出口とを交互ににらみながら立ち続けた。

午後一時五分、中央出口に、人が溢れ出した。快速電車が着いたらしい。左近麻里子さんはまぎれもなくその人波の中にいた。私は思わず近づいて手を振った。ちらっと私を見た左近さんは、微笑しながら顔を伏せ気味にして私の方に近づく。白いレースのブラウスと紺のスカートが彼女を最初の時よりも若々しく見せて面映い感じである。案外背が高く清潔感に溢れている。

「よく来てくれましたね。この間は失礼」

「お待ちになった？」

「いいや、つい今来たところですよ」

本当は三十分近く待っていたのだが、この

際、とっさにいい恰好をしてみせたのは私の若さであろうか。

「今日構わない？」

「いやだって云っても、なさるつもりでしょう？ わたしも来たんですから……」

それ以上彼女に云わせるのは騎士道（？）に反するであろう。私は左近さんを車に乗せると、煩雑な梅田界限を走り抜けた。

一戸建ちの瀟洒な部屋に落着いた私達は、互いに顔を見合わして笑ってしまった。

「強引な方ね。ここまで来てしまったら、もう断れないわね」

「断ってもいいよ。しかし、そんなに僕は強引かな？」

「暴君って意味じゃないのよ。じわじわと真綿で首を締めるみたいに断われなくしてしまふんだから」

「そんなの嫌い？」

「嫌いだったら来てないわ」

どうやら一本取られたようである。彼女を浴室へ行かせてから準備にかかる。いつものことだが、この一刻は私にとって何ものにも替え難い期待の感動を呼ぶ。同じモデルの場合であっても同様であるが、未知の人の場合は尚更である。準備を済ませた私はお茶を飲

んで気分を落着かせようとするが、どうも浮足立つ思いである。彼女が美しい人であるだけに落着けと云う方が無理かもしれない。前に大塚啓子さんを撮った時とよく似た気分であった。浴衣を着た左近さんは鏡台の前に坐って髪を解いた。

「化粧はどうしましょう？」

「別にどうでもいいよ」

私は少し焦っていた。早く彼女の体を確めたい気持である。

「裸になるんでしょう？」

「そうお願いできたからね」

「わたし山本さんのを読んだから覚悟はして来たんだけど……。ちょっと恥かしいわ」

「いいからいいから。じゃ最初は縄を使わずに撮ってみよう」

バックを黒で落した写真を撮りたいので、畳の間と控えの

洋間を区切っている真紅のカーテンの前へ左近さんを立たせる。ストロボはカメラから離してテーブルに固定する。

「さあ脱いで！」

彼女は両手で顔を蓋うと肩を振っていやいやをする。世話のかかる人だが、それが未経験者らしいところであろう。私はカメラを置くと彼女の傍に近づき、帯を解いて肩から浴衣を剥ぐ。左近さんは一瞬ピクッと体を震わしたが逆いはしなかった。しかも彼女、浴衣の下には何も着けていなかった。まともに見



るのがまぶしい気がしてカメラを構え、ファインダーを覗く。素晴らしい。全く素晴らしい女体がレンズを通して私の目の中に飛び込んで来た。乳房の膨み、ウエストのくびれ、腹部の曲線、すべてが完璧と云えるだろう。それにしみ一つないような肌は全く白くて、思わず私は歓声を挙げた。

「いいよ。すごい」

私は、真紅のカーテンをバックに浮き出た美事な裸身を撮り続けた。その表情や体の線に固さのあるのにも構わなかった。一本のフィルムはまたたく間に、左近さんのヌードで

埋められてしまった。急いで入れ替える。その時である。今まで黙っていた彼女が、口を開いた。

「縛って下さらないの？ 何だかこのままで立っている方が辛いわ」

噫々である。私としたことが彼女に催促されるとは。急いでバッグから縄を引摺り出す。今日は縄を充分に用意してあるのだ。私専用の白いロープと、箕田氏から貰った縞模様の柔らかいのとを全部持って来ているのである。先ず私専用のを使うことにする。彼女の両腕を後に廻わさせ、手首を合わせて縛った



た縄を肩からたすき掛けにして腋に振り分ける。乳房の上下と二の腕に縄を巻いてから腋のところを絞る。最初なので少し弛かったようである。はっきり顔の出たのは雑誌に出さないで欲しいという彼女の強い希望なので、彼女の美貌をずばり紹介できないのが甚だ不本意だが、その縛りで猿轡をさせたのが写真(1)である。光線を少し下から当

てたため顔が暗くなったが、美しい体の線は見えていただけだと思う。その姿勢で前後左右に体の向きを変えさせて写したのだが、枚数と内容に制約を受けている現在、その美しい全貌をお見せできないのが残念である。余談になるが、現今の情勢下では一ポーズ一枚主義で少しでも多くのポーズを見ていただくと思っている。一ポーズの連続したものへの希望が強いようなら方針を変えてもいいと考えてはいるが――。

縄を掛け猿轡をしたせいか、左近さんは全く沈黙してしまった。しかしその瞳は妙にいきいき出したようである。写真でもそれがわかっていただけだと思う。体の向きを変えるため近づいてその肌に触れると、その白くて滑らかな皮膚はじつとりと汗ばんでいるようである。湯上りのむれた臭いが私を強く刺激する。

「一度解こうか？」

左近さんは返事をしない。開いた目は何か愁いを含んだようである。私は最初のことでもあるので、一旦縄を解くことにした。猿轡を外し胸の縄を解く。その時、再び左近さんが口を開いた。

「しばらく手はそのままにして置いて」

「じゃ顔は括るよ」

後手首の縄はそのままにして、猿轡に使った包帯で両眼の上をぐるぐる巻き口にも噛ます。私好みのやり方である。私の写真には目かくしが多過ぎるという声があるようだが、一つには私の趣味であり、一つには誌上に晒される女性の迷惑を慮っての配慮である。しかし今後は出来るだけ美貌そのものの見られるフोटも入れて行くつもりなので、御了解いただきたいと思う。さて顔面を縛った左近さんをその場に坐らせる。彼女の希望でもあるのでそのまましばらく放置することにした。顔を縛ってあることは観賞側にも都合がよいし、彼女自身も体と心で束縛感を味うのだから悪いことはあるまいと勝手な解釈をする。その時の写真(2)である。写真を撮ってから私は横着をきめ込んで、坐っている女体の前に体を横たえる。この人の乳房はともいい。ボリュームも相当なものだし、線も崩れていない。五分、十分と時間が経つが、左近さんは呻き声も出さず坐ったままである。奇ク誌の読者というのだから、恐らく独身の彼女は、誌上に想像の夢を働かせて悶々の夜を過ごして来たのであろう。そして現実になった夢を、じっくりとその肌で味わっ

ているのに違いない。私は彼女が想像的なマゾヒストというだけではなくて、現実の束縛にも耐え得るマゾ性の持主だと判断した。そうだとすれば容赦することはないのだ。また飼育を待っている女体に違いない。

「どんな気持だった？」

顔の束縛を解いて尋ねる。

「何だかわからないわ。でも悪い気分じゃないわ」

彼女の瞳は陶酔を物語っている。

「じゃ今度は少しきつく縛ってみるよ」

彼女は黙って肯ずく。私は箕田氏から貰った模様のある縄を使うことにした。それは凄く柔らかい感じだが弾力性がある。

「よく締るような気もする。」

左近さんを立たせるとその縄を使っ

面した窓を開けてみる。そこは余り広くはないが庭になっていて、向う側と両側が塀に区切られている。小さいながらも寛から水が落ち樹も植っている。四囲を見廻わしても覗かれる心配はないようである。私は左近さんとその室外に追いやることにした。私にとって初めての野外撮影である。彼女の後に廻ると両肩を押す。

「外へ出るの？」

「大丈夫だから」

それ以上彼女は逆わずに低い窓から外へ出た。正に引廻わしである。寛の傍の石の上に坐らせて撮ったのが写真(3)である。その



縛り方をくわしく書かなかったが写真で見て貰った方が早いだろう。写真(4)は位置を変えて撮ったものだ。この二枚ではよくわからないと思われるが、縦縄の掛っていることを記して置く。またわざと顔を自由に置いていたので彼女の美貌の一端が見えていただけだと思う。自然光の下で彼女の裸身ははっとする程美しく、ファイnderを覗きながら私は思わず何度か唸っていた。この二葉の写真が印刷されて果してどれ程鮮明に出るか疑問であるが。何度も場所を変え、立たせたり坐らせたり、最後は芝生の上に寝かせたりしたのだが、彼女は終始沈黙を守った。腕が痺れているのがその変色でわかってはいたが、私はわざと無視して引張り廻わした。その写真の多くは箕田氏に提供したので分譲品で見ていただくしかない。

素足のまま庭を歩かせたので彼女の足はすっかり汚れてしまった。私は縄を解かずにその足の裏を片足ずつタオルで拭いてやる。拭いながら私の心は妙に感動していた。マゾ的感動に通じるものがあるのであろうか。それともそれはサド的感動なのであろうか。足を拭ってから部屋へ入れる。

「すぐく締ってるわ」

「もう解いて欲しい？」

「……………」

「まだ辛抱できる？」

「構わないわ。でも何だか妙な気持」

左近さんは矢張りマゾ性を強く持った女であつた。そのまま部屋の中に坐らせ、投げ出された膝の上に私は頭を載せて横になった。いい気分である。目の前に豊かな乳房が息づいている。

「重い？」

「いいわよ。でもこんなにきっちりくられたら、どんなことをされても無抵抗ね」

「いじめてあげようか？」

「いじめるって？」

「まあ止しとこう。君も疲れただろう？」

質問を質問ではぐらかす。正直云って私はきっちり縄を掛けられた柔らかそうなその裸身を抱き締めてみたかったのだ。しかし私のモデルに対する不文律は、その時にも無視されなかった。

「そうでもないわ。少し腕が痺れてるほど。山本さんは女の人をくくって愉しい？」



「愉しいね」

「いつもモデルになる人とは一対一なの？」

「大体ね。男二人でやることもあるけどね。左近さんはどちらがいい？」

「わからないわ。でも二人に縛られるなんて恥しいよ。うな気がするわ。勿論裸な

んでしよう？ ちょっと不安だし、でもちょっと興味あるわね。さっきいじめるって云ってたけどどんなことをするの？」

なかなか厳しい追求である。左近さんは、この世界に強い好奇心を持っているようである。私は返事をせずに目の前にある豊満で香ぐわしい乳房に下から掌を当てがってみた。

「ううっ！ いやっ！」

左近さんは上体をちょっとゆすって悶えるが笑った顔の中で目がうつとりとしていた。縛って写真を撮りまた縛り直してカメラを向けるといふモデルに対するやり方だけでは、マゾ性を持った女性には不満なのはわかってる。左近さんの場合もそうした撮影者対モデルの関係以外に何かプレイめいたものを望んでいたのかもしれない。彼女自身意識では

男女の普通の行動も懼れ否定してはいたのだろうか。女体そのものは何かを期待せずにはおれなかったのではないかと思う。SもMもその窮極は性本能に繋がっているのだから。私は左近さんの媚態に危険信号を感じた。それを甘受しようとする欲望と、忌避しようとする理性が私の中で渦巻いていたことは事実である。

「少し休憩しようね」

私はそう云うと返事を待たずに縄を解きに掛った。ちょっと座がしらけた感じだった。白い肌に縄の跡がくっきり残って痛々しい。私は黙ってそれを軽くさすってやる。彼女は拒まない。

「山本さんって親切ね。みんなにしてあげるの？」

「まあね」

私はこの左近さんの綺麗な体の中にマゾの血が流れているのが不思議に思えた。未婚の彼女だけに尚更である。そしてそれだけにその女体を思い切ったやり方で責めてみたくなかった。それはまた危険信号からの逃避でもあ



る。

「少し休んだらきついのをやってもいい？」

「どんなこと？」

「吊りをやってみたいんだけど。ここならやれそうだから」

「うはっ、こわいわ。雑誌にはよく山本さんが吊ったっていうのが載ってるけど、本当に一人で吊れるの？」

「やれるよ。しんどいけどね」

私は彼女が拒否しないと見てとった。最初の日から吊りをやるなんて少し無茶な気がしたが、遠慮している場合ではない。私は彼女が厭だというまで押し進むことにした。

○ 写真(5)を先ず見ていただこう。完全な

磔つけである。縄は体重が掛るのを計算に入れて柔らかい縞模様の方を使った。両手首と胸と膝上、足首の縄の外には彼女の体を支えているものは何もない。椅子の上に立たせて縛り、足下から椅子を抜き取ったのだから彼女は完全に空間に磔つけられているのだ。ただ柱の横に渡された板が写真では邪魔になって効果を半減しているのが残念である。しかし磔つけの写真としては悪くはないと自負している。尤も編集部の方で誌上にはどのような形で掲載されるか不安が残るが。このポーズの性質上、箕田氏がよく使われるやり方で名札を使用した方が、変なパンツを使うよりは趣きがあるかもしれない。足から椅子を外した時、二三十センチはずり下ったから、相当な苦痛であった筈である。しかし左近さんは口を開かなかった。私は彼女の限界を見極めるつもりでしばらくそのまま放置して十数枚のフィルムに露光させた。十分近く経っただろうと思う。彼女の顔が苦痛を表現し出した。すかさずそれをアップで撮ったのが写真(6)である。写真(5)と較べて見ていた驚きたい。依然彼女は悲鳴を挙げないが、私

の方で可哀想になってきた。

「苦しい？」

彼女はちよつと肯ずいた。私は最後に秘蔵の一枚を撮るため、非情にその名札を肌に残めてあるセロテープと共に剥ぎ取ったのだが――。

足の下に椅子を差し込みうとして私は困惑した。最初の位置からはうんとずり下っているためそれが入らないのだ。慌てて低い化粧椅子を運んで来てそれをこじ入れる。彼女の体は汗でじっとり濡れていた。

「腕が凄く痛かった」

縄を解くと、彼女はそう云って肩をさすった。

「よく頑張ったね。大したもんだよ」

「腕が痛くさえなかったら、もっと辛抱できるんだけど。でもちよつと辛かった」

左近さんの微笑を見て私はほっとする。彼女に嫌われたくないという私の勝手な願いが救われたからである。

「もう懲りた？」

彼女は黙って顔を左右に振った。私の慾望は果しない。この程度で止めた方が紳士的なかもしれないが、その場の雰囲気は私に先を急がせた。

「もっと吊りをやってもいい？」

「いいわ。辛くなったら云うから好きなようにして頂戴。わたし何だかハッスルしちゃった」

私は彼女の体の中でマゾが目覚めたのを覚った。素晴らしいマゾヒストではないか。若くて美しいその裸身に宿っている激しいマゾの情熱は、この部屋にいる二人を灼き尽くさんばかりである。若さのタフネスは私の意慾をがっちり受け止めようとするのだ。

次に私が意図するのは猪吊りである。私が今までに何人かの女性に試みたそれを、この美しい女体にも体験させることにした。写真(7)がその完成図である。縄は私専用の白いロープを使った。吊り方は足首と手首を別々に縛った上、椅子に仰向けに寝かせ、先ず足首の縄を棧に廻わして引上げ、次いで手首の縄を足首のそれに連結した。腰の下から椅子を外すと、棧がミシッと不気味な音を立てた。この作業は文字にすると簡単だが、実際に一人でやるのは大変だった。私が全身汗みずくになっていたのは、いつもの通りである。この写真も自称ながら傑作ではないかと思っている。顔の表情が入っていないのが欠点だが、腰のボリューム、腕と乳房の位置な

ど私の気に入っている一枚である。実際はこの吊りを完成した時、猪吊りにされた女体は手足を引き上げている縄を中心にぐるぐると廻わっていた。従ってカメラは動かずにその吊りの全容を十数枚のフィルム面に写し取ったのだが、その中の白眉の一枚でもある。この姿勢で尻打ちのないのは、塩のないゆで卵である。既に諸兄弟姉の想像される通り、私は平手でその滑らかな肉を打った。そう強く叩いたつもりではなかったが、彼女はちよつと呻き声を挙げた。しかも悲鳴というよりは、悦虐の嘆声に近い響きを持っていたように思う。私にとってその呻きはショックだった。

そして全く無抵抗なこの美しい女体を前にして冷静さを保つことは誰であっても至難であらうと思う。私のサジステイックな血は沸騰していた。この姿勢のまま左近さんの逆になった顔が私の前に廻わって来た時、私は思わずその唇に私の顔を寄せようとした。すると彼女は顔を振って叫んだ。

「それは止して！」

猪吊りから降ろすと、さすがの左近さんも疲れたのかぐったりと体を横たえていた。

「参った？」

彼女がちよつとはほえんで云った。



「さっきはごめんなさいね。わたしキッスに弱い」

ああ何といういじらしさであろう。謝るのは私の方ではないか。私は黙って彼女の手足に無残に刻み込まれた縄の跡を撫でた。ちょっと直ぐには消えそうにもない程くつきりと型がついていた。

「嬉しいわ」

左近さんがぼつんとつぶやく。何が嬉しいのか私にはわからない。

「どうして？」

「わたし、いつも空想ばかりしていたんだけど、本当に縛られてみたら空想と少しも違っていなかったから、わたしマゾなのね。吊られている時も、何だかもっともってひどい目

に逢わして欲しいなんて考えていたのよ。山本さん、どう思う？」

「木村さんや大島さん以上かもしれないな」

「大島さんって山本さんが逆吊りの写真を撮った人でしょう？」

「そうだよ。木村さんや笹原さんも逆吊りにしたよ」

「わたし名前はよくわからないわ。でも逆さ吊りにされたら、どんな気持ちかしら。凄く残酷な感じがするけど」

「それ程でもないんじゃないかな。反って足だけで体重を支えるんだから楽かもしれないよ。尤も頭に血が下るけどね」

「やって下さる？」

うううっ、である。私の方が押され気味である。

「もう少し休んだ方がいいな。そうでないと後でこたえるよ」

こたえるのは恐らく私の方であろうが。左近さんは一旦浴衣を着て部屋を出て行った。もうここへ来てから三時間近く経っているのだから自然の生理現象があってもいいのだ。私は喉がカラカラで口の中がねばっこいので冷蔵庫からコーラーを出して飲む。そして煙

草に火を点けてふかしていると少し気分が落着いた。三十六枚撮りのフィルム三本がテーブルの上にある。カメラの中の四本目が二十五枚を指しているから、百三十回程シャッターを押した勘定である。もう十枚程を消化して置きたい感じである。左近さんは帰って来ると、私に向き合って腰を降ろした。

「もう少し撮って止そうか？ もう五時だから」

「そうね。じゃ今度が最後ね」

何だか未練のあるような云い方である。私にもファイトが湧いて来た。タフを以って自ら任じている私が退く手はない。彼女が悲鳴を上げるような強烈な責めで有終の美を飾るべきである。サジスチックな血がぐらぐらと沸き立つ思いである。さればと試みたのが写真(8)の強烈な逆さ吊りである。載せるかどうかかわらないし、載せるとしても小さくすることになるかもしれないという編集長の言なので、果して掲載されるかどうかかわらないが、もし諸兄弟の目に触れたなら、とくと御覧いただきたい一葉である。写真としてはバックの処理など不完全ではあるが、緊縛フォトとしては貴重なものだと考えている。写真(5)の位置での反対姿勢である。手の

代りに足を開いた逆吊りで、体重は両足首だけに掛っている。(5)の時と同じように柱の横の板が邪魔になっっているが、頭は完全に浮いている。矢張り椅子の上に仰向けに寝かせ、予め縄を巻いて置いた足を片足ずつ引き上げて椅子を外した。後手は吊ってから縛った。(5)の時に使った名札を再び使用。逆さになった顔は別人のように見えるので、そのまま見ていただくことにした。それ以上の解説は不用だろう。五分位は吊っていたと思う。私のカメラはその左近さんを十枚余のフィルムに刻み込んだ。しばらくすると左近さんの口から断続した呻きとも嘆声ともつかない声が洩れ始めた。ウン、ウンというあれである。胸が大きく呼吸を繰返し、乳房が震える。縛り最高の図ではないか？ 私はこの一瞬に酔っていた。左近さんはとうとう悲鳴を挙げなかった。

川端嬢や梨花嬢や関谷夫人のことを私は実際には知らない。しかし初めて縛りを試みて、その日の中にここまで強烈なものを受け容れた女性はないのではないかと思う。だから彼女は飼育されて完成したマゾではなく、生来のマゾと断定するしかない。しかも美貌と均整のとれた体は、その被虐の図を最高の

ものにしていえるといえないだろうか。貴重なそして本誌のアイドルとなって然るべき存在だと私は信じている。

逆吊りから解放するのには、吊る時以上の力と神経を使ったのだが詳しいことは省略しよう。さすがの彼女も疲れが見えていた。しかしその顔は陶醉していた。畳の上に全裸の体を横たえた左近さんは、何かを待つように大きな呼吸を繰返した。私はそっと近寄ってその額に口づけをする。

「辛かった？」

「……………」

「悪かったね」

「……………」

「疲れただろう？」

「山本さん！抱いて！」

私はその裸身を力一ぱい抱き締めていた。赤信号である。私ははっとして体を放した。

車で大阪駅まで送る。二人はもう元の快活な二人に戻っていた。長袖のセーターの袖口から少し縄の跡が見えて痛々しい。

「もうこりごり？」

「楽しかったわ。本当はもっと心配していましたが。どんなことをされるかわらないから」

「案外紳士的でしょう？」

「そう云うことね。でもちょっと罪だわ」

左近さんは笑いながら云った。

「辻村さんや箕田さんにも縛って貰う？ 皆それぞれ流儀が違うけど、絶対信用できる点は同じだから」

「わたしは構わないわ。でもどうかしら、今のわたしちょっと正常じゃないから、帰って考えてみますわ。多分志願するようになると思うんですけど……」

私は、彼女の美しい体に箕田氏や辻村氏が縄を掛けるのを想像してみてもちょっと妬けるような気がした。しかし独占するのも狭量であろう。彼女が奇クのアイドルになるのもいいだろう。また、それだけのものを持っている人である。

私はホームまで随いて行く。彼女は電車の窓から顔を出して微笑した。

「また連絡して下さい？ お待ちしていますわ」

美しい人だった。私は恐らくこのルポに彼女の続篇を書くだろうと予感している。

(この項おわり)

ゴムに憑かれた

女の告白



雨の夜のゴムプレイ

梅川幸子

用しているのを見て、却って自分のゴムフェチを強く意識せられ、人知れずに悩み、或は楽しんでいるのではないだろうか？

ゴムの魅力は、先ずその柔らかさとスベスベした肌触りにあると思います。そして、その快よい匂いもまた魅力ですし、色々なゴム引雨具をまとって秘密のプレイに恍惚となる嬉しさは、また格別でございます。

今まで何度か私の行っているゴムプレイを拙い筆の運ぶままに書いて本誌に載せて頂きましたが「物言わぬは腹ふくるるわざ」の諺通り、皆様に告白して、私自身さっぱりした気分になり、また皆様の中でゴムマニアの方のご参考にでもなればこれ以上の幸せはございませんから、また筆をとらせて頂きます。

先ず私の身のまわりの品は、次のものを用意しています。

(一)、ゴム手袋

お台所やお洗濯に使う色ものではなくて下水工事やビルの掃除婦の方がはめている茶色のひじまで届く大きなゴム手袋です。これを二組。

(二)、ゴム長靴

これは農家の人が田植仕事にはいている茶色い裏表ともに総ゴム製の長靴です。底が地

近頃、本誌のゴムマニアに関する記事が少なくなり、非常に寂しい限りです。世の中にはゴムに魅かれる性癖を自分だけのものだと思

い込み、劣等感を持っていらっしゃる方が多いのではないのでしょうか？ したがって、さほどゴムの感触に敏感でない人が日常使用着

下足袋のように平たく、そして爪先も地下足袋のようになっていて、腰まで届くように出来ています。文数は自分の足によく合ったものを選んでおります。これを二足。

(三)、ゴム引レインコート

近頃では全く見られなくなりましたが、羽二重や絹の裏にゴム引きしたレインコートです。五、六年前まではよく流行していたもので、この品についてはマニアの方々がよくご存じでしょう。襟の形や釦の位置で何種類かあり、いずれもフード、ベルトをたたんで収めておくための同生地が縫いつけてあります。

大きさは普通「44」サイズですが、特大の「46」サイズがあり、胴まわりも丈も非常に大きく（丈の長さで六センチほど長い）ゆったりと出来ています。私の持っているのは、全部この大きな「46」サイズで、色は赤、ピンク、ねずみ、緑、茶など五着揃えています。（いずれもフード、ベルト、袋は失くさないように大切にしています）

四、ゴム 合羽

男物の黒いゴム合羽（裏は茶色）で、裏表とも総ゴム製のものです。フードは、鼻から下を隠すための小さなベルト付きで、これも特大サイズを二着揃えました。

(四)、ゴム引マント

ゴムマニアの方の告白が何枚もありましたが、このマントが出てこないのが不思議です。私が一番好きなのは、このマントにくるまることです。自転車に乗った男の人が着ているのを今でも時々見かける黒いゴム引の防水マントで、裏は茶色いゴワゴワとした木綿地です。これは男女物の区別がなく、大きさも一定しています。勿論、フード付（ゴム合羽同様の小さいベルト付）です。これを二着。

六、ゴムマスク

以上の品を用意して、宝ものようにしておきます。

これからプレイに移りますが、ゴムマニアの方々の告白や体験記と似た点もあると思いますし、重複してもいけないと思いますけれど、ご参考までに筆を進めましょう。

私のプレイをする時間は夜中の午前二時頃テレビの深夜放送が終って一息ついた頃にはじめます。先ず着ているものを脱いで、鏡台の前に立って自分の姿を鏡に写しながら、素肌にゴム引レインコートをまとい、ガサガサと音を立てて腰まで届くゴム長をはき、ゴム引レインコートを収める袋を裏返しにして（ゴムの部分を表に向けて）顔に当てがい、

その上からゴムマスクを、眼をわずかにのぞかせて当てがい、フードをすっぽりとかがぶり、腰のベルトを結びます。

この姿が基本で、着物でいえば長襦袢を着たところですか。小柄な私がこの姿になったところをご想像下さい。ゴム引レインコートが、まるでガウンかネグリジェのように引きずるほど長く、裾が足首まで隠しています。その上から着物に相当するゴム合羽を着てフードをかぶり、フードに付いているベルトを締めました。もちろん腰のベルトも締め、大きなゴム手袋をはめると、私独得のゴム装束の正装になりました。このスタイルが私の一番好きな姿ですが、これからどんなプレイと悦虐が待ち構えているのかという恐怖におののきながら、自分自身鏡に写った姿に見とれます。こうしているうちにも汗びっしょりになり、しばらく畳の上に横たわってあれこれ考えながら、やがて立ち上ると、ゴム引マントをすっぽりと羽織り、フードをかぶり、フードに付いているベルトを締めると、私の身体は完全にゴム引マントに包み隠されてしまいます。そしてこの姿を鏡に写して眺めます。

黒いゴム引マント、魔法使いのようなその

フード、ゴムマスクに隠された顔、僅かに眼がフードから覗いています。ゴム引マントは引きずるように長く、ゴム長の爪先がちょっぴりとのぞいています。(着ているゴム引雨具の釦は全部行儀よく、きちんとはめます)それからプレイに必要な器具、浣腸器一式とゴム浮袋を出しビニールの風呂敷に包んで小脇に抱えると、真暗な雨の降りしづく戸外へ出て行きます。

裏庭の木戸を出て田圃道を百米ほど歩くと木立に囲まれた小さな池があり、夜になると、しかも雨の夜はこんなところに人も来ませんし通りもしませんから、前もってその他の周囲のようすをよく調べておきました。

夜半の激しい雨は土砂降りになり、そこらの溝は湧き立つようにあふれ、泡を立てています。暗やみの雨の音に一寸恐怖を覚えますが、そこは勝手知った土地のことゆえ、田圃道をせつせと歩いてゆきます。雨は次第に激しくなり、音を立ててゴム引マントを容赦なく叩いて滝のように流れてゆきます。息をは



て、顔やゴムマスクをびしょびしょに濡らします。ピチャピチャと泥水をはねながら田圃道を歩き、草と木立の生い茂る池のほとりに着きました。

真暗な天地、激しい雨、ゴム引雨具に包まれた小柄な一人の女、私は何度このプレイに我を忘れたことでしょうか。私は小脇に抱えていた包みを草むらに置くと、少し股を開いて立ち上がり、ひざを曲げ上体を少し前にかがめました。ゴム引マントを叩く雨の音を聞きながら次第に体を奇妙にくねらせ、へなへなと雨の降りしづく草むらの中にしゃがみ、そして寝ころんでしまいました。ゴム引マントの中では、はてる体をゴム装束に固めて、秘密のプレイに耽溺して身も心も歓喜に身悶

ずませるたびに、ゴムくさい臭いとニチャニチャと吸いついたりふくらんだりするゴムマスク、素肌にまつわりつくゴム引レインコートの汗ばんだ感じ、腰まで届くゴム長のくすぐったいような歩きにくい感じ、重いゴム合羽の暑苦しさ、そしてそんな姿の私をすっぱりと包んだゴム引マントを叩く雨の音。ゴム引マントのフードからしずくがしたたり落ち

えしているのです。その度にゴムマントが異様に起伏し、ゴムマスクが唾液で濡れ、全身汗まみれになり夢うつつとなりました。気がつくると素肌にまとったゴム引レインコートにゴム長、ゴム手袋は汗で体に濡れたようにまつわりつき、ゴム合羽は汗とゴムの臭いでむせかえり、ゴム引マントは雨が浸み込んで裏の木綿地は、まるで濡れ雑巾のようになって

しまいました。

雨が依然として激しく降っています。これから水中の、あるいは水際のプレイが始まるのです。しばらく横になっていてゆっくりと起き上ると、風呂敷からゴムの浮袋を出しゴムマスクを外して新鮮な空気を吸い、その勢いでフウフウとふくらましはじめます。これは普通の輪形の浮袋と違い、馬の形に出来ていて、こういう池でプレイをするのに絶好の小道具です。

ようやくふくらむと再びゴムマスクをはめ、浮袋を池に浮べ、草をふみわけてドボドボと池の中へ入ります。そして、ひざが浸る位の深さのところ、どっかりとこの『お馬』にまたがり、アヒルが水を掻くように両足を動かして水を掻き、深みの方へ動いてゆきます。さすがこの『お馬』の形をした大きな浮袋も、ゴム装束の私を乗せると相当の重みで、おまけにゴム長に水が流れ込んで重りの役目をするので、お尻から下が水に浸ってしまいました。上半身の汗まみれの苦しさとは反対に、何と下半身、水に浸って快よいこと！ちょうど池の真中までくると、浮袋の栓をゆるめます。シューッという音が続き、空気がだんだん抜けて『お馬』の形が崩れて浮

袋が浮力を失ってゆきました。そして私は、だんだんとお腹から胸まで冷い水の中に浸ってゆき、股にはさんで両手でしっかりと抱きかかえている『お馬』の形が失くなった時には、首まで水の中に浸ってしまいました。

川と違って池は急な深みがないかぎり、危険のないプレイが楽しめます。それから、用のなくなった『お馬』を岸边に放りあげると、水中で駆足をしたり、胸の辺まで浸って佇ずんでみたり、首まで浸って手足を動かして、バレーかダンスを踊っているようにさまざまなポーズを作って楽しめます。（一番深いところでも背が立ちますのでプレイに好都合の池です）ゴムにとりつかれて、雨の降りしづく初夏の深夜、田圃の池でしぶきをあげてゴム装束でのたうち私の心情をお察し下さいませ。それから、グシヨグシヨのままで岸にあがり、浣腸器をとり出して浣腸の用意をすると、ドボドボと池の中に入りました。首まで水に浸り、水中で、さっき草むらの中で行ったように脚を開いて立ちほだかり、水中の浣腸プレイに身悶えするのです。水の冷さも忘れて恍惚となり、へなへなど、身をかがめると、ブクブクと沈んでしまい、したたか水を飲んで、あわてて真直ぐ体を起して立ち

はだかりました。

また岸にあがり、浣腸器と浮袋と一緒に風呂敷に収めると、ゴム引マントを脱ぎゴム合羽姿になり、岸边の浅いところに四つんばいで水に浸ってチャブチャブと這い廻ります。そして合羽に包まれた私は水面から顔をあげて、クタクタになるまで泥水に浸ってゴムにとりつかれた異常な楽しみに我を忘れるのでした。疲れきって吐く息も荒くなる頃には雨も小降りになり、東の空が白みはじめました。しばらく岸にあがり、草むらに坐って足を投げ出して休憩してから、もう一度ゴム引マントを羽織りドボドボと池の中に入りました。そして首まで水に浸って瞑想にふけります。

ゴム引マント——私をゴムマニアにした、いわくつきの品物です。思えば私が少女時代詳しく書きますと、今ではよほど年輩の方か戦前から戦後の昭和二十五、六年頃にかけて小学生時代を送られた方ではないと存知ないでしょうが、当時の子供は雨の日は防水マントを着ていました。女児用のは赤いゴム引に出来ていて、裏は茶色または白い木綿地で、特徴は何といってもそのフードの形でした。ちょうど昭和の初め頃の婦人帽か、赤ちゃん

の日除け帽のように頭にきっちりとかぶさり折返した大きなひさしがついていて、雨の激しい時はこのひさしを立てるようになっていきます。このゴム引マントを着た小学生が連立って登校し、廊下にズラリとこのゴム引マントが濡れて吊り下げられているのは、昔の思い出になってしまいました。

私の知る限りでは、このほかに青いゴム引のや、同じ形と色で木綿地の防水布で作ったものもありましたが、私の着ていたのは、この赤いゴム引マントでした。これを着て、フードのひさしから落ちるしずくに顔を濡らし、裾からしたたるしずくがゴム長に落ちて足を冷く濡しながら雨の日を楽しく歩きまわったものでした。このゴム引マントを叩く雨の音とスベスベした滑らかな感じと、ゴム引雨具特有の臭いに我を忘れて、一人で教室に残り雨天体操場へ出掛けた級友を見送ったあとで廊下に出て沢山吊り下っているゴム引マントの中から私のを教室に持ち込んで、誰もいない教室の片隅でこれをまとい恍惚となつたものでした。また、お家にいるときは、一人で留守番をしているときなど、お部屋の中でこれを着て色々なポーズを作って鏡に写して楽しんだり、裸になってゴム長をはき、こ

のマントにくるまってお風呂に入ってみたりしたこともあります。ゴム長を脱いで、中にたまったゴム臭いお湯を口に含んでみたりしながら……この女兒用のゴムマントは、今では見ることも出来なくなり、露天の古着屋さんの店頭か、田舎の家の物置の隅でも探さないと見当らないでしょう。

私は、ずぶ濡れの姿で池からあがると風呂敷を小脇に抱え、小雨にうたれながらお家の方へ歩き出しました。ごらんさい、黒いゴム引マントにくるまった女が、ずぶ濡れになって足どりも軽く歩いているでしょう？ お家に帰るとお風呂場に行き、泥水にぐっしょりとなったそのままの姿でぬるくなったお湯に入り、首まで浸ってお湯を波立たせ、秘密のプレイに身も心も天国に遊びながら、時の経つのを忘れるのでした。

これで雨の夜のゴムプレイが終ると、お風呂場で着ているゴム装束を脱いで綺麗に洗い陰干しにしてから、ぐっすり眠るのです。そして眠るときは、寝巻の代りにゴム引レインコートを着、ゴム長をはきゴム手袋をはめて大の字になって楽しい夢を見ながら昼まで眠ります。さっきの池の中の、またお風呂に浸っているプレイを夢見ながら、またゴム装束姿

でギリギリに縛りあげられて、浣腸をはじめあらゆる恥ずかしめを受ける姿を想像しながら、また泥沼の中にもがきながら沈んでゆく姿を夢見ながら……。

目が覚めると、着ているゴム引レインコートが汗びっしょりになって素肌にまつわりつき、ゴム長に汗がじっとりにとにじんでいるのに気がつきますが、それから後はまたゴムマスコを当てがい、ゴム合羽を着、ゴム引マントにくるまって、お部屋の中で鏡に姿を写しながら色々なポーズで秘密のプレイや、浣腸プレイに耽溺し、それが済むとお風呂場へ行ってお湯に入ります。（勿論、そのままのゴム装束のままです）

このように一日に何回もプレイを楽しみますので、着替えのゴム引雨具を沢山持っているわけです。

読者の皆様、いかがでございますか？ どなたか私と一緒にゴム装束をまとうてプレイをして下さる方は、いらっしやいませんか？ ようか。

（京都市右京区西院 梅川幸子）

(日本婦人部隊奮迅録)

海

かい

嘯

しょう

の

譜

ふ

(上)

黒 淵 嬰 一

昭和十八年五月十日。

一通の至急電報が全太平洋を震撼させた。

宛、第六艦隊中継、聯合艦隊。

癸、真珠湾沖に待機中の伊号第九潜水艦。

「〇五四五。米艦隊主力ハ出動ヲ開始セリ」

使用時は中央標準時。現地時間では五月九

日午前十時頃に当る。

「遂に出動したな」

旗艦武蔵の長官公室。

河合玉堂描く処の江戸城と、横山大観作の

金下地に朝日の昇る富士山図が飾ってある。

その下で山本五十六が言った。

「行先が濠洲なら航空消耗戦を伴う持久戦。

直路マーシャル群島に掛けて来れば全力を以

てする艦隊決戦だ。果して何方に来るか」

× × ×

昭和十七年十一月を以て世界情勢は大きく

転回した。

十一月二日。エルアラメインでロンメル軍

が敗れた。

十一月八日。米軍が大西洋を渡って北アフ

リカのフランス領植民地を接收した。これは

事実上の欧洲大戦介入である。

十一月十九日。スターリングラードに於て

ソ聯軍の大反撃開始。

大西洋のUボート戦はこの月から下降線を

辿った。

そして十一月三十日。米独間に宣戦布告。

日本は三国同盟発動を以て警告を発した。

併し充分の戦争準備を整えた米国は逆に威嚇

を以て応じた。

十二月。日本は再び仏印進駐。

米国は戦略物資の輸出を禁止。

昭和十八年一月。中国共産党軍が星条旗を

立てて日本砲艦を射撃し、日米交戦を誘発。

真相は間もなく判明したが最早太平洋戦争を

阻止するには手遅れだった。

斯くて三月三日。遂に日米開戦。

× × ×

「私達の行動は無意味だったのでしょいか」

磐城朋子が言った。

「現代では誰にも理解して貰えないかも知れませんが。併し昭和十六年末に開戦していれば日本は間違いなく侵略者と呼ばれていたでしょう。これでよいのです」

棉津見洋子が答えた。

ブラウン諸島のエニウエタック環礁上。

礁湖には発進準備成った九七式大型飛行艇が浮かんでいる。

「昭和十六年末の日本は支那事変未解決で、陸海軍の協調整わず、軍備は不充分でした。併し我整う時は彼も成る。両洋作戦に備えた米国の兵力は今や日本の二倍近いでしょう」

一二一事件関係者六百余人は未だ懲役刑を解かれていない。磐城朋子の制服は原型を留めていなかった。

「併し米国民は心の用意が出来ていません。ルーズベルト一派が懸案の太平洋問題を解決しようとして無理に起した戦争だからです」

戦気は既にこの島の上に迫りつつあった。

× × ×

五月十一日。

広島湾内に待機する旗艦武蔵。

作戦室には重苦しい空気が流れている。

敵艦隊の動静は解らない。哨戒配置に就いた潜水艦は敵に制圧された如くに思われる。

「潜水艦隊に依る漸減作戦は不成功だったようだ。航空索敵の方は遺漏はないだろうな」

参謀長宇垣纏中将が言った。

「クエゼリン基地から十八機の二式大艇を以て九本の索敵線を出しています。敵がマーシャル群島に向っているなら必ず発見します」

航空甲参謀の樋端中佐が答えた。

× × ×

山本五十六は聯合艦隊司令長官と軍令部長を兼務していた。次長の古賀峯一を大本営に留め、自身は旗艦武蔵に在って第一艦隊を直率しつつ広島湾から全艦隊を指揮している。

第二艦隊の巡洋艦群はフィリピン水域で掃蕩作戦に従事中であり、第三艦隊の空母群は航空撃滅戦を終ってパオラで整備中だった。

第四艦隊は内南洋、第五艦隊は本土北方の配置に就き、第六艦隊の潜水艦群はハワイ方面に展開し、第七艦隊の旧式艦艇は陸軍の進攻作戦に協力して西太平洋に行動している。他に多くの基地航空隊と陸戦隊があった。

この全兵力をトラック島に至急集結しなければならぬ。それには二週間を要した。

「敵がマーシャル群島に直行すれば遅くとも五月二十日には上陸を開始するんだろう。陸上防備は聯合艦隊集結完了迄耐えてくれるか」

× × ×

稔田少佐はマッキンレー兵営の屋上から夜のマニラ市を眺めていた。

——今夜も市内は平穩のようだ。——

婦人部隊主力はマニラ周辺の治安に当たっていた。宣撫工作は行き届き、親米感情の強い現地の住民がよく軍政に従っている。

フィリピンの大部分は既に平定され、米比軍はコレヒドール島とバタアン半島に籠城していた。日本軍は半島の根本を固く封鎖し、敢て急攻せず、饑餓に依る自滅を待っている。戦力の消耗を避け、可能の全力を東方に集中する為の戦略だった。

マニラ湾の彼方から鈍い砲声が聞えた。

——重砲だ。撃ったのは鹿島か。——

婦人部隊の練習艦鹿島はサンアントニオを基地としてバタアン半島の砲撃に参加していた。二門の十二吋砲は沿岸攻撃に最適の火器である。十二隻の戦艦は貴重な決戦兵力で、

その主砲弾は高価だった。十八隻の重巡洋艦も決戦の補助兵力で、八吋砲は威力不足だった。石炭専焼の鹿島は補給容易。防禦力も適度。一種のモニターとして利用し得た。

又しても殷々たる砲声。

ナチブ山の上に闇を劈いて閃光が走った。

× × ×

五月十一日。ワシントン。

日本では五月十二日に当る。

ホワイトハウスでルーズベルト大統領とスターク海軍作戦部長が対座していた。

「ドイツ軍はスターリングラードの大敗で主導権を失った。我が国の軍事力は両洋作戦を可能にする程強大となった。今こそ日本を抑えつけて東洋問題を解決する好機だよ」

「日本は威嚇して封じ込めるだけで充分だったのではありませんか」

「東洋の資源と人口は世界の半分を占める。我が国がこれを独占する為の障害は日本海軍だ。何時かは除かねばなるまい」

ルーズベルトは大政治家と思われていた。併し後になって見ると、彼のニューディール政策も極東政策も成功とは言えなかった。唯一つ。日本を圧伏するに足る大海軍の建設。これが彼の達成し得た事業のすべてだった。

× × ×
エニウエタック環礁を発した九七式大型飛行艇が北に向っている。従来の九一式に代って婦人部隊に払下げられた新鋭機である。

尤も海軍が二式大型飛行艇を採用した為に換装された余剰機でもあった。

主操縦士は倭操子。機長は棉津見洋子。

重厚な二式大型飛行艇に伍して、パラソルを差した瘦形の九七式飛行艇が最西端の索敵線を飛んでいた。

× × ×

日本の軍事力は陸軍五十一箇師団、戦闘用艦艇百三十万噸、第一線飛行機五千機。外洋船舶七百万噸。貯蔵石油一年半分六百万噸。対する米国の兵備は陸軍九十箇師団。艦艇二百五十万噸。新式飛行機八千機、船舶二千万噸。これが一時間毎に増勢されつつある。更に英、蘭、濠の陸海軍が加算された。

兵力差は余りにも大きい。日本の海空軍は分割して二正面作戦を行うには不充分。

昭和十六年末の危機に際して真珠湾空襲を計画した山本五十六が、今回は脆道を棄てて正兵を採り、三十年来の研究に成る内南洋邀撃配備に就いた。先ず全力を以て西に英、蘭を討ち、次に東方へ転じて米、濠と争う。

× × ×

五月十二日。敵情不明。

コロナード飛行艇らしい機影がマーシャル群島上空に現れ、一機は撃墜された。

× × ×

五月十三日。

「十番索敵機。〇七二〇。敵艦隊ヲ発見ス。東経百六十八度。北緯十八度」

武蔵の作戦室は緊張した。

「ウエーク島のすぐ南だ」

「意外だ。何故そのような北に現れたのだ」

樋端参謀と室井参謀がディバイダーで測りながら言った。

「敵の目標は本当にマーシャル群島攻略か。小笠原かマリアナを狙っているのか。単なるウエーク島の救援か。そして此の敵は主力なのか。一部の牽制兵力なのか」

宇垣参謀長が自問する。

「索敵機に連絡しろ。敵兵力と動静知らせ」

今中通信参謀が電信室を呼んだ。

グワム島は第十一師団と第四艦隊が攻略したが、ウエーク島は陥ちなかった。米軍はウエーク島を足場として決戦を挑むか、濠洲方面に迂廻して長期封鎖戦に出て来るか。

「敵は必ずマーシャル群島を攻撃して来る」

山本長官が厳然と言った。

彼は一二一事件を思い出していた。

混乱に際して彼を呉から横須賀に運んだ九一式飛行艇の婦人操縦士を。

「九七艇の殊勲だ。索敵線の西端で敵を発見しなかったら内南洋の奥深くに踏み込まれていたかもしれない」

× × ×

「日本軍は感附いたようだね。今迄の単調な電波交信が突然喧騒極まるものに変ったよ」

旗艦ペンシルバニアの司令塔。

太平洋艦隊司令長官キムメル大将が艦長クック大佐に向って言った。

× × ×

「敵ハ戦艦八隻。航空母艦十三隻。巡洋艦ラシキモノ四十隻。駆逐艦多数。針路南。速力十四節。緊縮輪型陣デ航行中」

十番索敵機からの報告が続いている。

「機動部隊だな。これが敵の全力ではない。

必ず船団を伴った攻略部隊が他に居る」

室井参謀が言った。

「九七艇が機動部隊に接触し続けるのは危険だ。早く二式大艇と交替させよ」

長官が樋端参謀に命じた。

「敵戦艦機ト交戦中」

果然警報が入る。司令部の面上に憂色が流

れた。速力三百四十軒。武装も運動性能も貧弱な九七式飛行艇が戦艦機に追跡されたら免れる筈もない。

「敵ハF四F、約十機」

これが最後の連絡だった。殊勲の索敵機は消息を断った。

× × ×

山本五十六は適確な命令を下した。

「第六艦隊ノ潜水艦ハ敵ノ前程ニ集結セヨ」

「全索敵機ハ敵ト接触シ、ソノ動静ヲ監視セヨ。併セテ東方ニ統行中ト思ワレル攻略部隊ノ発見ニ努メヨ」

「第二、第三艦隊。トラック島へ急行セヨ」

「マーシャル群島所在ノ艦船飛行機ハ暫時ボナペ島へ避退セヨ」

敵は強力である。前哨戦で兵力を消耗してはならない。先ず集中。然る後に全力決戦。

マーシャル群島の防衛は陸上局地兵力に委された。

エニウエタツク島には婦人部隊の労役で建設された仮滑走路が有った。航続力の少い九式艦上爆撃機の一隊は此処を中継にして移動した。

× × ×

島上の陣地は概ね完成していた。併し守備

兵力が居ない。海軍陸戦隊を進出させる予定が間に合わなかった。数千人を収容するに足る半永久陣地に軽火器だけを持った婦人部隊六百余人が拠っている。彼女等を後退させる時間も無い。米艦隊は迫っている。

本来エニウエタツク島は第二線だった。それがウエーク島攻略不成功の為に側面を露出した。併しヤルト島やクエゼリン島が突破されない限り直接攻撃に曝される事もないだろう。

× × ×

五月十四日。

快速機動部隊の中央。

レイ、レックスの愛称を持つ優美な巨艦レキシントンが堂々と航進して行く。

艦内の長官公室で二人の将校が誰かを待っている。

ブルドッグのような顔。レスラーの如き体格。上着も脱いで頗る行儀の悪い提督。

右腕に錨の刺青。ハルゼー中将である。

他の一人はスコットランド風の紳士。

艦長シャーマン大佐だった。

突然二人の高級将校は弾かれたように立ち上った。裸の提督は慌てて上着を着た。

鄭重な敬礼。

現れた人物は三十才を少し過ぎたばかり。階級章は真鍮色の木の葉が一枚。何う見ても少佐である。若い少佐が悠然と中央の椅子に坐った。司令官と艦長が両側に小さく掛ける。

「捕虜にした日本の飛行士を見せて下さい」
年令に似合わぬ重い口調だった。中将と大佐が幾度も頭を下げた。

議會万能、文官優越の国柄らしい。政界の大物か、それに関係ある顔役なのだろう。

× × ×

「これは捕虜虐待ではありませんか」

少佐が言った。

「いや、余り激しく暴れるものですから」

ハルゼー提督が頭を掻きながら弁解した。

「女ではありませんか。こうまでせずとも」

顔役が語る。

「それが物凄く強いのです。気絶して漂流中を拾い上げ、本艦に収容して手当を加えていると突然眼を醒まし、軍医を投げ飛ばしました。水兵達を取り抑えたが縛りあげる迄に三人も負傷させられました」

シャーマン艦長が説明した。

引き据えられているのは俵操子だった。

両手は索具用の固いロープで後ろに縛られている。

飛行服は脱がされ、代りに米海軍の水兵服を上着だけ与えられていた。それで充分だった。彼女の体格に対してはハーフコートより長く、ワンピースに近かった。

「下院議員リンドン・ジョンソン殿だ。問われた事は何でも正直に申し上げる」

ブルドッグの異名を持つハルゼーが噛みつきそうな顔で言った。

ルーズベルト大統領の軍事査察使は正面から縛られている俵操子を見下している。彼女も臆せずに見返した。威厳と品位の具った、潔癖症らしい顔。併し何となく融和を欠く、冷たそうな顔。

誰も知らない。

この少佐こそ二十年の後、第三十六代米国大統領になるべき人物であるとは。

× × ×

伊号第七潜水艦が軍隊輸送船マウント・ヴァーノンを雷撃し、襲撃後敵情を報告した。

「矢張り船団と直衛艦隊が来ているぞ」

聯合艦隊司令部が緊張した。二式大型飛行艇の編隊が二方面に急行し、敵に接触した。

× × ×

俵操子はレキシントンの船倉に監禁されていた。予備索具を格納する倉庫らしい。

米空母が艦内照明に螢光灯を全面採用して絃窓全廃を実現したのはホーネット以後である。俵操子が入れられている倉庫にも高い位置に小さな絃窓が一つだけ有った。

索具庫なので材料は豊富だった。彼女の両手は背に縛られ、足も揃えて固く縛られている。ブルドッグのハルゼーに平手打ちされた頬は脹れ上っていた。ジョンソンの前で反抗した為に被った暴行だった。そして彼女の身体は重い鋼索の束に挟まれて動けなかった。

俵操子の操縦する九七式飛行艇はグラマンF四Fワイルドキャットに撃墜された。敵は管制レーダーを実用化している如く、視界限度の遠距離から断雲を利用して隠顕触接を試みたにも拘らず戦闘機の集中攻撃を被った。

機体は海面でクラッシュし、横転しつつ胴体中央部から二つに裂けた。俵操子は切断孔から海中に放出されたらしい。侵入した海水が機体内の空気を圧縮して噴出したのだろう。

失神した為に水は飲まず、墜死を免れた。併し生き残った者は彼女一人だけのようだ。棉津見洋子等九名は遂に発見されなかった。

艦内に警報が鳴り響いた。拡声器が潜水艦

の出現を報じている。

渡洋艦隊に対する潜水艦の反復襲撃、これこそ漸減作戦の第一段であり、有形上の戦果を収めずとも敵を疲弊せしめるに足る。

「此の艦に命中してほしいのだけれど」

レキシントンが沈没すれば。

手足を縛られ、鍵の掛った船倉に幽閉されている彼女自身も助かる筈がない。併し、

「どうせ生きて還れないのだから。世界最大の航空母艦と一緒に少しも惜しくはない」

倭操子は縛られた身体に反動を与えて起き上ろうとした。足は不自由、艦の動揺は不規則。且つ後ろ手に縛られて安定がとれない。幾度も転んだ。脚を屈伸し、背に廻った手で支え、綱の束に背を当て、七回目には漸く尻が上った。両脚跳躍の要領で舷窓に近寄った。

窓は高かった。米国水兵の平均身長には適しているのか。倭操子が不自然な姿勢で幾ら背伸びしても届かない。足と背で重い鋼索束を窓際に押し遣り、苦勞しながらその上に立った。

見えた。

左舷正横にヨークタウン、続いてエンタープライズ、三番艦ホーネット、

レキシントンの後方にサラトガ、ワスプ。

レンジャーの諸艦。

エセックス級とインデペンデンス級の新鋭航空母艦が居る筈だが此の窓からは見えず。右舷側に並航しているのだろうか。

遙か向うにアイオワ型とワシントン型の新鋭戦艦群。ナッシュヴィル型の巡洋艦群。

飛行機が次々に発進した。駆逐艦が駆け廻る。水柱が立つ。水中爆発音が聞えて来る。

潜水艦は制圧されらしい。

日本海軍が自信を以て建造し、多年訓練を重ねて来た艦隊潜水艦に依る漸減作戦は米海軍の進歩した対潜兵器の前に無力なのか。

拡声器が撃沈確実を告げた。

レキシントン艦内に歓声が湧き、倭操子は無念の唇を噛む。

此の時、突然レキシントンが大きく面舵に転舵した。倭操子の足下で鋼索の堆積が崩れた。手足を縛られている彼女は安定を保つ事が出来ない。頭から真逆様に床へ転落した。

× × ×

サイゴンの司令部で南方軍総司令官今村均が情勢を分析している。

「我が海軍の艦艇と航空機の全力は内南洋に向いつつあり、南方攻略作戦は陸軍に一任された。英、蘭の海軍は敗れて印度洋に退いた

が此の際に反撃して来るかもしれない。陸軍が一式戦闘機に代えて零式艦上戦闘機を採用したのは良策だった。陸軍航空隊は充分海洋作戦に耐え得る。必ず英・蘭の反撃を封じて南方攻略を完遂して見せるぞ」

× × ×

旗艦アイオワの作戦室で機動部隊司令長官ニミッツ中将が幕僚に指示を発している。

「日本潜水艦の無能力は既に証明された。次は基地航空兵力を撃破する番だ。艦隊主力が来援する前にマーシャル群島の飛行場を全部叩き潰す。その次が最後の艦隊決戦だ」

× × ×

五月十五日。

上陸作戦旗艦に改造された豪華船キーンサージの大広間で作戦会議が行われている。

水陸両用作戦総司令官ターナー中将。

陸軍総司令官バックナー中将。

第一海兵師団長ヴァンデグリフト少将。

第二海兵師団長スミス少将。

陸軍第七師団長ブラウン少将。

英国観戦武官ラムスデン中将。

旅団長級の准将若干及び各將軍の幕僚達。

「偵察結果より判定するに日本軍の守備兵力はクエゼリン島一万。ルオット島四千。エニ

ウエタツク島五千と思われます」

ターナー中将が航空写真を示して言った。

「空中偵察程度で兵力が推定出来ますか。此の写真に見える地上施設は僅少ですが」

ラムスデン中将が疑問を挟む。

「潜水艦、飛行機、無線諜報の綜合判定で、出入する補給船、通信量や呼出符合数等から計算しました。地上施設が少いようなのは、兵舎と倉庫を椰子林に隠蔽した事、陣地の大部分を地下に埋設した事。及び日本人の必要とする諸施設が我々より少いからでしょう。就中極め手となったのは便所の大きさです」「便所？」

「そう。便所の大きさと、それを利用する人員の数は必ず比例します。写真に見える、海上に長く伸びた棧橋状の構造物。これが便所である事は潜水艦が確認しました」

ターナーの着想は卓抜だった。併し惜しむ可し、彼は計算を誤った。

米軍の露天開放式。雑談自在の便所に対し日本人は体格不相応の固定便所を建造する。時間と分量が違うのか。日本人の方が小さいのに便所は二倍大の容積があった。ターナーの精密計算にも拘らずクエゼリン島の日本兵は六千。ルオット島のそれは二千五百に過ぎ

なかった。

エニウエタツク島の誤算は一層甚だしい。

だが無理もない。婦人用便所は更に大きい。その上、島内には進駐予定の海軍陸戦隊二千に提供されるべく準備された未使用便所も有った。在島の実人員は軽火器しか持たない婦人部隊六百三十二名。これに対し米軍は陸軍第七師団の全兵力一万八千を差し向けた。

レキシントンの船倉内。

倭操子が縄を解こうとして跪いている。

漸く両手首が別々に動き始めた。皮膚は真赤に擦り剥けている。額には汗の玉。

更に数分。室外に足音が聞えて来た。食事の時間らしい。

東京では、

政府、大本營の連絡會議が開かれていた。

政府からは戦時内閣首相宇垣一成。陸相梅

津美治郎、海相米内光政。

大本營側は参謀総長岡村寧次。次長石原莞爾。軍令部次長古賀峯一。

「御懸念には及びません。必ず立派に負けて御覧に入れます」

天才將軍石原は開口一番、得意のパラドッ

クスで列席者を嗤然とさせた。

「戦争目的は東亜諸民族の解放であります。

日本が戦争に勝って欧米の旧植民地を領有したのでは目的達成は出来ません。日本には植民地経営の人材も資本も有りません。大東亜の為には寧ろ日本が犠牲となるべきであります。植民地時代は終りつつあり、大戦に疲弊した米・英・蘭は自覚後の独立運動を阻止し得なくなります。日本の採るべき施策は占領地の一旦放棄、戦後の独立援助と信じます」嘗て御前進講を東北弁で行った程の奇矯児石原が今日は標準語で溜々と論じた。

「近く行われる筈の内南洋艦隊決戦は勝敗如何に拘らず最後の戦闘であります。政府は媾和の準備に万全を期されるよう改めてお願い致します」

「捕虜の日本婦人飛行士が逃亡しました。食事を運んだ水兵は裸で気絶しています」

シャーマン艦長が驚いて立ち上った。

「艦外に出られる筈はない。急いで捜せ。相手は女だが強いぞ。油断はならぬ。弾薬庫、燃料系統を特に警戒しろ」

「星が綺麗だな。あの大きな星は何だろう」

鹿島の艦橋で稔田少佐が言った。

「獅子座の土星レグルスです」

楯法子が答えた。稔田少佐は名目上の艦長だが実際の指揮は楯法子が執っていた。

「あの一等星は？」

「乙女座のスピカです」

鹿島はサンベルナルジーノ海峡を越えて東に向っていた。乗組総員千二百名。婦人部隊第一、第二中隊と教官の殆んど全部が乗っている。旧式ながら中部太平洋の決戦に微力を加えんとする決意は缶内の石炭よりも激しく燃えていた。

「北の水平線上に雲のような光が見えるが」

「アンドロメダ座の渦状星雲です。俗に大星雲と呼び、銀河系に匹敵する他の宇宙です」

浦賀船渠で大改装された鹿島は練習艦から補助任務に就き得る海防艦に変容していた。

艦首の十二吋砲は建造当時の俣だが、両舷中部の十吋砲撤去跡には二十五耗二聯装高角機関銃四基が据え附けられている。後部は徹底的に改造され、教室、講堂、居住区は全部取り去られ、一箇の巨大な格納庫と高い平甲板が新設された。航空母艦の後部を思わせる巨大な空間は兵員、兵器の急送に適するが、今日は婦人部隊の全航空力を収容している。新

式化(?)された機種は九六式艦上攻撃機。

その三機は格納庫内に、二機は甲板上に露天繫止されていた。そして神酒慶子以下十五人の婦人部隊航空科全員も艦内に居た。

「アンドロメダ王女か。併し、あの星座は人の形に見えないぞ」

「端のガンマ星が左足先。次のベータ星が左腿。デルタ星が肩。大星雲が腕に当ります」

「窮屈そうな姿勢だね」

「その筈です。あの星座は鎖に縛られた王女を象っています。アンドロメダ姫は何千年でも同じ姿勢で天に晒されているのです」

× × ×

無線封止中のレキシントンから怪電波が幅射された。通信室からではない。他の何処からか、弱勢力の中波だ。

「サラトガ型二隻、ヨークタウン型、エセツクス型、インデペンデンス型各三隻」

日本語の平文モールス符合だった。

「格納庫だ。急いで予備飛行機を調べろ」

副長ヒアリー中佐以下が慌てて搜索した。

「レンジャー型、ワスプ型各一隻。アイオワ型二隻、ワシントン型六隻」

発信は続いている。八十四機の常備機と十二機の予備機が一斉に検査された。

「居たぞ」

アヴェンジャー雷撃機の胴体内に隠れて電鍵を打っていた倭操子が曳き擦り出された。

無数の拳が撲り掛り、大勢の足が蹴り上げ、踏みつけた。鋼索や電線や綱具や、凡ゆる材料で米俵の如く縛りあげられた。

「八吋砲弾を足に縛りつけて海へ抛り込め」
嗚咽しているのはハルゼー提督らしい。

× × ×

五月十六日。

ニミッツ中将は航空攻撃の開始を命じた。予定より一日早い。機動部隊の位置はロングラップ島北方百哩。米海軍のドントレス偵察爆撃機やワイルドキャット戦闘機の航続力にとっては少し遠過ぎる攻撃距離だが、日本軍が昨日の電波を受信したとすれば遅延は許されなかった。

一千封爆弾搭載のヘルダイバー爆撃機。

二千封爆弾装備のアヴェンジャー雷撃機。

ドントレス偵察爆撃機は五百封を携行。

直衛する戦闘機はワイルドキャット。

攻撃隊総兵力は六百三十機。

常備機数の七割を放ち、二隊となってロングラップとクエゼリンに襲い掛かった。

レキシントンの船倉内には手足を縛られた

倭操子が半死半生で横臥していた。厚い眼隠しに遮られて何も見えないが聴覚だけは僅かに働いている。朦朧となりかける意識の中に嵐の如き大空軍の爆音が響いていた。

× × ×

「第一艦隊トラック島へ向ヶ出港セヨ」

戦艦群は象徴的主力に過ぎないが空母の前衛には成り得る。燃料経済の為、及び東亞水域に戦艦を動員するに足る敵が居ない為に今迄本土に留っていたが遂に出陣の時が来た。

前衛は阿武隈の嚮導する第一水雷戦隊。

続いて世界最大の超戦艦大和。第一艦隊司令長官。大将近藤信竹の旗艦である。

第一戦隊の戦艦陸奥、長門、

第二戦隊、伊勢、日向、山城、扶桑。

第四航空戦隊の軽空母竜鳳、鳳翔。

第六航空戦隊の補助空母飛鷹・隼鷹。

九三式遠達酸素魚雷四十本を装備した重雷

装巡洋艦北上・大井から成る第九戦隊。

後衛は那珂を旗艦とする第三水雷戦隊。

これに水上機母艦兼甲標的母艦瑞穂と特設

給油艦東栄丸、東邦丸が加り、すべてで堂々

四十二隻。舳艫相含んで豊後水道を出撃し、

十四節の艦隊速力を以てトラックへ向った。

山本五十六の独立旗艦武蔵と第一駆逐隊四隻

だけが柱島錨地に残留している。

× × ×

五月十七日。

ニミッツ中将の機動部隊はマーシャル群島の奥深くへ侵入し、クエゼリン、ルオット・ヤルートの諸島を反復空襲した。艦艇の一部は沿岸砲撃を開始した。これに対し日本軍は砲火で応戦するのみ。飛行機も艦艇も圧倒的に強大な米艦隊を避けて西方に一時撤退し、僅かな潜水艦だけが接敵を続けていた。

此の間にも、キムメル大將の直率する艦隊

と三箇師団を分載した攻略船団は東北方から

マーシャル群島に急接近しつつあった。

× × ×

武蔵・龍・曙・暁・響の五隻は第一艦隊に

一日遅れて柱島を発した。第一・第二・第三

艦隊は嚴重な無線封止下にトラック島への集

結を急いでいる。列外に在る武蔵だけが随時

電波を幅射して命令する事が出来た。これは

又、艦隊主力の所在を秘匿し、敵潜水艦を欺

く効果が有った。

武蔵は大和の同型艦だが司令部居住施設を

拡大改良した旗艦適任艦である。山本五十六

は此の艦を移動司令部として使用した。彼の

幕僚は冷房完備の作戦室に在りベストコンデ

イションの頭脳で作戦計画に没頭した。

× × ×

五月十八日。

キムメル大將揮下の艦隊が艦砲射撃を開始した。条約型戦艦十五隻に練習戦艦を再武装したワイオミングとユタを加えた巨艦群が百八十二門の砲口を揃えて三千噸の鉄量を撃ち込んだ。十四隻の特設空母も視界内に現れ、四百余の飛行機を以て空襲を反覆。日本軍の呂号第六十潜水艦はトレントンを撃沈した。

× × ×

五月十九日。

海兵第二師団はルオット島上陸に成功。

クエゼリン島上陸を試みた海兵第一師団は

大損害を受けて撃退された。

米軍の上陸計画は大規模だが不完全。殊に

沿岸測量を欠いていた。使用海図は一八四一

年版。接岸可能と思った岸は遠浅。通過予定

の水路は塞っていた。珊瑚礁が百年間に増殖

して珊瑚礁の地形を一変していたのだ。舟艇

は沖に停り、水陸両用車^{アムトラック}は不足。肩迄浸って

徒歩進攻する兵士は掃射されて潰乱。珊瑚礁

上に臥して収容を待つ傷者は次回の満潮で溺

没した。

此の頃、ニミッツの機動部隊は西進してエ

ニウエタック島を空襲しつつあり、三島同時
攻略を目標とする米軍の大作戦は茲に全貌を
現した。

五月二十日。

砲爆撃がクエゼリン島の椰子林を吹き飛ば
した。珊瑚礁の地形が根底より改まり、米國
海兵第一師団は上陸を再興して橋頭堡を確保
した。

同じ日、エニウエタック島の沖にも艦隊と
船団が現れ、激しい艦砲射撃を開始した。

設堡陣地の中で磐城朋子が沖合を見ながら
傍の同僚に言った。

「私達には重火器も装甲車輛も有りません。
人数は僅か六百。此の島を守り抜こうという
ような分に過ぎた野心は捨てましょう。クエ
ゼリンとルオットの健闘に期待し、少しでも
多くの敵を傷つけ、僅かな時間でも敵兵力を
拘束する事に全力を傾注しましょう」

三千人を収容すべく計画された堅陣に、迫
撃砲と小銃、機関銃のみで武装した六百余の
婦人兵が分散し、配置に就いている。

テニヤン島の第一航空艦隊司令部で基地航

空隊の総指揮官中将大西滝次郎が言った。

「聯合艦隊の集結完了はあと五日。東進して
決戦を挑むには更に二日。それ迄三島中の何
れか一つが保ち耐えてくれたら航空戦は極度
に有利となる。敵艦隊は陸戦隊援護の為に機
動力を失い、味方は自由な攻撃時期を選べ
る」

五月二十一日。

スミス少将のターナー中将宛報告。

「ルオット島ノ日本軍ハ陣地ヲ出デ、大逆襲
ヲ敢行シ来レルモ海兵第二師団ハ奮戦コレヲ
撃退セリ。ソノ結果。日本軍ハ大部分ノ戦力
ヲ失イ、戦闘ハ残敵掃蕩ノ段階ニ入レリ」

エニウエタック島の磐城朋子等は上陸して
来た米國陸軍第七師団を邀撃中。

ニミッツ中将の機動部隊は洋上補給を行い
つつ日本艦隊の来襲に備えている。

レキシントンの船倉内では俵操子が六日間
縛られた俵で転がされていた。

物好きな黒人水兵が居て、最初の数日間
縄は解かなかったが食物を運んだり身体を拭

いたりしてくれた。併し航空戦が高潮すると
誰も来なくなった。彼女の存在が忘れられた
のでもあるまいに。

一週間分の食糧と称するチーズ一片と、バ
ケツ収容器一杯の水だけが置いてある。手を
使わずに勝手に飲食しろという意味らしい。
身体は汚れ放題。腕も脚も麻痺している。

眼隠しだけは壁に擦りつけて顎の下に落し
た。併し窓から外を見る為に立ち上るだけの
気力も体力も無い。外界の気配は音だけで察
した。機動部隊の航空攻撃は一段落したよう
だ。日本軍の反撃は未だ行われていない。

グム島攻略を行った第十一師団はアプラ
港で乗船準備を完了していた。その将兵に向
って軍参謀辻政信が訓辞を行っている。

「マーシャル群島に過度の大兵力を配置する
事は寧ろ有害だ。補給の所要量を増すばかり
で防衛力はそれに比例しない。少数の精兵を
堅固な陣地に配置する現行守備方式こそ理想
の形態だ。徒に多くの人命を火力に曝さず、
只一週間の死守のみを期す。その間に聯合艦
隊と第十一師団が逆襲するのだ」

五月二十二日。

「エニウエタツク島守備隊の健闘には幾ら感

謝しても足らぬ。此の島こそは聯合艦隊が攻勢に転ずる際の旋回軸になるだろう」

五月二十四日。

天皇陛下は軍部大臣を宮中に召された。

「エニウエタックは未だ保ち耐えているか」
米内も梅津も、言葉もなく拝伏した。

クエゼリン島の日本軍は善戦空しく玉砕。

バックナー中将は焦った。ブラウン少将を

挿絵画家募集

○本誌発表の作品にふさわしい幻想的で優雅な異色画を求めます。

○用紙は必ず白い画用紙に墨汁又は黒インクにてお書き下さい。鉛筆や青インクはお避け下さい。大きさは御自由ですがなるべく二倍乃至三倍位が適当です。

○優秀作品は本誌の最近号に発表の上、読者の反響の如何によつては、本誌専属挿絵画家として毎月執筆願います。

○従来、S画（主として女体緊縛）或はM画、女体切腹などについて多くの方々から御応募頂きましたが、残念ながら特に傑出した作品には接しませんでした。どうか奮て力作をお寄せ下さるよう、お待ちしております。御送稿は第一種便にてお願いいたします。

解任し、自ら上陸して攻撃の指揮を執った。

彼はその夜、間近に落下した迫撃砲弾の破片に心臓を貫通されて即死した。

「長官」

参謀長宇垣纏が呼びかけた。

併し山本五十六の姿は見えない。

十八節でトラック島に急行する戦艦武蔵。

闇の海面に白い波頭が躍っている。

「長官は上部艦橋に上って行かれました」

従兵が言った。

海面上三十四米。吹き晒しの見張所。

星光の中に人影が見分けられた。

「長官」

参謀長は思わず立ち止った。

彼は見た。遙か東方、マーシャル群島の空

に向つて合掌している提督の姿を。

五月二十五日。

エニウエタックが陥ちない。

全国民が健闘を称えた。そして守備隊名と

指揮官名の発表を待ち望んだ。

併し大本営は固く沈黙を守って語らず。

既にルオット島を屠つて意気高い海兵第三

師団が猛将スミスに率いられてエニウエタック島の北海岸に上陸した。

指揮官を失つて沈滞していた陸軍第七師団も競争者を意識して奮い立った。

守備の婦人部隊は一週間の激戦に疲労し、弾薬も欠乏していた。何よりも兵力が少い。

今日迄阻止したのは敵が火力に頼り過ぎた為と言える。我が兵数を悟られたら終りだ。

「日本艦隊来襲ノ兆候アリ。攻略ヲ急ゲ」

キムメル大將はターナー中将に命令した。

「出血の覚悟ノ上デ前進セヨ」

ターナー中将がスミス少將に命令した。

二十五隻の戦艦から撃ち出す砲火が全島を掩い、千三百の飛行機が上空を乱舞した。

スミス少將のターナー中将宛報告。

「日本軍ノ主要抵抗線ヲ掃蕩セリ。守備兵ハソノ部署ニ於テ戦死ス。大部分が女兵ナリ」

ターナーは卓を叩いて怒った。

「欺された。精鋭な本隊は始めから存在していなかったのだ。最初に突撃していれば容易に攻略出来たものを」

山本五十六はトラック島北方で決戦兵力の集結を終った。第一、第二、第三、第四艦隊の全部。第六艦隊潜水艦の大部。第七艦隊の一部。第一航空艦隊の基地航空隊。

正規航空母艦六隻。補助航空母艦七隻。特設航空母艦三隻。戦艦十二隻。重巡洋艦十八隻。軽巡洋艦十九隻。駆逐艦九十九隻。潜水艦六十三隻。水上機母艦三隻。其他敷設艦から小艦艇迄決戦陣に編入して三百二十七隻。艦上機六百七十八機。陸上機四百九十五機。水上機百二十六機。

燃料の洋上補給も終った。

「東方ニ進撃シ敵ヲ撃滅セムトス」

山本五十六は東京に電報した。

× × ×

米潜水艦もトラック島に蛸集していた。軽巡洋艦天竜がアルバコアに撃沈された。

米潜水艦の多くは有能且つ勇敢だった。

併し魚雷の磁気信管は作動不完全。炸薬も未だトルペックスを使用していなかった。特務艦野島は不発魚雷に船倉貫通、軽微な浸水。東邦丸も雷撃されたが早発の為に被害を免れ給糧艦間宮の如きは不発魚雷を腹に刺した俛で無事帰還した。

米潜水艦トラウトは此の間に撃沈された。

五月二十六日。

米艦隊は二群に分れた。

西進するニミッツ中将の快速機動部隊は航空母艦十三隻、新式戦艦八隻、重巡洋艦十八隻、軽巡洋艦十二隻。防空巡洋艦四隻。駆逐艦百二十隻。飛行機九百機。

エニウエタック島周辺に留るキムメル大將直率の攻略艦隊は特設空母十四隻、旧式戦艦十七隻以下艦艇三百七十隻。飛行機四百二十機。他に輸送船団百六十五隻。

× × ×

海兵第二師団長スミス少將は海岸を逍遙していた。エニウエタック島の戦闘は最後の掃蕩に入り、狙撃兵の弾丸も飛来しなくなり、直轄中隊は立った俛で歩き廻っている。

擱坐していた水陸両用車が沖に向って動き出した。満潮の為に浮き上ったのだろうか。

「俺は見たぞ。裸の兵士が泳いで行くのを」戦闘疲労症で頭の回転が鈍くなった海兵が何かを思い出そうとしていた。

「確か三人、あの水陸両用車に向っていた。俺は撃たれながら見た。日本兵だ。脇腹を隠さない下着。褲を締めていた。」

彼は、危い、伏せろと叫んだようだった。

だが次の瞬間、水陸両用車から撃ち出された米製機関銃弾が彼の眉間を貫通していた。

スミス少將は個人壕に飛び込んだ。その上に幕僚の死体が倒れ掛った。水陸両用車は岸近くを航過しながら掃射した。内陸に向って掩堡を作った米軍は海上からの反撃に対して無防備な背面を露出した。一箇中隊が算を乱して潰乱した。

「砲兵を呼べ。銃弾では装甲を破れないぞ」スミス少將が叫んでいる。

此の時、異変を察したのか、遙か沖合から一隻の機動高速水雷艇が突っ込んで来た。

「R・T・一〇九号だ。頼むぞ」五十七耗砲が火を吐いた。水陸両用車は中央部から二つに割れ、急速に沈没し去った。

× × ×

「気がついたね。外傷は無い。水も飲んでいない。気絶してただけだよ」

ハスキーな、早口の英語だった。磐城朋子は驚いて寝起きした。

「君は勇敢な兵士だ。他の二人を救助出来なかったのは残念だが君のような勇士に遭えた事を嬉しく思うよ。それに君は美人だ」

明朗快活。典型的なヤンキー青年だった。

階級章は銀色の材木一本。中尉だから二十五

▽賞金△

入選作品	一席	1篇	五万円	10篇
入選作品	二席	1篇	三万円	10篇
入選作品	三席	1篇	一万円	10篇
入選作品	四席	1篇	五千円	20篇

▽内 容△

一、特異な風俗文獻誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェッ、シュ一般、女性切腹、男性切腹、男女性、美、女相撲、女斗美、生首狂崇、変装、妊婦嗜好、見世物奇態珍聞、奇習珍奇風俗、風俗文獻紹介、同性愛、アブラブ等をはじめとして、その他古今東西に亘る特異風俗に関する題材を広くとりあげて下さい。

一、広範囲に大いに新分野の開拓による力作を歓迎します。特に従前本誌にて余り扱っていない分野の傑作をお待ちします。

▽規定△

一、形式は創作、小説、読物などのフィクションも結構ですし、又自らの体験による告白や手記、見聞記、実見談でも結構です。更に論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲など、如何なる形式でも最もお得意のものをお選び下さい。

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。作品の中に引用部分があれば、その出処（作者、書名など）を明記願います。以上の二枚は四百字詰原稿用紙換算にて三十枚以上二百枚まで。必ず二百字詰又は四百字詰の原稿用紙をご使用願います。入選作品は順次、次の誌上に発表いたします。一回、懸賞応募原稿は、他の一般原稿と区別する。ため第一頁に「懸賞」とお書き下さい。返信、料、封の上、その旨添記して下さい。一、原稿の送付先は、大阪市住吉局私書箱第四百一十一号、曉出版株式會社（第一種郵便）によつて下さい。直接の訪問は固くお断りいたします。下募集係宛。必ず郵送（第一種郵便）によつて下さい。採否は誌上発表を以てご承知願います。

才前後たろう。併し二十才丁度にしか見えなかった。瘦形で大きな眼。美男子と言える質ではないが愛想の良さは生来のものらしい。

「僕はジョン・フィッツジェラルド、ケネディだ。ジョンと呼んでいいよ。小さなボートだから何も無い。缶詰で我慢してくれ」

艇長というより金持の坊や然としている。

相当なフェミニストらしい。ポークビーンズの中缶を開け、半分は皿に盛って磐城朋子に奨め、残りは缶の底で自分が取った。

「所属と階級。嫌なら名前だけでもいいから教えてくれないか」

磐城朋子は軽く一礼して受取った。

「近衛婦人部隊退役伍長磐城朋子です。武運」

拙く捕虜になりましたが、機会さえあれば必ず脱走しますから、警戒を怠らないように願います」

流暢な英語で返し、挑発的に微笑した。

ケネディ中尉も笑って答えず。

五月二十七日。

「攻撃隊出動セヨ」

未だ暗い内に大西滝次郎は出撃を命じた。

テニアン・サイパン・ロタ・グアム・トラツ

ク・ボナペの基地から大攻撃隊が発進した。

一式陸上攻撃機百六十二機。零式艦上戦闘機

二百十六機。二式大型飛行艇九機。

黎明と共に敵空母へ殺到する作戦だった。

×

×

×

エレベーターの騒音が喧しい。

死んだように動かなかった俵操子が索具の

間から逼り出した。両手は依然として背に縛

られている。手首から先は紫色に変わり、狭く

暑い船倉に満ちた悪臭も麻痺した嗅覚には感

じなくなった。併し彼女は生粋の軍人だ。戦

闘の気配を知るや直ちに生き返る。

「只事ではないようだ。日本海軍の総反撃が

始ったのではあるまいか」

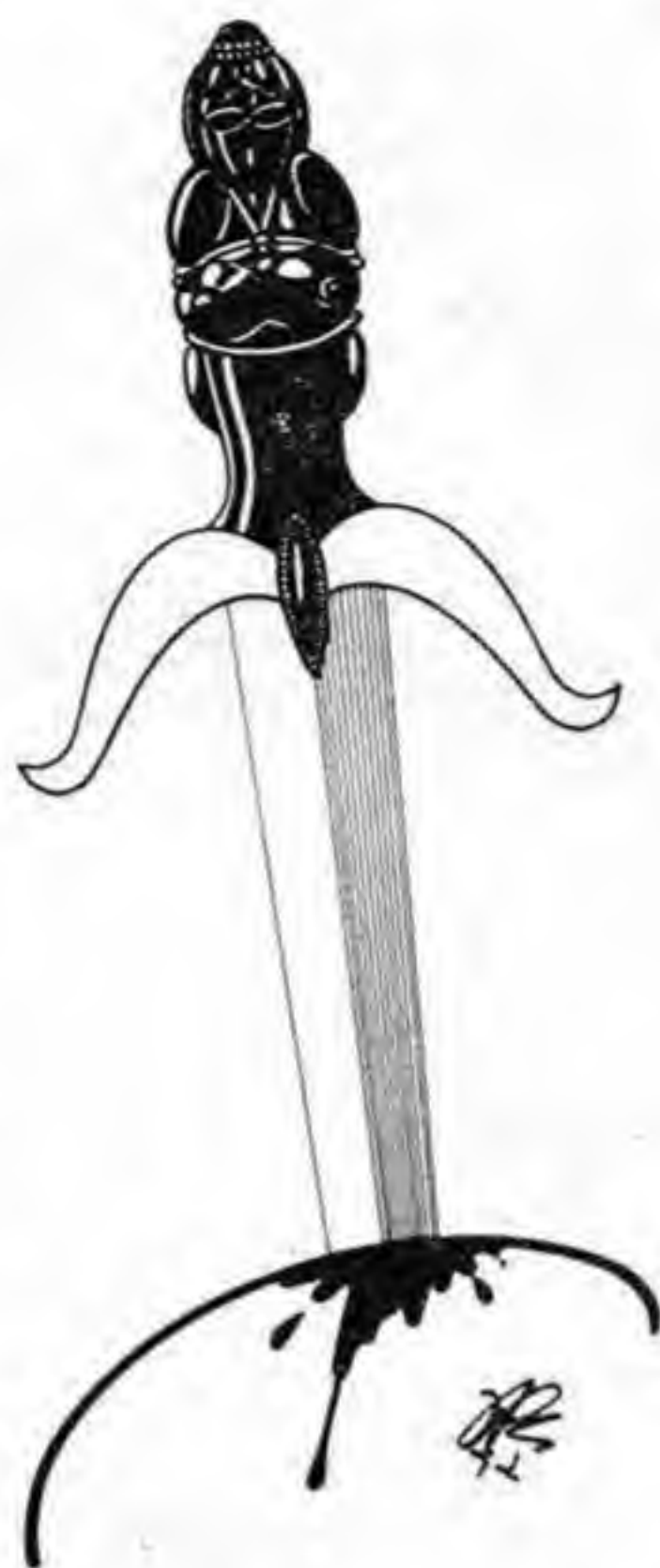
(未完)

古来、コルシカでは裁判や法律より、銃とか、あいくちの方が尊ばれて来た。目には目、歯には歯というような原始的な復讐、これをガンペッタ、という。

復

讐

(その2)



|| (ガンペッタ) ||

千葉青鬼

△デイスポーター▽

マジックミラーに見せつけられた狂舞、しかもその哀れなスターが、最愛の一人娘恵利香であったとは。緋沙絵夫人にとって、あまりにショックが強すぎたと言わなければならぬ。油汗を流しながら、こらえにこらえていた彼女も、遂に精も根も尽き果ててしまっ

たのであろうか。男のねらった通り、又もや失禁状態に陥り、次第に気が遠くなっているのだった。

黒い男は、気を失った緋沙絵夫人を拘束椅子から解放した。力のぬけた夫人の身体は、グニャグニャと床にくずおれてしまった。それに、もともとおり身ずくろいをさせ、ワンピースを着せてやると、部屋の隅から一メートル

ル程の犬鎖を引きずって来た。一端は足錠になっており、他端には錠前がついている。足錠の輪を緋沙絵夫人の足首にガチャリと音をたててはめこみ、錠前のついた端を、床の中心に埋め込んである金具に固定した。そうしておいて、一諸に持ってきた黒皮のカバンを開けて、注射器を出し、強心剤とバランスをポンプの中に吸い上げ、夫人の上膊につき

立てる。ものの一分とはたたない。

低いうめき声をあげて、ものうげに両眼をひらいた緋沙絵夫人は、黒い男が視野に入ると、たちまち一切の出来事をよみがえらせてしまった。恐怖に、その眼をひきつらせながら、立ち上って逃げようとする。しかし、それも鎖の限界だけであつた。足をとられて、もんどりうって倒れる。必死に鎖を抜こうとしても、ガッチリと施錠してあるので、これも空しい努力にすぎない。絶望した彼女は、辛うじて男に背を向けて、ただ泣き伏すばかりだった。男は椅子に腰を下して、だまってそれを見ているだけである。

しばらくして、緋沙絵夫人は心を決めた様子で男に向って坐り直した。

「あなたは一体、何のうらみがあつて私達をこんな目に遭わすのですか。お金が目的ならいくらでも差上げます。どうか、私達を自由にして下さい」

覆面の中で、フフ……と含み笑いを洩らしながら男はいうのである。

「別にどうということはないさ。ここは、もう日本から遠く離れてしまっている。人身売買だって公然と認められている国だ。あんた方が少しでも高く売れるように、ミッチリ仕

込んでやるさ。身代金なんて危険な取引はする必要がない程、高く売る積りだよ」

残酷な男の考えに、緋沙絵夫人は胆をつぶさんばかりにおののく。今までのことから、男が単におどしているのではないということが痛切に感じられるからである。

「どうか、どうか」

恥も外聞もふりすて、緋沙絵夫人は男の膝下にひれ伏して絶句してしまった。男は無言のまま足をあげて、夫人を突き転がした。

「今さらおそいよ。生かそうと殺そうと、こっちの思いのままじゃないか。いいかげんであきらめて、よい奴隷になるよう心掛けるんだな。そうすれば売り飛ばすのは止めて、親子一緒に飼ってやってもいい」

母性愛が電光のようにひらめいて、緋沙絵夫人は、せめて娘だけは助けようと心に思い定めた。

「お願いです。私は何とでも、あなたのおっしゃるとおりに致しますから、娘だけは帰してやって下さい。これだけは諾いて下さいまし、お願いします」

憎むべき黒い男を、両手を合わせておがむみじめさ。それでも、恵利香は助けなければと必死である。

「だんだん聞きわけがついて来たじゃないかね。その調子、その調子」

男はアザ笑うように言った。

「おまえとちがつて、恵利香はもう大分調教が進んでいる。恵利香を十万ドルに売るのはそれ程骨の折れることじゃない。だが、おまえにはまだ五千ドル位な値うちしかありやしない。十万ドルを五千ドルと取りかえるって。そんな馬鹿な取引はあまり有難くはないね。それに、二人とも、もう僕の所有物なんだから」

普通なら気が遠くなってしまうような話だが、注射のきき目で夫人はそれも出来ないものである。

「どんなことでも、一生懸命にいたします。

さもないと……」

「さもないと、どうするんだね」

「私は生きておりません」

決然と言うのに、

「おや、おや、まだわかつちやいないんだねえ。生きるも死ぬも、おまえの自由じゃないんだ。そういうと、舌を噛んでも死んで見せると言いたそうな顔をしているね。よからう話してあげよう。隣の部屋に、流しがある。その中に大きなディスプレイがっている

んだ。死んだやつは、コマ切れに刻んで、このディスプレイに入れる。骨も肉も、細かくなって下水の中に流れてしまう。よく水を流せば、証拠も何も残さずに死体を仕束することが出来るんだ。おや、顔色がわるくなっただね。どうだ、舌を噛み切ってみたら。今までだって、いうことを聞かなかったやつは、みんなディスプレイの歯で粉々にしてやったんだから」

又しても、打ちひしがれた緋沙絵夫人。今度は胸がわるくなって、激しい動悸にさいなまれなければならない。いっそ、気がちがってしまったのなら、どんなに楽であろうかと思う。万策つきて、手放しで、ワアワア泣きながら、子供がやるように、

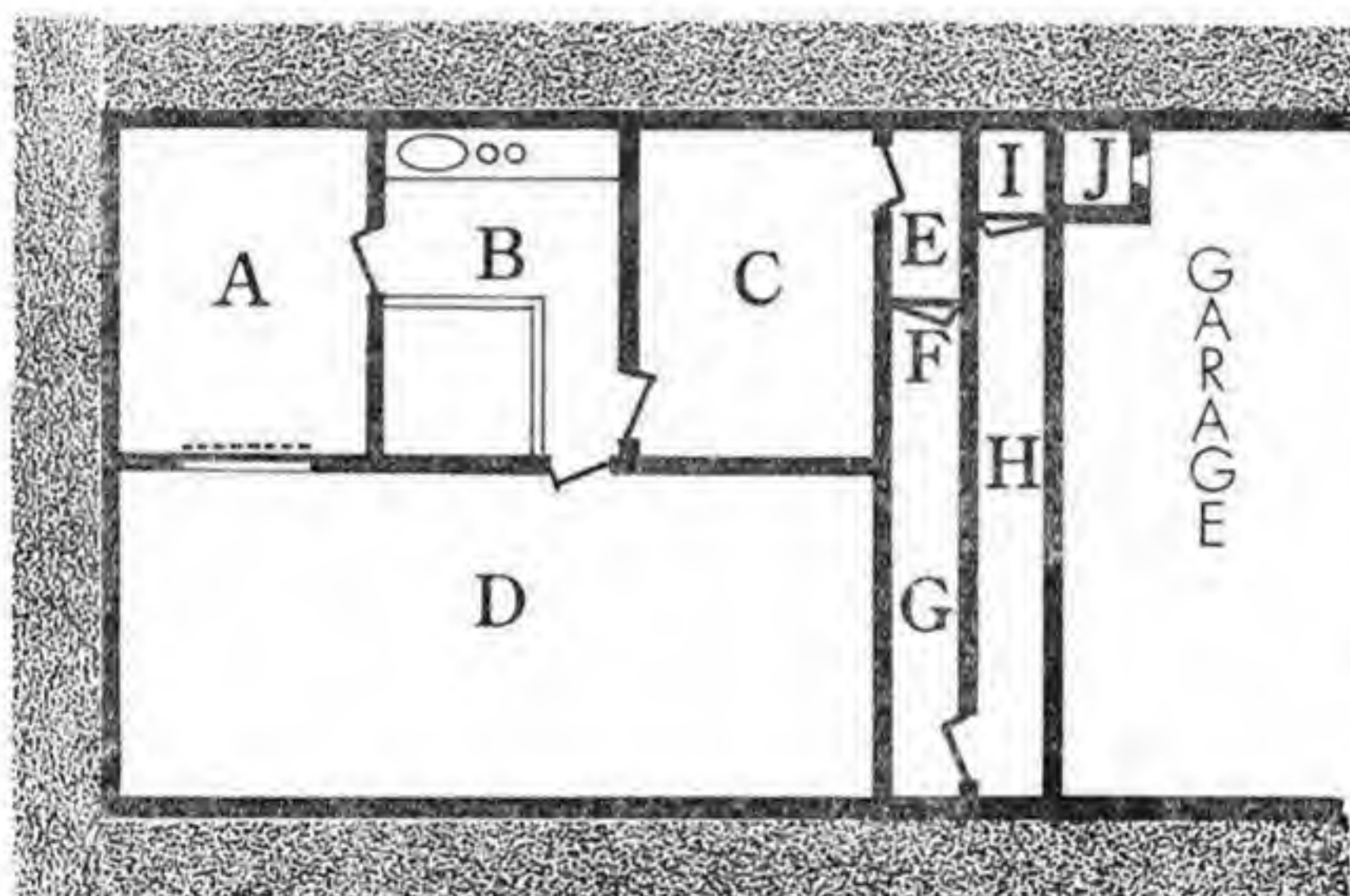
「恵利香を、恵利香を助けて」

と、男の足にむしゃぶりつくのであった。

男は、緋沙絵夫人の髪をつかんで引き起しながら、低いがしかしドスのきいた声で、

「うるさい。わめくと承知しないぞ。おまえが静かにならなければ、恵利香の命はないと思え」

たちまち、夫人は棒立ちになってしまう。眼に一ぱい涙をためていても、泣声を出すことは許されないのだと覚ったのである。



緋沙絵夫人が完全に屈服したのを見定めてから、男ははじめてやさしい声を出した。「俺の言うことを、何でも聞くと誓うのなら恵利香の自由は考えてやってもよい」

薬をもつかむといった気持で、緋沙絵夫人はこの言葉にとびついて行った。誘うとみせては突き放し、突き放すとみせて甘言を弄する調教師の手練手管に、まんまと乗せられてしまっているということなど露ほども知らないのである。

「えっ、それなら、恵利香は助けていただけるのですか」

「そうだ。だが、それもおまえの努力次第だぞ」

「はい。私はどうなっても構いません。あなたのお指図の通りに致します。ですから、ですから、恵利香だけは……」

男はそれに答えず、

「では、まず裸になって見せて貰おうか」

冷酷な声がハネ返ってくる。暫くの躊躇、そして半分は自暴自棄になったように、緋沙絵夫人は一枚又一枚と、身にまとうものを自らとり除いて行くのだった。最後の一枚になって、さすがに、例のビーナスの像のように片手で胸を庇いながらためらう。

「これだけは許して」

蚊の泣くような声で哀願するのに、

「馬鹿。そんなことで恵利香を自由に出来る

と知っているのか。さあ、早く素ッ裸になつて見せろ」

と声もあらしく罵り返されて、泣くなくショーツも自ら脱がねばなくなる。そして、緋紗絵夫人は、本能的に両肩をおさえて、壁際にうずくまってしまふのであった。

「立てッ」

鋭いムチのような男の声。

「両手を頭の後に組め。両足を揃えてツマ先で立て」

オロオロと立ち上って、無理矢理に作らせられるポーズに、いきなりフラッシュがあびせられる。続けさまに起るシャッターの音。

次から次へと強要される様々な姿態に、無我夢中で撮影されたショットの数はかぞえきれないほど。夫の雅義にさえ見せたことのないあさましいポーズを、むしろ誇張される位にフィルムに刻みこまれてしまったのであった。

いつの間にか、両手を後に縛られて、その代り、足錠は外されていた。

「坐れ」

という命令に、今度はヘナヘナと膝をそろえて正坐させられる。豊かな胸部をかくそう

にも、後手に縛られた手ではどうすることも出来ない。せい一ぱい前かがみになって、すこしでも見えないようにするだけだった。その鼻先きに置かれた白い紙片には、次のような宣誓文が書かれていた。

私はあなた様のドレイでございます。
私はあなた様に飼育される畜生に過ぎません。

私はあなた様に、このいやしい肉体と貧しい精神の一切を捧げてお仕え申し上げます。

あなた様から頂戴するお仕置が、私の欲びとなるまで、存分にお鍛え下さいませ。そのために、私の自由とか人格が、どのような無視されても、少しも後悔いたしません。

私はあなた様に、心から服従をお誓い申し上げます。私の命も、私のすべてが、あなた様の持ち物でございます。

「読めッ」

という号令がかかる。

あまりといえはひどいその内容に、緋紗絵

夫人の心は悲想にひしがれてしまふ。その上恥しい裸身を、あますところもなくさらして男の足下に平伏しなければならない浅ましさに、ともすれば読む声もシドロモドロになっ

てしまふ。

「やり直しッ」

とか、

「もっと大きな声を出せ」

とか、叱咤がとぶのである。

最後に男は言った。

「いいか、今から五分間でチャンと覚えてしまふんだ。それでも出来なければ懲罰だぞ」

△ 鼻 吊 り △

ここで、この美しい母娘が閉じこめられている地下室の構造を説明しておこう。間取図のようにA、B、Cという六畳ほどの小部屋が三つ並んでいて、このすべてに接して約十八畳のD室がある。この密室への出入は、これが建てられているマンションの五階にある黒い男のレジデントから秘密のリフトにぶらさがってIに降りなければならない。この縦穴はダストシュートを一部仕切って作ったものである。つまり、一般の人たちはガレージ

の隅にダストシュートが附属しているとしかがつかないように巧妙に偽装されているのである。(このことは、これからの物語りの理解に不可欠であるから記憶にとどめておいていただきたい)

さて、リフトIによって地下室へ降り立つと、今度は平行的な二本の廊下、H、Gを通過する。これは防音と隔離性を強めるために設計されたもので、どの扉も、それとわからないうちにカムフラージュされている。つまりカラクリを知らない人は、H室へ入ったとしても袋廊下としか見えないし、G室へ移るドアを発見することが出来ないのである。G室も全く同様で、一見全くの密室としてしまうことができる。そしてやつのことで、前室Eを通過してC室に入ることになる。

C室は真赤な厚手の絨氈を敷きつめ、コンパクトではあるが、立派な家具と調度で落ちついた寝室としての雰囲気醸し出されている。ダブルベッドも、ふだんは壁にはめこま



れているけれども、スイッチ一つでセット出来るようになってくる。

B室はバスルームとキッチンになっていて下流しには男のいったように特大のディスプレイサが取り付けられていた。この他、バスルームの仕切りが透明ガラスで出来ていることが変わっている。

A及びDの二室は、壁も床もムキ出しのコンクリートで、何のかざりもない。Aは主として拘禁用に使われ、Dは訓練或いは調教用に用いられ、それに必要な器具装置がとりつ

けられている。それらはこの物語りの進展に応じて逐次説明されるであろう。この二室を仕切る壁に例のハーフミラーがとりつけられているのである。すなわち緋沙絵夫人はA室から、D室の恵利香を見ていたわけになる。

宣誓文を五分間で覚えておけと言いつけたまま、男はA室を出た。外側からは簡単にあけられるが内側からは鍵がなければあかないノブがつけられている。キッチンを通り抜けて今度はD室へのドアを、キーを鳴らしながらあけた。

恵利香は、このD室に閉じこめられていたものである。再び華やかな衣裳をまとっていたものの、さすがにぐったりと床に倒れ伏していた彼女は、男の姿を見ると恐怖におののきながら、あわててコンクリートの床の上に正座すると、まるでお茶の会が何かのように三指について深々とお辞儀をするのだった。

「脱げ」

男が簡単に命令する。女子校の名門S学院で、富と美貌を争う才媛の中でも、水際だつて群を抜いていた恵利香。クラスメートにもボーイフレンド達にも王女のように振舞っていた彼女。その誇り高き乙女が、今はコンク

リートの床に正坐させられ、又もや裸になれと強要されているのである。実際、恵利香はうんざりしていた。誘拐されてから今まで、日に十回も着物を着ることを命じられ、そのたび毎に、つまり十回もそれを脱いで裸形を曝さなければならぬ。そして脱いだ衣類は下着にいたるまでキチンと畳んで乱れ箱におさめなければならぬ。しかも殆んど一カ月もの間、洗濯一つ許されていない。さっき、ハーフミラー越しで見たからこそ真白く見えたと下着類も、本当は垢がついてヌルヌルしていた。一日に二回も下着を取りかえたいくらい潔癖だった恵利香にとって垢まみれの、しめっぽい肌着をつけなければならぬことは、何にもまさる苦痛であったのである。

何事であっても、単純な動作を繰返させることくらい人を苦しめるものはない。繰返させられる苦痛と、汚れきった下着をつけなければならぬ厭悪感。この二重奏は恵利香を自暴自棄にさせる程だった。いっそ、裸のままで、力一ぱい鞭で打たれていた方がましだとさえ思う。恵利香は、まんまと男の術中に陥りつつあったのである。

ともあれ、恵利香は命じられた通り、脱い

だものをキチンとたたみ終ると、男の前に進んで膝立ちとなり、両手を高々とあげて、男の検査を受けなければならぬのだった。

男は、抵抗を許されない恵利香を、人形を眺める如く、平然として見降していた。

歩み寄って無造作に恵利香の頭をかかえ込み、臉をひらく

「あ、あッ」

思わず体がくずれるのへ、膝で小突いて、「動くなッ」

と、どなる。恵利香の肢体は電氣を受けたようにピンともと通りに戻る。

やや顔を上向きに支えて、一ぱいにひらいた目の玉に、ポトリと真黒なコンタクトレンズを落す。続いてもう一方の目も。

目かくしをしなくても、恵利香の視力は完全に遮られてしまう。しかし、臉の内にはさまれたこの不馴れな爽雜物は、容赦なく眼球を刺戟する。痛みに顔をゆがめ、涙を流しても男は意に解さないようである。レンズを勝手にズラせないように、両手を後に廻させて



縛ってしまふ。

更に、黒い男は恵利香の鼻梁に小さい金環をはめた。一カ月かかって徐々に大きくして行った穴である。牛のように、文字通り鼻づらをつかんで引き廻すためであった。

天井から下っている鎖のナス錠にこの鼻輪を連結する。壁際のスイッチを押すと、ジーッと鈍いが強力な感じでモーターが廻り出すと、忽ち鎖が上って行く。

「ヒイッ」

派手な悲鳴をあげながら、あわてて膝を立てる、中腰になる。それでも、鼻は上方へ攀られる。立上ってしまったも、まだモーターは廻りつづけている。逆にツマ先立ちになっではもうこれ以上こらえられない。

「アッ、アッ、とめて、とめて」

必死で哀願する。ここで漸く鎖はゆるむが踵を床につけることは出来ない。鼻先きを真上に向け、全身を張りつめたようにして立つ

ていなければならないのである。みるみる恵利香の全身に油汗がにじんでくる。半開きの唇から可愛い舌がのぞいて、すすり泣きの声が洩れていた。

再び男はA室に帰った。

緋沙絵夫人は、戦慄しながらひざまずいてこれを迎えた。単刀直入に

「目をつぶって暗誦してみろ」

という。

「私は、あ、あなた様の、ド、ドレイでございます。わ、わたしは……」

と、切れ切れながら、やっこの思いで記憶をたどるのだが、最後の節と、その前の節をひっくり返してしまった。

「それみろ、まだ覚えていないじゃないか。」

どうしても罰しなければならんな」

といいながら、ポケットから汚いゴルフボールを取り出して、素早く緋沙絵夫人の口に押し込んだ。首をふって逃げようとしても手は縛られているし、男の熟練した手つきで、無理矢理に口をひらかせられて、顎が外れるような気がしたかと思うと、ボールは口中に入ってしまった。舌で押ししても外へ出すわけには行かない。

「物覚えの悪い口には、丁度いいぜ」

事実、この即席の猿ぐつわは、巧みに夫人の声を奪ってしまったのである。

こうして緋沙絵夫人はA室から、C室へ引き立てられたのであった。そして、鼻吊りにされている恵利香を見ると、われを忘れてかけ寄ろうとするのに、男が無慈悲に足払いをかけた。たちまち、つんのめって後手のまま引っくりかえる。息がつまって、暫く起きられない。

そんな緋沙絵夫人の後手に、別の鎖がかけられて、するすると引きあげられた。夢にまで見た、なつかしい娘の恵利香を目の前にして、なすところもなく後手吊りにぶらさげられてしまったのである。

男のいたずらには、まだ奥があった。今度は、細い紐のようなものを取り出して、一端を恵利香を吊っている鼻輪に結び、そこから五十センチばかり上の鎖の穴に通す。更に、いやがる緋沙絵夫人の左足を、強引にかかえて上にあげさせ、その親指にさっきの紐の端をピンと張って結び合わせてしまう。

「いいか、足をおろすと可愛い恵利香の鼻が

どうなるか」

いうまでもない。男が手を放すと、そのはずみに緋沙絵夫人の足が沈んで、紐を引張ったのである。恵利香が飛び上って悲鳴をあげた。死にものぐるいで緋沙絵夫人が再び足を突き出すと、恵利香の鼻輪がゆるんだ。

不可抗力であるとはいえ、親が子をこのように恰好で責めなければならぬ無念さに、歯噛みをしたいたい思いがあっても、口中に這入ったゴルフボールがそれを許さないのである。

(ひとでなし、鬼、……)

と罵りたくても、それも出来ない。ただ

「アー、アー」

と声にならない号泣を洩らすだけである。

一体、どのくらい片足をあげていられるかやってみればすぐわかることだが、とても数分と続くものではない。筋肉をぶるぶる震わせて、こらえてみても、腿は鉛のように重く自然に足先きが下ってくる。そして、間髪をおかずに恵利香の甲高い悲鳴を耳にしなければならぬのである。遂には、後手を絞り上げている鎖に体重をかけて辛じて足先きのバランスをとろうと試みさえする。それは又新

しい責め苦の開始だった。手先がねじれ、肩が抜けるほどに痛む。若しこのままどちらかが倒れてしまったらどうなるだろうか。恵利香のきゃしゃな鼻梁は引きちぎられてしま

うに相異なる。身の毛がよだつほどに怖しいことだ。緋沙絵夫人の総身に悪感が走って、三度目の失禁がはじまる。冷かな室なのに、母娘が交互に発する悲鳴

が響きわたって、熱っぽい、爛れたような雰囲気を感じ出すのであった。

(未完)

〔告白〕



女性肥満体

の郷愁

美川 芙美子

最近、貴誌を古本屋で見ながら、私は絶大なる貴誌のファンになりました。私は暇のあるたび古本屋をのぞき貴誌をさがしますが、仲々入手困難です。私は貴誌の肥満女性讚美に關しての記事を見てから、ひがんでいた私の人生観は一変して、毎日がたのしく生きて

行ける様になりました。そして肥満女性に対するファンが多いことを知り、自分に自信がもてる様になり、私は只今幸福で一杯です。私は小さなバーにつとめている、今年二十七才の未婚女性です。私は元々肥満体質で、昨年などは一時期七十五キロ(身長は百五十五

センチ)ぐらいまでになり、毎日、死んでしまいたい程なやんで、絶食したり、やせ薬を飲んだり、美容体操をしたりして努力しましたが、いっこうに効果はなく、苦しい毎日を送って居りました。

私は昨年末にふとしたことから、奥さんや子供さんのいるお客さんと間違いを起し、妊娠し、四カ月から五カ月の間でおろしたことがあります。今年の二月頃から私の身体は以前にも増して肥り始めました。私は、やせる苦勞をするのもいやになり、食べたいだけ食べる生活を続けて居りました。一度妊娠した身体ですので、私の乳房は(以前から相当大きく、みんなからひやかされてました)益々大きくなり、人がジロジロ見るので恥ずかしい程です。私が五カ月前におろした時にはお乳がすごく張って、毎日しぼって捨てたり氷でひやして乳の出を止めたりしました。

私の身体の中で一番肥満しているのは、何

んと言ってもウエストです。子供をおろしてからは、お腹にすぐ肉がつき始め、特に下腹などは、吾れながらびっくりする程大きく、丸々とき出し始めました。私は貴誌の記事を見てから肥満女性の話を待つ様になりました。今では肥ることに生きがいを感じる様になりました。以前はお腹が出ているので、きつくコルセットでしめたりして、出来るだけ目立たない様に努力しましたが、今ではわざと、お腹の出ているのが目立つ様な洋服を着ている程です。

私はやがて三十才にもなる身ですので、これからの結婚なんかは考えたくありません。ただ私は貴誌を読んでから、若い男の子をかわいがる様なものに非常にひかれる様になってしまい、毎日もんもんと暮して居ります。私は十五才ぐらいの優しい男の子をかわいがりたくてしようがありません。それも男らしくない、優男の方が好きです。私に若しそのような男の子が居れば、私は一生懸命に働いて、その子のために尽くしたいと考えています。

大きな乳房、そしてこの大きな、肉づきの良いお腹、私のお腹は決してたるんで居りません。固い感じの脂肪ののった肉が、私のお

腹のまわりには、たっぷりついています。私はこのお腹を突き出して、大きなお乳を可愛い男の子の顔に、息もつけないほどにあたえてやりたいのです。そして男の子に私のお腹に馬のりで、ドシンドシンと尻もちをついてもらいたい。私は、お腹が張りさけそうなのを我慢して苦しむのです。そうして、さんざん苦しんだ上で、その子にお詫びをして許してもらい、張っている両方の乳房を思いきりいじめてもらいたいのです。

私のこの様な想像は果しなく続き、生きてるのが厭なくらいなやんでいたのが解消して幸せな夢で一杯になります。こんな気持ちにさせて下さいましたのも貴誌のおかげと感謝致して居ります。どなたか、私の様な肥満女をいじめてくれる冷めたい感じの若い男性はいないでしょうか？ 私は只今、夏の服を何枚か作っていますが、ウエストは出来るだけきつく作り、やっとスカートのホックがしまる様にして居ります。そうすると、益々お腹のでっぱりが誇張されて、私はゾクゾクするのです。

私はいつも小さめのパンティをはいて居ります。それは私のお腹をつつむことが出来るので、パンティのゴムの部分の上には私の

大きな下っ腹がはみ出てすぐ迫力があります。私は人の余り居ない夜道などでは、わざとお腹を前に突き出して歩くのです。そして前から人が来たりすると、わざと両手でお腹の両脇から前にさすり、さも大儀そうに肩で息をして見せるのです。たいいていの人は道をゆずってくれますし、すれ違うときにチラリと私のお腹を見て行きます。

最近、私のお腹に肉だけがこり始めました。余り肉がつきすぎたためでしょうが、お腹のお臍から下の部分（私のお腹は異常なまでに下の方がでっぱっているのです）に所々赤っぽい薄むらさきの線が、少しずつですが出来て居ります。人に聞いたのですが、余り肥りすぎると出来るのだそうです。又、私の乳房にも出来て居ります。お乳の脇の方ですが、特に腕に近い方には何本かの肉ざけが出来てきました。

私は、これ以上肥ると、歩くのにも困るのではないかと考えたりもしますが、なりゆきにまかせて行くつもりです。私は元来、色白の方です。パー勤めが終ると、家に帰ってから三面鏡の前に立つのが毎日の楽しみです。スカートのホックをはずしパンティだけになると、大きなお腹が丸々と出て来ます。私

は、やや垂れ下がっているお腹の下の方を両手で静かに上に持ち上げるのです。そして深く息を吸って出来るだけ大きくお腹をふくらまします。それが三面鏡にうつりますと物凄く迫力が出来ます。

私は両手で軽くポンポンと腹づつみを打ったり、力づくよくお腹一面をマッサージしたりするのが、毎晩の楽しみな日課になりました。そういえば、私はしばらく以前のことですが、ピープショーというアメリカのストリップ映画を観たことがあります。その時に出演した、よく肥満した女性が凄く印象的でした。そのストリップパーは、おどりの途中で、客席に向い、肉づきのよいお腹を、うんと空気を吸って益々大きくし、それを両手でいとおしそうにさすり、観客に見せておりました。私は、この場面を一生忘れることは出来ません。その時のお腹の、なんと大きくて美しかったこと、あんなによくお腹が出るものだと思うほどでした。私は時々あの場面を思い出しては真似をして居りますが、現在の私のお腹は、あの映画以上に大きいし、迫力があるのではないかと自負して居ります。

私も貴誌を見て切腹の記事に感心し、自分

で夜中に切腹の真似をしてみますが、本当に切ることは恐ろしくて仲々出来そうにありません。ただ鏡の前でお腹を出し、刃をすりつぶしたナイフを持って真似だけはして見ますが、只それだけです。

私は自分では切れないが、むしろ若い弱い男性にお腹を切られるのなら、少々のキズや痛さは平気だと思います。私が坐っている後から、若い男性が片手で抱きしめ、片手は私のお腹にナイフを突きさすというような場面を考えているのです。

私は自分のお腹を突き出して、そり身になってあえぎます。お腹は大きく波を打って上下にふくらみ、私は片手でお腹を揉みながら、男性に切ってくれと頼みます。男性は私のお腹に圧倒されて躊躇し、仲々切れません。私は「このお腹を切って、お願い——」と泣きながら若い男性の手にすがりつきます。

間違つてナイフは、私のお腹の一番出っばっている、お臍の辺りに突きさされます。私は両手でお腹をかかえ、苦しみ、血だらけのお腹になってのけぞります。そして苦しみが静まってから、その弱々しい男性の顔を私の

大きく張った両方のお乳で圧迫し、息がつけなくなるまでいじめます。真青になったその男性をそうしていじめながら、共に苦しみ抜いて私は天国へ行くのです。こんな想像をしている時が、私の最高のしあわせです。

私は今夜から、このお腹にクリームを塗ります。そして毎晩手入をします。私は、もうやせたくはありません。お腹だけならもった肥ってもいいと考えますが、これ以上大きくなったら妊婦の八カ月腹ぐらいに見られるかもしれません。私は妊婦は好きではありません。お腹に子供がいなくて大きいのが一番美しいと思っています。

最近、私は吸乳器を買いました。それで毎晩お乳を吸い出すようにしています。別に出るわけではないのですが、私が子供をおろした後、お乳をしぼったことから、何かしらそうすることがたのしいのです。そのためか最近お乳が痛いまでに張ってくる時があります。そんな時は水みたいなのが少し出る時があります。私は弱々しい少年に、この張ったお乳を思いきり吸わせてみたいと想像し、その夢に生きるしあわせを覚えているのです。

(おわり)

S M カメラ・ハント

《青柳千紗の巻》

黒 の 拘 束 帯

辻村 隆

山本一章が大阪キタの巷で大塚啓子とバツタリ出逢った如く、いつだったか私が、大阪ミナミの千日前敷島劇場の前で、竹野ひろ子と行きずりに偶然出会った如く、会おうとして仲々会えない場合もあるのに、悪戯ずきの運命の神は、突然に思いもかけぬ人と出くわさせてくれるものだ。

京都四条河原町の、あの混雑の交叉点で、美木乃々子とバツタリ出会ったのも、謂わばそんな偶然がもたらした奇遇といえようか。

三月十九日の帰宅には少し早い午下り。その日私は徳永昭三と別れて、時間も少し

早かったので、河原町通りを三条から四条へぶらぶらと別段あてもなく散策していた。交叉点を渡って高島屋へ一寸立寄り、子供達への土産ものでも買い、すぐ帰宅するつもりでいたのだった。

信号が青に変わり、人浪に揉まれて渡りかけた路線の中央辺りで、反対側から渡ってくる美木乃々子と、まるで正面衝突のようにバツタリと出くわしてしまった。一瞬人違いかと思ったが、彼女も呀っといった声を出して、まじまじと私を見つめた。咄嗟に彼女について、渡って来た人道を引返す。美木乃々子に

は可愛い一人の連れの女性がいた。

ひる下りの混雑で、ともすれば引き離されそうになった私達は、兎も角、私の提案で最寄りの喫茶店に入ることにした。

「お久し振りね、もう随分お目にかからなかったようね」

「丸二年ぐらい経ったのじゃないかね。私は覚えてるんだよ、白川のT氏宅で拷問刑罰シリーズを撮っている最中、急に熱が出てどうにも仕様なくなったが、それで調べたら糖尿が分ったんだよ。寒い小雪のチラつく日だったが、あれから二年丁度、そしてその後も

う一度、御池飯店で待合せて、二条ホテルかで撮ったけど、あの時は余りスタミナがなかった。たしかあの時以来かな」

「ちょっと……」

美木乃々子は、私の言葉をたしなめるように眼くばせで傍らをさした。そうだ、誠に迂かつなことで、彼女の横に、美木乃々子の友達達の若い娘がいることを、私はすっかり忘れていた。一般向でないプレイの話を、よくうっかりと喋ることがある。私自身、そのプレイの環境に馴れきっていて、今更何とも思わず人前で喋るが、相手にとっては、それこそ大迷惑の場合だってあり得るのだ。美木乃々子の場合、大迷惑とはいかなくても、少々困惑していたことは確かだった。

「相変らずねえ辻村さん。人前も場所柄もないんだから」

「御免御免。ついうっかり、ハハハ」

私は照れ隠しに笑った。

「なあに、分らないさ。しかし元気で結構だね。今どうしているの？」

「相変らずよく似たことよ。去年は年が悪か



ったから、余りやいやい言われなかったけれど、今年になってから縁談せめ。明後日又お見合なんよ」

「いい加減にそろそろミコシを挙げないと、乗りおくれるよ。いい人でもいるの？」

「まあね、あるといえばあるような、ないといえはないような」

美木乃々子は、特徴のあるくるりとした円らな眸で笑った。笑うとえくぼまがいのひだが頬により、歯並びのよい白い歯が光った。

「あッ、そうそうこの人紹介するわ。私の友達で青柳さん、私の可愛いペットよ」

その娘はピョコリと頭を下げた。私はああと軽く会釈する。ピンクのハーフコートに、緑のネッカチーフ。断髪の若い澆刺とした娘で、真赤なブーツを履いて、ミニスカートから、円い膝がむき出しに覗いている。

まるでかつての小原真澄のようにピチピチして新鮮な、女になりたての蕾のような娘だった。ムラムラとハントしたい意慾が湧き上って来た。

「ダメなの？」

美木乃々子に問いかける。それだけで分る言葉の意味だ。

「ダメだわ」

にべもなく彼女はプツンと応えた。一寸、とりつく島もない。しかしここで引下ってはそれ迄だ。私は美木乃々子を見無視して、青柳千紗にジカに声をかける。

「可愛い人だね。成人式すんだの？」

「ハイ、今年の一月十五日です」

「勤めているの？」

「ハイ、二条の医薬品問屋のK薬品の事務をやっています」

「そう、二条のクスリ屋ではN製薬のプロパ―の人なんか、古いなじみなんだよ。青柳さんとも新薬を扱っているんだね」

「ええ、そうです。N製菓は京都が本社で随分大きいですから、私とこへも、プロパーの人がチョコチョコきますわ。御存知は誰方ですの？」

「Nさん、Kさんなど昔から知ってるけど」

「ああ、Kさんなら私も存じておりますわ。」

いつも面白いことばかり仰有って、笑わせるんですもの」

「チョットちーちゃん、この人C調だから、こんな調子で、すぐ女の子と仲良くなるんだけど、油断したらダメよ」

美木乃々子は、私をにらんで、ジェラシーめいた言葉を挟んだ。

「ひどいな、乃々ちゃんにも随分気を使って紳士的だった筈だよ」

「そりゃ、そうだけど……。ウチの可愛いひとなんですもの。余り誘惑せんといてほしいわ」

何かわけがあるなこれは？ 近頃多いレスピアンであろうか。そういえばこの青柳千紗なる娘は、美木乃々子に対して、お姉さん、お姉さんと呼んでいたな――。

私は思い当った。美木乃々子自身の口からはっきりと、ウチの可愛い人だと告白しているではないか。

「誘惑なんてとんでもない。まるでそれじゃドン・ファンみたいに聞こえるじゃないか。ところでこれからどこへ行くの？」

「ええ、少し時間あるから二人で、加茂川のボーリング場へでもと思っっているんだけど、辻村さんもなさる？」

私はハタと困った。近頃チョコチョコ私の娘達にも誘われるのだが、それで一度覗いてみたら、若い男女の群のムンムンする空気にすっかり圧倒されて、とうとう眺めているだけで引き返してしまっただけで、ついぞ足を向けたことがなかったのである。アイス・スケート場といい、バツティングセンターといい、どうも若者の場所のみ多すぎて、私如き中年族は、所詮チビチビなめているより仕方のない現状である。

「ボーリングか、こいつは弱ったな。正直言っただけで全然やった事がないんでね。それよりどう？ ドライブでもしないか」

「あらッ、車で来てはるの？」

「四条の南座横の、市営駐車場に置いてあるんだけど、よかったら、どこへでも走るよ」

「どうするチーちゃん？」

「お姉さんさえよければ、ウチは構へんえ」
若い娘の京都弁も愛らしい。チーちゃんは可愛い眼を見開いて、あどけなく答えた。
先程、私に返事したのは、随分かしまつて言葉使いに気を配ったのだろう。
「じゃあきまった。どこへ行こう？」
「強引やわ。とうとう辻村さんの誘惑に負けましめたわ。あんまり遠い処へ行くのも何やし、そうや、名神でも走りましようか」
私は正直言っただけでもよかった。要するに、青柳千紗との時間をもう少し持ちたい念願に外ならなかったからだ。
日曜日の河原町は凄く雑踏だった。人浪を縫って、四条大橋を渡り、やっと市営駐車場に辿りつく。折角の日曜日のアブれた半日が彼女達との偶然の邂逅によって無意味でなくなりつつあった。これからの結果が、吉と出るか凶と出るかは賽の目任せとして、兎も角午後の行動が始まったわけである。
徳永昭三が紹介するという、京都山科のY夫妻の夫婦プレーが、約束不履行で、何の連絡もない俣すっぱかされて、多少は向ッ腹も立っていて、徳永氏の弁解も勿々に別れたのであったが、現金なもので、今私の胸のしこりはいつの間にか雲散霧消して、この若い澁

刺とした娘にプレイの食指を動かし始めているのだから辻村隆もええ加減悪い奴である。

駐車場で車をバックで出し、ドアを開くと後部に二人はさっさと乗り込んでしまった。どちらでもいいから助手席に坐ってくれればいいのに、気のきかない。

まあいいや、幸い天気もよし、日も未だ高い。一走りするか――。

× × ×

京都東インターチェンジから名神ハイウェイに入る。時速九〇キロ平均で飛ばすと、もう大津のインターチェンジに入っている。霞んだびわ湖が一望の眼下にあった。

大津のパーキングで眺望していると、美木乃々子がトイレに向った。今だチャンスは。

「チーちゃん、電話してもいいかい？」

早速チーちゃんなどと馴れなれしく呼びかけて小当りに当ってみる。

「ええ、構しまへん。せやけどウチ、おじさんのこと全然知りませんねん」

私は慌てて名刺を出して手渡す。まじまじみていたが、

「へえー、えらい又変ったショーバイですねな」

と一寸意外な表情。

「ウチの電話は――」

「みなまで言うな、電話帳しらべるよ。二条のK医薬品やろ」

「日曜と祭日と、第二土曜が、お休みですね。有給休暇もとれますけど」

チーちゃんは積極的である。美木乃々子は化粧直しをしているのか、未だ戻ってくる姿が見えない。

「そうそう、一枚記念写真とったげようか。」

恰度カラーが入っているよ」

「まあ、うれしいわ。うまく撮れてたら頂戴ね」

「勿論だとも」

仲々いい調子でソツがない。今日の夫婦プレーを撮るつもり、フォト用具一式を入れた黒い鞆が、私のシートのすぐ傍らにおいてある。素早く一眼レフの、カラーフィルムを装填したカメラの方をとり出して、早撮りで二枚許りパチパチと、びわ湖をバックにして納める。再会のいいネタを仕込んだものだ。

「全部撮し終ったら、早速現像に出して、今度会った時あげるよ」

「ウチ、はよ見たいわ」

美木乃々子がそそくさと食堂の蔭から姿を見せて小走りに戻って来た。私は既にカーに

のりこんでいる。

「お待たせして御免ね」

「長い長い。おしっこかと思ったら、大きい方だったのだネ」

「いやね、変なことって。一寸顔を直していたのよ」

「道理で見違える許りに輝やいているよ。美貌益々冴えたよ」

「冗談ばかりって」

乃々子は私の背を軽く叩いた。大分気分がほぐれている。

「どちらか一人、助手席へ乗ってくれよ。一人ぼっちで淋しくて仕方ないや」

「あら、どうせ一人で京都へ来たんでしょ。勝手いってるわ」

「じゃんけんできめたらどう。次の停車で交替するとして」

「そうね。じゃあそうするわ」

美木乃々子は案外あっさり妥協した。ジャンケンポン、合い子でポン。

「勝った方が前だよ」

私は一寸真剣になって脇から口を挟む。チーちゃん勝たないかな。

淡い希望通り、千紗が勝った。可愛い子が私の横にチョコンと坐った。



栗東インターチェンジで八号線に出て、まもなく左折、琵琶湖大橋に向う。

大橋のたもとで小憩。乃々子と交替して、びわ湖を半周し、大津から国道一号線を京都に向う頃、既に陽はトップリと暮れていた。こうして、思いも掛けず、私は青柳千紗を知る機会に恵まれた。美木乃々子には悪かったが、既に私の脳裡では、乃々子は完全に脇役に廻っていた。

× × ×
会って確かかりと心を繋いでおきたいという気持は、絶えず私の心を支配し乍らも、日々の生業いに追われて、心ならずも一カ月を

経過していた。四月に入ってから、連日雨に祟られ、好天の日

は数えるほどしかなかったのも一因ではあるが、秋山夫妻のことで奔走したのも原因していた。それでも電話で二度許り、カラーフォトが出来上がったので、近々渡すよと連絡だけはしておいて、いよいよ私のミコシが上ったのは、四月二十三日の日曜日のことであった。本来なれば日曜日を避けたい私であるが、青

柳千紗の休日のことも考慮に入れて、已むなく日曜日にしたのである。

この日は珍らしく朝から久し振りの上天気であった。

プレイの可能性を考慮に入れて、車のトランクには準備万端ととのえて来た。特に四月上旬、千葉の寺西氏より御恵送いただいた、さまざまの革具一式を旅行用鞆にいれて持参してきている。あわよくば、あの愛らしい千紗に、この革具を初使いしてみたかったのである。

御池通りの、御池飯店シャンゼリゼ喫茶で私と青柳千紗は一カ月振りに再会した。

道路に面してパーキングメーターがついて、駐車には都合がいい。

既に、青柳千紗は私より前に来て待っていた。二条に近いこの辺り、土地カンもあるらしい。

真赤なセーターにミニスカート。そして今日もブーツを履いていた。ピッタリと身についたセーターの胸がポツカリと隆起し、細い金鎖のネックレスが隆起の上で揺れている。

「待たせたね、御免御免」
そそくさとテーブルを挟んで陣取り、飲物を注文して、やっと落着く。

「ホラ、これがカラー写真。よく撮れているよ」

三枚のフォトを手渡すと、千紗はニコリと笑って、白い柔かい手で受取って、チラリと眺め、

「やあ、いややわ、この一枚メメつむっては」

彼女は恥かしそうにフォトで顔を蔽った。眩しかったのか緊張して眼を瞑ったのか、一枚はさしてよくなかったが、もう一枚の方はチーズと笑って、片脚をやや前へ出している。どったポーズ。この方はいただけた。

「ウチ、どうもシャンうつりわるうてあき

まへんのんえ」

どうも奇妙である。この尖端をゆくスタイルの若い娘の言葉が、まるで安藤孝子さん式になよなよしているの、京娘と分っているもへんな気持になる。

「ドライブして、食事して、口説くつもりで来たんだよ」

「ウチを口説きはんの、まあ怖おおすこと」

千紗は口とは反対に、ニッと笑って、黒いつぶらな瞳を私に走らせた。女学生のように無雑作に短かく切った断髪スタイルが、この子を一層子供っぽく見せた。見ようによっては親娘とも見られるカップルである。ホテルへ誘う時の気恥かしさがチラリとかすめる。

何でも当って砕けるだ。うまく口説き落せれば大した拾いものだし、ポンと肘鉄喰わされて、Hやわと片付けられてもともと。若い娘とのドライブは、体の保養にもなるというものだ。どの握め手から攻めてゆこうか。

私は千紗と乃々子が、間違なくレスポスの関係にあると確信して、その方面に突破口を見出した。

「チーちゃんと乃々子、すごく仲がよさそうだね。可愛がってもらっているんだろ」

千紗はハッとした様に眼を伏せ、見るみる

顔を赤らめた。私の質問の、可愛がるという意味を、明らかに分って受け取ったらしかった。もう一押しグサリと残酷な質問の矢を發する。

「一緒に寝たことあるの？」

千紗はあわてて首を振ったが、それは弱々しかった。

「もう、そんなこと聞かんといっておくれやす」

「でもね、乃々子とは以前暫らく交際って、いろいろながことがあったものだからつい……」
「いろいろいいはると、どんなことおしやしたの？」

てっきり言葉の綾に引っ掛けて来た。乃々子お姉さんのことが気に掛ると見える。

「いろいろって、いわゆるいろいろさ」

「聞かせておくれやすな」

「いずれボツボツね。さあ、それよりドライブどこへ行こうかね」

「どこでもよろしおすわ。辻村はんのゆきはるとこどしたら」

辻村はんときたね。私は優雅な京言葉を、この若い娘にきいて、心の暖まるなつかしさを覚えると共に、娘の育ちのよさを思った。

「チーちゃんは京都のどこに住んでるの？」

「北白川どす」

「北白川というと、どの辺りかな」

「今出川通まっすぐ東へ走ったら、銀閣寺の方へいきます。兼好法師が住んでおしやしたという吉田山のところ北へ疎水に添うて走ったら、もうすぐどす。北白川という電車の停留所から十分許り歩いたとこどす」

精しく聞かされても判っきり分らないが、銀閣寺近くの閑静なところらしい。

「あの辺りから、確か比叡山への道が通じているね」

「そうです。白川道走ったら、八瀬や大原へもあの方角からどす」

「奥比叡のドライブウェイにでもゆくかね」

「あそこは、この間、会社から走った許りどすえ」

「じゃあ、名神ハイウェイを飛ばして、彦根へでも走ろうか」

千紗は大きくうなずいた。それをシオに立ち上って私達は喫茶を出る。プレイに関して一言も喋べっていないが、車内でボツボツと口説くとしよう。いきなり切出すと、驚倒しかねないいいじらしさを千紗から感じた。

一号線大津から名神に入り、彦根インターで出るまでの車内の対話のうちに、雰囲気は

次第にプレイの核心にと近づきつつあった。行楽の白ナンバーの往来激しい中を、巧みに縫い乍ら、さりげなく会話はプレイの方へと傾いて行く。

「チーちゃん、乃々子をどこで知ったの？」

「お料理の学校で知り合ったんだす」

「いい人だろう、あの人」

「ええ、とっても親切で、優しくて」

「それで好きになったの？」

「お姉さんの方から好きになりはりましたん」

「本当に泊りがけで、どこへも行かなかったの？」

「休みの日や、土曜の連休に、三度許り一緒に二人きりで旅行しましてん」

「何処へ？」

「白浜と、城崎、天の橋立と、蒲郡の方へといきましたわ」

「乃々子、愛しているチーちゃんに何もしなかったの？ 一緒に床を並べて寝たんだらう？」

「……」

「くちづけしたり、体さわったりしない？」



「ウチを抱きはりました。もうカンニン、それ以上ウチの口からいわさんといて……」

「まあ、想像するよ、いろいろと」

「さっきお姉さんといろいろあるっていやはりましたけど、どんなことおましたの？」

「聞きたいかね」

「そら、好きなお姉さんのことやもん、ききとおすわ。辻村はんと関係おましたのやろ」

「どんな関係？」

「男はんとおなごはんの関係——」

「ないよ、全然」

「ほんま？」

「ああ、本当だとも、嘘はいわない」

「ほんならどんなこと、じらさんと教えて欲しいわ」

「乃々子の写真をとったんだよ」

「どんなシャシン？」

私は片手を背広の裏ポケットへ突込み、封筒に入れた、美木乃々子の十数葉のフォトを封筒ごと、青柳千紗に手渡した。そこにはカメラ・ハントに掲載していない露出がある。主に西洋刑罰式の種々の革具類を使ったものを選んであった。

呀っという押し殺した、悲鳴に似た驚声が私の傍らで洩れた。私の視野の外角に、千紗の両手で顔を蔽う姿がチラリと入った。

名神ハイウェイに車は入っていて、私は脇見は許されない。スピードを少し落して六〇キロ前後、追越線からドンドン後方の車が追いついて突っ走って行く。

「驚いた？ 美木乃々子の、もう一つの面だよ。チーちゃんの知らない世界の、プレイという言葉で表明される、乃々子のさまざまなポーズだよ」

「信じられしまへん。これみな辻村はんおとりやしたの？」

「そうだよ」

「怖いお人——」

「怖いと思うかね。私は美木乃々子の、本当の美しさを、このフォトの中に見出しているんだけど」

「お姉さん、こんなシャシンとること自分の口から承知しはりましたの？」

「勿論だよ。私は決して、無理強いはいしないよ。彼女は随分協力的だった。チーちゃんが何もきかなければ見せるつもりじゃなかったんだよ」

「お姉さん、本当はこのようにくくられはるの好きやないとウチは思いますねん？」

「どうして？ チーちゃんにそんなことわかるはずないじゃないか」

「ウチはそう思いますねん」

「おかしいネ。何か心に当ることもあつていうの？」

千紗は沈黙した。私の直視する視野の外れで、急に熱心にフォトに見入る千紗の気配を感じた。嘆息に似た女のためいきが洩れた。私も黙して運転に専念し、千紗の反響を秘かに心待ちにしていた。こんな場合、こちらが黙っていても、きっと女の方から何か言い出さずにはおられない心理にかられることを、私は過去の経歴から会得していたのである。果して、千紗は独り言のように呟やいた。

「城崎の旅館の夜、ウチを寝巻の紐でくくりはりましてん。お姉さんもそんなことウチに試して見はったんやろか」

私は尚も黙っていた。空白の数分後、再び千紗は、今度は私に問いかけるように呟やいた。

「お姉さんは、自分がくくられるより、人をくくる方が好きと思うんやけど……ウチにそうじゃはったんやもの」

前方を直視した俛、私は他人言の様にいった。

「縛られ、束縛されて虐じめられる中に、甘美な陶酔を感じて、その陶酔を自分の愛する人にも味わわせて見たいと思うことがある。乃々子は被虐の陶酔を、チーちゃんに試してみたのかも知れないね。縛られた時チーちゃんはどんな気持だった？」

「……」

「痛いというより、お姉さんに好きなようにされるといふ愛情の深さを感じたのじゃなかったかネ」

「……」

「チーちゃんも乃々子に愛情を覚えているとすれば、愛する人になら、何をされても構わないという、むしろうんと虐めて貰いたいよ

うな気持にかられるのが本心と思うがネ」

「……」

「最初は何をされるのかと思って恐れたが、縛られて自由にされて、そして陶酔を覚えたら、いつかは、陶酔を求めて縛られることを望むようになる。そうじゃないかね？ チーちゃんは乃々子になら、どんなにされても構わないと思っているのだろう？」

「辻村はんに聞かされて、お姉さんの気持が今はつきり分る気がしましたわ。このお姉さんのシャシン見ていて、お姉さんもくくられるのを望んではったんやと、そんな気わかるように思うんどす」

「いや、このフォトの場合は単なる、拘束帯や縄をアクセサリーにしたフォト用のポーズに外ならないのだよ。乃々子の顔に、何ら感情が浮んでいないだろう。緊縛といって、強く縛ったり、虐じめたりするプレイは、本当は愛し合ったり、すごく憎み合ったりしている者同志の間に介在するんだよ。フォトはそういうしたプレイを象徴するポーズなんだ」

「ウチがこんなシャシンみたこと、お姉さん知ったらびくつきりしますわ」

「そりゃ困るだろうね。だから相手の困るところとは云わなけりやいいのさ。お互いの秘密に

は、触れてよい時より悪い時の方が多いのだよ。黙っているに如くはないさ」

「辻村はん、こんなシャシンおとりやして、どうしはりますの？」

「嬉しいネ。私の生甲斐かも知れない。私は先月、河原町で乃々子と一緒にチーちゃんを見た瞬間、パッとインスピレーションがひらめいたね。チーちゃんならきっと私の気持ちを理解して、協力してくれるんじゃないかと」

「協力？」

「そう、可愛い、まるで喰べてしまいたいようなチーちゃんを、犇々と、黒いベルトの革で締め上げて、被虐に陶醉してゆくチーちゃんのポーズを幻想し、チーちゃんなら、私という人間を信じて、或いは黒の拘束帯をつけた赤裸々なポーズをとってくれるんじゃないかと確信したのさ。いやかね」

「ウチ、とてもそんな恥かしいこと」

「出来ないだろうか。無理にとは、いわないよ。だけど、チーちゃんに乃々子のこのフォトを見せた以上、嫌といわれると乃々子に対して、物凄く済まない気持ちになるんだよ。何か一方的に乃々子の半面を知らせたようで」

「お姉さんが、この間辻村はんに、ウチを誘惑せんといて言わはった意味が、やっと分

りましたわ。下心おしやすたんどうすな」

「なかったといえは嘘になる。正直いって、

チーちゃんを見た瞬間、心を惹かれたよ」

「ウチをそんなことする女やと、思いやすか？」

「乃々子がこんなフォトをとらせた女だと思うかね」

「ウチがはっきりイヤとお断りしたら？」

「口説くだけ口説いてダメなら、残念だけどあつさり諦めるよ。唯、今日は万一の場合を期待して、真新らしい、未だ誰一人の肌の匂いもしていない、黒い革具をもってきたんだよ。千葉県か或るファンの方が、特に私に送ってよこしたんだけど、その時から、これを使う人は、絶対新鮮な、処女であって欲しいと心にきめていたのでネ。そのおニューの革具をフレッシュな可愛いチーちゃんに使えるなかったのが一番残念だよ。ファンの人が誠心こめて、いろいろなものを作ってネ。未だ使い方すら分っていないシロモノなのだ」

幾分気拙く、私達に沈黙が続いた。車は彦根インターチェンジを出て、古びた市中を走り抜け、二度許り来て心憶えのある、彦根市民会館の前に辿りついた。車は自由に会館の前で駐車出来る。

「ここで食事してゆこう。案外おいしいよ」

素直に千紗は車を降りてついて来た。

彼女はAランチ、私は紅鰯のフライとライス。ビール一本のみたいところだが、運転を考えて控えた。会館の食堂の硝子戸越しに護国神社を三々伍々するレジャーを愉しむ人々に、春の陽射がやわらかく照り映えていた。

「気分悪うしはった？」

「いや、別に——。そんなチーちゃんが尚更可愛いよ」

「怒ってはるんかと思ひましてん」

「怒る理由なんか何一つないよ。チーちゃんに可愛くて清潔で、純情そのものだよ」

青柳千紗にホッと安堵の色が浮んだ。この少女めいた娘は、私の要請を蹴ったことに、小さいハートを深く痛めていたのかも知れない。

車をここにおいて、私と千紗は軽装の手ぶらで彦根城に向った。オリンパスペンひとつを私はぶら下げて、時々、千紗のポーズをとってやった。

井伊家三十五万石の居城は「花の生涯」で全国にその名を知られていた。

楽々園、通称八景亭といわれる玄宮園、大老ゆかりの埋木舎などを見て廻り、うわべは

いかにも愉しげな、親娘連れとも見紛うアベックで、私はひととき、プレイへの想念を喪失していた。千紗のスナック許り二十枚近くも撮ったかも知れない。

土台、全然プレイ気もない、何も知らぬズブの娘を口説く方が無理だったのだ。

私は既にはっきりと諦めて城から車の方へと揃って戻ってきた。

千紗は車の前で立上ると、ややほにかむような口調で、声を潜めて、私に囁やいた。

「おじさま（散策途中から、辻村はんがおじさまに交っていた）、ウチ、その革具いつもの、見せてもらわれませんか、後学のために……。そんなものもあることも知らんウチやったから、いっぺんだけ見せてもらえたら嬉しおすけど……。こんなようけの人混みの中でも無理でおすやろな」

「車のトランクに入れてあるけど、一寸こんな場所ではね。見せるぐらい、いくらでも見せてあげるけど、何処か休憩するところへでもゆかないと無理だよ」



「ウチいつでも構しまへん」

見せるだけで、わざわざホテルへしけ込むのも業腹だが、入ったら入ったで、何とかなるだろうと、私は苦笑を浮べて辺りを見廻した。近くにレジャーセンターがあって、湖城閣といったホテルもあるらしい。

ケ、セラセラ……。行くところまで行って、なるようになれと、私はキーを差込んだ。怖いもの見たさの女の心理。げに不可解な若い女心である。千紗は覚悟をきめた顔付の、やや硬ばった表情で、前方をにらんでいた。

和洋折衷の、アベックがくつろぐには、比

較的広い間取りであった。

寺西氏より御恵送を受けた、革の責具一式が、そっくりその儘、私の携行した黒のボストンバッグに納まっている。正直云ってその使用法も判っきり分ってはいない。

千紗は極度の緊張と不安と危惧と期待の交錯した表情で、あどけない顔を硬ばらせて、テーブルの前に、ぎこちなく坐っている。

「何しろ送って貰った俵なので、全然使い道が分らないんだよ。誰かに装填してみたいと思いつた日経ってしまっただけ。正直いってチーちゃんが始めてだよ」

私は黒光りする革具類を、ぞろぞろと鞆からとり出して、机上に雑然と並べた。恰好から察して、嵌口具、乳責環、搾衣、束縛ベルト、股責、デルタ帯などと推察出来るが、孰れにしても、とりつけて見なければ分らぬシロモノばかりであった。

増田喜代司や、長田実なら、この種の責具に対するウンチクはあっても、過去、縄一辺倒に近い私には、多少荷厄介なシロモノであった。千紗は怖わごわ、そのひとつを手にとつて、おどましがな顔付の奥に、興味を内潜し乍ら、私に問いかけた。

「おじさま、これなにに使うんですやろな」

「多分口に当てて猿轡の代りをするんだろ。ホラ見て御覧、この革具の中心部の辺りに、丸く平らべたい舌のようなものがあるだろう。それが口中に押し込まれて、首のうしろでとめるんだ。やってやろうか」

「イヤ、イヤ、うち何やしら怖いわ」

「怖くなんかないさ、試してみるだけだよ」
幅八センチぐらいのなめし革の口に当る中央の、なすび形の塊りを見つめるうち、私の心は急速にSに傾むいていった。無理矢理にでも、千紗の可愛い口中に押し込んで、声を塞いでみたい衝動にかられ出した。

身をすくめる千紗の背後に廻って、口許に押しつけてゆくと、彼女は歯を喰い縛って、かなり抵抗した。

「いややわ、いややわ、おじさま、もうやめ
といて、あかんえ」

私は無言で、身をすくめる千紗の腋の下に両手を挿し入れて、軽く擦ぐった。

「こちよばいぞ、コチヨ、コチヨ」

私のおどける声につられて、千紗は身をねじり、両手で腋を押え込んでしまった。

私の手がさっと、千紗の上唇にかかる、茄子形を呀っという間もなく、頬ばらせていた。素早く、嵌口具で両頬を挟んでしめて、

小さい締金をかけて引きしめる。千紗の頬が引きつれて、ウウウと声にならぬ呻きが洩れ彼女は両手をうなじへ廻して、必死に外そうと果敢ない抵抗を試みる。

首筋に廻したその白い手首をぐっと押えつけて、机上の革具類と一緒にとり出してあった縄の一本をとって、うなじで合掌縛りにぐるぐる巻きに巻いて手荒く縛り上げた。私のこの数分の行為は、彼女の許容せぬ、半ば暴力的なものであった。肘が水平に開いて、このうなじ縛りは、始めての千紗にとっては強烈なショックには違いなかった。

縛られた俣のポーズで、千紗は嵌口具でものもいえず、泣きべそをかいて私をじっと見上げていた。その眼は私のこの暴挙をなじるようにうるんでいた。

私はハッと冷静に還る。そうだ無理強いのも暴力はいけない。例え偶発的な一時の衝動にしろ、可憐な小娘に近い千紗のハートをぐさりと踏みにじった事は、私らしからぬ行為であった。真の嗜虐なら、それも許されるかも知れないが、何もしらぬほんとにウブなこんな小娘に対してとる態度ではなかった様だ。

私は急拠反省して、大急ぎで手首の縄をとき、うなじの締金を外してやった。

「御免、御免、チーちゃんが怖がるものだから、反って面白半分になっちゃったんだ。いけなかったね」

千紗は解き放たれた瞬間、パッと両手で顔を蔽ったが、蔽った俣の姿勢を崩さずに、かぼそい声でいった。

「急に手荒いことしやはるので、ウチどないされるんかと、心臓がとまりかけたんだす」
「本当に驚かせて悪かったね。見るものは見たのだし、じゃあ引揚げようか。少し早いけど」

私はあっさり諦めて腕時計を見た。僅か十五分そこそこしか経っていない。

「あらッ、もうお帰りやすの？」

千紗も呆気にとられた様子だった。

「一度チーちゃんにこれらの革具をつけてもらいたいのには山々だけど、一寸無理なような気もするし、又誰か探さ。今日の処はあっさり引揚げよ。いきなりこんな話を切出す方が無理だったからね」

「でも、ウチ、それを体につけるだけやったから、かましまへん。おじさま悪いわるさせえへんのやったら……」

「いじらしいことをいってくれるネ。チーちゃんに、そんなに協力してもらえらんだった

ら、指輪のひとつもプレゼントすりゃよかったな」

千紗のクスリ指にはめてある、飾り気のない銀の指輪をみて、私はそう呟やいた。

「えらい、気いつこうてくれるんだすな。おじさまに帰りがけ、京都のデパートで、本当に無理いいますえ、そんなら」

「ああ、いいとも。その代りやってくれる？」

コクリと大きく千紗はうなづいた。

「脱いでもらったよ、構わない？」

眼をつむって、千紗は小さく二度許りうなづきかえした。交渉は危うく成立した。

強引に押せば尻込みするし、さっと体をかわして引退ろうとすると慌てて追いつがってくる。こんな経験を、数度ならず私は若い娘から受けていた。青柳千紗も又、その例外ではなかったようである。OKとなればことは有無をいわせず、再考の余地を与えず、迅速に遂行せねばならない。

追い立てるようにして、私は二の間に千紗を押してゆき、

「さあ、そうときまったら早速始めよう。脱いでこの浴衣だけつけて出てくるんだよ」

と半ば強圧的な口調で命じていた。その間

に、私は大急ぎでカメラの準備にとりかからねばならない。さあ、急がしくなった。

ここまで筆を運ばないと、本番にかからないのだから、カメラ・ハントたるもの、いかにもしんどい極みである。

× × ×

いざ本腰を据えてその気になると、近代娘は反って度胸がすわっている。

案外にサバサバした顔付で、千紗は浴衣に紐もせず、前を合せた俣、二の間から現われて、私を見るとチョッと首をすくめて羞らった。浜美枝のような一流スターだって、プレイボーイ誌上で全裸をさらす御時世である。

若い娘は想像以上に割り切っているのかも知れないのだ。若さにはち切れた自分のカラダに自信が持てるからだろうか。

「さあ、怖いことをはじめろぞお……。これでワンセットになっているらしいが、一度全部つけて見よう。うまく体に合えばいいのだが、全部尾錠や縮金つきだから、いい工合にゆくだろう。さあ、おいでよ、ここへ」

「やんわりとしておくれやすえ」

裸になって反って度胸がすわった千紗は、悪びれず私の前に立ちはだかった。

説明書も使用法もないのだから、これはむ

つかしい。私はまず、順序として嵌口具をはめ、ついで首革をはめて、それに連なる乳枷をはめることにした。縦横のバンドをどう使うのだろう。乳枷をはめるについて、私は遂にそこで、千紗の浴衣を引きむしるように剥ぎとった。ハッと彼女は身を引いたが抗らわず、私のなすが俣になって、羞恥に眼を固くとして佇立している。今私の眼前に、千紗のありのままの体が展開されていた。小娘とあなどった彼女の裸身は、眼を瞞る許りに成長し熟していた。新鮮なもぎ立ての桜桃のように艶やとハリがあつて、お腕を伏せたような乳房の発達には意外なくらいに豊かに円く隆起している。

徐々に眼を落してゆくそこに、私は千紗から突如として「女っぽさ」を感じた。すっかり結実した女体がありありとそこにあったからである。少女めいた髪と顔のあどけなさに比して、始めて曝した首より足までの隠されていた部分の、思いもかけぬ成長の相違に、私の胸は妖しく震え、見事な娘に、私はただ、酔ったような幸福感を、刹那泌々感じた。正直いってこれ程までの素晴らしい女体を、千紗からは想像もし得なかったのである。

それこそ夢中で私は、千紗に黒い拘束帯を装填していった。否応なしにベルトは両股を通って、双丘の谷間に陥没し、尾錠が腰でカチカチと鳴った。

乳枷からポツカリと突出した円い隆起は、尖端を桃色にいろづかせて、微かに弾んでいた。しゃぶりつきたいような味覚をそそのめるのをどう制止しようもない。汚れを知らぬ真白い肌に、漆黒のベルトは、黒と白とのコントラストを否が上にも盛り上らせていた。

どうやら、こうやら一通りの装填を終った時、私のひたいは汗でビッシヨリと濡れていた。骨が柔かいのか、高手小手に黒いベルトで両手を締め上げてあっても、一向苦にならぬのか、千紗は平気な面持で未だ眼をつぶっていた。体のバランスが崩れかけると、恥かしげに細目を開いて、ポーズを整え、そして又眼をつむった。

私はやっとカメラにしがみつく。ファインダーを覗いてポーズを見る。

「撮るよ」

声をかけると、千紗はパツチリと円らな瞳を開いた。上瞼に入れたシャドウが千紗の瞳を更に黒く大きく見せた。

縄と勝手の違う拘束帯が、白い肌にマッチ

して、その時、私はこの種の革責具に対して今まで無関心だったのが、突如として惜しまれてならなくなった。過去の数多くの女性に對して、私は殆んど使用したことがなかったが、かくも素晴らしい束縛の妙味が味わえるものであることが、今の今まで知らなかったのである。伊藤晴雨ばりに乱れ髪と縄に固執するきらいのあった私のSは、千紗のこのポーズを見るに及んで、西欧風のこのバタ臭い束縛にも、とりようによってはかくも素晴らしいSの要素が秘んでいたことを、今始めてしらされた思いであった。ゴテゴテした縄の縛りに比して、確かに綺麗で見た眼もスマートである。定型のベルトゆえ、変化に乏しいが、各種の拘束帯の組み合わせによって、千変万化するかも知れない。千紗によって眼覚めた私の革具熱はここ当分続くかも知れない、そんな予測を私は自分の観念でうけとめていた。

とあれ、千紗の裸身と相俟って、拘束ベルトの各種のポーズに私のカメラは吸いついていった。立たせ、坐らせ、いくつかのポーズを、私はノドをカラカラにさせて撮りまくっていた。下手なくどくどしい説明よりも、ハントしたフォトの、十数枚を見ていただいた

方が早いかも知れない。

「苦しいかい？」

いやと千紗は首を振った。いざとなれば、この子は実によく耐える。もう既に十分ぐらい束縛した俥である。未だ構わないというのか。

私は長尺リリースをカメラにとりつけた。じわじわと何か責めずにはおられない嗜虐の想念が燃えて来たからである。

千紗の二の腕が遊んでいるので、私は縄で拘束ベルトの上から、更に縛ってみたい気にかられた。やはり、よくよく縄が好きとみえる。胸から腕にかけて縛ってみたものの、これは所詮水に油の、全然緊縛らしからぬ、不似合なものであった。やはり縄とベルトとは異質のものであろうか。

縄がしまるにつれて、胸の隆起は尚更に眼に灼きついてくる。しゃぶりつきたい様な慾望を必死に押えて、その代り私は吸いかけのピースをかるく揉み消すと、未だ余熱の残っている燃殻を、強く乳頭に押し当ててにじった。千紗の眉が迫り、熱さを耐える衝撃が、身震いとなって、彼女の全身をわなわなとわななかせた。それが急激に疼痛を呼んだのであろうか、彼女は下半身をよじって、何かを



きく二度三度彼女は息を吸って吐いた。

「ああ、ほんまにしんどおしたわ。もうこれ以上はカンニンどっせ」

拘束帯をつけたまま仰臥している千紗は、無防備の体を私の眼前にくまなく曝して、ニツと笑った。その笑いに少女めいたものは微塵もなかった。ニンフめいた女ッぽい成熟の誘発する笑いがひそんでいた。

私は唾液でグチャグチャに濡れた、嵌口具の茄子形に眼をやっていたが、この唾液を思わずしゃぶりたくなった。

私は無言で茄子形を口中に押し込むと、千紗の味を口中で転がしていた。

「まあ、いやどすわ。ウチのつばで濡れてますのに。きたのおすが……」

「きたないかい、チーちゃんの唾液なんだろう？」

「そら、そうやけど」

「チーちゃんの苦しみを一寸味わって見たかったのさ。成程これを頬ばって長い間口中を

塞がれていると苦しいかも知れないね」

千紗は一寸眉をしかめて黙っていた。間接的な接吻を感じたのかも知れない。

私は茄子形をなめりつくすように、口から絞ってとり出した。

「どう、もう一度入れてやろうか」

「イヤ、もうカンニン」

「私ので濡れているからかね」

「それはいいの、うちもう苦しいんどす」

「じゃあもうこのくらいでよそうか？」

「おじさまは、これで目的、達しましたのやろ」

「一応はね。でも少し物足りない」

「いやーん、そんなことじゃはったら」

「そのうるさい口を塞いでやる」

「いや、いや」

私は嵌口具をあきらめて、ホテルのタオルでふんわりと猿轡した。盛り上った乳房を指先で弾くと、ピクリと千紗の体が跳ねた。

縄を握って、その端っこで、剥き出しの千紗の腹から腿の辺りをペタリ、ペタリ叩くと、彼女は大仰に体を波打たせて喘いだ。

私は跪ずくと、そっと唇を押しあてた。硬直したように腿に力が入り、足指が空にケイレンしていた。ゆるいタオルの猿轡の下から

もの言えぬ口で訴えて来た。私は双丘に眼をやる。深い谷間に陥没したベルトはその姿を没し去って、その辺りが赤く染まっていた。私は後ろへ廻って、腰の尾錠を外し、谷間のベルトを外してやる。湿気を帯びた黒のベルトに女の残香が匂った。

座布団を二枚並べて、隣室の枕をとりに行く。ダブルのマットレスへ運ぶのは易いが、私自身の自制心がきかなくなることを懼れて座布団に仰臥させたのだった。

千紗は何かもの言いたげであった。じんめりと唾液を吸った嵌口具を外してやると、大

歓喜に似た悲鳴ともつかぬ声が押し殺されて流れた。私の抑制は音を立てて崩れていった。私は気懶るい身を起して、ユルユルと千紗の拘束帯をとき始める。体を立てさせてすっかり解き終り、足下にバサリと黒いベルトの束が落下しても、千紗は虚脱したように、ぼんやり佇立した俤だった。

縄が二条、人待顔に机上に散っていた。私はやはり縄に憑かれていたらしい。僅か二条の縄であるが、千紗に犄々と巻きつけてみたかった。

「一度だけ縛っていい？」
「……」

物憂げに、うつろな瞳で、千紗はかすかにうなづいた。彼女にとってこのプレイの体験は、余りにもショックキングな行為の連続であったに違いなかった。

思考力すら、既に失なわれているのではなからうか。あたかも催眠術にかかったかのように、私の言葉にあがらぬもせずうなづいているといった状態であった。

私は縄捌きも素早く、彼女の胸に縄をかけ、二重三重と胸の隆起を挟み込んで、突出するように、かなり強く締め上げた。なすが俤に千紗は、やや体をよるめかせ乍らそれに

耐えていた。ねじ上げた両手をうんと高手にして、指先が殆んどうなじに近づくまで押し上げて両手首を縛り、ぐいと引き絞って肩越しに胸の縄につなぎ止める。

残る一本の縄を輪にして首に嵌め、千紗の体を押し倒して、両足を伸ばさせて開股させると、首根っこを押えつけて、ぐいぐい弯曲させる。短かい髪が、パラリと垂れて、太腿に触れる。押えつける手を未だ止めない。両腿の間に半分許り頭が這入りこんだ限界で、首の縄を太腿に通して更に首に廻し、しっかりと固定してしまう。苦しげな千紗の呻きが私の耳朵を撃つ。腰で二つ折れになった裸身にじっとり汗が浮き上っていた。

前後左右から数枚とり終えて、私はカメラを離れると、千紗の足を握って抱え上げようとした。が……。私の力ではどうしても上らなかった。あきらめて、腕の辺りを押して、ゴロリと横倒しにする。双丘の間から、苦悶に打ちひしがれた、瞑目する千紗の顔がチラリと覗けた。

思い切り高手小手に縛った腕が痛むのか、遂に千紗は音を上げた。
「ウム、痛いわ、痛いわ。おじさま、早くといて、あぁッ」

横倒しの腕に体重がのって、その苦痛に堪えられないのだ。

二、三枚撮るや、飛んでいって抱き起し、素早く解きほぐして行く。千紗のくしゃくしゃのしかめた眼尻に涙が浮き上っていた。

私の腕の中で千紗は身を柔かくした。眼尻に唇をよせて、私は出かかったその涙のしずくを吸ってやった。

「ほんまに、ものすごいことしやはるわ。ウチもう骨が折れそうだったえ」

千紗は恨めしげに云って、私の体の中から身を起すと、しきりに腕を撫でた。

「お風呂へいっという。その間に片付けておくからね」

「おじさんは？」

「気が向いたら行くよ」

そそくさと跡を片付けて、千紗のハダカをもう一度拝もうと、下着をぬいでいたら、もう千紗は出て来た。バスタオルを巻くでもなく、惜しげもなく、堂々と眩しいような裸身を私の前にさらしている。

「待ってたんどっせ」

「もう一度這入れよ」

「いやッ、もうこれ以上這入ったらのぼせますがな」

千紗は笑って、身を躍らせて二の間へ消えた。ええい、こんなことなら、跡片付なんか放っぽり出して、矢張り一緒に入るべきだったわい。後悔先に立たずか、どうも時々、ええ恰好したがるからイカン。

× × ×

私達は車の中——。真赤な夕陽を浴びて、名神ハイウェイを、京都へ向って一目散に引返している。

「ねえ？」

「何？」

「おじさま、約束して……」

「何を？」

「今日あったこと。乃々子姉さんにいわへんって約束」

「ああ、絶対言わない。言えばドヤされるかも知れないからね。大事な恋人をとられたと、カンカンになるかも知れんよ」

「も一つ約束して」

「何だい」

「今日撮ったシャシン、絶対に姉さんに見せんといて」

「言わないから、勿論見せない」

「出来たら呉れはる？」

「チーちゃんのをかい」

「自分のくくられたの見てみたい。そして、さっき見せてもろた姉さんのシャシンも、うちにくれはれしまへん？」

「おやおや、バカに御熱心だね。よし、全部あげるよ。それでどうするんだい？」

「姉さんが恋しなったら、お布団の中で見るんどっせ」

「それで思い出して、独りで泣くんのだろ」

「泣かしまへん。楽しいおもいするんどす」

「勝手にしろ」

「おじさまは、お姉さんにも、今日のようなことはしたんどすか？」

「どんなこと？」

「ペッティング——」

「知ってるんだね、そんな言葉。彼女には全然しなかったよ。チーちゃんが可愛いからつい我を忘れてしまったのさ」

「本当？　うちだけ」

「本当だとも、嘘と思うなら乃々ちゃんにきいてみるといい」

「そんなこと、きけませんかな」

「しかし、今日はショックだっただろう」

「ショック、大ショックやわ。でも、今度はいっぺん、お姉さんにきつうくくられてみたいわ」

「おやおや、すっかりお気に召したね」

「おじさまより安心ですもん。姉さんとならなんぼそれでハッスルしても、やや子出来る心配あらしまへん」

「乃々ちゃんを縛ってみたいかね」

「全然——。うちにくられる方が好きですわ。ジーンと体しびれてしもて」

「今日はどうやった」

「おじさまとは今日が始めてですもん。それでいきなりあんなことするて、夢にも思てへんさかい、怖い方が先に立ってしもて、チットもええことなんかあらしまへん」

「じゃあ、この次はいいぞ」

「うちはもう、辻村はんとは会わしまへん。危のおすさかいな」

「本当かい」

「こわい顔して——。ウソ、ウソ、又いつでもよかったら、お会いしますえ。くくって頂戴、おじさまの気の済むまで」

青柳千紗は、アヴァンチュールを再び求めるかの様に、私の運転する腕に身を凭せかけてきた。

「あの、今日の革具の中で、一つだけ置いてきたのがあるんだけど分るかい」

「そんなの分らしませんわ」

「教えてやろうか。猿轡にしたあの茄子形より、もっとウンと大きくて、長いのがくっついてある嵌口具なんだ」

「あれより大きい、とても口へ入れしまへんわ」

「バカ、もう一つの口だよ。この辺で、夕飯でも喰い乍ら、ゆっくりSMプレイの講義をしてやるよ」

「プレイのこうき……」

「縛ったり縛られたりのはなし」

「まあ、いややわ。それよりか、約束の指輪忘れたらいやどっせ」

「ああ、余り高くない奴で、似合うホドホドのをね。何万円もするのはあかんで——」

「無理なこと云わしまへんよってに、どうぞ安心おしやす」

青柳千紗はチャッカリ屋の近代娘である。

カーラジオに合せて、ブルーシャトウを口吟んでいた。何事もなかったように——。つい先刻、革具にあえいでいた娘とは、信じられない。

暮色の京都も近い。この可愛い娘との食事、そしてプレイ談義。愉しいことが未だ私の前途にあった。年甲斐もなく、私もいつしか口笛で、ブルーシャトウを吹いていた。

ルポルタージュ

『ソ連展』の刑具

おもだか・しの

東京日本橋、白木屋デパートで開かれた「ソ連展」を見物いたしました。現代の部は、例によって例の如きもので、私共には縁の遠いものですが、革命前後と第二次大戦中の参考品の中に、大分面白いものが出ておりました。

先ず新聞にも紹介された、拷問用ルパシカが、王朝時代の立派な衣裳と一緒に、よい場所に並んでおりました。

窄衣は日本でも使用されていて、ことさらに目新しい物ではありませんけれども、日本のは「懲罰用」なのに、これは「拷問用」と

ただし書が附いているだけあって、大変丈夫そうな革の上着型の物です。

なにの皮で出来ているのか、袖は非常に長く、絶対に手首が出ないようになっており、それに引きかえ胴まわりは私共にも少し小さいと思える位で、ボタンはなく、代りにしっかりと真鍮の環が五個ずつ附いており、ズボンのベルト位な、革の長い紐が一番上の環に、それぞれ結びつけてあり、同じベルトが両袖口と背中の下の所にも附いておきます。つまり精神病者などに用いる、窄衣とか、締めジャケツといっている物と、刑務所で懲罰用に用いるコルセット型の窄衣とを、一枚で兼ねているわけです。

着用させる時は、前を合わせて紐を環に通して菱形に編んで締め上げた後、両袖を後か前に廻して結え、さらに背中中の紐を股から前に廻して、上着が上にずり上らぬ様に結びつけてしまうという、仕組みらしいのです。

とにかく見ただけでも、これを装着させられたら、いかにも骨身にこたえるだろうと思えるしろ物です。普通に使用されている整形外科用のコルセットでも、少し強く（といっても普通より二、三程位でも）締めつけて着けると物すごく苦しいもので、そのまま一日も過すと、内臓が弱って疲れ切ってしまう。私の持っているのは胸から下の物ですけども、それでも胸が締められるので、呼吸は肩で小さきみにしか出来ませんし、特に横になると腹腔の内臓が胸を突き上げて来ますから、ますます息が苦しくなるものです。

ですから、この拷問用ルパシカを着て、胸までギッチリと締め上げられたら、結果はどんな事になるか、およそ見当がつくというものです。

同じく、今世紀初頭に使用されたという

物に鉄製の足枷。先の方が三本になっている立派な鞭。鉄印。絞首刑に使用したという綱。絞首柱の一部などがありました。

足枷は繋留用のガッチリした物です。

鉄印はアルファベット一字ずつの物が三個あり、字の大きさは新聞の大見出し位な物で、多分二十六文字と、数字が一揃えあったのでしよう。ただこれの説明に、焼印と書いてありましたが、構造から見ても明らかに間違いで、これは入墨用の針印です。印字の部分には鋼鉄製で、長さ四耗位な針を、三耗位な間隔に削り出して、文字を形作ってあるというものでした。

これならば、囚人の額などに強く押しつけて、後を墨で拭くだけで、永久的な入墨が簡単に出来るわけです。囚人の管理などには便利な物でしょう。

絞首用の綱は、使用した女性の名前まで書いてありましたが、綱は処刑用に作った物ではなさそうで、植物性でしたが、麻等ではなく私の知らないロシア特産のもののように、丈夫さの点は、大した事はなさそうに見えました。太さは一程位で、一端が蛇口になっておりますが、使用後に切ったものらしく長さは短いものです。

絞首柱は、綱を通す環の前後を二十程位に切取った物で、柱の太さは見付六吋、見込四吋位な針葉樹材で、鉄の環は内径三吋位あり、打込軸は裏まで通っておりませんが、打込んだものらしく、ネジにはなっておりませんでした。

次に第二次大戦中の物は、アウシュビッツその他で使用された囚衣。密造した、パケツの底に仕込んだラジオ受信機（中の真空管はRCA）。処刑された女囚の頭髮一山。鞭二本。その他、こまごました物が並んでおりました。

鞭の一本はゴム製で、ドイツ刑務所の官給品のようなでしたが、今一本は手製のものです、軍用の無線装置等に使用されている、外径十五耗位なシールドワイヤーの一端を、十二程位な蛇口にして把手にした全長六十程位な物です。これで打たれたらきつと傷になるでしょう。

とにかく、革命記念というおめでたい催しの会場に、こういう物を堂々と飾り立て、一般に展示する神経には、びっくりいたしました。

……オムツ幻想曲……



ある「レッスン」

原 由貴子

「まあ、奥さま、ごらんなさいませ」
女中のみつの声に、叔母の淑子は何ごとかと二階に上ってきた。

美恵子の寝室にあてている、日当りのよい南側の四帖半一ぱいに敷きはなした、明るい花模様の掛布団をみつがまくると、白いシーツの真中が大きく濡れている。——まあ、美恵子さん、十八にもなってオ・ネ・シ・ヨするなんて、困った子——。美恵子は今朝もピアノのレッスンのため、朝早くごはんもそこそこに

お友達とさそいあって、急いで先生のところへ出かけていった。何も言わなかったが、まさかオ・ネ・シ・ヨなんて……。きつと、自分でも恥ずかしくて言いだせなく、黙ってそのまま出かけてしまったのだらう。可哀そうにと思ふと、淑子は美恵子が帰ってきてても何も聞かないようにみつに言いふくめ、手早く自分でお布団の洗濯にかかるのだった。

高校三年生になり、来年受験する音楽学校の入学試験準備のため、美恵子は夏休中、叔

母にあたる淑子の家から音楽の先生のお宅へレッスンに通うことにしたのだった。

叔母は子供がないせいか、美恵子のピアノの練習にしても、わがことのように熱心だった。毎日のお茶菓子にも気をくぼり、何くれとなく美恵子を世話した。来年はどうか音楽学校へ無事合格してくればよいけれど……しかし、昨晚食べたものが悪かったのかしらそれとも何か体の具合が悪いのかしら、困ったわ……。彼女は、ひとり気をもんだ。

「ねえ、みつさん、美恵子さんは一体どうしたのかしら。お医者さまに相談してみたほうがいいかしら。病気だったりしたら困るわ」
「奥さま、きつとお嬢さまは緊張しすぎたか何かで一寸具合が悪かっただけでございませよ。何でもないと思うんでございますが……」
それとも、夜お寝みの前にアイスクリームを召上ったから、お腹が冷えたんでございませよ」

みつは三十半ばになるまで、この家で十五年近くつとめていた。自分の若い時は、若奥さまがうらやましかった。美しい着物を着て、わがままもしてみたかった。淑子のところでは、よその家よりは仕合せだった。しかし若い娘達には、何かと競争意識を知らず知

らずのうちに持ったこともあった。買物のおともで外出したり、お茶やお花のおけいこ等はさせてもらったし、可愛いがってもらったが、今度は美恵子がピアノのレッスンのため来てみると、やはり自分と違って奥さまに自然に甘えられるのがねたましかった。

「みつさん、お布団くらい自分でするわ。ママにしかられるわ」

「いいえ、お嬢さま、奥さまからいわれますし、みつがいたします。それよりどうぞピアノのおけいこに力を入れて下さいまし」

みつは、美恵子の身のまわりの世話も、半ば意地になって自分でかってでた。しかし、胸のうちはおさまらない。そのうちに、美恵子に何か恥ずかしい、くやしい思いをさせてやりたいと思うようになった。しかし決して美恵子がこぼれず、奥さまも知らずに力のかすような方法はないだろうか……みつは、ふとめくっていた婦人雑誌で、夜尿症の相談の記事に眼をとめた。まあ、大人になってもオネショってあるのかしら……そうだ、これがいいわ。もし自分のしたことがばれても、傷をつけるわけなし、いたずらですませることが出来るし、お嬢さまも案外恥ずかしがりやだから、きつと黙っているにちがいない。

○ 「叔母さま、ただいま」

「美恵子ちゃん、お帰りなさい。今日はどうだったの？」

「ええ、今日はとても調子がよく、一曲進んで次のにかかったわ。先生も大分上達したって言って下さったの」

「そう、それはよかったわ。ところで、あなた、体の具合は？」

「ええ、べつに」

「そう」

美恵子は、叔母がいつも自分のレッスンや体の調子に気をかけてくれるのありがたいと同時に少しわずらわしく、もう少し無関心になっていて欲しいと思うこともあった。しかし今日にかぎって体の具合なんて聞かれ、ふと頬を赤らめた。

あくる朝、美恵子の出かけた後、みつは黙って美恵子の布団を持って降り、奥さまの横を通って風呂場へ洗濯に出た。

「またなの？」

「はい、奥さま」

「そう、困るわね」

みつは、ジャブジャブと洗濯の水音を高くたてた。淑子は何か別のことを考えているよ

うだった。

「みつさん、一寸あたし、病院の斉藤先生のところまで行ってくるわ。……美恵子ちゃんには何も言わなくてもいいのよ」

「どうぞ、いつてらっしゃいまし」

みつは洗濯を終え、掃除に取りかかった。奥さまも気にかけてくれた。もうそろそろ次の用意にかかってもいいころだ……。

病院は朝のうちは混んでいたが、昼近くは静かで、待合室にはお婆さんや子供連れの主婦といった様子の三、四人しかいなかった。間もなく順番がきて内科の医務室に入り、かかりつけの斉藤先生の肥って明るい陽気な姿を見ると、淑子は何かほっと気が楽になるのだった。

「やあ、奥さん、いらっしゃい。お元気そうですね、今日はなんですか」

「あの、先生、なんですの、一寸ご相談が……家であずかっている親戚の娘のことなんですが先生、十七、八にもなってオネショするなんて、あるんでございましょうかしら」

「やあ、時にはありますね。ま、しかし別に気にするほどのことはないでしょう。一時的な緊張とか何かが原因ですな」

「でも先生、二、三日ずっと続けてですの」

「じゃ、さしあたってお薬を調剤しておきましょう」

「お願いしますわ」

「まだ続くようでしたら考えてみましょう」

齊藤医師は眼鏡をはずし、一寸ぬぐってかけなおした。そして、いつも送ってくる様々な医療品のパンフレットの中に、エンゼル印ベビー用品の『羽衣商会』という広告があったのを思い出していた。そうだ。いざというときは市販品より、あそこに問い合せてみれば、品物は間に合うだろう……。

みつは、何かのひょうしに美恵子のランジェリーのサイズを聞いておこうと思った。

「お嬢さま、前より丈夫のようですね。あたしですともうあまり変りないんですが、まだ大きくおなりでしょ。あの、失礼ですがサイズはいくらくらいですか」

「まあ、いやなこと聞くのね。下着は〇〇インチよ。でも、この頃、一寸ふとっているけど叔母さまのところでのんびりしすぎたせいかしら」

その夜、みつは齊藤病院宛にとどくよう返信料を同封して、サイズや材料をくわしく指定した注文書を、婦人雑誌の広告でみたある

ベビー用品メーカー『羽衣商会』に出した。

そして、いつかご近所の奥さまのおめでたのときに用意され、流産なさったとかでそのましましまいこまれていた、あの包みのことを考えた。うまく齊藤先生が奥さまにすすめて下さるといいんだが、もし駄目だったら自分で言ってみよう。お嬢さまの方には、何も知らせないで事をはこんだ方が、きっと効き目がある。

こうして美恵子は、女中のみつのため叔母の淑子と齊藤先生の話題になっていたとも知らず、午前の涼しいうちはピアノのレッスン午後は涼しい木かげで本を読んだりテニスをしたりお友達とボートに乗りに出かけたり、高校最後の夏休みを楽しんでいた。

四、五日たち、淑子は齊藤先生からの電話で病院まで出かけた。

「やあ、お嬢さんの具合はどうですか」

「……あい変わらずですけど、私から何も聞けなくて困ってますの。感じやすい年頃ですし……」

「実は、こんな物を送ってきましたね。商品見本らしいんですが……まあ、これを使うほどもないかと思ったんですが、とてもお困りだったら一つ使ってみちゃ、どうでしょう……」

……

「何ですの、先生？」

「これですよ……」

「……」

そして、淑子が齊藤病院の玄関を出る時、小型の紙包みを一つ手にしていた。淑子は家に着くと、みつを呼んだ。

「ねえ、みつさん。ほら、いつかの、あの赤チャンのために用意したのがあったでしょ」
「ああ、ございましたわね。ご近所のお祝いがあつたら差し上げられるようにとの事で、ちゃんとしまってくださいます」

「今日、齊藤先生から呼ばれてね、美恵子さんにしばらくオシメさせたらどうかって。これ、先生のところからいただいたきたの」

みつは、淑子から包みをうけとってひろげた。やはり、そうだった。それは、齊藤病院あてに自分が注文しておいた、大人用のおしめカバーだった。黄色の薄ゴム張りにレースのふちどりも美しく、ピンクの地に花模様が可愛かった。

「まあ、可愛い。奥さま、これならようございますね。ほんとに柔らかなゴムのこの手ざわり。早速、オシメも出しておきましょう」

う。赤ちゃん用だから小さすぎるかしら。でも多分、間に合うと思うんでございますよ」「そう、丁度斉藤先生あてに商品見本として送ってきたんですって。ピンクで本当にきれいなね。斉藤先生にもすすめられたんだけど、美恵子ちゃんにどうかしら」

「いいんじゃないませんか。オシメのお洗濯の方が、お布団より楽でございますし、丁度お嬢さまに合いそうですね。私がお世話しますから、今夜からでも早速お嬢さまにオシメさせてあげになったら」

「じゃやっぱりオシメも出して置いて頂戴」みつは思わず身をのり出し、押し入れの奥の方からオシメの包みを取り出すと、まめまめしく支度にかかるのだった。……さあ、美恵子にオシメをさせるのだ。いい気味だ。さぞ恥ずかしがるだろう。何んなら奥さまの手でなく、自分でさせてやりたい。

淑子は、その派手なゴム張りのオシメカバーのホックをはずし広げながら、ふと手をとめた。大きくなって年頃なのに、まるで赤ちゃんのように、こんなオシメカバーでオシメさせられるなんて、何だか可哀そうだ。さぞ美恵子は恥ずかしがるだろう。きつといやがるに違いないと考えたが、しかしすぐ、いや

折角こんなきれいなオシメカバーを斉藤先生からいただいたんだし、みつさんのお布団の洗濯も大変だから、と思いなおし、みつが押し入れから取り出し、いそいそと差し出す青い花模様やピンクの豆しぼりのオシメをひろげて、オシメカバーの上に重ねてみるのだった。

「ねえ、みつさん、美恵子ちゃん恥ずかしくて嫌じゃないかしら」

「じゃ、奥さま、オシメの用意をしておいてあげるだけでよいじゃございませんか。きつとご自分でおあてになりますよ」

「そうねえ」

「じゃ、黙って用意だけしておきましょう」その日の午後、美恵子はお友達とテニスをきて、少し疲れた。夕方帰宅して、いつものように何げなく夕食の膳に向ったが、この頃は叔母さまの家へ来たころよく頂いた果物とかジュース類が食後に出なかった。

「美恵子ちゃん、いつもビタミン剤、忘れずに飲むのよ」

「ええ」

「じゃ、お風呂がわいてるから入りなさい。お布団、ちゃんとみつさんが用意して敷いてあるから」

「はい、すみません」

美恵子は、早速お風呂へ入った。タイルの浴槽に手足を一ぱいにのばすと、軽い疲れもどこかへ消え、温い湯気の中で柔らかな石鹸の泡が、ふっくら白い体をつつむのが心持よい。すべすべした太股に薄っすらパンティのゴムの痕がある。タオルでこすっても、桃色になるだけで消えない。まもなく美恵子は眠気をおぼえ、湯から上ってタオルで体をふき浴衣を身にまとった。

「叔母さま、お先に」

「湯加減どうだった」

「ええ、丁度よかったわ」

トントんと自分の部屋へあがり、姫鏡台に向うと、クリームで軽く頬をマッサージし化粧水で顔をふく。まだそれほどおしゃれでないので簡単だ。ふり返って寝ようとする、ふと枕元にきちんとたたんで置いてあるものに気づいた。何かしら……その色とりどりの布が、赤ちゃんのするオシメであることに気づくのに、さほど時間がかからなかった。まあ、何故こんなところにオシメが置いてあるのかしら。赤ちゃんがいらないのに誰のかしら……しかし、どうでもよいことなので別に叔母さまに聞いてみようとも思わず、お布団に

入りすぐスタンドを消した。眼を閉じようとし、ふとお布団の中で何かざわざわ布のようなものが腿のところにあたるのに気がついた。動くときゅうきゅう音もする。何が入っているのかしら。すぐ起き上り、スタンドをつけ掛布団をまくってみた。まあ……

スタンドの柔らかな光に照らされ、美恵子のお布団の丁度お尻にあたるところに、薄ゴムのひだがキユウと腿と腰紐の部分でくびれた、大きなゴム引のオシメカバーがおかれ、その上に柔らかなオシメが縦横に重ねてひろげられ、ちゃんとオシメの用意がしてあるではないか……

美恵子はびっくりして思わず息をのんだ。最初、美恵子はどこか親類の赤ちゃんが来ることになっていて、自分が間違って赤ちゃんのために敷いてあるお布団へ入ってしまったのかと思った。しかしよく見ると、薄ゴム張りのそのオシメカバーは、普通の赤ちゃん用のにしてはかなり大きく、明らかに大人用のものである。ホックの横の縁取りにも「十六七才用」としてある。これは、どうしたのだろう。一体、誰のためのだろう。叔母さまが用意しておいたのかしら。しかし何のためだろう。オシメカバーやオシメがいる人はいな

いのに。美恵子は、まさか自分がみつのためオネショの濡れ衣をきせられているとは知らなかった。何だか気恥ずかしいような妙な気持ちになり、それを取り出すと、枕元のオシメと一緒に部屋のすみへおき、布団へ入ると間もなく昼のつかれですやすや軽い寝息をたてて眠ってしまった。

翌朝、美恵子が出かけたあと、

「ねえ、みつさん、美恵子ちゃんゆうべオシメして寝たかしら。一寸みてきて頂戴」

「はい、奥さま」

勿論、美恵子にオネショなどという癖のないうことは百も承知のみつは、さぞ美恵子は驚いたことだろう、と昨夜の様子を想像するだけで心をワクワクさせながら、様子を見に二階へ上った。しかし、やはりオシメは部屋のすみにおいてあり、オシメカバーも使用した様子もない。……彼女は、又、美恵子のお布団を濡らしておく必要があった。

「奥さま、そのままになっております」

「そう。やっぱり、させたげなきやあ駄目かしら。でも、もう一晚様子をみましょう」

次の夜、明け方近くになって、みつはそつと二階へのぼり、ふすまをあけ美恵子の部屋へしのび込んだ。叔母の淑子がビタミン剤と

いって飲ませているお薬のきき目がないことどうしてもオシメの必要なことをいよいよ立証するのだ。みつは片手に魔法瓶を持ち、そつと静かに片手を美恵子の寝ているお布団のすそに入れてみた。今夜は、お薬はお医者様から頂いたのではなく、その逆の効果をもたらすはずのものにすり替えておいたが、もし万一、何んともないと困る。しかし魔法瓶の必要はなかった。……眠り薬も効力があるようだった。

翌朝、いつも朝早く起きて直ぐ出かけるのに、その日にかぎっていつまでたっても起きてこない美恵子を、起すようにと淑子は声をかけた。

「美恵子ちゃん、まだ眠ってるの？ みつさん二階へ上って起してきて頂戴」

「はい」

「……あの、奥さま、私が声をかけてもお嬢さまお目ざめにならないんですが」

「そう」

二人は二階へ上った。

「あら、珍しく今朝はお寝坊ね。美恵子ちゃん、どうしたの。どこか体の具合でも悪いのじゃない？」

「お嬢さま、いかがなさすったんでございま

すか？」

淑子と一緒に、みつも白ばっくれて声をかけた。

「あら、私、どうしたのかしら」

その声にやっと眼がさめ、珍しく寝坊した美恵子は急いで半身を起しかけ、お布団の中の異変にハッと気づいた。腰から下がじっと濡れているではないか。まさか、まさか、あたしオネショしたんじゃない？ しかしそのおそれは現実だった。そっとお尻のところに行った手が濡れたショーツにさわり気持ちが悪い。困ったように美恵子が赤い顔でもじもじしている、淑子はすべてを察してやさしく言った。

「何か困ったことなの？ 美恵子ちゃん、叔母さんに何でも言ってお頂戴。あ、みつさん、いっていいわ」

「はい」

みつは、たくらみが図にあたったことで有頂天だった。あの困りよう、恥ずかしそうな様子、いい気味だ。今夜から、美恵子に公然ときまりの悪い思いをさせてやれる。その後の様子も気になったが、すぐ引きあげた。

「あの、叔母さま……」

「ああ、そうなの。いいの、いいのよ。何も

言わなくてもわかったわ。でも美恵子ちゃんおとといから折角用意してあげたのに、ううべもどうしてアレしなかったの？」

美恵子はびっくりした。あのオシメカバーは、やはり自分のため用意されていたのだ。思い出して又赤くなったが、しかしこうなることがどうして叔母に予想できてたのか、不思議でならなかった。もちろん、前からみつが自分のお布団をたたむ前にわざわざ濡らし洗ってみせたりすることなど知らなかったのだ。寝床の中で恥ずかしくて顔もあげられない美恵子を、淑子は優しくいたわるのだった……。

「ねえ美恵子ちゃん。いい子だから、今夜から恥ずかしがらないでちゃんとオシメして寝るのよ。叔母さん、子供がいけないでしょう、上手にあててあげられるかどうかかわからないけれど、みつさんにも手伝ってもらえばきつとできるわ」

美恵子は真赤になったまま、黙ってうつむいていた。日頃は陽気でお茶目で明るい、本当はひどく恥ずかしがりやなのだ。

その日は、やがて先生のお宅へ出かけても心は落ちつかなかった。

「美恵子さん、今日は貴女どうしたの。いつ

もの貴女に似ず、さっきからミスばかりしてますね。何かあったの？ さ、もっと落ちついて、もう一度最初からやり直してごらんなさい」

ピアノのレッスン中に先生から注意を受けたが、やはり心が動揺しているせいだろう、ミスが多かった。

こうしてその日の夜がきた。お薬をいつものように飲まされ、お風呂から上ってお部屋へもどると、叔母の淑子とみつが、用意のオシメを手にとっていた。

「さ、美恵子ちゃん、いらっしゃい」

その声に、おずおずと美恵子は坐った。

「あら、そんなところへ坐らないで、お布団に入りなさい」

叔母の淑子が、ピンクのオシメカバーの前ホックを外し、みつが広げるオシメを重ね、お布団のシーツの上に広げるのを前に、美恵子はいよいよお布団に横たわった。

「さ、いいの？ あ、脱がなきゃ駄目ね」

白いシーツの上に広げられた可愛いオシメカバーは、美恵子の胸に遠い日の母に甘い無意識下の記憶がよみがえり、不思議な甘い感動をよび起すと同時に、彼女の心に乙女らしい羞恥心を取りもどさせた。

「叔母さま、ごめんなさい。もうしませんから勘忍して」

美恵子は体を固くし半ば泣き声でこぼんだが、いつもは優しい叔母が今夜は容赦しなかった。

「美恵子ちゃん、困るわ。みつさんのお布団のお洗濯のは間も大変なのよ。ね、いい子だからオシメするまで、ほんのちよっとの間じっとしてるのよ」

みつに両手を押さえられ、浴衣の前がはだけられ、二人がかりで穿いていた下のものを全部脱がされてしまうと、もういくらもがいてものがれられない。美恵子は観念の眼を閉じ、あきらめと半ば甘える気持で、もうすっかり下半身を叔母のなすがままに委ねオシメカバーの上におずおずと体を開いていった。

「さ、お尻をあげて。そうそう。内側がゴムだから、最初のうちはちよっとヒンヤリするかも知れないけれど、いいこと」

みつの見ている目の前で、いや進んでみつの手も手伝ってお布団の上で恥ずかしい恰好をさせられた美恵子は、赤ちゃんのために用意されていたオシメがあてがわれた。それは決して小さすぎず、美恵子の腰部から股間を覆うのに充分間にあった。

「あら、まだ駄目よ、アンヨ広げるのよ。そうそう」

お尻の下から両足の間へオシメがまわされ思わず両腿を固く閉じた時じーんと体のしんまで痺れるようなゴムの弾力感が伝わった。

やがて下腹部全体がゴムの感触で包まれ、前ホックがかけられ淑子の手が腰紐を締めおわるまで、美恵子は体がほてり腿がわれ知らずぶるぶるふるえてくるのを、どうしようもなかった。両足から腰全体を包むゴムの柔らかな感触。オシメをすることがこんなに快いことを今まで知らなかった。体全体がとけてしまいくらいな快感と、完全にオシメをあてがわれた安心感で、われ知らず体がガタガタふるえてくるのだった。

「奥さま、ブルマーどうしましょう」

「そうね、美恵子ちゃん、オシメカバーの上からブルマー穿かせてあげましょうか。どうする？ でも、折角こんな可愛いオシメあてて、上から見えなくなるの残念ね。大丈夫よ、しなくてもいいよ」

腰全体が不思議な感覚でじんと痺れてしまいい、美恵子はただ頬を紅潮させて吐息を吐くだけで、返事どころではない。

「さ、終わったからもういいよ。今夜から安心

して眠れるわね。美恵子ちゃん、可愛い赤ちゃん、オシメしてネンネするのよ。じゃ、おやすみなさい」

「お嬢さま、おやすみなさい」

お布団の中で、腰を覆うむずがゆいようなやるせないようなゴムの肌ざわりに、美恵子は赤ちゃんに戻ったような気持から次第に、今まで未知だった神秘的喜びの感覚に押し流されていた。

翌年、春四月、音楽学校を受験する美恵子につきそって列車に乗った淑子のスーツケースの中には、ちゃんと幾組ものオシメとオシメカバーが用意されて入っているのを誰一人気づく者はいなかった。美恵子は、もう一晩でもオシメをしてももらわないと翌日は一日中、気持が落着かないようになってしまったので、叔母の淑子が自ら買って出てつきそいとなったのである。美恵子は受験の前夜、淑子の手によってオシメかぶれをふせぐため白くむっちりしたお尻から腿の間へシツカロールもちゃんとすり込まれ、特に念入りにオシメが当てがわれたのはいうまでもない。美恵子は上気した顔で、試験課題曲となっているショパンのノクターンを頭に画きながら目をうるませるのだった。



瀬 沼 四 郎

マタニティ・ヌード観賞

4月24日の朝日新聞夕刊「ティールーム」欄に次のような記事がのっていた。

「視線を上にもたす、マタニティドレス。

このほど、名古屋・中村百貨店婦人サロンで、妊婦約三十人をあつめて「マタニティドレス・ファッションショー」が開かれた。出品作品は、同百貨店の主任デザイナー・堀味啓子さんのパターンによるものを加えて計二十点。

マタニティ・ドレスのポイントは「えりぐりと胸など上体にはっきりしたアクセントを置き、目の錯覚を利用しておなかのふくらみを目立たせないこと」と堀味さんはいうが、この日の作品も二色、三色使いのミニ・ドレスの傾向をとり入れたものが多かった。

以下省略するが、三人のモデルが並んで立っている写真がついていて、「おなかのふくら

みを目立たせない」という方針のためか、いっこう妊娠しているように見えないのが残念である。このファッション・ショウのモデルに本物の妊婦を採用したのかどうか、また本物だとしたら、どういう事情で妊娠中の主婦が応募したのだろうか。その審査の光景などを想像したいところであるが、モデルについては、どうも本物の妊婦かどうか自信はないところが婦人雑誌などで見るカルダンのマタニティ・ドレスは、どうも「おなかのふくらみを目立たせない」という堀味さんとは違った「大きいおなかを美しく見せよう」という方針らしい。出来上りも非常にスッキリして、マタニティらしい。

「大きいおなかを隠すのではなく、少しでもそれを美しく見せよう」という気持ちがあると思います。

「腹部に自然な美しい線をだす……これがマタニティの原型ともいえるものです」

「カルダンのドレスは、……バストラインを高めに合わせ、おなかに向かって美しいフレアーのシルエットでまとめられています」ということだ。（高島屋系）

ところで小生は、五月号「オメデトウみゆきさん」の中で、デパートのマタニティ・コ

「ナーで妊婦の恰好をしたマネキン人形が、はたして腹が膨らんだ形をした人形なのかどうか疑問に思うと書いた。その後また行ってみたところを報告したいと思う。」

小生は、妊婦人形のそばに寄って、指で、腹の所を強く押してみた。ところが、確かに固い——詰め物をした形跡はないのである。さらに指でたたいてみた。コッソ、コッソと音がするのである。それではじめて、最初から妊婦の形をしたマネキン人形が、特別に作られていることを知った。それも、よく見ると、いろいろちがったポーズで、妊娠七、八カ月位から臨月までの、それぞれ違ったものが作られているようだ。マネキン人形といっても、スマートにすらりとした理想的なプロポーションを採用してはあるが、実際に人間の着る洋服を着せるのだから生きている女性（ここでは妊婦）の体のままの寸法でなければならぬ。人形を作るためには、モデルについての精密な研究が要る。

小生が見たマネキン人形は、実に理想的な妊婦の腹の形をしていて、大きさも十分大きい（臨月）ものがあり、人間とちがって、下着を着けず、ワンピースを直接一枚だけ着てあるだけだから、見とれるような美しさだ

った。詳しく見て、ますます感心した次第である。

妊婦のマネキン人形はどこで作ったのか知らないが、モデルになった妊婦はどういう人であろうか。どういうルートでどういう事情の妊婦を使ったのだろうか。勿論モデルをハダカにしなければ、人形は作れない。ハダカの妊婦をくり返しよく観察して、妊婦の人形を作った職人がいるわけだ。いろいろ想像して、小生は楽しむのである。

ワンピースの下は何も着けていないのだから、ハダカの妊婦人形を見たいという衝動に駆られたが、要するにそれまで欲求不満を大きくしただけのことである。妊婦の腹は、人間の体つきそのものがそうであるように、個人差があり、千差万別である。俗に「横孕み」という横に広いのもあれば、グッと前に突き出した「尖り腹」、大きくなり過ぎて下に垂れた「垂れ腹」というものもある。いかにも妊婦らしい前にグッと突き出た、大きい腹をしていながら、マタニティ・ドレスのデザインがよいせいもあるが、自然な丸味が実に美しいのである。

別に、トルソだけの、これははっきりと肌（腹の部分）を露出した、下着をつけた人

形が置いてあった。横から見ると腹は十分出っ張っている。全身のかわいい妊婦マネキン人形とちがって、体の一部であるためか、形も太っているように見え、グロテスクな感じがした。しかしもし、単なるマタニティドレスのファッションショウではなく、もっと実用的な「下着ショウ」の妊婦版であつたらどうだろうか。それこそ本物の妊婦モデル、実際に妊娠しているファッションモデルの登場ということになるだろう。いろいろ想像をたくましくしてみるのである。臨月の妊婦を見せるショウということになるのではないか。

二年ほど前、「医学カード（性のデザイン編）」なるものが売り出され、映画にもなった。その写真のモデルが映画にも出演し、途中でスキヤンダラスなゴシップまで生んで、世間の評判になったことがある。それは今でも、どの本屋にも並んでいるが、もともと五部のシリーズの第一回ということであつた。その第三回目が「出産育児編」になっているので、あるいは実際に妊娠している女性をモデルにして、ハダカの妊婦の写真が見られる（そして広く流布して妊婦ブームになる）とひそかに期待していたのだが、どうなったのか。あるいは、シリーズとは名目だけで、第

二回以降は発行するつもりははじめからなかったのかも知れないが。

× × ×

ここまで書いたところで、奇ク六月号を見た。この号は残念ながら、五月号にのった愛知葉子さんの「妊娠九カ月の自像」二葉のつづき（もう分娩されたのであろうか）がなく、かわりに（？）11ページと161ページに、室井亜砂路氏の妊婦腹裂きのイメージ画が掲載してある。迫真力の点で写真に及ばない。それから横溝仁氏の「責め演劇見てある記」に、三月に公演されたという、奇書金瓶梅をアレンジした「続拷問」の中で、妊婦の腹裂き場面が登場したとあるが、「妊婦の腹裂きもただドギツイだけで感銘も薄く竜頭蛇尾の尻すぼみ」とだけで、本物の妊婦を見せたのか（まさか？）妊娠腹は、張りボテだったのか、肝心の場面はあるいはかげ絵だけでごまかしたのか、詳しいことが知りたいものである。

妊婦写真についても、読者通信で見ると、「最近の分譲写真の広告を検討すると、浣腸だとか妊婦がやたらと多く」（鹿児島・南国生氏）というような意見もあるが、毎月一人二人は新しいファンの投稿がある。増田みゆ

き夫人の妊婦フォトを見て感想を寄せられたものが多い。

「ぶつくりとふくらんだまんまるいお腹は、

ほんとうに見事なもので、こんな立派ではっきりした妊婦の写真を見たのは始めてです。まことに貴重なものだと感じました。七、八カ月でこんなに大きいと思っていましたら双胎児だったそうですね。今後がたのしみです」（兵庫・妊婦ファン氏）八月号▽「昨今読者の中で……妊婦フォトの提供があることは、好ましい傾向と思います」（東京都・冬木雄三氏）

「増田みゆき夫人の臨月腹の写真拝見し、その余りにも偉大な膨脹ぶりに只々感心しました。……お臍もノツペリとなくなり、蛙腹となっています。今まで見たどんな妊婦のお腹より増して見事なものです。……私達マニアにとって、見たくて仕方ない妊婦腹がこのように手にとるように眺めることが出来るのは、又とない幸福です」（静岡・妊婦ファン氏）——以上三月号。

「増田みゆき様には無事御安産の由心からお祝い申し上げます。それにしても千載一遇のチャンスを与えられて御同慶の至りに存じます」（京都・洛北生氏）

「昨年末には双胎妊婦裸像の又と得がたいフォト……増田みゆきさんの妊婦フォトは貴重な資料として、毎日のように手にして観賞させていただいております。増田さんのカラ

ー妊婦フォトの鮮明な双胎腹の偉大さには、つくづく感じいりました。こんなすばらしいフォトは又とあるでしょうか。目の前に見る双胎腹、手にとって眺めている以上の迫力が私の胸をわくわくさせています。……増田夫人に心から感謝いたします」（大阪・高井田直氏）——以上四月号。

六月号では、長野市・大沢菊造氏の

「小生の特に興味をもったのは妊婦に関する記事並に資料です」

のほかに、静岡市・神田五郎氏の

「授乳時の女性のあの膨脹しきった乳房に対する記事を見たい。……乳汁の満ちた乳房をもてあます女性の写真集が出来たら……」

と期待される。これまでになかった、変った希望が寄せられているのが、とくに目を惹く。ヒノエウマ解禁後、現在進行中の妊婦ブームに、このジャンルの一層の開拓をのぞみたい。

× × ×

週刊現代3月9日号に、「大阪にあった

「人造ワイフ」製造工場——一体50万円もする「幻想の妻」を試みた人たち」という記事があった。「ダッチ・ワイフ」の名前は久しいが、本当にそれを作っているところがあるか、その「幻の美女」を追跡して、「私こそその製作者だ」という人物と、愛用者とを見つけて出すことに成功したという、「くわしい報告である」という。その作り方、性能を紹介した、迫真的な記事である。

その追跡は困難をきわめた、という。なぜなら、それは法律で禁じられた品だから。

(刑法第七十五条のわいせつ物頒布の罪に該当) しかも、本物のダッチ・ワイフ(?)の写真入りで「巷間、噂だけが高い美人……これが精巧をきわめたその「幻想の美女」だ」「息づく美女を見る思いがする「人造ワイフ」」などというキャプションがついている。生命のないものが、まるで生きて呼吸をしているかのように見える、気味がわるいような美しい女が、両腕を枕に、薄いネグリジエをまとって、あまむけにベッドに横たわっている写真(全身と顔の大幅しと二葉)である。本場は関西であるという。

日本の南極観測隊が持参したものは別として、関西について、まず訪れた関西日活館主

会会長能口久良雄氏は、次のように言う。

「アレは、デパートのマネキン人形を作っているところなんぞでときたま作るんですわ。ダッチ・ワイフも、材料は違いますが、作る工程はマネキンとほとんど変わらしまへんがな。アレの場合は、軟質の樹脂が材料のようでな。しかし、まともに注文受けて作れば法に触れる。だから、個人が材料を自分で買って、職人をやとって作らせたという形にしなければあきまへん」

頭髮などは、実物を使用。皮膚のなめらかさ、色彩、体温なども、生きている女性と同じに出せるという。ただし、日活映画「人類学入門」に登場したダッチ・ワイフを作った山一マネキンKKの山脇正一氏によれば、あくまで撮影用のもので、実用?には役立たない、セックス抜きのものを作ったのだという。これなら合法的なわけだ。マネキンの精巧なものと思えばいい。実際に作っているところはないかと、あちこち探しまわったあげく、

「だいたいダッチ・ワイフを作るのは、マネキン商売のところより、人体科学の標本(例の胴体をひらくと内臓がわかる、学校で用いる教材用の人形)を作っているところでき

えるんだ、きいています。……マネキンですと、最高でも一体二万七、八千円。ですが、船に積みこむようなダッチ・ワイフは、三十万から四十万円が相場だとか。……さらに精巧な細工をするとなると、商売としては成り立たんのと違いますか?」(Mマネキン)

「うちでは、ダッチ・ワイフなんて作ったことはありません。しかし、本物の女体ソックリのものを作ることは可能です」(京都の某科学標本会社の重役)

製造方法と性能との詳しい紹介があるが省略して、この重役氏の話では、

「要するに、金さえかければ、なんだってできるんですよ。そうだったら、本物の女性より、あるいははるかにいいですよ。……単に、人形に体温をつけて、ボディを作るだけでも、ま、七、八十万だんね」

というように、最後はいよいよ、

「私はダッチ・ワイフを作ったことがある」という人物が登場する。マネキン会社の社長であるという。

「ダッチ・ワイフは、しょっちゅう作れるものやない。なんせ、金のかかる道楽やさかいな。……ええ、年に三体から四体は作りま

な人の頼みではひき受けません。……」

それから、製造方法と性能との詳しい説明——前の重役氏のと大同小異だが、すこぶる具体的で、読んでいて変な気持ちになる位。

「日数は一体作るのにほぼ四十日。値段はものによってことなりますが、ま、五十万から六十万というところ」

他方このダッチ・ワイフ購入者の一人は、次のように言う。

「むろん、本当の女性とは、やや違う。が、そこがまたなんともいえず刺激的でいいんですよ。……これを買って以来、私は現実の女に対しての欲求が減りましたね」

記者の話によると、現在も製造中と見えたところ。また、「名古屋もけっこうその道の本場」と言う人もあるという。

小生はこの記事を読んで、妊婦のダッチ・ワイフは作れないものか、と妙なことを考えたわけである。妊婦のマネキン人形も作られているのだから、出来ないはずはない。人形だから顔かたちも肌の色も体格も好みのままのものが出来る。双胎臨月妊婦の腹でも、品胎でも、四、五胎の妊婦でも出来る。しかもいつまでも妊娠しつ放しの大きな腹をしているわけだ。年をとることもないのである。も

し小生にお金があり余るほどあれば、妊婦、しかも妊娠腹の途方もなくデッカイ、ダッチ・ワイフを作ってみたいところだ。ただし、家のものはさぞびっくりすることだろうが。ときどき胎児を腹の中から取り出してみられるようなものも面白い。いや、単なる観賞用妊婦のハダカ人形でもよい。もちろん買って置くところに困るだろうが、もっと安く出来るにちがいないから。

最近紹介されたイタリア映画「欲びのテクニク」の第三話に、人類未来の性生活においては、人びとはダッチ・ワイフと結婚することになるだろう、という話が出て来るそうだが、さしずめ小生なら、超膨満腹部をもった妊婦ダッチ・ワイフがよい。もっとも、こういう趣味に溺れたら、

「……こいつに一度魅入られたら、毎晩その顔を見なければ寝られんという話ですわ。人間だと、どないな美しい女性でもみにくくなることもある。が、人形はそんなことおまへんさかいな。……死んだ女房にソックリなんて人形が、立ったり寝たりしててごらんなさい。そりゃ、コワイでっせ。やはり、そんなものを愛好するのは、普通ではないんでっしゃるな」(上に出た能口氏のことば)

ということになるろう。江戸川乱歩の「人での恋」に出て来る主人公のように、いわゆる「ピグマリオンズム」と称されるものである。小生の場合は、ハダカで観賞するように作られた、迫真的な、とてつもなく大きく腹が膨れ上った臨月妊婦の人形を想像するわけである。小生にいろいろな想像をさせ、その中に楽しく遊ばせてくれたのは、実に増田みゆきさんの臨月双胎妊婦の蛙腹の写真であった。あらためてお礼を申し上げたいと思う。

× × ×

週刊新潮5月6日黄金週間特別号「ダイジエスト」欄に次の記事がある。

「人形、こわい」

★ついに婦人雑誌も捨ておけなくなった「ダッチワイフ」の流行……。

いま話題の「人造妻」とは？ (主婦と生活五月号)

一部の男性の間で愛用されている「人造妻」のメーカーは、関西のマネキン会社だそう。

しかし刑法百七十五条でワイセツ物の頒布が禁じられているため、ひそかに作られ売買されている。

通人として知られた関西日活館主会会長の能口久良雄氏によれば、『電気ゴタツの代りになる』というが、これは厚さ八ミリほどのビニール製の胴体に電流を流し、常に三十八度から四十度を保つようにしてあるからだ。女性自身の部分は良質の生ゴムを利用すれば『ソックリに作ることができる』し、とりはずし自由に洗たくもきく。

人形の原形は石膏^{こう}を利用して生きた人間より直接作ることもできるし、注文主によっては顔を女優さんの〇〇に似せてくれなんていうのもあるという。

製作期間は一カ月。値段は六十万円から八十万円。『声』を出すような芸術品は百万円以下ではできない。

奈良市在住の一商店主に使用感を聞くと、『人形抱いてる思うと変な気持ちになる。そこがまた刺激なんやな。麻薬みたいなおそろしさがあると思うわ。こわいわ、人形は……』といった。

生身の女性を遠ざけ、深夜一人ビニール製の息づかない美女の肌をさすっている男の姿——それは想像しただけでも奇々怪々な図ではないだろうか。

『そやけど人形ちゅうもんはグズグズいわん

で。ウワキしたからいうてふくれつつらすることもないし、あれ買うてくれ、これほしいなんてこともいわん』と店主はいうが、これで血が通っていたら理想の女性ということだろう。たとえ相手が冷たい物体だろうと、男性はそれに欲望を覚え、充足感を味わうのだ。

しかし、ある西洋の文学者は『この世の人間はまったくどうしようもない動物だが、しかし男と女の触合いはこよなく美しいものである』といった。お人形や『メス』が活躍するようでは、人間のもつこの唯一の美しさはあとかたもなく消えてしまふのではないだろうか。

——マタニティ・ダッチワイフを想像して一人で、勝手によろこんでいる小生は、実用(?)性能はともかくとして人形なら、どんな形のものでも造れることに大いに興味をもたずにはいられない。ふだんは普通の大きさのハラをしているが、内部に、膨らめば双胎も品胎もの胎児を入れて子宮ぐらいに大きくなる袋が入っていて、何リットルもの温湯を注入すれば、マルマルとすごい大きさにハラが膨らむダッチワイフだとか、男性雑誌にあるような、不自然なまでに——奇形的に

——バカでかく突き出したオッパイやヒップ——昔はこの娼家でも、客の特殊な好みに応じるため、そういう娼婦を一人ずつ置いていたという。を持った人形とか、思いのままのものが造れるわけだ。さらに、希望があれば、内部に仕掛けをして、何リットルものミルクを乳房から飲めるようにするとか、またネクターの代りにウイスキーが出たり、ソーセージが食べられるように出来るわけだ。それぞれの好みに応じて、どんなことでもさせられる。

小生も巨大なオッパイやヒップは好きだから、すごいグラマーの奇形のような人形に、仕掛けのあるようなのがほしい。あるいは何百万円もかかるかも知れないが、さらに出来たら「息づかない」人形ではなく、雄大な胸を上下させて呼吸しているように見えるような、胎動もするような人形なら申し分ない。また、これはむずかしいかも知れないが、分娩する人形だって出来るかも知れない。空想はとめどを知らないのである。

ある高級なマンションの中に、特別な会員だけを集めて開かれる秘密パーティに、数本の、それぞれ変ったポーズをしたヌードのマネキン人形が置かれている。その中には道具

的なマタニティ・ヌード人形が混っている——妊婦マニアのために、観賞用妊婦人形がちん列してある。そういう光景を小生は想像してしまう。

右のようなピグマリオンズ的な空想は、誌上でもっともっと、開拓されるべき分野のように思われる。

最後に、手もとにある切り抜きを一つ紹介しておわりにしよう。朝日新聞昨年10月14日の囲み記事「暮し寸評」からである。

「マタニティ・ドレスの流行 森南海子」

よくよく気をつけてみると、わずかにふくらみを感じる程度……。たぶん三カ月ぐらいだろうか。

普通のスーツやワンピースを着ていて、こうにさしつかえあるまいと思うが、多くのミセスは、もうそのデザインを見ただけで、はつきり妊婦とわかる服をご愛用である。

デパートの売場できけば『最近はずいぶん早くからマタニティをお召しになるようです』という話。ことしは去年の一八〇%増しの売上げで、これは近来まれなめっけもの有望商品だということである。

マタニティ・ドレスというのは、お腹（なか）のふくらみをカバーするためのドレスで

あって、まだそれほど目立ちもしないときから『私は妊婦です』と誇示するためのものにはあるまいと思うが、最近のマタニティ・ドレスの流行ぶりをみると、どうもそれを誇示していると思えない。

いったいマタニティ・ドレスとは何であるうか。

和服時代の女性たちがひそかに味わった、他人には知らせたくない自分だけのよろこびと秘密の時期を、いまの若いミセスたちは、他人に知ってもらおうことで、そのよろこびを拡大させようとしているのだろう。

和服は腹囲が増してくると、前のうち合せぐあいを工夫し、帯でかくし、また前掛けでかくし、さらに野良仕事をした主婦たちは、もんぺの上に割ぼう着をかけ、かくしきれない体の変化とたたかった。そしてこの衣服とのたたかいはそのまま新しい生命をうみ出すための女の葛藤（かつとう）であった。

だが、現代でもかくすことのなかで、よろこびを感じている夫婦もある。友人から聞いた話だが、共かせぎの夫婦で、一人一人が社会とのつながりをもって仕事をしている場合には、妊婦がかくしおおせなくなるまで普通の洋服を着、そのことによって、つまりマタ

ニティ・ドレスという妊婦の制服を着ないことで、妊娠をかくしているということであった。ところが、社会と直接のつながりをもたない主婦にとっては、それをかくすことよりは、むしろ妊娠しているという事実を、自他ともに認めることで、そこに主婦専業の意義をはつきり感じとることになるのだろう。

彼女たちはマタニティ・ドレスを着ることに生き甲斐（がい）を見だし、それがマタニティ・ドレスの流行という特殊な現象をつくりあげたのではないだろうか。

とすれば、現代のマタニティ・ドレスというものは『私は立派に結婚し、ちゃんと子どもをつくった』というマークの役割を果たしているにはかなるまい。だからサイズやデザインは余り問題にされていないのかもしれない。妊婦であるということを証明してくれる共通の何かでありさえすればこと足りるのだ。ここにマタニティ・ドレスが普通のドレスとはつきり区別されねばならない意味がある。

古くには夫婦の間では、妊娠という『かくされたしあわせ』をふたりは守り通さねばならなかった。そのプライバシーが、現代の夫婦においてはふたりだけのものではなくなくなってしまったようである。



『奴隷妻』に

魅せられて

柴 利 好

七月号所載の「奴隷妻」を一読した夜、私は興奮の余り暁方までマンジリともできませんでした。私の網膜に、妖しくも美しい富子夫人のユニフォーム姿が焼きつけられて、脳髓を絶え間なく刺激したからなのです。愛する妻を一時的なプレイとしてではなく、本当に奴隷妻として飼育し続けたいとは、Sの男性にとって見果てぬ夢の一つでありました。う。それがあらぬか、従来もそれをテーマとした数多くの作品が、誌上に発表されて来はしましたものの、現実に厳しい社会環境の中にあつては、これが果して実行可能な事柄なのだろうか、少なからず疑念を抱いておったのです。

ところが、本年に入つて本誌々上において二度までも、思いがけない真の奴隷妻の存在

を知り得たことは、心底から驚異であり、さらにはこの上もない喜びでもあります。即ちその一つは、二月号の今田さまで、夫妻による鍵付き鎖ブラジャーとハンダづけ胴鎖のことであり、他の一つは冒頭に述べた山本さまで、夫婦による奴隷用ユニフォームなのです。しかも特に嬉しいのは、これら両夫人の奴隷姿が偽りのない真実であるという明白な証明として、写真さえ添付されていることです。こうした事例は、全く珍しい特殊な事柄とは思われますけれども、このように堂々と公表されないまでも、結構これに類する奴隷妻の存在が、その辺にも認められるのではないかとさえ思われて、行きずりの女性の後ろ姿を、シゲシゲと観察したりしておる始末です。ここにいう奴隷妻とは、奴隷のように残

酷な労働を強いられている薄幸な境遇に喘ぐ妻を、意味するものでは勿論ありません。

さて、上記の二例の共通点を挙げれば

一、結婚後奴隷妻としての飼育を開始するまで相当の期日を要し、ご主人のSに対する執念のほどを察せられること。

二、夫人がたは先天的にM的資質の所有者であつたかも知れないが、結婚後の飼育によって、はじめて悦虐の血を喚起されていること。

三、飼育成功後の両夫人は奴隷妻であることの自覚に徹し、奴隷生活を甘受することに肉体的・精神的に満足されていること。

四、他にも色々な責め折檻が加えられているにも拘らず、鞭打などの打擲が記載されておらず、縛りが主題となっていること。

五、奴隷妻としての仕上げの道具に犬の鎖が使用されていること。

六、鎖は被縛者の意志では絶対に解くことができないこと。

七、完全な合意から始められた生活とはいえ夫人には鎖を拒否する自由が与えられておらず、すべて主人の一方的意志によっていること。

八、鎖の着装は一時的なものではなく、その

被縛期間には全く期限がないこと。

九、不自由で苦しい奴隷姿のままで、日夜実生活が続けられていること。

などであります。

鎖を奴隷妻完成の最終の道具として使うことは、自由な解脱を許さない長期の戒具として当然と思われまゝ。それには市販の犬用の鎖が一番安直で、戒具製作の作業も割合に簡単でしょう。鎖には捕縄のような弾力（伸縮性）がありませんから、これで身体を長期に亘って緩みなく縛り続けるためには、余程嚴重に鎖を引締める必要があります。それに弾力がないだけに肉体に激しい苦痛を与え、鎖の環の一つ一つが肌深く喰い入って、一層加虐の効果を高めます。殊にそれが犬用の鎖であることが、精神的にも、落ちぶれ果てた奴隷意識を否応なしに植えつけずには置けません。つまり犬鎖の使用はMSの真隨に合致したものだといえます。即ち「ジャラジャラ」という音響的なMS効果は寧ろ重要ではなく、着脱の自由を奪うことが主たる眼目となっているように思われます。否、むしろ鎖独特の音響は日常生活の上でマイナスになる点で、音がしないように縛る可きかと存じます。そういう意味で、鞭打ちよりも緊縛が主になっ

ておるといふのも、社会生活上からの一つの限界を示すものではなからうかと考えます。

これら二例の内容の中で、私が特に驚嘆した点というのは、金田夫人のウエストに巻かれた胴鎖が、ハンダ付されて絶対解脱不可能であること。それから、山本夫人に対して行われた、熱海温泉旅館での非情な仕打ちの一件です。その何れもが、正に徹底したMとSの凄まじさを物語る証拠であるとして特筆せられるべき価値があります。

山本さまについては不明ですが、今田さまの場合は、お子さまがおいでの方。小さい時は兎に角として、成長されてくれば奴隷生活の上にも何かと差し支えが起って来るかも知れません。さらにこれはご二人に共通していただけるのですが、果して何年先まで、こうした生活を継続して行けるか、ということが問題です。

万一大病にでもかかられたら、どうされるのでしょうか。また老年期に至るまで、今のままのM性を保ち得るものかどうか一つの課題です。奴隷妻であるならば一生、鎖で縛り続けられるべきです。病気をしようがどうしようが、死ぬまで鎖を外すことは許されない。それが奴隷妻の宿命であり本質なので

す。果してそこまでの決意と覚悟とをお持ちの上での営みなのでしょうか。若し然りとしても、そうした事柄が社会生活の上で何処まで許容されるのでしょうか。

課題といえ、鎖による長期間の締めつけが肉体上に及ぼす影響はどうでしょうか。例えば、肋骨とか骨盤に当る部分の皮膚はすれて傷つき、その他の柔かい肌の部分も鎖による圧迫溝が深々と喰い込んで、内出血による色素の沈着が、痛ましく残って消えることがないでしょう。或は血行不順や内臓圧迫などによって、思わぬ悪影響が起らないとは限りません。しかもなおこうした責め苦を受け、苦しみ耐え続けることにこそ奴隷妻の生き甲斐があるのであり、それこそご主人の、愛する妻に対する情愛の発露であるといふのであれば、所詮は忍ばなければならぬ奴隷妻の性であり、業でありましょう。さらにはこれらの苦しみや悲しみが、悦びと感謝にまで昇華されたとき、はじめて夫妻のSM生活の完成があるものと信じます。

今田さま、山本さま、行く末長くお伴わせな日常をお過ごし下さいますよう、お祈り申し上げます。



懸賞入選作品

妻と女と縄

テラジルの女

花影 叢

バスの停留所の前に喫茶店があった。暗い

入口の小さな店である。私がそこに初めて行ったのは五年ほども前のことだ。車で通りかかり、思いつきで息抜きの場所としてそこを選んだのだ。その時、京子がそこに居たかどうか記憶はない。多分、いなかっただろう。K町に私が越して来たのは三年前だ。それから一年ほど、日曜日を除いて日に二度ブラジルの前に立った訳だが、そのドアを押すこと

はなかった。

K町一丁目というのがそのバス停の名前だが、そこに停る東京駅行きのバスに乗って私は丸の内の貿易商社へ通っているサラリーマンだった。

月収約五万。営業部第一係長というと聞えはいいが、総勢三十人の会社の、部下といっても運転手を含めて三人というこじんまりしたポストに座っている、輸出入業務に経験五

年なりに精通している他、これといった特技も持たない、ひとりの平凡な男を想像して貰えば、まあどのような男であれ、私に似合いの像ができるに間違いはない。

としては三十。結婚して三年。あまりくだくだしく書くのはやめよう。そしてつい最近、私は私のそうした過去を捨てたのだ。一枚の紙に簡単に書いてしまう過去。そいつをクシヤクシヤと丸めて、紙屑箱へほうりこんだの

だ。感慨はない。

見渡すと、ちっけな殺風景な部屋がひとつ、六畳の間。これ一間だが一応それで独立した家屋になっているのだ。南側は広縁のよくな造りになっていて東の一隅にキッチンがあり西の方はバス、トイレ。仲々洒落れた構えであり、三十才のサラリーマンの自家としては結構なものと言わねばならないだろう。が、これも間もなく人手にわたる。広縁に柔らかな春の陽があたり、部屋はうらうらと暖い。平穩といえは平穩。幸福とは恐らく、こういうところにあるのだろう。女房がいて、キッチンで水音をさせている。三年の暮しで子供は出来なかったが、縁でよちよち一人遊びをしている図を、想いうかべることはたやすい。

この家売りに出すのに、しかし決心は要らなかった。多少なりともまとまった金が入ってくる筈だが、別にそれをどうというアテはない。半分は、今はここにはいない女房にやる。つまり手切れ金という奴だ。二人が別れたのは、形の上では妻が家出したことになるのだが、是非はともあれ、私には私自身の裏切りによる破局であることがよく判っている。妻が勤めに出たいといいだしたのは半年

前のことだ。一人でさがして来たホテルのレジという職場に、翌日から通いはじめた。

私の他に男ができた。私は、酒を飲んで狂った。しばらく中絶していた——手首に赤いあとがのこるので仕事にいけないという理由で、彼女が拒絶した結果なのだが、——遊戯を強引に復活させ、力づくで責めた。そうすればいやがるにきまっているのを承知で裸にむき、赤く痕を残すに違いない縄を、容赦なくかけた。きいきい泣くのに、さすがに気がひけるので、布を丸めて口におしこみ、やっとな喘ぎだけにおとなしくなったところを風呂場へひきずりこみ、ホースで水をぶっかけてやった。異様な叫び——口から音はスースーとしか出ないのだから、そうである筈はないのだが、たしかに叫びというはかない——が私に伝わりと同時に、ぶるぶるっと皮膚がちぎれるようにふるえた。モーターが廻りはじめた器械のように震動はつづいた。

翌日。仕事を休んで、彼女は一日中寝ていた。食事はとらなかった。私も出かける気になれず、縁側の椅子でぼんやりしていた。宿酔いでズキズキ痛む頭のなかで、一切を嫌悪した。嫌だ、嫌だ、何もかも嫌だ。嫌だ、嫌だ、何もかも……。

口に出してぶつぶつ呪文のように唱えていたかも知れない。呪っていた。家を、女を、会社を、バス停を、東京駅を、陽光を、木の芽を、唇を、ラヴ・シーンを、公園を、豚を、ロケットを、週刊誌を、何よりも自分自身を。

夕刻になり、胃と頭のジリジリがおさまりかけたので、店屋物を取り、妻に加減を聞くのと、蒲団を頭からかぶり答えもしない。

ひとりで鍋やきをすすりはじめると、妻がこの蒲団から這いだししてきた。思い直して食事に出てきたのかと思うと、そうではない。広縁のところで立上る。足をガニ股に踏んぱりよろけながらトイレへ消えた。水洗の水音。それが切れると呻き声。わざと私に聞かせているようにもとれるが、そうではない。痛むのだろう。が、うどんを食べている私には迷惑だ。うどんが何かに見えてくる。吐気がくる。

長い用足しが終って、やはりガニ股でヒョロヒョロと出てくる。一言の応酬もない。髪が乱れ、一晩で落ちくぼんだ目のふちから鼻唇と、どす黒い。頬はいきんだせいだろう、紅い。紅と黒のなんだらだ。これで額がはれ上ってでもいれば、なんのことはない『お岩

さん」だ。

そのまま蒲団にもぐりこんでしまふ。私はのろのろと、また意地汚なくうどんをすすりはじめた。いかにも不味い。その時、私が何のつもりでそうしたかわからないが、部屋に立って行き、妻に声をかけた。顔を見てもむかつくというのに。

「おい、見せろ。見せてみる」

しばらく沈黙があった。いや、新たな沈黙ではなく、その前の状態が私の発言にかかわらず続いたというべきだろう。私の声は、上っ滑りをして宙に消えた。と思った。

反応はいきなり来た。

蒲団が顔の辺りでひょいとまぐれると、ふくれっ面が、そのなかの黒い瞳が光った。

「ド助平」

と太い声で女は喚いた。

「見たきや見せてやるよ。さあ、ごらん」
くるりと剥き出された膚に赤い筋が這い廻っていた。私は気を吞まれ、少しの間、突っ立ったままでいた。しかし、ぼんやりしていた訳ではない。ぼけている筈の頭がいとも奇妙に素速く回転した。誤解だ。それは誤解だ。ではないかもしれない。私は女房の肌になく交叉する縄痕を見たいのだ。単純に。好

奇的に。が今のところ私はそれを見たところで役立つまい。胸のときめきもないだろう。ほんとうに見たいのだろうか？ 見たい。見てやってもいい。面つき合わせて見たい。反吐のなかに眼を据える。走らす。暗い情熱。ドス黒くて紅い情念。胸の奥の炎。ド助平！ 灼かれるがいい。確かにド助平だ。何処かで聞いたことがある。このセリフ、二十才前後、金を握ると通った娼家のすれっからしが喚いた言葉だ。ド助平！ しかし妻の叫ぶ言葉ではない。もともと、そんな言葉を知っているのは驚きだ。女も案外なものだ。追い詰められると牙をむきだす。うなる。逆毛をたてる。追い詰めたのは、この私だ。もはや、妻ではないのだろう。

私も夫ではない。泣き声を聞いた。泣く、というより喚きの続きである。うつぶせになり、尻を私の方に高く突きだし全身で喚いている。喜んでいいるのではないか、案外に。とすれば、これは歌である。猫族の悲鳴のような讃歌である。

電灯をつけた。ふいに眼が覚めたように明るくなった。それまでに夕闇に気がつかなかったのだ。宙に浮いて見えた玉は、そこだけに戸外の薄明が映っていたのである。それに

しても私のくそ落ちつき方はどうだろう。度胸というべきか。虚脱とむしろいうべきか。讃歌を前にして心はビクともしない。

その時、猫は牙をむいた。大げさでなく、何かしら白い巨体が飛びあがった。私は鼻の奥に激痛を感じ、それから後へくずれた。

今でもその時の状況を想いうかべると、スローモーションの映画を見るような、交に間延びした動きがそこにあった気がしてならないが、事実はむしろ急テンポな事態の推移があったようだ。つまり彼女はぴんと跳ね返ったように態勢をたてなおすと、いきなり足を飛ばし私の突き出している顔をしたたかにけた。私がひっくり返る。飛びかかる。滅茶苦茶にしがみつく。ひっぱたく。ひっかく。けとばす。跳ねくる。ぶつかる。ころがる。人間の動作のなかで最も動的なそれらをあとになって羅列してみたところで、その表現になっていないが、全体として、彼女のそうした動作は私に対する攻撃というより、彼女自身のために作られたものだった。副次的な攻撃が私にその目的たる効果をもたらす筈はなかった。が、別な意味において、意図はどうあれ、効果はやはりあり、当然のこととして劇は新局面を迎えた。

私は、彼女のよくくねる肢態をようやく腰と腕で押さえつけ、一息ついた。女は間断なく喚き続けた。殺せ、殺せ！ といっているようだった。その間に、バ声。なんともいいようがない、その多彩ぶりには更めて敬意を表したいぐらいだが。

曰ク、色ガキ。曰ク、地獄。曰ク、デバ亀変態。H。……

私にもどこの言葉だが判じがたいものもあった。いや多くは私に判らなかつた。押さえつけてはいるが、どこからその濁音がやってくるものかいつこうに見当がつかない。

私は目で細引を探した。それ用に買った、昨夜も使った黒い布織りのそれが部屋のどこかにある筈だった。

目が、かすんだ。汗が目に入ったのだ。ひどい汗である。水のなかでオットセイをおさえこんでいるようだ。水のなかで、鬼どうしの戯れに似ている、斗争。やっと縄がみつかり、見当をつけて、片腕だけをねじりながらそれをとった。女の体が跳ねかかったが、悲鳴をあげてパタンと伏した。私は容赦しなかつた。ひとまわりごとに力をこめて、縄をすごいた。休まずに、正確な機械のように私の手は動いた。思いつきがあった。やっとひと

つの荷物をこしらえ上げ、ふとんの上にころがしてから、女の口を昨夜と同じようにこじあげ布切れをかました。が、時をおくとまたはじめから愁嘆場のくりかえしだ。こうしておけば、私の手がかからなくとも、責め本来の苦痛の永続性が得られるというものだ。そして、そのうちに慣れる。苦痛の奥に眠っている臆病な快楽がめざめる。悲鳴は喜悅のあられもない序曲だ。

私は、女の縄尻を柱にとりつけておいて、外へでた。ぐらぐらと足がゆれて歩くのに骨が折れた。細い暗い道が石段になっていて、なまぬるい風が、肌にまとわりつくように下の家並から吹き上ってきた。

私は、私の持っている性癖をとにかくいう言葉はもたない。とにかく現世、いや人間が社会を営みはじめて以来、私の癖のような現象が、性の形として表だって承認されたことは、まれとして存在したが、本流としてなかったことは事実だ。私もそれを充分知っている。私の持っているものは、つまり奇態なのだ。そこ居直ることはできる。そうだと変態、いいではないか、という具合に。

たて方じたいが滑稽に思える。在るものは在るとしかいいようがないではないか。そこからすべては出発する。

二年前、喫茶店ブラジルで京子という女に出会う前の私は、前にも書いたように平凡なサラリーマンであり、新婚の妻をもった、はた目にも当人にも、しごく平穩に見える若い男だった。が、その私とて一ツ足飛びにそうなったのではない。私なりの人生の曲折を経てそこへたどりついたのだ。

その一年前、私は私の父と呼ばれる老人の死に立ち会い、現金で百万なにがしの遺産を得た。生前、老人は『高利貸し』と世間で呼ばれる業を東京の下町で営んでいた。借家の裏店ずまいを長いこと続け、晩年の数年は病院の大部屋ぐらしだった。それも生活保護者を主に対象にして経営されている病院の最低のベッドの上で有金がなくずしに消えて行くのをしつかり握りながら、一生を終った。私は、遺された一通の銀行預金通帳を前に、ひとりの老人の死に、いっこう切実たり得ない自分を幾分持てあました。

もの心ついてから、私にとって老人とは、ひとつのイメージを持った他人だったようだ。母というべき女も私は知らない。老人と

私の貧相な生活のなかに、時折、女の影があり、短期間でそれが消えるのが常だが、その複数は要約され、玉枝という名のひとりになっている。なぜ玉枝なのか。私にとってはじめての女がつまりそれなのだ。

私は今はさほどでもないが、十六、七才ごろまではかなり寸足らずの少年だった。成長も遅く、したがって、私が普通にいえる快樂を得なかったとしても無理はない。

老人にとって女とは何だろう。昔風にいえば、安い女中でも置いたつもりだったのだろう。それ以下の仕打ちはあるにしても、それ以上の待遇はなかった。私は問題外、員数外だった。私にとって女は二種あった。私をいじめる女、可愛がる女。が結局は一人である。女は、自身の感情によってのみ行動をする。私とて同様である。ただ主体がどこにあるかというだけの差が各々にあるに過ぎない。

女は女中であり、私は犬だった。としておこう。老人は不可解な、いまわしいに過ぎないもの、それ以上の何者でもなかった。

私と女の関係が老人に知れた。女はいとも簡単に追いだされた。老人は酒を飲んだ。私を呼びだしひとつの劇を演出した。女をとられた老醜の狂った君主。その小姓。

老人の骨太の手が私を捕え、私の衣服をむき、私の、恐らくおかしい程貧しい体を一本の麻の細引でくくりあげた。

私を灼熱の鋼鉄が貫いて疾った。

十七才の春、私は老人を捨てて、下宿生活に移った。夜間の高校へ通い、二十三才の春卒業。官立の大学入学。と書けば容易だが、いずれの時もお話にならないくらい、私は金が無かった。下宿は何度も追いだされ、何程かの手づるをたどり転々とした。たまに金が入ると『赤線』に行き、女をかき抱いた。女は私に親切だった。化粧くずれで、だんだらもようの女の顔が時には天女に想えた。

大学に入って間もなく、アルバイトに来た丸ノ内の商事会社に何となく腰が据り、二十五才、正式に社員として入社した。大学は自然に退学した。教員になり損った訳だ。

どちらかといえば小柄で通る私は、同じように小柄な女が好きだ。玉枝も小柄な女だった。街へ行っても小柄な女を選んだ。妻の明子も同様に小さい。が、乳房とか腰とか、つまり蝶番の部分は意外にたくましかった。顔はいずれも美人とはいえないが、男好きのするオキヤンなところがあった。が、新婚の明子は、まるで跳ねっかえりでなく、人形じみ

ておとなしかった。私の帰りの足音をドキドキして待っていた。少し冗談をいうとおなかを押え、痛い、痛い、といって笑った。おとなしかったとは、そうしていたのではなく、それで満足していたのだ。私は仕事を大切に、時間を守ることに忠実になった。

「ブラジル」の戸を私が押したのは、土曜日のことだった。

ドアの内は、冷たく空気が沈み、人氣がなかった。二三步奥へ進むと、カウンターが奥までとおり、女がひとり客側のカウンターにもたれてうつぶせになっていた。客なのか店員なのか判断がつかねた。しばらく勝手のわからないまま私はそこに突っ立っていた。

もし、土曜日でなかったなら、もし晩春の陽光が私のなかになかったら、私はそこで引き返し、当分はまた「ブラジル」の戸をあけはしなかったろう。変な喫茶店の変な女という印象もじきに消え、私の生活に京子が影を投げかけることもなしに、時は過ぎ去ってしまったことだろう。

が、いずれにしろそうはならなかった。私は気嫌のいい昂揚した心理状態にいた。女に声をかけた。女はゆっくりとした動きで顔をあげ、私を見た。しばらく見ていた。私にいく

らかのたじろぎを与えるくらい、真剣とはいいがたいが、それに近い対峙があった。

それから急に、釣人に気づいた小魚のように、くると頭をひるがえすと、立ちあがって、一人の女店員の恰好になった。

一時間ほどブラジルにいた。その次の週の土曜日にもブラジルに行った。行事はどうやら習慣化し、私には、その行事が気に入っていた。つまり、それも外の世界の出来事のひとつになりかけていた訳だ。

京子とは、初めての時以来口を利きあっていなかった。最初の印象はどうであれ、私はまだ彼女の存在を気にしていなかった。

二月ほどして京子の顔が見えなくなった。やめたのだという。少しのもののさびしさはあったが、それだけのことで、顔だけでも知っている女の子が嫁にでも行ったと聞くと男のだれしもがほっとためいきのひとつもついて見る、その感慨が京子の場合もあったに過ぎない。私には戻るべき家庭があり、妻があった。私のため息がその場かぎりのものだったのも当然である。

夏のことだった。私は仕事で遅くなり最終のバスでK町三丁目の停留所へ降りた。ブラジル”の灯がほの赤く明るい。時間を

見ると、九時四十五分。ドアを押すと、ひどくまぶしい光の渦の中で、京子の顔がいきなり私の視界に飛びこんできた。

私は、いつものとおり窓際のボックスへ座った。京子が店に戻ったのかと思ったが、そうではないようだった。グループで遊びに来たらしく、騒いでいる。その高声が癪にさわる。が、私はそれについて私の方から何か働きかける習性を持たなかった。むっつりして窓を眺めるほかはなかった。

コーヒーが来て私の前に女が立ったままだった。私は店の女房かと思っていたが、いつまでも立去らないのが不審で顔をあげた。

「手がふるえてるわ」と京子はいった。

私のとりあげたコーヒー茶碗がこきざみにゆれているのを見たのだ。何故か、私は屈辱を感じた。手に持っているのが苦痛になり、受皿の上に置く時も瀬戸物のカチカチした音が意地悪く高く鳴った。私の京子を見上げる目は自然に険しくなっていた。

「怖いね」といった京子の声は、その意味する中味とは違う柔か味があった。それから、つと私の前の席にすわった。

私は、再びコーヒー茶碗をもち上げる勇気がなかった。といって、どこを見て、何をす

ればいいのか。

が、事態を判断する思考は冷静に働いた。京子に気易くされるほどの交際は、かつてない筈だった。女は酔っているのだ。京子だけならいい。仲間が出てくるようだとうるさい。若い男の妙にしつこいからみ方は私には我慢ができない。となぜそう想わねばならないのかは、まあどうでもよいが、今にも私が見じめな状態に追い込まれそうで、京子の大胆といえは大胆、遠慮がないといえはそうもいえるその姿にはらはらしつつも、一方で不快であり、一方で度胸を据えた。たかが小娘ひとりにびくつく事はない。

私は京子を見無視することにして、窓に目をやった。

「出ません？」ポツリと、京子はいった。

井口京子。年齢二十才前後。

バス停の「ブラジル」のむかい側は小高い丘になり、杉の木立を持った寺の境内になっていた。本堂の裏手に崖があり、その際に小さな泉があり、小川がそこから流れている。N写真の工場へ川は流れ入り、そこを抜けた時、かなりの水量の滝となり、小溪谷を形づくりにながら、小住宅アパート群の屋根の合間に姿を消す。

その滝つぼに近く、写真工場から流れでる豊かな廃水の流音に洗われて、京子の住んでいるアパートの二階の一室はあった。

私は京子のアパートを出てから、タクシーで盛り場へ出て飲み明かし、翌早朝帰った。家の戸はしまっていて物音はなかった。庭へ廻り、縁側のガラス戸をたたいた。何度かの末に明子の顔が現れた。その明子の語っている表情を無視して、私は部屋にさがりこみ、機械的に着衣をぬぎ捨て、そのまま夜の闇敷きっ放しになっていたらしい蒲団にもぐりこんだ。明子が食事の事を訊いた。要らない、と私は答えた。とにかく寝る、君もまだ早い、寝たらどうだ……

目をつぶる。世界が廻る。シーツの糊の匂いがする。これが、家だ。なまぐさい残り香が急速に消えて行く。が、回転は続く。ひとつのイメージがその中心にある。つるつるした、手がかりのつかめない、白いそれ。

「金？」

と私は大声で問い返した。

滝の音が高いので言葉のやりとりが自然に高くなっていた。

「そう、お金。いくら持ってる？」

と女は、平静なはっきりした声でいった。

「三千二百円。そう。いいわ、それで。ちょうどい、わたしに」

「君に？」

私は考えた。一体何がおこったのだろう。いや、何がおこりかけているのだろう。滝音が、まるでやけに大きい。滝つぼの下にいるようだった。滝つぼの底でゆらめいて二匹の魚が近づくとともになくもつれあい、泳いでいる。ゆらゆら。ゆらゆら。つ・つ・も・た・せ・というのがある。気の利かない二枚目が三枚目に変わり、劇からおっぼり出される、という奴だ。「わけ、はないわ。ただ、貴方がわたしを買ってくれるだけ」

「買う！ 馬鹿な」

小娘が何をいう。悪を氣どったところで、まだ尻のどこかは青味が残っていよう、というものだ。「ブラジル」では判らなかったが対座してみると、十七八。高校へ行ってキャアキャアしているのが似合いに見えた。

「断るね」

私はできるだけ突っけんどんに答えた。

「だめ！」

少女の目が光った。大きくなった。それでもどこか芝居じみたところがある。と私は思った。まだ、余裕がある。

「逃がさないわ」

ふいに余裕が消えた。恐怖が私の身内を貫いて走った。少女の手にナイフがあった。少女が拡大した。私は夢中に手を振って、ドアに向ってころげた。ノブに手をかけた。動かない。悪夢。ではない。女の突進に、私は変な叫びをあげた。悲鳴、だったが、噎れて音にならない。

もつれあった。馬鹿力が出て、女を組み敷いて、手をねじりあげた。女が悲鳴をあげたのでわれに返った。手から落ちたのは果物ナイフだった。がそれでも人は刺せる。とにかく、普通じゃない。気がいだ。言葉などでわかる相手じゃない。私は、途方にくれた。力はゆるめなかった。窓は、と見るとカーテンが風をはらんでたためている。ナイフを拾い、そこへ投げた。スツと消え、物音ひとつしない。額をぬぐった。冷汗をかいていた。滝音は相変わらず高いが、それ以外の物はここにはないように静かだった。

手を慎重にねじりながら女を引きずって行きドアを調べた。今度はノブは廻るが、押しても引いてもどこか引っかかる音がして、それ以上に動かない。

「おい、鍵はどこだ」

無駄と思ったが訊いた。女は、おとなしくなりぐったりしている。ぐらぐらゆすった。女の顔がガクンと背に落ち、私に向かった。ちよつとゾツとした。が、薄目を開いているのだ。

「そこに縄があるわ、それで縛って、わたしの体に訊いてちょうだい」

細い淫蕩な流しめが中年女のそのように崩れて、そういった。

戦慄が走った。が、打算も忘れていなかった。縛る、それもいい手だ。そうしておいてからどうすればよいのか思案しよう。縄は、それと気づかなかったのがおかしくくらい派手にせまい部屋に散らかっていた。

どこからこんなものが、と思ったが、その疑問はおろかだ。二枚の座ぶとんが、部屋の隅に離ればなれに飛んでいる。その一枚の下に用意されていたのだ。黒い木綿ものらしく柔い、めずらしい細引だった。

手首を重ねてくくったが、どうもぐずついでしきうまうまいかない。焦ると、手ががくがくしてなおまずい。縄がもつれる。女の軀がこうも扱いにくいものだとは知らなかった。どうにか、恰好がついた時は、すっかり汗まみれになっていた。女の背の白いブラウ

スも濡れて、背筋に張りつき、肉色を浮かしだしていた。

女を部屋の中央にほうり出して置いて、私は部屋を見渡した。四畳半の正方形だ。ドアのある所が凹んでいて、そこに小さなキッチンができていて、押入れがある。家具は、変な事に鏡台がひとつ。いやに立派な代物だが、それだけとなると奇怪にも見える。ひとつの椅子。チャブ台といっている、背の低いテーブル。それだけ。

鏡台の抽きだしをあげ、中をかき廻した。鍵は、ない。驚いたことには、一万円から千円、百円玉までごちゃごちゃにひとつの抽きだしに詰っていたことだ。

キッチンを探すべく、一段低いタタキに降りた。私の靴がそこに揃えておいてある。そのわきに黄色に光った、それが鍵だった。カチツと手応えのある音で、ドアは不思議なように外に開いた。靴を足先に突っかけて後先も見ずに、文字通り飛び出した。背に声を聞いた気がしたが、振返ることはしなかった。通りへ出て、それがきめられたコースのようにタクシーを呼びとめ、乗りこんでぐったりした。

月曜日。私は、いつもに変らず、乗る時は道の反対側になるバス停から「ブラジル」を見やりつつ、やがて来た人でふくれ返ったバスに押し乗り、会社へ出勤した。午前中は、デスク・ワーク。午後から車を出して外廻り、午後五時の退社時近く、社へ戻った。

電話があったよ、と同僚がいう、若い女の声だ。女房だろう、という、いや違う。まだあの声は子供だな、ティーンエイジャーというところかな。おい、気を付けた方がいいぞ、この頃の若い子はオッカネエからな。しかしだ、君にロリータ趣味があるとは、これはお見それ……。まあまあ、いい訳はいいやね。まあ、せいぜいうまくやれよな、エッヘッヘッヘ……。

五時五分前、皆いっせいに帰り支度。残業の連中もひと休み、というところで大きな伸びなどをする。ベル。電話、私へだ。事務所にいた奴は、ことさら好奇の目を私の応答に向ける。それほど関心がある訳ではない、その反対に半ば型なのだ。気にする必要はないが、やはりそのために私は固くなったらしい。問答がトンチンカンになった。

若い女。つまり京子だった。何時にブラジルへこれるか、という。私はそれに答えず、

私が独身でないこと、私の勤めている会社は貿易商社であること、などを要領を得ない言葉でいった。ブラジルで待っているわ。京子が一言いって電話は切れた。

私は、自分の態度が愚かしく、決然としたところが何もなく、ただうろたえて、少女に鼻面を引きずり廻された恰好になっているのが、不快だったが、一面とにかくほっとため息の出てきそうな安堵感を感じずにはいられなかった。私は危惧していたのだ。もし京子に何かしらの悪意があり、私をおとしいれようと図ったら、容易に利用できる事態がそこにはあった。警察沙汰。または、やくざ者の介入。いずれにせよ、私は決定的に不利だ。いみじくもいったロリータ趣味の一サラリーマンの裏の生活が、そこでは白日の下に晒される訳だ。私がどういいわけしようと、私の言葉は余りにも辻褄のあわない造り話にされるに充分な矛盾を蔵している。

とにかく秘密は保たれているようだ、と私は電話の声で判断した。が「ブラジル」へ行か行かぬか決断がつかない。私の会社を知っているくらいだから、京子には私の生活というものもある程度心得た上の誘いだったのだろう。それをいたずらに避けても、何か困

りそうなおこりそうだ。例えば土曜日の私の外泊を妻はどう解釈する。私は、その夜を明子に釈明などしたくない。

ぐずついた気持ちのまま、私は会社を出てバスに乗った。ともあれ気持はどうにしろ、バスは私を運ぶ所へ運ぶ、という計算もあった。S町に近く、交通のネックへ引っかけかりバスはのろのろ運転をはじめた。

夕刻の、灯の目だちはじめた街は、そのざわめきに人の気をさそう。酒を想った。酒はにがく、まずい。が、一度それを想うと、この操作で、思考はそこにとどまり、動きだそうとしてくれない。独身のころは、そうしてこの辺りでバスを捨てた。なじみの穴がいたるところにその口を開いている。見覚えのある露路にもぐりこみ、ドアを押した。よすががすっかり変っている。変っていないのは、店の名だけだ。女が寄ってくる。ひどく不愛想だ。いや、不愛想なのは、私なのだ。女たちは、私のその時々を、忠実に反映する鏡である。私には、その場をもたせるべき努力、考えれば空々しい限りだが、そうして時間というものは人々に吸収され無害なものになるのだが、その気力に私は欠けていた。こういう時の酒は悪酔いする。と思ひながら、

結構、私はそこにいたらしい。勘定は意外に高かった。ボラれたのではなく、どうやらそれだけ飲んだことは納得した。が、どうにも何かベテンにひっかかった気がしてくるのはすでに、悪酔いのはじまりに違いなかった。タクシーに乗った。行き先をいって、クッションに崩れていると、道が違う。間違えたためかと思うと、九十度に二度廻り、遠廻りして「ブラジル」の前はたちまち過ぎた。私は何かいった。と暗い露路に車は入った。車が止る。

「お客さん。酔って運転手からむのはやめてもらいてえな。それとも、なんか文句があるってのかい」

兇悪な人相というのがあるが、運転手の振り返った顔を見て私はオタオタした。結局、メーターどおりの、普通のコースの優に倍額の支払いをして、タクシーからおぼりだされた。いくら他人は自己の鏡だといって、この私があのごとく兇悪であるとは想わなかった、と心中でばやきながら、私は夜の街に歩きだした。タクシーで来た路を逆にとり通るへでると、ブラジルの前に通ずるバス通りがあった。ともあれ、私のその夜の宿命はそこに結びつけられている、と思った。自己暗示

にかけ、無意志的に私はそこへ向った。

「ブラジル」には京子はいなかった。いささか肩すかしを喰った感じで、自分の意気どみに滑稽感を見いだした。京子のアパートへ向った。確かめてみないと気がすまない、ともいえるが、やはり酔いの勢いだろう。悪酔いのしっつこさというべきだろう。京子のアパートの窓に灯はなかった。これで気がすんだかい、と自らにいいきかせてきびすを返す、その正面に女はいた。

「やっぱり、やってきたわね」

道は暗く、女の表情も暗い。が、声はあいまいでなく丸くとおど艶があった。そうだ、やはり私は来た。それ以外に何の言葉があるう。丸一日費した思考は、所詮ひとつの点を指向してめぐり廻った。私は戻ってくる酔いと悪感に耐え、めくるめく、渦の引き寄せる深淵にもぐりこんでいった。

D・H・ロレンスの「チャタレイ夫人の恋人」に女主人公が森番の小屋で男に抱かれながら男の痴語を聞く場面がある。

「君のお尻は、すばらしい」というのだが、結末に近く、その言葉がもう一度出てくる。そこでは、夫人が男のもつ性情を、その言葉

にこめられた男の「優しさ」を、讃美する意味でとりあげているのだが、夫人自体の心情も同時に明らかだ。マダム・チャタレイの母に眠っている何者かがその数語によってひらかれたのだ。

「君のお尻はすばらしい」

ロレンスを、ここで評するのは本意ではない。が、何とすばらしい言葉ではないか。言葉は、そこで真の意味あるものとして、めざめ、躍動する。それを痴語といいさる常識を私は憎む。

しかし、私は京子のそれについて、さらに明子のそれについて語ることは避けよう。私たちの場合、残念なことにも、その心情においてロレンスの言葉は理解し得ても、その人生の結末は、いともあわれである。無論、それがあわれであって悪いという規定はどこにもない。人は、そのにがさを噛みしめるほかはないだろう。

急ぐことはない。臨床的に、京子と私、ついに交い合えなかった、生の一瞬を、私の側から報告しよう。だれに？ それは問うところではなからう。

アパートの部屋には、食事の支度がしてあった。

「食べて下さるわね、今日おひるっから買い物にいった、こしらえたのよ」

と、女はいった。もの怖じしない、時にはそのために痴呆的に見えるはつきりした黒い、というより紺味がかった瞳。それが、言葉の交りめによくクリクリと動いた。

こんだては、豚のロースのソテー。マヨネーズサラダ。魚のスープ。赤のワイン。デザートにアイスクリーム。幼稚な作りだが、材料の良さで味が良い。私に席をとらせてから熱を加えた肉も、新しく香ばしい。スープの魚は、無造作にブツ切り、魚の名は不詳。辛味が少し利き、好し。ワインは輸入もの。

「さんさん待たされて、おなかペコペコ」
白エプロンを取ると、チョンと坐り、私にすすめるより、自分ではじめた。

約一時間。一本のワインが二人で空になり、食事が終わった。

「お粗末でした。奥さんみたいには、いかなかったでしょうけど、マアマアってところでしよう。これで仲々家庭的なんだ」

私は無言。が、満足していた。明子ことは想いだったが、うしろめたい気持は不思議とない。ままごとだとは思った。眠気がしはじめ、頭がかすんだ。

それから寝たのだ。何事もなく。

劇は翌朝まで、その仮の幕を降していた。

目ざめた。肩から冷気がしのびり、眠気をうばった。喉にじりじりと執拗なかわきが這いあがってくる。ひとつのふとんに背中あわせの恰好になり、二人は寝ていた。それを、寝返りで触れたもので知って、その時ビクツとしてから、昨夜がよみがえった。食事のあと、とにかくすぐ寝入った。それに間違いはなかった。私は、目のとどく範囲で、私の衣服をさがした。背広はハンガーにかかり壁にあった。下着は、見当らない。何もつけずに眠る習慣はないので、自分でそうした筈はないが、私の膚を包むものは何もない。夏かけのかけぶとんが肌につかず寒いのもその故だった。立上った。向こう向きに寝いている京子にふとんを押しやり、キッチンへ這うようにして行き水を飲んだ。とにかくこのままでは恰好がつかない。が、水を飲んだことで一応気は落着いた。窓のカーテン越しに薄明が見られるものの、部屋はまだ夜が居残っている。一寝入りは無理としても、まだ余裕はある。というより肌寒さが、私をふとんにまた戻らせた。煙草が目についたので腹這いで火をつけた。手を伸ばした時、ふとんがめくれ

て、京子の肩がのぞいた。纖く、青みがかった白さだ。朝の薄明をうつし、ぼんやりと物哀しいような色に見える。それが、私の気を入恋しくさせた。手をのばし、その肩へ触れた。と、私のてのひらに響が伝った。わずかに動くともなく動いたのだ。やがて、その動きがはっきり現れ、からだごとすべって寝返り、髪がなびき、その影に女の顔が露われた。その目は開かれていて、私を見た。不思議な花の露のように、泪が言葉どうりはらはらと頬をすべってこぼれた。

どのくらいの間、私と彼女とはそうして見つめあっていたのだろう。女の手が、私の肩から落ちた手を取った。深くいざなった。少しのぎこちないとまどいがあったが、もはや私は理解した。それが何物であるか。黒い蛇体の、一条の、縄……。

かつて私が、力でしたように、京子はうずくまり、後ろ手を揃えて、私にさしだした。ためらいはすでになかった。昂揚した気分もなかった。力仕事にかかる労働者のような、自然に冷静に沈む手つきとところで、私は京子を括っていった。前に廻してしめると、二の腕が切れそうにくびれた。痛い。むしろ、痛んだのは私の心だ。にかかわらず、自身の

痛みに挑む、むき出しの心を投げだしてかかる熱心さが私にあった。

白く透けて見えた肩や背の肌に、赤味がうかんだ。

「足でふんずけて……そして、たたいて」

短く切れ切れに、つづられる言葉どおり、私は動いた。手首の重なった背に体重をかけると、女は呻いた。蛙のように足を曲げ、そこだけが太々しく厚ぼったい臀部をびくびく動かした。そこを狙って、用意されていたと思える竹のよくしなる棒を打ちつけた。音のびしっと冴え返る高さにはっとした。

「いいの。このアパートは空家なの、わたし達だけよ、今ここにいるのは」

ああ、ああ、と長く尾を曳いて、声とも聞こえぬ音を、女は出した。今更に、考えることとて何があるろう。考えつくし、そして今夢ではなく、まのあたりにそのままの姿で現れた、ひとつの宇宙。私は竹の鞭をふるい続けた。腕が痺れてきて、私は手をとめた。白くぼうと広く存在したそれは、動きのない、赤くむくんだものに変っていた。酔いどれのしまりのなくなつた顔に似ている。胴体をころがし、おおむけにした。目をとじて、齒を喰いしばっている。スースーと息が通う。私は

横に沿い、上半身の二つの丘から、片手をすべりのよいカーブにずらそうとした。

「やめて、お願い。それはしないで」

奇妙な言葉を聞いた。が、目に真剣な色を見せて、今まで柔かった体がこわばったところを見ると、聞き違えではないようだった。拒否されて、一瞬、兇暴な想念が、私を貫いて走ったが、唾を飲みこんで、こらえた。そうだ。やめた方がよい。理性、というより、やはり一種の情緒というべきものが、私のからだを流れ、手を思いとまらせた。

「ごめんなさい。怒った？」

怒りはしない、と答えかかって、女の媚を感じて黙った。ふいに、落ちこんだような覚醒があった。動いたことで、冷氣は飛び去り、真夏の日中を告げる、けだるさと、対するに暴力的な陽光を予感させる陽が、すでに幾つかの条を作ってカーテンを照らしていた。夜はすでにない。私は疲れを感じた。

京子が、その不自由な肢態をうごめかせて、私に近寄った。首をもたげて進む、不器用な爬虫類に見えた。髪の毛の匂いが油こく私の鼻をついた。歯があたり、その痛みが私をいらだたせた。

「カーテンがもう一枚あるの。しめて、暗く

して」

「それから、ろうそくをともして。燭台はここにあるわ」

乞食巫女め！ 地獄の底から何呼びだすつもりだ。

紺地のカーテンが、部屋をふたたび夜に戻し、その夜はろうそくの火で祭られた。

「それでは落ちてしまおう。抜けないように……。もぐさ。三ついっしょでして、右と左、火を……」

祭文はつづく。無音。煙をたてる祭壇。炎がゆれる。こきざみに、やがて中断なく。大地は水を吹きだす。炎を小さくひとつひとつに写した泉は、震える地をころげ、すべる。やがて、当然なことだが、儀式は終る。ろうそくの火が崩れ、消滅した。闇の世界が訪れた。声は、途切れた。カーテンの彼方にある朝が、一条の光で闇を寸断していた……。

私たちは、ふたたび眠った。正午に近く、めざめ、私は京子のからだに幾条かの淡赤くしるされた、儀式の証しを見た。感動はなかったが、ひとつのまぎれもない事実として、私はその闇の世界を認めた。

「会社へ行かなければならない」と私はいった。

「そう。じゃ、さよなら。……わたし？ わたしはどうもないわ。変りはしないわよ」と女はいった。

そうだ、変りはしない。バス・ストップの前の「ブラジル」という喫茶店、そこにある日ひとりの女がいて、私が通りかかり、それだけの事だ。

帰り際、私は女に金を渡した。女は受けとった。京子の住んでいるアパートは、階下が、近くの炭屋の倉庫になっていて、上は四つのほぼ同じ造りの部屋になっていて、今は家屋ごと売りに出ているので、住んでいるのは京子だけだ、ということだった。「その炭屋のおじさんが面白いの」と京子はいった。「犬みたいに足をペロペロなめてよろこんでるの、おかげで足がいつもきれいわ、わたし。顔も手も炭を塗りこんだみたいになっただけで、舌までは黒くないのね」

私は、社へ電話して欠勤し、家に帰った。明子は顔を紅くはらしている。恐らく寝不足なのだろう。それが、京子のだらしないところと転った臀部に見えた。目がちかちかし、ものもいわず、私は明子を抱きかかえた。変な恰好になるのが自分でもわかった。ふとんのところまでかかえこんで、唇まで赦しながら

ら、ふいに女は暴れだした。部屋を飛びだし、縁にたったまま泣きはじめた。私は、すっかり白けた。腹が減っているのに、気づいた。うまい味噌汁がいっぱい飲みたくなかった。妻に声をかけかけたが、やめて自分でキッチンに立った。側を通ると、肩をびくっとさせて、こころもち泣き声まで高くさせたようだった。石かなにかを口にほうりこまれた気がした。戸棚をあけると、皿に大切れの肉がある。いったん焼かれたものだろう。黒くちぢれている。トマト。ざるに野菜が切って入れている。ガス台の鍋。スープ。何の脂か浮いてギラついている。京子の食膳のと、まるで同じだ。飲んで見た。なまぬるい。が、見た目より味はいける。肉をひっぱりだして口へほうりこみ、汁を飲んだ。

次に妻を抱いた時、抵抗はなかった。発作がおさまりきっておらず、しゃくり返るようだったが、支障はなかった。私の背に廻された妻の手に力がこもってくるのを感じながら私はあることを思った。愛。愛とは、何？

今度、細引を揃えておこう。糸織りの、色はやはり、黒……。

その週末。朝から、京子の事が気にかかっ

た。以来、京子から電話もなく、私の方から何か逢う手段をこうじる気もおきず、多少気にかかるまま過ごしてきたのだが、その気分が週末をむかえて行き詰って来たのだ。

退社時刻になった。が、私の責任である車が帰ってこない。用事は、横浜までなので、それも時間上予想できたし、はじめはゆっくり待っていた。食事にも時間をかけ、仕事もないのでビールを空け、二時近く、さすがに気になりだした。と、電話、川崎のA町警察だという。悪い予感はそのままあたり、事故だ、という。子供をはねた。人身事故では任せてはおけない。私は社を出た。

結局、私が仕事から解き放たれたのは、夏の長い日もすっかり昏れた夜。幸い事故は、子供の脳震盪で一時的な失神のみで済んだようであり、とにかくほっと一息ついた。S町の灯に私はまたひっかかった。アルコールが廻りかけると、いやに調子づいて、はしご。そしてタクシー。「ブラジル」の前で降りた。「ブラジル」は暗い。そうだ、ちょっとおそ過ぎたな、と気づいた。京子のアパート。滝の音。うるせえぞ。ちったあ静かにしろ！ 灯は、しかしここもない。かまわず、階段をドタドタ音たてて登り、ドアをノッ

ク。無音。応答なし。顔をなでおろして、思い切り悪く離れた。鮎屋に行った。そうして、目ざめていれば京子に逢う気がした。会って、どうこうなるというものではない、と思った。世に吾在るを君よ知れ。

「その意気だよね、おっさん」

鮎屋の若い職人の顔が振り向いた。

「いや失礼。おっさんじゃない、わかいしゅう。なあ、君よ」

しかし、そう考えることは、無言の私の京子への執着へ形を与え、執着そのものを形骸化しかかる私の心の習性からなのを、私は知っていた。酔ったところで、その作用に交りはない。そこに至ると、私は、どうにも救いがたい自分を感じるのだ。ヤマアラシのような、ナマコのような、貝のような、自己。その私の目に写るものは、灰色の、形の幻に過ぎない、世界。風のような、時間。

思うことは思うことによって裏切られる。下手な田舎芝居は、そして演出される。

鮎屋を出ると、さびしい夜の街である。さびしいねえ、君。さびしいよ。さびしい。犬が鳴く。車が凄まじい音で近づき、遠のく。残念なことに、しかし真の意味の淋しさはもはやないのだ。安全な、我が家のふとんがあ

る。眠りがあり、訳のわからない夢があるのみである。

翌日曜日。昼まで床から頭があがらなかった。完全に宿酔いで、床を離れてもぐらぐらする。が、食欲はあった。食事の時、妻が私にいった。

「K町一丁目って、この坂の下町のことでしょう?」

「うん。交叉点のところのバス停がそういう名だ」

食事をしながら新聞を読むのは、私の長い習慣だった。従って、妻の顔色も見ない。

「写真会社の工場があるんですって。そこから河が流れだして、小さな滝がある」

私は明子の表情を思わず見た。

「その側のアパートで、人殺しがあったそうなのよ」

私は片手に持った茶碗をおとしかけた。

「今朝、下の町の八百屋さんへ行ったら、そのお隣の隣が炭屋さんで、そこご主人が犯人なんですって、大騒ぎしてたわ。新聞に出ていない、記事?」

社会面を急いでひろげ、見出しを拾ったが見当らない。

「朝刊には間にあわなかったのね。なんでも

殺したのは三日前だかなんですって。今朝がた警察に、自首したんだか、だれだかがうったえたかしてわかったんですって。アパートに死んだまま三日もほってあったんだわ。気味の悪い。……あら、もうご飯おしまい。どうしたの。顔色がとても真っ青。気持ちが悪いの? ごめんなさいね。お食事なのに、変な話はじめちゃって」

間違いはない。京子だ。くるくる頭の中が廻転した。昨夜、私がおとずれたアパートのあのドアの一枚むこうに、京子の屍があったというのだろうか。どういう肢態の様で。どういう表情で。あの黒い縄は? 紺のカーテンは? 鏡は? ろうそくは?

「まだ、酔っているらしい。水をくれ。一息寝よう」

といった声が、おどろおどろして、自分の声のようでなく私に聞えた。ふとんにもぐりこんだ私に妻が水を持ってきた。息をつく、妻の顔が歪んだ。唇は、味がなく不快だった。

夕刊の記事で事実が確かめられた。被害者は、井口京子(22才)意外なことは彼女は、炭屋の主人、井口の妻であることだ。無論、男は若くない。というよりすでに老人だ。五

七才。若妻、嫉妬のため殺さる……。

二段見出しの、社会面の隅の方の記事であり、常識的な動機と内容が飾りつけもなく書かれてるに過ぎない。

月曜日から、変り映えのない日常がはじまった。京子に関する疑問はあった。そっけない新聞記事以上に私は彼女を知らないとはい得たが、私はまた別な京子をひとり知っていた、というべきか。未知の京子の部分をたずねる気は、私にはない。ただ、日を経るにしたがって、京子の死という事件は遠のき、ひとつのイメージがしだいに明らかに姿をあらわしてきた。

夏の終りから秋にかけて、私がK町一丁目の黄昏れに降りたつと、ブラジルの小さな窓には灯が入り、道の彼方は燃えるような茜が見られた。そのために路も赤く、街路樹も赤く、街だけが黒く大地のようであった。人通りはあったが、私は人を見なかった。車の、おめき、それも遠く、地の伝えるわずかな震えとも聞こえる。その赤く血ぬられた地平線を背景に、私の京子は一本の黒縄を背に引いて歩みつづけていた。血も、死も、かわりなく。それが京子であり、同時に私自身だろう。私に悲しみはない。私には、しかし予感

がある。恐らく、その歩みは永遠であり、何物も、その果てすらもないだろう。が、大げさにいう必要はない。二年がた、離れるともなく離れていたアルコールと私は握手して、日常に彼を連れこんだ。どうしてそうしたか特別な理由はない。それが安易なことだったからに違いない。明子は、単純に顔をしかめた。外でふらふらせず、家でやった。私は、ひどくしつこくなっていたので、そのあぐくの半暴行的な行為を明子は拒否するようになった。縄のことを私は考えた。しかし、ひるまになってみると、その用意をまた怠るのだ。勤めが、きつい。午前中のデスク・ワークを避けて、できる限り外廻りをするのだが顔なじみのおとくいに愛想をいうのが臆劫だった。と、その自分の態度そのものが、後のしこりとして残り、次の顔あわせを苦しいものにする。もともと私は性向として、人づきあいのいい方ではない。が、その仕事、外交と呼ばれる類のそれだが、を遂行するのに性向はさして問題ではない。ただ、動くこと、人に会うことを厭うてはいけない。相手を圧倒し、自己のペースによって業をなす、それもいいだろうが、人と人との間にはおのずからリズムがある。そのリズムのままに動いて

いく。それが、私の行き方、私の生のリズムだ。どうやら、その乱れが、私にあった。

仕事の業績は、急カーブをえがいて低下するという事はない。もともと扱う商品が特殊な輸入品で、需要は全体的に急伸、いくらかの品薄気味で、その行先も見通しのついていて、といった物であり、私が係としてデスクに座っていれば、事は万障なく行われるはずだったが、現実には、車の事故以来、運転手がふいに来なくなったり、在庫を調べたら、頭をかしげる点がでて来たりで、低調であり、その挽回を図る気力は私に欠けていた。結果はその年の下半期の成績にひびき、年の暮、営業部長から勧告された。

「君、体の調子がおかしいのじゃないか？」

病院で検査でもして貰ったらどうかね」

年末から正月へかけての休暇、明子連れ旅行へ出た。わざと通俗的な温泉をえらんだ。雪に囲まれた山の宿、とは思ったが、上つった遊蕩的な気分の方が、その時の自分には必要な気もしたのだ。

朝風呂へ入っていっぱいやり、酔いさましにI市の海岸通りを歩き、また宿へかえって風呂、酒。不思議なほど、それが飲める。宿酔いも三日酔いもない。明子にも、飲ませる

と、気分が浮いているのだろう、よく飲む。頬を桜色にして、しかしそれ以上にはならず、つつましく、平気な顔をして、私の盃につきあっている。

街を歩いていて、縄を買った。黒でなく、白だが、まあ間に合う。妻は首をかしげる。「いいから、いいから。面白いことがあるんだ」

と答える言葉尻に、胸がつまった。思わず咳きこんだ。

その夜。部屋ずきの風呂へ妻を入れて、下着をかくし、風呂から上りうろうろしている彼女の手首に縄をからめた。裸で不自由な姿にされて、妻はうつむきもじもじした。それを見ながら、私は酒をつづけた。

家に帰ってきた。再び会社、家の往復運動がはじまった。ただ、夜の床のなかに持ちこんだ細引は、自然明子が受けいれるようになり、一種の安定を得た。と、私は想っていた。その夏も無事に過ぎかけたある日、明子が勤めに出たいといいだした。一日考えた末、私は許容した。

結局、細引を使うそれ自体は、一種の夜の場のアクセサリーに過ぎない。が、そうすることによって得られた場の、異常な昂揚は、

私に幾分かのおとろえを生みだした。おとろえは焦だちを生む。さらに強い刺戟を求める。自然に昂進し、行きつくところは、京子の死が想いのかぶ。計算してみれば、そういう事だ。がそれが必ずしも、と私は思った。その道の至る町ではない。

何が、私をしてそうさせるのか。獸的な欲望か、私の本来持っている野性か、あるいは滅亡へ指向している本能か？

私には混乱があった。明子のひとつの提案とも見えるそれに乗って様子を見てもいい、と思った。

当然のことだがアクセサリーを連夜用いつづけることは無理になった。手首と足首に残るアザが、翌日の仕事に支障となり隠しようがない、というのだ。隠すことはない、とはさすがに私にもいえない。休日の前日のみ、ということでは私は妥協した。

年末に近づき、明子の帰りのおくれが目だちはじめた。となると、私も時間つぶしに、ついつい外を飲み歩くことになる。アルコールは私を卑しくし、欲望の災を一時的に熾烈にした。実際は、飲むというのはかなりの労働で、それだけで消耗してしまうのだが、頭のどこかが醒めていてそれが承知をしない。

欲望だけで体がともなわないだけ、より観念的にそれを求めた。家へ帰ると、しどろもどろに明子に挑む。恥も外聞もない。大声で喚き、明子を屈伏させる。下ばきを剥ぎ、鳥肌だったのも構わず平手でたたく。いい体だ、もいっちょ、そら、テンテンテンツク、テン……。

私は、破局を予感した。正月に、明子の方から、休みを利用して久し振りに故郷へ行って来たい、という。切符は手に入るか、と私は聞いた。新聞記事で読んだ年末年始の列車の混雑と、切符を手に入れるために、夜の寒さのなか毛布やゴザを持ちこんで並んでいる若い人達の行列を思いだしたのである。勤め先の伝手があるわ、と事もなくに答える明子の姿に小賢しげな顔を見上げて、私は承知する他はないと思った。

五日に帰る、といって出て、年が明け、十日。私はなかばあきらめた。帰ってくるにしても、別れ話を持ってだろう。その場になつてみなければわからなかったが、取り乱すほどのこともなかった。形はどうあれ、私が追いだしたようになる負い目の心理は気に入らないが、それも仕方がない。覚悟をきめた。十一日、明子は帰った。風呂敷包みだの古ば

けたトランクだのちょっとした引越しの荷物。大荷物をえっちら運びこんで上気した顔は、気嫌がよかった。背負い投げを食わされた感じだが、正直ほっとした。

その夜、音沙汰なしの日おくれを理由に、私は妻を責めた。右手と右肢、左手と左肢の各々をくり二方に綱を引くと、尻が高々と上に突きでる。その頂へ灸をすえた。小粒のに次々と火をつけた。前へまわり、髪をつかんで顔をおこすと、目を固くつぶり、唇の中で歯を喰いしばった表情が、斜めに私に向く。額に滲む汗。口が、ふいに開き、舌を少し出して喘いだ。私の胸を突きあげてくる熱いものがあつた。

翌々日から明子はまた勤めに出だした。相変らず帰りがおそい。決算だという。それを疑わなかったといえは嘘になる。怪しいものだ、とは思った。が、事実がどうであるのか、私は確かめる気はなかった。明子の勤めている、といったホテルは私の勤め先から遠くなかった。行って見ても、電話をしても、手間のかかることではないのに、それはしなかった。私には私の生活がある。これは明子との夜にかかわらないことだ、と思った。同様に、二人の生活から抜けだした明子の部分

があっても私の問うところではないだろう。

それが私の論理だった。

夜の誘蛾灯のような灯の影で、私は明子を見いだした時も驚きはなかった。確かに二人連れだった。S町でもはずれにかかる街並は淡青色の道を暗闇にむかって通していた。それを追ったのも、気まぐれというほかない。

一軒のホテルへ二人のうしろ姿は消えた。なるほど、と私は思った。きびすを返して、灯の明るい街の中心へ向って歩いた。なじみのバーで酔いつぶれるほど飲んだ。

その夜のことは、それで済んだ。一月も終り、決算のはずだった時間のおくれは、多少、当初は減ったようだったが、一カ月たたないうちに旧に戻った。

ある予定日、つまり土曜日、夕刻の食事中つい口走った。

「お前、恋人が出来たってな」

妻の箸の動きが止った。何をしているのかと思ってみると、口に物をほうばりながらくっくつと笑っているのだ。私は、呆然とした。眼前の妻の姿がぼうつとかすんだ。これはいけない。咄嗟に、家を飛びだした。タクシーをS町へ飛ばした。それから、バー・A B C D E F G……。

私の狂態は、それから三昼夜つづいた。昼と夜は入れかわり、雨戸をしめっぱなしに部屋を昏くして眠り、めざめると酒を飲みに行き、はしご、家に帰り明子にからみつく。明子は横浜の工場にいた時から恋人がいたそうである。それをひとつの旋風のように横から襲ったのは、この私だ。

恋人は同郷の人間で親同志ともつきあいがあり、いわば幼馴染のいいなずけといった相手だったが、ふいの明子の消滅で、あきらめきれず二年さがし廻りここへ尋ねてきた。人の妻という立場も一応は納得し帰ったもののそれから時折やってくる。勤めにでたのは、その後で、昼間ここへ来られるのを避けるのと、仕事に暇を取られてつまらない考えをおこさずに済むようにとのことからである。それもしか、男に勤め先にまで追ってこられると、逢わない訳にも行かなくなり、ずるずる関係が続いた。

とにかくどういう落着き方をするにしろ、一段落を求める意味で正月、男の勤めるままに二人で帰省した。そして親に相談したところ、男はまだ若く勤め先もないような有様で、結婚といったところで生活のめどもたたない。これでは話にならないと諭されて結局

私のところへ帰ってきた。追って男も上京。別れ話になったが男が承知しない。私に関係をばらす、とか女を殺して死ぬとかいう。明子は、もうどうでもいいように、とは思ったが、生活にもすっかり詰り、野良犬のようになった男を見て、これも自分がしたのかと思うと哀れになり、お金を与え、してきたのがかえって悪く、ずるずる今日にいたった。——それが、明子を責めて、私の聞きだした話だ。

話。しかし、私にどうすればよいという思案は湧かない。その夜。出かける時そうするよう明子を縛り、鍵を外からかけて、私はふらつく足を踏みしめて街の灯に向った。さすがに萎えた胃はアルコールを素直にうけ入れてくれない。がとにかくしばらくの放心したさまよいに身をまかせて家へ帰ると、鍵が開いている。中へ入ると、明子はいない。消えた。二日ほど私は暗闇の中でうずくまっていた。それから会社へ連絡して、退社の手続きをとり、以来、家にとじこもっている。

明子の勤め先のホテルへ電話すると、明子が出なかったが、明子の消息はいとも簡単にわかった。ホテルをやめていないのが意外だ

った。調べてみると、いつの間にか衣服や手廻りの品は運びだされている。江東の、ゴミゴミした安アパートが想像できる〇〇荘とかいう新住所へ、私は会社から受けとった退職金のなかばを送った。何か書いてやるべきか、迷ったが、金だけにした。私にいうことはもはやない。

折返し、明子から手紙がとどいた。

お別れします。それよりほかに、しようがありません。済まないと思っています。お体

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。○直接予約購読のお申込みを下さるのには

に気をつけて下さい。わたしのために無茶にならないで下さい。それが心配です。それと思うと、せっかくの決心にもぶります。

愛しております。決してきらいでお別れるものではありません。私が弱いのです。さんざんご迷惑かけました。あなたの、わたしにしてくれたこと、忘れられません。胸がジーンとするくらい好きです。もっともひとくく責めてくれればよかった。私が死ぬほど。

あなたのほかに、もうだれにもあんな事させません。大切にします。あなたの、愛。い

大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会
社宛表記予約購読料をお込みの上、何年何
月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装
代などは、総べて当社にて負担致します。但
し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分
二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げ
になりましたので、予約購読料は三月分三冊
一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分
十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間
誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印
刷完成と同時に、外部から見えないように厳
重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送
料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御
送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読
者の方の分と一緒に発送致します。

いえ、わたしには判っていました。

愚痴になりそうなので、もうやめます。

生活は苦しいと思います。だれどご心配は
しないで下さい。生活の苦しさはがまんしま
すが、あなたを苦しめることは我まんどきま
せん。くれぐれもお体を大切にして下さい。
さよなら。

明子

愛! とは何?

裏切ったのは明子ではない。恐らく、この
私だろう。京子においても。(了)

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号
から何カ月分送れとお書き願います。第一回
分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。
何月号からとお書きにならないときは、重複
や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に
△本号にて前金切の判を捺印致しますから
継続お申し込み願います。継続のお申し込みでも
何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方
は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局
留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受
取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構
です)と受取人のお名前とをお知らせ下され
ば、当方では御指定の局留としてお送りいた
しますから、数日後その局で御受領願います
局での留置期間は十日間です。その間に
お受取りにならないときは、発送人に返戻さ
れます。



＝〔手記〕＝

『化物の話』のはなし

能 美 積

世の中には変わった人が沢山いる。私などその最右翼にランクされる変人であるから、他人の事とやかく言えた義理ではないが、一寸ばかり面白い話が身辺に発生したので、紹介させて戴く事にします。

民放のラジオ番組で視聴者の投書を紹介して穴埋めをしている局がある。投書は殆んどといって良い程、御婦人方であるが、仲々建設的な意見もあって、私は楽しみに聞かせて貰っているのであるが、先日一寸気に触れる発言があった。例によって悪書追放に関する問題だ。奇譚クラブの名は出なかったけれども、七つ程の書名をあげて、**「男性共の興味**

本位に発行されるこれ等の書籍が、次の世代をになう青少年を毒する役割りを果しているのを、私達主婦は力を合わせて叩き潰す必要がある」というものである。

多少大人げないとは思ったが、私は反論する事にして早速、筆を取ってみた。

「発言者自身、よくまあ七冊もの悪書を探し出されたものである」と、先ずその労をねぎらい、事の序でに「婦人専門の雑誌には随分いかげんしい物が出回っているようであるが、女性諸嬢の興味本位に発行される、これ等の書物は悪書の対象にはならないのですか？」という意味の事を書き、青少年の健

全なる育成のために、という美名の元に、悪書なるものを読み漁る暇があったら、あなたは先ず歩き方の練習でもなすっては如何。交通のルールを無視して、左側を平然と歩きまわる無神経さ。幼児が手を挙げて横断歩道を渡ろうとするのを、さっさと引っ張って近道に行く母親達。まずその悪癖を叩き潰して、いってこそ、青少年の育成云々をすべきではないか」と。大要そんな意味の事を書いてみたのである。どうせ採りあげられる事もなからうと思いつつ投函したのであるが、意外にもこれが放送される結果になった。

数日後、三人連名の封書が届いた。何事な

らんと開封してみたら、これがなんと、件の投書者と、それに共鳴する二女性からの抗議文だったのである。

まず「悪書追放と交通法規とは全く別個の問題であって、これを混同して文句をいうのは筋違いである」に始まっている。全くその通りであるが、私としては、悪書礼讃をやったのでは没にされるに決っているから、運転士という職業に引っかけ教訓めいた脚色をしただけの話である。三女性も、御親切にも悪書の見本を二冊同封し、「貴殿は、（たしかに貴殿としてあった）悪書を御読みになった事がないから、そういう事を仰有るのであらう。一度とくと御高覧の上、是非責任ある御回答を賜わりたい」と結んであった。

見本の誌名は公開しないでおくが、一冊は週刊誌で、くだらない裸女のカラー写真に朱線が引いてある。つまりこの部分が気に入らないというのであるが、馬鹿な話だ。「たしかにオッパイ剥きだしではあるが、ブラジャーを着けさせたら、テレビに登場する水着や下着ショウのように生身で動かないだけでも、ましな位なものである、婦人雑誌に挿入される性態位の研究なんかより遥かに健康的である」とその部分は回答した。他にも沢山

朱線が引かれてあり、中には残酷漫画なるものもあった。裸の女が大の字に縛りつけられ腹のあたりから血汐が吹きだしている、凄惨漫画だ。「これはまずいですなあ、でも大人の漫画だからこの程度の事は大目に見て下さいよ」と苦しい弁解。別の一冊はSMを主体にした雑誌で、三つ程ある責小説に朱線が有った。「お蔭様で大変面白い物を読ませて貰った。出来る事なら他の五冊も是非拝見させて頂きたい。私は健全なる中年の男子であるから、その点御心配下さらなくて結構です」と半ば自暴自棄で責任のない回答をしてしまったのであるが。ここで私は一つの名案を思いついたのである。

早速書店に出掛けて、奇ク七月号を三冊購入。一旦バラバラにしてその一部を抜きとった。鬼六先生の化物の話である。奇クを直接送り、三人の悪書リストに加えられてはコトである。私はこれを別々に三人の住所宛郵送し、責任ある読後感を是非拝聴したい、と言ってやったのである。

さあこれから本番である。私はその日から帰宅すると真っ先に妻に尋ねる、郵便は来っていないか？と。

来た来た。第一便、仮にA夫人と呼ぼう。

「この原作者は貴殿のですか？ 若しそうだとしたら、貴殿は鬼六どころか、鬼千ともよばれるべきです、人間蔑視もいいところ、あなたは完全な化物です。私は貴殿のような化物とは一切交渉を持ちたく有りません。爾今文通はおろか、貴殿の名さえも口に致し度くはありません。貴殿のような救いのない人類が斯の地球上に存在する事実、嘆かわしい事です。神も許し給いますまい」

やれやれである。地球上に存在価値の無い人間とはちと甚い。もっとも、これは私ではない。団先生がきかれたら、さぞかし大笑いされる事だろう。そしてこのヒス女傑をコテンパンにやつつける名文をあみだして下さるに違いないのだが、残念ながら私にはその才能が無いのである。

「貴殿はタクシー運転手とのことですが、貴殿のような変質者が免許証を持つ事が事故多発の原因でもあるのでしよう。速やかに免許証を返済しなさい。精神異常者が野放しにされているから、公安委員会では法律で取締りの必要性を認めているのです。私達は力を併せてこの問題とも取り組んで行きます」

勝手にしやがれである。化物の話のお蔭で遂々私は変質者にされてしまった。A夫人は

「斯の手紙を含めて、一切の物を焼却しなさい。」と結んでいた。私は破り捨てたが住所だけは控えておいた。折があったら化物女の面だけでも拝んでおきたい。「序でだが私は一昨年、十年間無事故運転で表彰された事がある」と葉書で知らせておいた。若し有力者の夫人か何かで、精神鑑定でも申請されてはたまらないからである。

B夫人からは、うんとともに連絡が無い。多分、此方も私を気狂いと断定したのに違いない。

ところで問題はC夫人であった。奇ク読者の皆さん、変質者扱いの、化物の話に思い掛けない救いがあったのである。

「大変、興味深く拝見しました。特に関心を持って読ませて戴いたのは、結婚式に関しての御意見で御座居ます。あかの他人と一緒になるのだから(当り前だが)相手が裏を返せば、どんな魔物だかわからない。温良淑徳に育った女性が、淫靡残忍な男性と一生……云々(筆者註、鬼六先生化物の話の引用)って、本当に御座居ますわ。それに人生相談の話。あれが過ぎて困る何とかならないだろうか、という相談は一つも無いんですって、あたくし吹き出して終いました。そのものずば

り、仰有り難い事を見事に云ってのけていらっしやる。毒舌で有名な和尚さんもきっと顔負けなさいますわね。作者の方は、勿論ペンネームを種々使い分けておられるのでしょうか、さぞかし有名な御仁なのでしょう」

俄然、鬼六先生の株が上った。悪書追放運動の参加者に褒められては、先生も、さぞ尻こそばゆい事だろう。C夫人はそれだけでなくハ誘拐V映画名鞭と肌。のヒロインに選ばれた少女と同じような事を書いていた。

「原作がありましたら是非拝見させて欲しいですわ。花と蛇っていうんですの。先日みなさんと書店に参りました際、探してみたいんですけど見当りませんでした、正確な書名教えて戴きたいのですが……」

とんでもない話である。化物の話とは全然異なった内容なんだし、男性の為の小説である事を理由に、私は断わった。無論、市販されていない事も付け加えた。が、C夫人はしつこく追伸して来た。

「お手持のが有りましたら暫く拝借させて頂けません。秘密は守りますし、お礼も充分にさせて戴きます」

私は判断に迷った。結局唯一の知人である親爺(体験記、責め絵のある関係、参照)に

相談に出掛ける事にした。

「畏やな」

親爺は断言した。

「主婦連いうやつやろ？ 産業スパイみたいな奴やな。そんなのに騙されてみい、あんた奇クのファンに呪い殺されるでえ」

私は然しなんとなく諦め切れなかった。こうなれば当って砕けるのである。午前九時車庫を出ると、回送車の札を立てて私は一直線に芦屋市に向った。C夫人の邸は直ぐにわかった。丘の中腹の家の前に駐車すると、私は早速偽装修理に取りかかった。一時間経ったが誰も現われる気配は無い。第二段階として私は肚を据えて呼鈴を押した。インターホーンを通して、女の声が聴こえた。

「済みません、車が故障なんです。水を少し貰いたいんですが？」

C夫人は以外に若く、そして美人だった。難を言えば、少し細すぎるようである。

「何処が悪いの、もう随分前から停ってらっしやるようだけどう？」

「ヒートしたらしいです。どうも申し訳ありません」

私は、バケツ一杯の水を受け取った。C夫人は、物珍しげについてくると、私の手元を

見守った。ラジエーターは満水してある。

「どうも変だなあ？」

なんとも恰好がつかない。C夫人は車の周囲を一巡した。

「大阪ナンバーですわね」

私はバケツを夫人に返した。これ以上いる訳にはいかない。相手が美人である事で私はすっかり萎縮してしまった。こうなれば尻尾を巻いて退散するより術は無い。夫人が消えても、直ぐにエンジンをかけるのは不自然なので、五分程ウロウロしていた。

「能美さん」

ギョッギョッである。

「冷たい物でも召しあがりません」

ばれてしまえば仕方がない、糞度胸だけは人後に落ちない。どうやらネームプレートを見られたらしいのだ。コーラを一本御馳走になった。

「それで、あの本持って来て下さって？」

「持ってなんか来ませんよ」

「あら、どうして？」

「あんまり人を信用せん性質なんです」

「まあ失礼。あたしそんな女に見えまして」

「だっておくさんは、悪書追放運動の旗頭なんでしょう？」

「あれは一種の社交辞令ですわ」

「……………」

「AさんもBさんも、こんな痛快な話は、観た事も聴いた事も無いって、それはもう大変だったのよ。三人で探し回ってるの。でもどうしてもめっからないの。ほらなんとかの」

「花と蛇です」

「そう、それよ。この間婦人会で集まって、尼崎の映画館へ視察に行ったの。たしか縄と乳房、そんな題だったわ。横に、花と蛇よりって書いてあったの知ってるわ」

「観たんですか？」

「まさか。でも観たかったわ」

二十分程駄弁ってから帰路に着いた。私はハンドルを操作しながら、変った人がいるもんだと、一人でしきりに感嘆していた。正に女は化物である。

ラジオ放送がとりもつ縁で三人、否、すくなくとも一人の化物を発見した。数日後、私は意を決して、花と蛇の前篇の部分をC夫人に手渡した。「誰にも見せない」夫人はそう約束して、ペラペラと頁を繰った。

「まあ凄い。ものごっつい残酷物ね」

四馬画伯の絵とモデル嬢の緊縛写真が夫人を驚かせたようだったが、眼は喰い入るよう

にみつめている。化物の眼の色だった。

「おくさん……………この本を主婦連に提供するよな事をしたら……………」

私は両手で首を締める真似をしてみせた。「関係ないわ、二人だけの秘密。ね」



さて、三日前に夫人から分厚い封筒が届けられた。本を返してきたのかと思ったが違っていた。花と蛇の読後感だったのだ。これは素晴らしい読物である。是非諸君諸兄に紹介したいのであるが、原稿紙に書き改めるのは相当日数を要する事だ。今、私は創作に取っ組んでいる。体験記では書けないものを、なんとかものにしようと、必死の毎日なのである。

実に一カ月を費やして、百二十枚程書きあげた。残る紙数は八十枚。締切りの十五日までには、何としてでも完成させる積りでいるのだが……………

C夫人の感想文は、まことに勝手だがその後にした。

八月号も入手した。読まねばならない。拙文、『続責め絵のある関係』を採りあげて下さった編集長の御厚意に報いるためにも頑張りたい。



＜論 評＞

現代マゾヒズム考

「一般的マゾヒスト」

洪 谷 青 樹

「マゾヒスト」などと言うと、世間の人々は直ぐ「マゾII変態」であるという固定概念をもって、これを異常者ときめつける。そしてあたかも自分は、全くそのような世界とは無関係であるかの如く振舞いながらも、一方では何か得体の知れない心の奥の誘惑に駆られて、この世界をのぞき込もうとする。その時、かなり多くの人々は、自分達の心のどこ

かに、多少なりとも、そのような傾向が潜んでいることに気付いて、驚くことであろう。「マゾヒズム」はマゾッホの小説以来この名がその代名詞として用いられ、色々な面からその内容が盛んに採り上げられて議論を呼んだものであるが、良い意味にも悪い意味にも、興味本位、且つセンセーショナルな報道や表現、取り扱いを受けた結果、今日のような

に、何か普通とは違っていて、社会的道徳に背く事の如き印象を世間に与えてしまったことは、まことに残念と言わねばならない。もしもこれが、最初から性科学的、性医学的にもっと真面目な取り扱いを受け、正当な評価が成されていたならば、今日のように、「マゾヒズムII変態II異常」というような一方的解釈や、不当な社会的取り扱いをされることはなかったであろう。

「マゾヒズム」の本質は、何か特殊な条件のもとでのみ芽生え、育ってくる、特殊な心理状態というようなものではなく、誰しもが抱く本能的な欲求、本能的なあこがれ等から始まるものである。その行為が他人に迷惑を及ぼし、社会的秩序に反する行動にまで到らぬ限り、それらは決して異常とは言えない。それは性的成長の過程で、誰しもが必ず一度は何らかの形で経験することであり、進んでは愛情表現の手段、本能的なあこがれへの近づき、本能的欲求の具体化に連なる性的欲求の一つに過ぎないのである。時には、それが暴走し、一般の人々にとって、とても理解し難いような、過激な行動にまで及ぶことがあるが、これについては場合によって、異常的

要素を、やや含んでいると言えるかもしれない。

が、ともかく性風俗に関する常識とか、一般論とかいうものは、時代によってその概念が、大きく移り変ってゆくものである。男女間の最も自然な恋愛すら、許されなかった時代、性というものを最も忌むべきものとする宗教のあった時代、性と美を大っぴらに讃え上げることでできた時代等……長い世界の歴史の中にこれらが混然と入り乱れ、今日の世界に連なっているのである。そして、恐らくそれは、人類がこの地上から亡びてしまうまで、何度となく繰り返されながら続いてゆくことであろう。

ひと昔前に「マゾ的要素……云々」としてもてはやされた谷崎文学の内容も、今の文学界ではすっかり日常茶飯事のこととなり、人々もそれほど変った内容とは受取らない。マゾホすら、今や古典の仲間入りをしてよさそうな情勢である。物語に於けるこの様な流れは、古くはギリシャ神話から始まり、ルネッサンスの人間臭い文学を経て現代に到るまで、ある時は政治的、教義的に非難抑圧され、ある時は人間性解放や、芸術の自由とい

う社会的要求をバックに勢いを盛り返し、我々の時代に到るまで脈々と続いて来ている。

最近ブームを起している「アラビアン・ナイト」にしても、女性が男性を組敷き、馬乗りになって思うままにする光景が、いたる所で描かれている。それを読む人々も、今日ではその内容に、余り抵抗を感じていないようである。かつて、女性の優位を反道德的と決めつけていた封建時代の、日本的な風俗概念でもってしては、とても社会的に許される内容ではなかったであろう。

現代の世界に生き、最も現代を敏感に吸収する子供達を見ると、我々の時代とは感覚が大きく異って来ていることを、はっきりと知るのである。小学校の砂場で男の子と組み合い、平気で相手を組み敷いている女の子。男の子も女の子に馬乗りになられ、押しひしがれながらも、喜々として楽しそうである。かつてはその様な光景は、極めて幼ない子供達の間でしか見ることが出来なかったが、今では小学生のみならず、中学一年くらいでも、ときにこのような光景を発見することがある。そこには我々が感ずるような暗い影や、うしろめたさはみじんもない。全くお

おらかそのものであり、見ている私まで思わず笑ってしまう程である。かつては、「はしたない」とか「みっともない」「女だてらに」などと言われタブーとされてきた、こういった遊びたわむれも、これからはだんだんと当り前の事になってゆくであろう。今まで我々が「マゾヒズム」として採り上げて来た行為の中で、軽度なものは、もはや「マゾヒズム」と呼ばれる資格を失って来た。一般の雑誌でも、すでにマゾヒズム的表現は珍しくなくなってきた。ここで、マゾヒズム的要素を含んで人の心を引こうとした一般雑誌の記事をピックアップしてみると、その傾向がはっきりするかもしれない。

(一) 男と女のレスリング

話は少し古くなるが三十八年八月号の「一〇〇万人のよる」、裏表紙の見開きに「男と女のレスリング」と称して、四枚の写真が掲載されている。解説に「これは今年五月、花の都はパリでおこなわれた、世にも珍しい男と女のレスリングである。男は元プロレス・チャンピオン、女は……」とある。

一枚目の写真は、今まさに二人が組まんと

しているところ。女は普通に見るレスリング用の水着姿ではなく、女子体操選手が着る水着？（コスチュームと言うべきか）である。黒いピチツとしたコスチュームにベルトを締め、靴も運動シューズ……。

二枚目、男が女を高々と抱え上げて、マットへ頭から逆さまにたたきつけようとしている。女の足は宙に舞っているが……次の瞬間美しく伸びた両足が、男の首をガッキと捕らえ、逆さまに持ち上げられたままの恰好で、男の首を太モモにはさみこんで、ぐいぐいと締め上げている。それでも男は、立ったまま、女を振り落そうと必死である。……（三枚目）

四枚目では、おお向けにマットに倒れている男の片腕を、腕でしっかり固めると同時にたくましい足で締め上げている。残念ながら男の顔は足の陰に隠されており、見ることは出来ないが、残された片手で女の足首をつかみ、解き放そうともがいている。

写真そのものは余り鮮明でないが、本文中に面白い説明がしてある。

「一九六三年、所はパリの場末の大キャバレー。前座に登場したのは、まさしく元世

界チャンピオンのヘンリー・ラグラン。四十五才の男盛りで、相当な色男だ。女は元オリンピック体操選手のマドモアゼル・ド・ロビエラで三〇才前後の素晴らしい美人である。試合が始まると、すごい迫力だ。寝技に持込まれるとさすがに体操選手だけあってロビエラの手足は、タコのように、男の体にまつわりつき、男は荒い息づかいで

マットの上をのたうち廻る。その妖しい魅力は、そのまま観客にも伝わって、興奮は極度に達するのだ。そのうち女の太モモが、男の首を羽がいにしめてグイグイ締めあげた。男がもがく。顔がしだいに赤くなり、時々「クエーッ」と荒いうめき声を発する。やがてロビエラは男の上に乗る。かり、脚をまきつけ、腕を押えて固める。完全な女性上位のまま、照明が消える……。

まるで見て来たような紹介ぶりであるが、写真で見る限り内容は真に迫っている。

(一) ？？？

ごく最近の平凡パンチ、六月十二日号。同じく裏表紙の見開きの写真に説明あり。

「あなたをほんとはさがしてた……股こそわが命……変な連想を起こしたらあかんで……ピンクの股間にはさんでバチンと割るんだ。あんたも〇〇〇になりたいのかい、いいとも首だしな。はさんであげるよ、チツソクしても知らないよ。ハイ、女性の股間で死ねれば、ボク本望です」

〇〇〇のところには、「クルミ」と入れて読んでいただければ結構。そう言えば、最近デパートの家具アクセサリーコーナーやプレゼントコーナーで、黒人女などの姿をした、クルミ割りをよく見かける。昔のクルミ割り人形は、クルミを口にはさんでガチンと割ったものであるが、これも時代の移り変わりか？

(三) リオのカーニバル

四十一年五月号の「宝石」カラーグラビアの頁に、有名なりオ・デ・ジャネイロのカーニバル風景が特集されている。

底抜けに明かるい南国の祭り、そのムードに酔いしれた人々の表情を、鮮やかなカラーでダイナミックに写し出しているが、その中の一枚……。

太モモもあらわに、ピンクの薄衣一枚をまとった若い女の子、恐らく十七、八才であろう、すばらしい健康美にかがやいている。同じく二十才前くらいの若い男の肩に跨がり、両腕を振り上げてうれしそうに何か叫んでいる。かつての映画「十戒」で見られた、乱痴気騒ぎをする群衆のシーンを思い出していただければ良い。

普通に考えれば、全くたわいのない写真のようであるが、案外、人々の興味を引くことを予知して盛り込まれた、このグラビアの中心とも言えるべき写真ではあるまいか。

女の子は、陽焼けしたたくましい太モモもあらわに、両股でぐっと深く男の首をはさみ込んでおり、更に下肢はしっかりと男の体にまきついている。

二人の表情には全く、くっただくなどみじんもなく、肩に跨がっている行為そのものに、何のためらいも不自然さもない。あたかも、女の子が男の子の首に跨がり乗るのは男を喜ばせるため。女の子を肩に乗せて練り歩くのは女の子を喜ばせるため。かくある姿こそ、男女間の自然な姿とでも言いたいような、その表情である。

男性にとって本能的に最も魅力を感じるところ。それを首筋に、肩に、両ホホに、直接感ずる俾せは別段我々にのみ与えられた特権ではない。この種の写真は五月頃の雑誌等に、毎年の如く載せられているようである。

(四) ウォーター・ポロ

四十一年、一二月頃の「F6セブン」にも、余り良い写りではないが、「男の肩車に女性が乗って行なうウォーター・ポロのゲーム」という小さな写真がある。白い水着と、ビキニスタイルの水着を着けた女性が二人、それぞれプールの中で男の肩に跨がってボールを追っている。ビキニ姿の女性が体を前に倒し両手を伸ばしてボールに飛びつこうとしているが、それに追いつけない下の男性は、女性の股間に首をはさまれたまま、バランスを失って今や水中に倒されようとする寸前である。しかし、この写真はどうもわざとらしく、外国雑誌等がグラビア用か何かに特写したもの、転載したものらしい。逆な見方をすれば、このような写真が適当な刺激として、一般読者に意外?と受けるのであろう。

四十一年の平凡八月号にも、和泉雅子がセ

パレーツの水着姿で加山雄三の肩に跨がっている写真がある。明るい空を背景に、白い水着で写っているため、コントラストがなく、余り迫力はないが、それでも、この様なポーズが我々の周囲にかなり多く見かけられる時代となったことを感ずるのである。

(五) 水中の騎士

一九六四年七月の米プレイボーイ誌に、夏の特集として浜辺での遊び方等を、カラー写真入りで取り上げている。その中に「Fun and Games」(たわむれゴッコでも訳すか)として「Water Knights」(水中の騎士)というものが紹介されており、これなどは仲間とともにやってみるのも楽しいであろう。海開きの時のショーや、映画の中では時々お目にかかるが、日本ではまだ少し無理かもしれない。

「波打ち際で女の子はそれぞれ男の肩に跨がり乗る。そして各々が、自由に相手を敵に回して戦うのである。すなわち、戦う途中で自分の馬を溺れさすことなく他の騎士を落馬させるのである。以後は、

“Eliminated riders are supposed to give

in gracefully and go ashore, but the odds are that they'll clamber aboard again and spur their mounts right back into the fray. Games is over when all the knights are spent."

ということでお終いになるわけだが、これ又、たわいもない遊びと言えはそれまで。しかし、そのたわいもない遊びが大げさに採り上げられるところに意味がある。

カラーグラビアには、水色のビキニをつけた金髪の子(チャームینگ且つ素晴らしいグラマーである)の股間に、男が首を後ろから入れて女の子を肩の上へ持ち上げようとしている写真がある。二人の様子を真正面から写しており、女の子はたくましい両足を真直ぐ伸ばしたまま、滑り落ちないように男の首筋を太モモで力いっぱいさみつけている。今両足がやっと水から離れたところだろう。女の子はうれしそうにはしゃぎながら、体を後ろへ大きくのけぞらせ、両手を後ろに突っ張って男の背中を押えつけている。今、男は、太モモの下にはさみつけられた首で、グラマーな女の子の全体重を感じているわけである。男の表情は、下を向いてはつきりは

判らないが、結構楽しそうだ。この写真の二人は、表情に全くくったくがなく、まさしく“Fun”に徹したという感がある。

もう一枚、男の腰くらいの深さのところ。前述の水色ビキニの女の子と赤いビキニの女の子が、それぞれ男の肩に跨がったまま馬上でつかみ合っている。男は女の子の足をしっかりとかがえ込んで固定し、馬になった男同志二人は顔をつき合わせて笑っている。二人とも顔の下半分は、グラマーな女の子の太モモに埋れてしまっており、更に馬上の女の子はお互いに伸び上ったり、腰をひねったり……男の首から頭は、さんざんな様子である。

この外にも、外国雑誌にはこういった写真が多いようだ。同じ馬乗りでも、日本の雑誌等に見られる馬乗りは、静的且つ遠慮気味な感じであるが、外国のものは、たくましい太モモで男の両ホホを、首をしめつけ押しつぶしていたり、遠慮会釈なく股で首筋や顔をはさみつけているものがほとんどである。

そのくせ、そこには暗いじけたところは少しもなく、明かるい太陽の下のはつらつとしたムードがある。女性の馬乗りを、マゾヒズム等と結びつける事など、思いもよらない

といった様子である。それは自然な男と女の“Fun and Games”なのである。

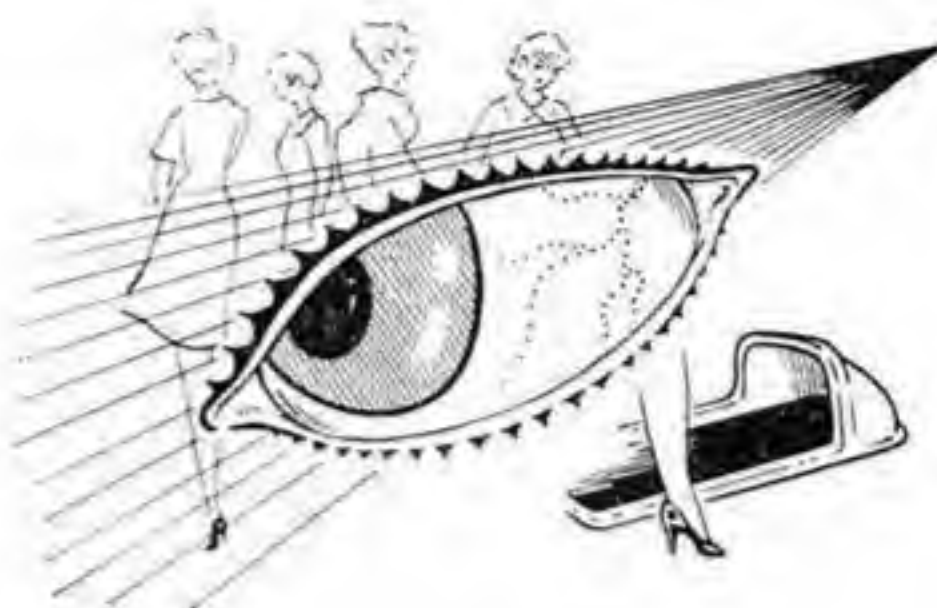
ここに採り上げた内容は、本当の「マゾヒズム」?という立場から見れば、大して意味のないものであるかもしれない。しかし、自らマゾヒストであると、心のどこかで思っている人々は、ほとんどこの程度か、又はこれが少し強められた程度でしかないのではあるまいか。この程度のマゾ的傾向を「変態」とするならば、正常な者はマレである。

しかし、日本でこの様なことが日常当り前の事として社会に受け入れられ、何の迷いや、恥もなく行なえるに到るには、まだまだかなりの批判や抵抗があるであろう。一度作り上げられた社会の固定概念は、なかなか破れない。それだけに、マゾ的傾向というものが内攻し、常に何か陰うつな、病的な暗い影を伴うことが、日本では非常に多いのである。

明かるいムードの中で、こういう傾向を発生できる時代、いつかはそういう時代がやって来る筈である。気の弱い者、なまじ常識のある者、インテリぶった者、皆んなが仲間に加わって“Fun and Games”を楽しめる時代が……。

＜告白的フエチ小説＞

日曜日の犯罪者



間宮清満彦

時々、彼はふと完全に狂ってしまう時がある。自分の心を発見して、身振りする。でも誰も、そんな彼には気付いてはいないし、全く一時的なものだと思つくと、彼は僅かに安堵の胸をなげ、自らを慰さめるのだった。

彼、高原雅文は貿易商社の中では、取扱高ナンバーワンと言われるK商事の若冠二十八才の新進係長である。原因の一つには、エリートコースであるT大出身という事もあったが、やはりビジネスにかけては、彼は手腕家であった。

その『仕事の鬼』と同業者仲間から恐れられる手腕家の彼も、日曜日には、陽の当る社会に在る彼ではなくなるのだ。

日曜日になれば彼は朝早く、一人住いのアパートの鍵が掛かる簞笥から、機械油のシミが黒くこびり着いている作業服を取り出し、それを着用する。

髪から油を抜き、ボサボサに引っ掻いて、アパートのうるさいかみさん連中に見つけられない様に、非常口からこっそりと、どぶ鼠のように出て行くのだった。

日頃とは全く別人の彼は、或る期待に胸をはずませ乍ら、遊園地へ出掛ける。その時の彼は名も無い薄汚れた『変態者』であり、彼

なりの限り無い『美』の追求者となり果てるのだった。

彼は七カ月前のあの事を、今でも、否、以前よりも一層はつきりと頭の中、瞼の裏に思い出す事が出来るのだ。そしてそれが、彼の心を強引に魅きつけるのだった。

● ● ●

風が冷く、プラタナスの葉がやけに舞い落ちる、秋のうすいブルーの様な日だった。

彼は、入園した祝いに遊びに来た甥の和夫にねだられて、F遊園地へ遊びに行ったのだった。

幼稚園に入園したからと云って、和夫が彼の所へ連れて来られなかったら。いや兄貴の暇が取れなくて、彼の所へ来なかったら……。彼は今でもそう思い、偶然知った強い魅力を呪い、そして反面、何ものにも替えがたい有難味を感じとっている。

冷える日だった。彼は急に便意を催した。そんな彼にはお構いなく、和夫は彼を引っ張り廻り、はしゃぎ廻り、ブランコに乗る。

彼は堪らなくなり、傍で子供達をぼんやりと眺めていた、人の良さそうな、中年の婦人に、和夫を少しの間見守っていてくれるよう頼んでみた。

すると婦人は快く二つ返事で、

「私達には子供が無くてね。淋しいですよ。いいですよ坊やの事は。安心なさい。どれどれ、まあ可愛い坊や。なんてお名前」

などと言って、和夫のお守り番を引き受けてくれた。

彼は遊園地の隅にある男女両用の便所へと急いだ。そこは溝を掘っただけの小便所と、その戸に小さな節穴が一つ二つあいている大便所三つとがあった。

彼は、一番隅の戸をノックするのもしどかしく、飛び込んだ。中は薄暗く、酸えた様な臭気が鼻をついた。彼は一瞬嘔吐しそうになった。その位、臭気は甚いものだった。尚その上に困った事には、どっちを向いて良いものか判断に迷った。つまり、キンカクシが無いのだ。

彼はままと度胸を決め、隣との板仕切の方に向かって始めた。

彼は少し気分が落着いた時、いたずら半分に壁板の節穴から隣を覗いて、しまったと思った。隣にはキンカクシが、彼の方に向いてついていた。彼は誰かが隣に這入って来たら、とんでも無い誤解を受けると思い、あわてて、向きを変えようとした。その時だ、

た。

やさしそうな声が聞えて来た。

「ター坊、おとなしくここで待っててね。ママ、おしっこよ」

彼はその言葉、いや、その声にひかれ、金縛りになった様に動く事が出来なかった。そして錐で脳味噌を掻き廻されているかの様に、頭が鳴った。

彼のどこかの神経は、美しい声イコール美人と解釈し、彼の内奥に果喰う悪魔がささやきかけたのだ。

「覗け、覗くん。こっちは暗いんだ、向こうから判りやしない。覗け、早く。美人だぞ。グズグズするな。覗け」

彼は負けた。彼の育った家庭は、躰が厳しかった筈だ。でもこんな時、彼はそんな躰なんて屁の突っ張りにもならない事を痛感したものだ。

美しい声の主は、躊躇する事なく、彼の視界の中にはいつて来た。

旅行者なのだろう。ブルーのスーツをきちんとして着込み、スカイブルーのエナメル靴を履いていた。もっとも、それだけのことに気がついたのは、彼女が出る時になってからであるが。

彼は、自分で自分の心臓の鼓動がわかりすぎるほど、はげしく波打っているのがわかった。なにかわめいて逃げ出したい様な気持だった。

彼女の年齢は、正直言って、よくは判らなかった。二十四だと言われればその様にも思えるし三十といえども又、そうかなと思う程だった。その女は「汚ない」と言いながらも、ゆっくりと、スカートを捲り上げた。そしてスリッパも……。

嗚呼、彼は、高鳴る心臓の鼓動の中で、遂に見てしまったのだ。水色のスリッパの下にあった紫色のパンティとガーターと、そして、それに引き吊られたストッキングを。そして、スナナリと伸びた脚線も……。

彼女は、眼前に彼が覗き込んでいるのを知らない為か、そろそろと、ガーターからストッキングをはずし、くるくるとストッキングを脛の下まで巻き下した。彼女程の太腿の白い女は、そうさらに居るものではない。女を多く知っているわけでもない彼でさえ、そう確信できる程だった。

彼女は、ストッキングを巻き下したその手で、紫色のパンティに指を掛けて引きおろした。と彼が感じるや否や、彼女の頭だけが彼

の視界に残った。彼はあわてて節穴から眼を離し、万が一にも、その美しい女に悟られない様に息をこらした。しばらくしてから、彼女の肢は、再び彼の視界にはいった。

彼はその時、自分の犯している最下等な「罪」の意識など念頭には無かった。彼が最も蔑んでいた筈の、中年男に多い、下劣な「ノゾキ」をしてしまったというのに……。

不思議にも、彼にはその時、彼女に接してみたいなどという気持は微塵も無かった。本当だ。彼はただ、白い太腿と、その白さを包んでいるストッキングと、それを、ある美しい緊迫でもって吊っているガーターだけは、いつまでも、いつまでも、眺めていたいと思った。

その美しき人は出て行った。彼の頭には、彼女の下着姿が強く焼きついた。

彼は、戯れに読んだ風俗雑誌から得た言葉をつぶやいていた。フェチシスト……。

● ● ●

それから一週間近くというものは、良心の呵責に悩む彼と、又、行って覗きたいと誘惑するもう一人の彼との、板ばさみになって絶えず苦悩し続けた。

仕事も、ややもするとおろそかになりがち

であった。

しかし乍ら、会社のデスクにある時の彼には強い野心があった。トップビジネスマンになり、そして、遂には必ず社長の椅子を獲得するのだという野心が。

彼はついに、ドス黒い欲望と、強い野心を二つ乍らに満足させる一つの解決策を導き出した。つまり、彼は全く別の二人になりきる事を思いついたのだった。日曜日だけは「高原雅元」という立派な殻を脱ぎ捨てて、一人の浮浪者となって、彼の異常な「美」に対する悪魔を満足させることだった。そうして週日は出世街道を邁進する。

彼は「フェチシスト」とつぶやいた日から六日経った土曜日のこと、「ナンデモ横町」へ行き、作業服の叩き売り、しかも質流れにもありそうにない、油のしみ込んだ一番汚いやつを買い込んだ。

次の日の日曜日、彼は朝早くから起き、まるで修学旅行に出掛ける小学生の様に、いそいそとその作業服を着た。そして彼は、念入りに頭から油を抜き、髪をボサボサに引っ掻いた。顔には、少し靴墨さえつけて、わざわざよごした。

彼はそつと非常口から抜け出て外に出た。

アパートの管理人に見つかるのを最も恐れたが、早朝だった所以か気付かれた様子は無かった。いや、気付かれても、彼には、彼と判らない程の変装に自信をもってはいたが。

彼は理屈抜きに楽しかった。仕事がうまく運んだ時の快さとは又、次元の異なる愉しみだった。その上、名も無い彼には何の責任も無いという思いは、一層彼を愉快にした。

F遊園地には、八時頃ついた。彼は浮浪者らしく振舞う事を心掛け、ベンチに横になり寝込もうとした。こうした野宿の真似事は、彼に懐しく学生時代を思い出させた。彼は苦笑しながら、何も知らなかった青年時代を思い出していた。異質の青年時代を。

彼が目覚めたのは九時を少しまわった頃であった。彼はまばらにやって来る子供連れの若い人妻を眺め乍ら、初めて眼前にした、あのター坊とかいう子供を連れた女の美しい下着姿を思い返した時、何とも言えない甘い陶醉が、足元から心臓の方へツーンと昇って来て、彼の体を震わせた。彼はその時、はっきりと自覚した。

「俺はたしかに変態と呼ばれる種族だ。しかし、並の変態じゃ無い。女の体そのものは欲しくはないんだ。ただ、俺の欲しいのは、

俺の望みは、あの色々のスカートの下に息づく、下着姿を觀賞したいだけなのだ。

やがて彼は、あの時と同じ一番隅の便所にはいった。そうして十分もたったころ。女学生らしい女の子が、二人でやって来る気配を感じた。

「ヤッチャン、私、さきにはいるわ。荷物、お願いね」

と言う声と共に、ボーイッシュな女の子が視界にはいつて来た。

彼は、華やかな女臭い下着を期待したが、女学生は、プリーツのスカートの下に、木綿のズロースを穿いているだけだった。

「ガキには用は無い！」と彼は腹が立ったが、腹いせに、口笛でも吹いて驚かしてやろうという考えは、どうにかおさえた。

もう一人の「ヤッチャン」とかい子に期待して、我慢したのである。

「ヤッチャン」がはいって来た。彼は期待にかたずを飲んだが、美事、裏切られた。彼女も全く下着に関しては、ボーイッシュな女の子と同一だった。

彼は「くそっ」とばかり怒り、鋭く口笛を鳴らした。

「ピューッ」

純白のズロースを下しかけていたその女の子は、ギクツと一瞬動きを止め、そしてあわててスカートを引きあげ、ころげる様に便所から飛び出して行った。

彼は、女の子達が警官にでも告らせると不味いと思い、一時そこから出て、警官の出現を待つことにした。

彼は、遠く離れたベンチで便所の方を見張っていたが、一向に警官のやって来る気配はなかった。

「恥ずかしくって、届けなんか出来なかったのだろう」と、彼は自分に都合のよい方に思い直した。

そうこうしている間にも、子供連れの人妻達が便所の方へ一人、二人と行っている。彼は急いで例の便所に戻った。

.....

こうして彼の「盗視遍歴」は今まで続いている。そして、彼が、日曜日毎のこの最下等の犯罪を書き留めた黒い皮表紙の日記も、きょうまで続いている。

● ● ●

×月×日 晴

九時より十八時まで、十五人。内、やや満足出来るのは六人。しかし、はっきりと俺に

下着姿を見せてくれたのは、二十七、八位の人妻らしき女と、二十才を出たばかりという感じのB・G風の女の二人だけ。

人妻らしき女は和服。それに気づいた時俺は、いつかの女学生の様にあわてさせてやろうかと思ったが、最近の女は和服でもパンティ位ははいているだろうと思い、我慢した。

果せるかな、その女は穿いていた。やれやれといった恰好で、ゆっくりと、不自然な位ゆっくりとパンティを下した。

しかも、そのパンティは、フリルの付いた派手なやつだった。朝から三時間程面白くなかったが、このフリルのついたパンティのお陰で気を取り直す。結局、顔は見えなかった。

B・Gの方は少しおかめ。でも体は素晴しく、下着もなかなか凝っていた。

それにしても、今から考えてみると、俺が最初に覗いた女は、度胸が良いのか、露出癖なのか、一番明確に俺に全てを見せた。今日の、いや今までの大半は、スカート、スリッパを捲り上げ、パンティに手が掛ったと思うと、さっと俺の視界から逃げてしまう。

終わった時でもそうだ。パンティを上げると息つく間も無くスリッパを下してしまう。

何も開陳して欲しいと願うのでは無い。ただもっと下着姿を、そうキミ達の一番美しい姿であろう下着姿を、もう少しはつきりと見せて欲しい。

ああ、最初の彼女程、下着をうまく、美しく着込んだ女はさらにはいないものか。

×月×日 雨

九時より十五時まで、四人。少いがすべて満足し得るものばかり。

雨の故か、人出は少なかったが、充実したよき日だった。

二人目の女の時、俺は初めて、女の生理時の下着姿をはつきりと知った。

二十三才位か、BG風。終って下着をつける段になるまでわからなかった。下着をつける時、彼女の身じまいは、あまりに長く、よく見ると、挿入式そうじゆうの生理用品を装備しているのだった。

近頃、類型化した二、三のパンティ姿しか観ていない俺にとっては、これは正に大きなショックだった。

そのパンティは今まで見て来た様なものと少し異なる。ゴムかなにかで二重にしてあるらしい。

あとの三人は子供連れ、必ず子供を先にさせてから自分がする。女というものは、便所があれば、そうさしせまらなくても、もよおすものらしい。尤も、俺にはその方がよい。

×月×日 雨

雨がひどい故か、人出少し。本日、アベック一組のみ。

そのアベックは、女は三十を少し出た位でくずれた感じがあった。男は二十五、六か。

男が便所に行くと言いだしたらしい。女は入って来る時、「わたしも、ね。これもって」と言った。そうして、彼女は人がいない

と思い込んでいるらしく、ゆっくりと支度をしたので、俺は十分観賞出来たが……

「アンター、バッグの中のチリ紙を取ってよ。ううん、いや、もってはいってよ」と言って男をひき入れた。

男は小さな性質らしく「でも」「誰か来るかも知れない」と言っただけだったが、女のいる中には行って来た。

ここからあとは書く気がしない程グロテスクなもので、俺は時々目を外した。愛情の無い「遊び」の不潔さと不愉快さを、絵に描いたようである。

しかし、二人は、いや女はパンティをそのまま便所の隅において出ていった。

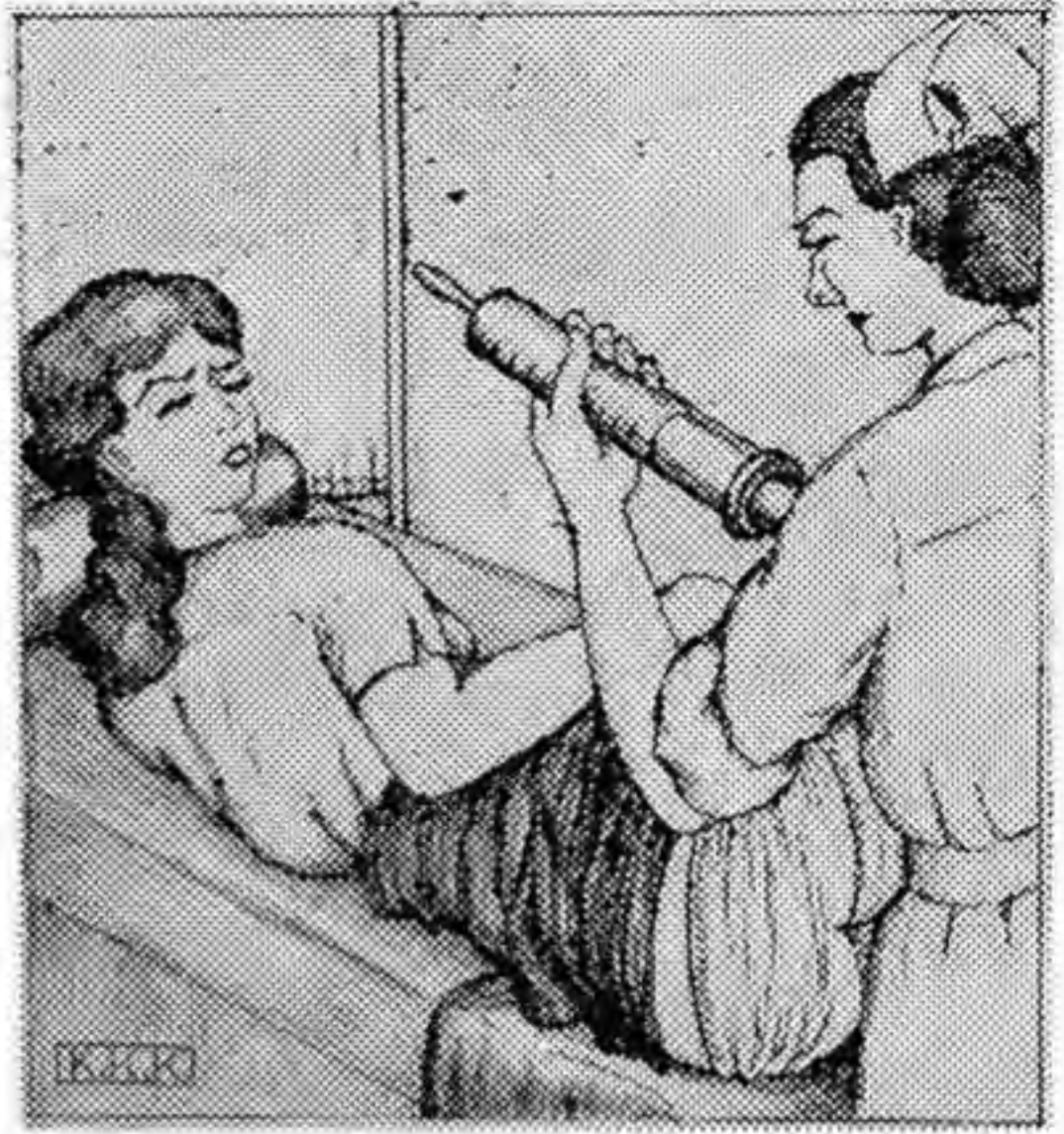
本によるとフェチシストというのは、この様な時には、迷わずパンティを手に入れるものとある。しかし、俺は欲しくない。俺の欲しいものは、ただ、白い腿にピッタリとパンティが貼りつき、その上にガーターに吊られたストッキングをつけた「女の姿」なのだ。捨てられたパンティなんて仕方が無い。でもあの女は白い腿の持ち主だった。よくパンティが似合っていた。

◎ ◎ ◎

彼はこうして、徐々に変則的ではあるが、フェチシストとなっていた。それにつれて彼のあの最初の女への思慕は、益々募ってきっている。そして日曜日の彼は、週日の彼とは全く別の「劣等極まる犯罪者」となり下り敢えてその罪に魅かれていたのである。まるで理想の女性を追求した光源氏の様に。

彼は現在、尚、正確に、日曜毎にF遊園地へ行っている。彼の桐壺を求めて……

願わくば管理事務所の方々よ、便所の整備をしないで戴きたい。又、ここに遊ぶ女性の方々よ、出来るだけ多く便所の利用を願いたい。彼の悲願達成のために……



《浣腸マニアの幻想曲》

痔疾病院の白昼夢

秋根登志雄

古い私達のゴルフ仲間で、飲み友達の一
人に中年を過ぎた開業医がおります。学位はた
しか直腸癌の研究でとった様ですが、現在は
専ら痔疾の方が専門になり、可成り有名だそ
うです。その頃私達の行きつけの料亭の看板
娘が、女将の懇望でその方の病気を彼に治療
して貰ったとかで、武骨者の彼がいやに彼女
にもてる様になり、他人事乍ら悪童共が彼の
職業に羨望と興味を持ち、件の娘が酒席に現
われると盛んに酒の肴にされたものでした。
偶々私が或る日ゴルフの例会の事で、彼の
病院を訪問しましたが、その時、偶然の機会

で、予想もしなかったショッキングな光景を
目撃し、貴重な体験をしましたので、披露し
ましょう。大きな石の門柱には、肛門科S病
院と横書きの門標がかかり、両側に紫陽花の
咲いた白い砂利道が玄関に続いていました。
門を入る時、母親らしい中年の婦人に附添
われた二十前後の背の高い綺麗な娘さんが出
て行くのにすれ違いました。初々しい頬を真
赤に紅潮させ、目を伏せ、泣きそうな表情を
し、何か甚く興奮している様に見えました。
娘さんの只ならぬ素振りから想像すると、き
っと嫌がるのを母親に説き伏せられて、おそ

るおそる病院に来て、薬だけ貰う積りくらい
でいったところ、形通りの問診の後で看護婦
に、遠慮会釈もない職業的冷酷さで、診察前
のお定まりの浣腸でもされたのでしょうか。
或は、更にあられもない姿勢で院長の太い指
が無慈悲に患部の奥深く、痛い触診でもされ
たのでしょうか。
専門の病院とはいえ、その気の毒な場面を
考えると、若い娘さんだけに、どんなに恥ず
かしかっただろうと可哀相な気がしました。
こんな想像を逞しくしながら、内に入ると
すぐ前に紅色の絨氈を敷きつめた待合室に豪

華なセットが疎かに置いてありました。すぐ目についたのは、年の頃は三十位でしか、ハッと息をのむ様な美しい和服の婦人がたった一人、隅のソファーにかけておりました。蒼白い顔をしてすらりと瘠せた華奢な体つきは、何処か弱々しい感じがしました。私と視線が会うとあわてて、黒い大きな目を伏せましたが、どんな診療を受けに来ているのだろうかと一瞬強く興味を感じました。

横の受付に来意を告げると、出て来た看護婦さんが長い廊下を案内し、診察室の隣の院長室に通し「これから診察がありますからしばらくお待ち願います」と云い残して、出て行きました。

その辺を見廻すと、彼の机の上には、医療器具の分厚い総合カタログがありました。かねて異常な興味をもっていましたので、頁を繰っていますと、形と名称からすぐ使用目的の判断出来る器具や、理髪店の椅子を複雑にしたような診察台などの写真が載っています。好奇心から熱心に眺めていますと、ものの一〇分位たった頃、私の座っている正面のドアをあけて、看護婦が入ってきて、一寸私に会釈して書類棚の前で何か捜しはじめました。

その時、何気なく、開いたままのドアから隣の診察室を見ますと、思わずはっと固唾をのむ様な、大変な光景が目の前に展開されていました。

室内は、待合室と廊下の出入口をカーテンと衝立で嚴重に仕切られ、外部からは見えないう様になっていますが、院長室からは丸見えでした。

私はその時まで、診察は例の足を挙げる診察台上で、カーテンや白布で患部以外を被って行うものとはばかり思っていましたのに、その時目の前に見たものは、先程待合室で会ったばかりの美しい婦人が、帯を解いたただけの姿で、黒い防水布を張った長椅子の様な診察台の上で四ッ這いになり、着物の裾を大きくまくり上げただけで彼と看護婦の治療を受けていたのです。何か複雑な機械に繋がった、五〇センチ位もある弾力の強そうな緩かにカーブした黒光りのする太い管が使われていました。機械と管の継ぎ目あたりから、ゴム球のついた別の管が下っているのが見えました。後でわかったことですが、これはガストロカメラで、直腸内の撮影をする準備をしていたところだったそうです。

私の位置から丁度正面に患者さんの姿が見

え、首を曲げて不安そうな美しい顔に、羞恥と恐怖と苦痛の入り交った表情を浮べ、口を半ば開いて苦しうに喘いでいるのがはつきり窺えました。すぐ目の前には、黒い蛇のよいうな想像を絶した太い管があり、彼が力を加える度にグイグイと小刻みに患者さんの体内に這入って行くのが、手にとるように見えました。

台の横に立った看護婦が、無意識に逃れ様とする婦人を両手で抑えつけ、こちらに背を向けている彼が、例の無気味な太い器具を無惨に押し込んでゆく光景は、何か白い虚弱的な肉体が、苛酷な体刑を加えられ、拷問に責めさいなまれていく様に見え、捲り上げられた着物の鮮やかな色彩と、白い肌の強い対象が痛々しく目にしみて、いやが上にも私の潜在的嗜虐心理を刺戟せずにはおかぬシーンでした。

室内の看護婦が捜しものを見付けて診察室のドアを閉めるまでの、僅か五分足らずの短い覗き見でしたが、鮮明にその場面が私の脳裏に焼付けられてしまいました。

更に十分以上経って、又看護婦さんがドアをあけた時には、例の婦人は診察台の傍に立って、すらりとした後姿を見せ、帯を締め

ているところでした。

先程のはげしい試練にさいなまれた為か、綺麗に結び上げた髪から、白い汗ばんだ襟足に後れ毛が垂れていました。数分前の状景を思い合せ、私は弱々しい中に何かなまめかしさを感じさせられました。

もう少し早くこの絶好の観覧席に来ていたら、或いは門前で会ったあの綺麗な娘さんの、あられもない一駒も覗き見出来る機会があったかも知れないと思うと残念でした。

私にはその頃、数年来平凡な交渉が続けていたパールの女性がいましたが、十人並みの容貌に似合わず、眩しい程の白い綺麗な肌と、均勢のとれた肢体の持主でしたので、カメラマニアの私は羞ずかしがる彼女を口説き落とし、随分極端なポーズのヌードを撮り続けて来ました。

しかし、やがて平凡なヌードには飽きて、彼女から



はすっかり変態視され、我ながら聊か悪趣味な、奇抜さを追うようになりました。

お定りのバナナ類から、試験管や万年筆等、思いつくままの物が小道具になりましたが、尚飽き足らず、その後は医療器具店で洗滌器具や子宮簪子、更には、浣腸器や肛門鏡の類まで買い集めたものでした。

先日も一〇〇〇〇〇Cのイルリガートルと、

一〇〇〇〇Cの浣腸器を交互に使用し、連続してフィルム四本に撮りました。早速徹夜で現像し、伸して見ますと中には相当ムードの出た傑作も出来ましたので、独りで得意になっていた矢先とて、あの時の診察室の婦人の姿態と、ガストロカメラの強く印象に残った光景を思い出し、どうしても彼女にそのままを試み、見たくなりました。

ふと考えついたことは、聊か可哀想ですが彼女に何かその方面の病気の懸念があるかの様に暗示を与え、一度精密検査を受けた方がいいだろう

と勧め、彼の病院につれて行き、私も立会って診て貰うということです。

診察される時、人一倍はにかみやの彼女がどんな顔をするか、又あの婦人の場合のように、長大なガストロカメラを使用される時、どんな態度をとるか想像しただけで楽しくなりました。

内気な彼女を納得させて連れ出すには、ただお腹を押える程度の簡単な診察だろうなどとうそをついて、何とか病院まで連れて行けば後はこちらの思うつぼです。

初めて経験する病院の物々しい雰囲気になくなって緊張しているやさきに、形通りの問診後、予想もしていなかった診察前の浣腸をされるか、或はいきなり裾を捲くられる羽目になり、気も転倒する程あわててももう遅く如何にもならないでしょうから結局、医師や看護婦の手前、諦めて観念し何でもされる俥になるでしょう。

多少残酷ですが、こうなれば一種の催眠術にかかったように、何をされても、当然受けなければならぬ必要措置と思ひ込んで、強い刺戟と疼痛も夢中になって我慢することでしょう。

これは、私一人では出来なかった試みを、

何でも実行できる絶好のチャンスです。彼と看護婦が、彼女に加えるであろう各種の検査や診察の光景を、セルフタイマーやリモートコントロールの煩しさから解放され、思う存分自由な角度で変化のある撮影が出来、又と得難い貴重な記録写真が出来ると思います。

しかし、若しこの計画を実行出来るとすれば、並はずれて羞恥心の強い彼女が、心ならずも絶対絶命の立場に追い込まれ、死ぬ様な思いで観念し、覚悟をきめさせねばなりません。

懸賞△告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

- 一、第一席 一篇につき 五万円
- 一、第二席 一篇につき 三万円
- 一、第三席 一篇につき 一万円
- 一、第四席 一篇につき 五千元
- 一、第五席 一篇につき 三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、従来、「告白、手記、体験」の分野で文獻味豊かな数々の告白特集号を刊行して、輝かしい金字塔をうち樹てた本誌が、更に充実したあらゆる傾向の告白を以て誌面を飾るべく今回の企画をしました。

ん。医師や看護婦や私の見ている前で、あの部屋の例の黒い診察台の上で、入念に診察される時の彼女の態度や表情を想像するだけで、私は強い興味を感じずにはいられないのです。

まず最初に試みたい事は浣腸です。いつも彼女は甘えているのか、五〇〇CC以上ともなると大げさに苦しがるのですが、病院で、施薬者が看護婦さんですと、職業的冷酷さで施される事に対する心理的緊張と、第三者に

体験▽原稿募集

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得るに足る手記、どうしても誌上に発表し活字として残しておきたいと願う熱意のこもった原稿を求めます。

一、文章の巧みさや、表現や描写のうまさ、は勿論大切ですが、なんといたって、実際に体験された事実の裏付けのある告白であるということが肝腎です。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数には制限はつきませんが、原稿用紙三十枚位から百枚位までが適当です。用紙は必ず原稿用紙をご使用願います。

一、締切は毎月十日。入選作品は翌月号に掲載いたします。

一、応募原稿の送り先は、大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社懸賞告白原稿係宛。他の原稿と区別するため、「懸賞告白」と第一頁に鉛筆書して下さい。

観察されている羞恥感から極限まで我慢すると思えますから、予め頼んでおいて、医学的に成人の許容量ギリギリまでの大量を使用し、貰い、彼女がどの位耐え得るか、どんな反応を示すかを実験して見たいと思います。

その結果によっては、彼女の直腸が常人に較べて狭小なのかどうか、バリウム液を充分使用して、レントゲン写真を撮って見たいとも思っています。

後は、色々の私の知らない器具や、例のガストロカメラ等で思う存分実験して貰い、又その場面の写真を撮って私のコレクションに加えることにしたいものです。

結局、何も心配する症状はないということ、彼女を安心させ、併せて浣腸は一〇〇〇CC位が適量であり、可能であることを自覚させ、撮った写真の中から会心の作が出来ればこの演出は一応成功と思えます。

しかし彼はれっきとした医師です。いくら私の親友といえども、そんな遊戯じみたことに神聖な医学を利用することに応じてくれるでしょうか。断わられそうな気がしてなりません。が、当って砕けるの気持です。肝か素面では照れ臭いので、近い内に一席設けた上、篤と懇談して見る積りです。(カット・筆者画)

娘相撲物語

女相撲同好会

(その結成まで)

海野美津夫

美代子の母は、二人を五時前に起した。

割に早起きであった和子にも、それは少し早すぎたが、『そうだったノ 私たち相撲取るんだった』と思うと、彼女は勢よくフトンをはねた。

「ごはんの仕度はできているよ。私、魚を仕入れて、町へ行ってくるから、朝ごはんからでも相撲の稽古からでも、どっちでも好きなようにやりなさい」

と言って、美代子の母は出て行った。

和子は、急いで玄関まで見送った。そして

「ごめんなさい。私、明日から、ごはんの仕度しますから」

と言った。美代子の母は、ブリキ製の箱をかつきながら、「いいんですよ、慣れてるから」と言って、笑って出て行った。その姿には、魚の行商など、別に苦勞とは思わない明かるさと、たくましさがあった。

感激しやすい和子は、思わず涙ぐんでしまっていた。

二人は、相撲から先に取りすることにした。



前の晩、美代子の母から締めてもらった方法を思いだして、二人はまわしをおたがい締め合った。

庭へ下りると、夏の朝の爽やかな風が、肌に快よかった。

二人は、勢よくぶつかった。

思いきりぶつかり合ったあとの朝食は、非常にうまかった。

二人は、まわしを締めたまま、あぐらをか

いて、飯をかきこんだ。

「お相撲さんたちも、こんな恰好して食べるんだらうね」

「うん、写真で見たけど、同じ恰好してるわよ、私たちと」

「ちがうわよ。私たちが、お相撲さんの真似してるんじゃない」

二人は、声を立てて笑った。そうして男と同じような恰好でいることが、二人には面白かった。

美代子は、朝食が終ると言った。

「また、やろうよ」

「でも、もう七時過ぎよ。ひょっとして誰か訪ねてきたらどうするの？」

和子は心配した。

「大丈夫よ。今ごろ、漁師の人たち、疲れて寝てるわよ。それに、このごろは青年もいないしね。心配だったら、門にカギをかけておいたらいい」

美代子はそう言うと、着物を羽織って、玄関を出て行った。

二人は、取っては休み、組んでは息を入れて九時過ぎまであばれた。

それはまだ、相撲とは言えなかったかも知れないし、二人とも、技の名も知らないもの

が多かったが、楽しくてたまらなかった。

美代子の母は、昼過ぎに帰ってきた。

昼のごはんは、和子が、腕をふるって用意していた。

「どうだった？ 相撲の稽古は？」

美代子の母はたずねた。

「うん、私たちまだ、技も何にも知らないでしょう。だから、早く知りたい。母ちゃん、横綱張ってたくらいだったら、知ってるんじゃない。教えてよ」

と、美代子が言った。

「うん。横綱張ってたと言ったって、年一回のお祭りの時だけやってたんだから、何にも知らないんだよ。お祭りの前の稽古だって、

たった二、三日だからねえ」

「それなら、どんな風にして取っ組んでいたんですか？」

今度は、和子がたずねた。

「どんな風になって、たいてい、押し合いか……そうだねえ、まわしをつかんで、寄り合うかだったよねえ。たまに、投げたりすることもあったけれど……それから、足を掛けたりすることもあったが、どっちかと言うと力比べだったね。技なんか、だから余り知らない

んだよ」

「すると母ちゃん、よっぽど力が強かったんだね」

美代子が、口をはさんだ。

「うん、力が強かったのか、身体が良かったのか……未だに病気ひとつしないから、たぶん、身体が強かったんだらう」

美代子の母は、しばらく黙っていたが、「相撲っていうのは、結局、押し合いが基本なんだろう。父ちゃんも、そう言ってたよ。あんたたち、技はあとで、今のうちこそそれで

いったらどうなのかね」と言った。

和子は、なるほどと思った。

二人は、あくる日から押し合い相撲ばかりで稽古を通し、最後に二、三回だけ、自由に取っ組んでみるようにした。

和子の体重は五二キロあり、美代子よりも二キロほどすぐれていたが、押し合いでは、どっちかと言うと美代子の方が勝つことが多かった。

自由な取っ組みになると、和子の方が敏捷なのか、勝つことが多かった。

和子は、力に於て美代子よりも劣っている

ことがくやしかった。

だが、中に二日、家に帰った日を入れて、十日ほども経つと、どうやら互角に押し合えるようになっていた。

午前中の相撲と、午後の水泳とで、二人の身体は、自分でわかるくらい、たくましくなっていた。

じゅばんを脱ぎ捨て、名実共に裸一つで取組んだのは、夏休みもあと三日しかないという日であった。

和子は、そのあくる日には家に帰らなければならなかったから、相撲も、あくる日の朝を入れて、あと二日しか取れなかった。

二人は、その二日を、一日九回ずつ、自由に取組んで星を争うことにした。

それは、和子が星三つ、美代子が二つかせいで、六回目の取り組みの時だった。

二人で相撲を始めてから、はじめての突き合いになった。

突き合いには和子が勝っていた。

土俵際まで突きまくっていった和子は、相手の隙を見て、左下手をむずとつかんだ。すかさず彼女はそれをぐいと引き上げて、相手を寄り倒そうとした。

美代子は、それを必死になってこらえようとし、和子のじゅばんを無意識につかんでいた。

折り重なって土俵の外に倒れた時、和子のじゅばんの胸のあたりはビリッと裂けてしまっていた。

美代子を引き起して立ち上った時、和子はそれに気付いた。

ふくれた乳房が、あらわに見えていた。さすがに、和子は恥ずかしかった。「アラッ！」と言うと、思わず両手でそれをかくしていた。

だが、美代子は何とも思っていないようであった。

「じゅばんなんか、脱いでしまおうよ」

そう言うのと、それをさっさと脱ぎ捨ててしまっていた。その豊かな胸が、その部分だけ陽に灼けていないせいか、白く輝いていた。

ためらう和子に、美代子は言った。相撲を取ろうと話した時の逆になっていた。

「どうせ私たちしかいないじゃない。男の人でも居れば別だけど、母ちゃんも居ないしさ。それに私、相撲取るのに、何だかじゅばんがじゃまで仕方なかったんだ」

和子は、なぜ自分がためらったのか、おか

しくなった。美代子の言うとおりであった。和子にとっては、汗で濡れたじゅばんが肌にピタッと貼り着く感触が何となくいやでもあった。

「よし！」と言って、和子も、それを脱ぎ捨てた。

まわしを締め直し、二人は、素肌の肉弾を正面から向け合った。

「これでいよいよ、裸の対決か！」

美代子が、そんなことを言って笑った。和子も、大きな声で笑った。

「四対二か、ちくしょう、いくわよ！ いいわね」

美代子が、急に目をけわしくすると、両手をぐっとおろした。和子も負けずにその目ににらみ返して仕切った。

上半身がバチッと音を立てて、ぶつかり合った。

左四つになっていた。二人とも、両手は、がっちり相手のまわしをつかんでいた。

美代子の異常な斗志が、直接和子に伝わってきた。和子には、それはじゅばんを着ての相撲では感じられないもののように思えた。和子も、きつと唇をかみ、相手のまわしをぐっと引いた。

美代子が突然、寄って出た。それは猛烈な寄りであった。

和子が、やっと土俵際でこらえると、今度は、上手投げをかけてきた。それをこらえた瞬間、相手は逆に下手投げを打った。

和子の身体は、大きな弧をえがいて土俵に落ちた。

素裸での相撲は、おたがいその斗志までをむき出しにしたようであった。

八回目の取り組みは、はげしい、無我夢中の突き合いになった。

二人は、いつのまにか声を上げていた。

「チクショウノ！」

「エイッ！」

というような言葉が、思わず口をついた。

美代子の突く力は強かった。和子は突き上げられ、突きとばされ、土俵際に追いつめられていた。

その和子に、美代子は全身でぶつかってきた。

和子の背は、帆布の土俵の外の砂の上に倒されていた。

痛かったが、その痛みよりも和子の斗志の方がはげしかった。

彼女は立ち上ると、きつい顔で土俵の中央



に戻った。美代子は、いたわりの表情を見せたが、和子のきつい目を見ると、彼女もきつとした顔に戻っていた。

和子は、立ち上りざま、思い切り美代子にぶつかっていった。

だが美代子は、がっちり受けとめた。今度は右四つであった。

「絶対、負けるもんか！」と、和子は心のうちで叫んでいた。そして、けんめいに身体をよじって、まだ取れていない相手の上手を取ろうとしたが、美代子は許さなかった。

和子は焦った。

そして、小手投げ、下手投げと、相次いで技をかけてみた。しかし、美代子はじっと勝機をうかがって動かなかった。

和子は、その気持を察して、彼女もじっとまた隙をうかがった。動けば損であった。

汗が、全身から吹き出してくるのがよくわかった。

額を流れ落ちる汗が、目にしみこんで痛かった。

和子は、フト、そうしてじっと相手の隙を待つということは大へんなことだな、と思った。力をゆるめることはできないし、かと言って無駄に力を出し切ってしまうえば負ける。

押し合う魅力もだが、こうして、じっと待つことも、相撲にしかない魅力だと、彼女には思えた。

しかし、気の早い和子は、再びじりじりしてきていた。いけない、と思いながら、彼女はぐいと寄って出ていた。

美代子はその和子を、満身の力で吊り上げた。

足を掛けようとしたが、とどかなかった。バタバタさせてみたものの、美代子はぐらつかなかった。

和子の身体は宙吊りとなり、その足は、土俵の外に着いてしまっていた。

負けたとなると、和子はあっさりとしていた。

「遂に負けたか！ 五対四だな、残念！」

彼女は、美代子の肩をポンと叩いた。美代子はニコッと笑ったが、直ぐ真顔になると、

「あんたの背中、大丈夫かしら、さっき突き倒しちゃったけど……」

と言って、和子の背に廻った。

「アラ！ やっぱりスリむけてるわ。直ぐ葉っけなくちゃ」

そう言えば、背中がヒリヒリしていた。

だが、和子は、

「相撲取るんだったら、このくらい覚悟なくちゃ」

と言って笑った。

最後の日は、逆に和子が五つ星を上げて勝った。

「結局、同点だったね」

二人は、それが嬉しくて、抱き合って喜んだ。

だが、二人は、さびしかった。

二人とも、まだ柔道部をやめるつもりはなかったから、月に二日は日曜日にも柔道の稽古があり、相撲をやるうとしても、残りの日曜日しかないことに、気づいたからだった。

事実、二人が美代子の家で相撲を取れるのは月に二日もなかった。

柔道の稽古のない日曜日にも、何やかやと行事のある日があり、また、和子の家庭も、日曜日を全部、娘が家をあけてしまうことを許さなかった。

相撲の味が忘れられなくなった二人は、真剣に悩んだ。

しかし、柔道部をやめてしまうことは、とりわけ対校試合にも選手として出る和子の場合、できることではなかった。

やめると言ってもシゴかれるというような

ことは全くなかったが、和子自身の気持が、それをさせなかった。

だが、和子は、相撲を忘れることができなかった。

だから、苦しかった。

月に一度か二度、美代子と相対した時、彼女は、起き上れなくなるまでぶつかり合うのだった。

いつか冬になっていた。

和子は、両親に、美代子の家で正月をしたいと申し出たが、両親はそれを許してくれなかった。

正月の三ガ日が過ぎて、ようやく両親は美代子の家に行くことを許した。

外には、雪が舞っているというのに、和子と美代子は、土俵に立った。

美代子の母が、「よっぽど相撲が好きなんだねえ、あきれた」と言った。

その母の前では、二人はじゅばんを着た。

少々不満ではあったが、相撲が取れるということは、それ以上のものになっていた。

△生みの苦しみ▽

和子が、柔道部をやめる決心をしたのは、三学期の中頃であった。

彼女は、柔道のけいこの最中に、よく相撲を思い出すようになっていた。そのために彼女は、負けないでよい相手にも、しばしば負けるようになっていた。

和子は、『ここまで来てしまったら、もう柔道が続ける意味がない、かえってみなに迷惑をかけるだけだ』と思った。

彼女は、それを美代子に話し、二人は、柔道部をやめることを申し出た。

予想したとおり、彼女たちがやめることには、部の全員が反対した。特に、二人のやめたい理由が判然としないだけに、みんなは入れかわり立ちかわり二人に、それを聞きたがそうとした。

二人はしかし、本当の理由は、どうしても言えなかった。

橋口、鈴木の両先生が、あらゆる角度から聞きただし、やさしく説得にかかってきたのには二人は参った。

二人が理由として出したのは、「柔道というスポーツに熱意を持てなくなったから」ということだけであった。それしか二人は考えつかなかった。もっとほかの理由をつければ良かったとあとから考えたが、おそかった。

小学校の時から柔道を稽古し、すでに一年

生でありながら相当な技を持っている和子には、とりわけ説得が集中した。

よほどのことがない限り、熱意を失うことがあるはずがないと思うのは、当然であつたろう。

和子は、つらかった。夜、眠られない日が続いた。そんなことはかつてなかった。彼女は、よほど、前言をひるがえして、みんなを喜ばせようと、何度も考えた。

しかし、彼女には、いったん言いだしたことをひるがえすことはできなかった。相撲への愛着もだが、それができない性格だった。一番つらかったのは、兄からの説得であつた。

その兄には、キャプテンの飯田ふみ子が話していた。キャプテンとしては、打つ手がなくなつて、最後に考えた方法だった。

兄は、ものごとを人に押しつけることのできない性格であつたが、柔道を愛している兄の話は、誰よりも説得力があつた。最もこたえたのは、和子が柔道を習いたいと兄に申し出た時に、兄が言った言葉、それに対して彼女が答えた言葉を持ち出されたことだった。

兄は、「それほど習いたいなら、教えてやろう。しかし、お前は女の子だぜ。大きな

つた時、私、もうやめました、お花のおけいこをいたします、と言うかもしれないよ。やるなら、ずっと続けなければいけない。そんなことはないだろうね」と言った。和子は、「いいや、私、絶対やめない。この言葉、兄ちゃん覚えておいていい」とその時、答えていたのだった。

和子はつらかったが、兄がどんなことを聞いても、話しても、答えなかった。

尊敬している兄にだけは、自分の本当のねがいを話そうかと思っていたが、口のところまで出て、それはとうとう言えなかった。

△仲間づくり▽

相撲の同好会を作るまでの間で一番つらかったのは、その時のことであつた。

そのあとは、その時のつらさに比べれば割合と楽に進んでいった。

二人は、できればその同好会は五人ぐらいにはしたかった。どうしてもだめなら、せめて三人にはしたかった。二人だけでは、何としてもグループにはならないし、相手が一人というのは面白くなかった。

二人は、その同好者をどんな風に見つけるか、何度も話し合った。

一番心配だったのは、誘って若し拒否された場合のことだった。当然、その人間を通して二人のことが他人に知れていくだろうからだった。

だが、三人目の仲間は、意外と早く見つかった。

それは、和子の初めての押し相撲の相手だった古川文子であった。

古川には、二人が柔道部をやめるという理由が非常に薄弱のように思えた。もちろん他の者もそう思ったからこそ、二人から本当の理由を聞きだそうとしたのだったが、古川文子の場合、疑問の持ち方が少しちがっていた。

それは、カンのようなものであったが、文子は、『ひょっとしたらあの二人柔道以外のスポーツに魅かれてるんじゃないか？ 或いは、それは相撲かも知れない』と思っていた。



彼女がそう考えるのには、それなりの理由があった。

文子は、こうと思ったら直ぐ実行に移す和子に、何となく魅力を感じていた。そうした

性格が自分に弱いからでもあった。

余り物には動じない性質であったが、彼女は自分のろさが、時折いやになるのだった。文子はその自分に比べて、勝気で明るく、そして敏捷な和子がうらやましくもあった。

そんなことより以前に、理くつでなく好きだと感じるものがあつたと言った方が良かった。文子は、だから和子の変化には早

くから気がついていった。

和子は、自分と押し相撲を取った時から、何となくちがってきているように思えた。柔道のけいこの時、それ以前と、ちがうことがちよいちよいあることを、文子は発見していた。

引くべきところを押してみたり、帯をつかんで相撲の上手投げのようなことをしてみたりということが、あとになればなるほど多くなっていた。

特に、二人が柔道部をやめると言い出す直ぐ前の或る日のことが、文子に、『或いは相撲ではないか？』と考えさせる強い理由になっていた。

それは、和子が美代子と柔道のけいこをしている時であった。

ホンの少しの間ではあったが、二人は、相撲のようにしてぐいぐいと押し合っていたのだった。文子はその時は、『何してるんだらう？』ぐらいにしか考えなかったが、やめると言いだしたのち、その時のことを思い出したのであった。

文子は、若し二人が相撲に興味を持った結果、柔道に熱意を失なったのだとしたら、それでいいじゃないかと思った。

彼女も、相撲が好きであった。テレビでの大相撲はもちろん、相撲大会などにも良く見に出かけていた。

そして、例の浜での押し相撲以来、自分が男なら、相撲を取ってみるんだがなあと思うようになってさえた。

だから、若し美代子と和子の二人が、相撲を実際に取りたいと思っているのだったら、自分も加わって、やってみようかと思うようになった。

思い切って文子は、二人に会った。

それは、『或いは……』と考えはじめてからひと月近く経ってからのことだったから、二人が柔道部をやめることが認められてからも二十日ぐらい経っていた。

時間はだいぶ経っていたが、文子の聞き方は短刀直入であった。

「あんたたち、相撲でも取りたくなかったんじゃない？」

そう言われて、二人は非常に驚いた。

しかし、文子にもその希望があると知った時、二人は有頂天になって喜んだ。とりわけ和子は、躍り上って喜び、文子に抱きついていた。

和子は、文子を尊敬して、いつかは話した

いと思っていたし、最初に押し相撲を取った相手でもあったからであった。

二人はすでに実行していると聞き、しかも、本当のまわしまで締めてやっているの知って、今度は文子の方が驚いていた。

「私、相撲のグループを作ろうかと言おうと思っていたのに。でも、不思議だな、女のくせに相撲取ろうなんていうのが三人もそろったなんて……」

三人は、春休みも近い次の日曜日、さっそく土俵に上った。

体重もあり、身長も和子より高い文子は、まさに強敵であった。二人に、一段と張りが出てきた。しかし、その稽古では二人に数歩をゆずる文子は、大きな身体を、何度も土俵にころがされていた。

文子も、柔道部をやめた。

だが、だいぶ前からその父が柔道に強く反対していたことを知っていた部員たちは、文子を余り強くとめなかった。

四人目の仲間、直ぐにできた。

それは、文子の仲良しで、文子といっしょに良く相撲大会などを見に行っていた福岡国子であった。

国子は、高校は別であったが、中学まで文子といっしょであった。彼女は、体育のクラブにはどこにも入っていなかったが、水泳が好きで、体格は良かった。

和子は、『同じような仲間が、意外と多いんだなあ。この分だと、働きかけ次第では何人も集まるかもしれない』と思い、嬉しかった。

だが、五人目の仲間は、簡単にはいかなかった。

それは、美代子の小さい頃からの友人で父親の転勤で長いことその村を離れて関西のK市に行っていたが、四人の仲間ができた春休みの終りの日に、父の再度の転勤で戻ってきた谷川富子であった。

彼女を仲間に入れようとしたのは、ひとつは彼女が、毎日のように美代子を訪ねてくる存在だったから、そのままでは四人の稽古場がなくなること。もうひとつは、富子は、美代子の小さい頃のおてんば仲間、相撲などもちよいちよい取った相手だったことからであった。

美代子は、「そんな相手だから、きっと仲間になってくれるわよ」と言い、説得にかか

った。

しかし富子は、六年もの大都会での生活ですっかり近代女性になっていた。富子は、とんでもないわ、と一言ではねつけた。そして「昔はたしかにこの村にも女相撲があったわよ。でも今ごろそんなことするなんて考えられないわ」と言った。「ボーリングならわかるけどさ、だいたい相撲なんて、近代的じゃないわよ」とまで、美代子は言われてきた。

美代子は、がっかりしていた

「そんな人、仲間にはいらん！」

和子は、強い口調で言った。

「美代子には悪いけど、そんなモダンぶった人、私はきらいだな。ボーリングならわかるけどなんて！」

和子はシンからシャクにさわっていた。その場に居たらブンなぐってやりたい気持ちだった。

しかし、美代子の気持は少しちがっていたようであった。

「あの人、昔に、きつとかえるわ」

と、そんなことを言った。

国子が、「それより、その人誰にも言わないでしようね」と心配した。美代子は、「それだけは絶対安心よ。約束だけは、必ず守る

んだから」と言った。

それからひと月ほど経った、或る土曜の夜のことだった。

富子はそれ以後、一度も美代子の家を訪ねて来なかった。土曜日から日曜日にしか和子たちは集まることができなかったのだが、美代子の母が、「あの人、普通の日も全然来ないよ」と、教えてくれた。

和子たちは、美代子も富子とその後、会っていないと思っていた。しかし、実際はそうではなかった。

美代子はあれ以後も、粘りづよく富子と会い、その都会風な鼻持ちならなくなっている感覚を、何とかして昔の素朴なものに戻そうと努力していたのだった。

その夜、美代子の姿はいつのまにか消えていた。その夜はみな泊りこんで、あくる朝早く稽古することになっていたが、十時を過ぎても彼女は帰って来なかった。

みなは、だんだん心配になっていた。

「探しに行こうか」と和子が立上った時、美代子は帰ってきた。すでに十一時を廻っていた。

美代子の洋服は砂まみれになり、その頬にかすり傷があった。

「まあ！ どうしたの美代子、ガケからでも落ちたのかい」

その母が、せきこんで聞いた。

「うん、何でもないんだ。私、嬉しいの。富子が、昔に戻ったわ……」

美代子は、砂を払い落しながらニコツと笑った。

「私ね。富子と大の仲良しだったでしょ。その富子が、あんまり都会じみて鼻につくもんだから、何とかして昔に戻してやりたかったのよ。だから、何度も会って話してたんだ。今夜もね。……そうしたら、彼女ったら結局

あんたとはセンスが合わなくなってるんだな、なんて言うじゃない。相撲のことなんかじゃないのよ。別のことでね。私、あんまりシャクにさわったから、思いっきりブンなぐってやったの。すると、彼女ったら、怒ってねえ、かぶりついてきたわ。つまり、ケンカしてきたのよ。でも良かったなあ。私、昔、彼女と三度ばかり取っ組み合いのケンカしたことあるんだ。その昔に、彼女戻ったのよ」「まあ、相撲ならいいけど、娘がケンカなどして」

美代子の母はあきれていたが、美代子は、「ぐいぐい押えつけておいて、ホラ、私相撲

できたえてるんだからって言ってやったわ」と、満足そうに笑って言った。そして、「ひょっとしたら彼女、明日あたり、私も仲間に入れてよ、なんて言うてくるかもしれないわよ」と付け加えた。

富子は、果して翌朝早くやってきた。すでに稽古をはじめていたので、富子が表の門を叩いても、誰も気付かなかった。彼女は、庭の方へ廻り、石塀の外から大きな声で美代子の名を呼んだ。

文子と押し合っていた美代子は、「やっばり来たでしよう」と言っただけで喜んだ。和子も、嬉しかった。

△お願い▽と△お断り▽

○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の紹介には一切応じておりません故御諒承下さい。手紙の転送は誌上に可能と但書きしたものに限りです。
○如何なる理由に拘らず直接発行所への御訪問は固くお断りいたします。御用件はすべて書面にて大阪住吉局私書箱第四十一号
○編集者へ面会をお求めの方は住所氏名職業を明記の上お便り下されば電話番号、連

美代子が、「よし、裏門をあけてやろう」と、その方向へ駆け出そうとした時、国子は「この恰好見せていいの?」と言って、美代子を押しとどめた。

だが美代子は、「大丈夫よ、富子はここへ来たんだから、きっと仲間になるわよ」とそれを振り切って駆けて行った。

美代子の母の居ない時、四人は、素裸で取組んでいた。まわしの色は、最初とかわらなかった。

富子は、入ってきてその姿を見た瞬間、アラッと驚いていたが、彼女は直ぐ仲間になった。

「ごめんね、相撲なんてとバカにしたりして」

絡場所等をお返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお会い出来ません。

○「男性モデル」は只今のところ募集しておりません。入用の時はいずれ誌上に広告いたします。

○本誌旧号の中、昭和27年28年29年30年に発行の分で分譲可能のものがありません。買い求めます故、希望価格お申出下さい。
○本誌上に紹介して価値のあるS・M・F等各種文献資料御所持の方で提供下さった方には応分の謝礼をお支払い致します故御連絡下さるようお願い致します。

富子はそれだけ言って、四人にピョコンと頭を下げた。

× × ×

まわしをポンポンと叩き、

「サアノ正式な相撲同好会の結成を祝って、みんなで四股を踏もうよ」

と元気よく言ったのは、富子であった。

「ようし」とこたえて、和子は勢よく土俵に飛びこんだ。

美代子がそれに続き、文子と国子は、落ちついた足どりで、ゆっくりと土俵に入った。

みんなは円陣になって四股を踏んだ。

朝日が、五人の陽に灼けた肌を、美しく照らしていた。

富子以後、新しい仲間が入ってこなかったが、仲間は五人で十分であった。

夏休みを待ちかねて、五人は正式に同好会を結成したのだった。

土俵は、前の通り帆布製であったが、まわしの色は紺にあらため、髪も、そろって後ろに束ねていた。

和子は、いよいよこれから本物なんだと心を引きしめていた。

(カット・筆者画)



煉

獄

(最終回)

黒井珍平

長々と「煉獄」という題で書かせていただきましたが、今回でピリオドをうちたく、若し生あらば、SMの感想文を書かしていただくかもしれません。この号、少し堅苦しいのではないかとも思いますが……。

煉獄の本题に移ります。

テレビと言うと子供と一緒に怪獣映画をみる位ですが、どれもこれももの悲しく愛すべ

き少しもこわくない怪獣たち。ただうす気味が悪いのは、マグマ大使に出てくる、ゴア様（地球征服をねらう怪獣の王）が手をかえ品をかえ送り出してくる人間モドキ。それは同じ人間の姿をして、見分けがつかぬばかりか、まもる君の親しい小父さんであったり、時にお母さんに姿をかえとびこんできた。オームに姿をかえ、又ゴアをやっつけるはずの

防衛長官になったり、ウルトラマンとちがった気味悪さがあります。又鉄腕アトムが、全く同じ形の鉄腕アトムになって、（悪の手先が作って）正義の味方であるはずの鉄腕アトムが、人間を攻撃して本物の鉄腕アトムの名譽を傷つけさせようとする。かえって怪獣よりももうすきみが悪い。怪獣は少しもこわくないが、自分のお父さん、お母さん、子供がいつのまにか人間でなく、怪獣の化身になっていたとしたら。……

さて民法の結婚の項をよむと、はっきりと公序良俗（オイヤケ公の秩序、良風美俗）に反しない事という一項があります。まさかと思う方は民法をごらん下さい。この公序良俗なるもの内容は、時代と共に変わり、又離婚とか、極端な時にしか、効力をもたないとしても、社会が祝福する結婚というものの中に、はっきりとこういう項目が規定されていることは、日本人が日本国に生きさせてもらっている以上、ある意味をもっています。

悪書追放、三ない運動、これからもさまざまに形を変えて、行なわれて行くであろう国家統制は戦後の自由（一口にそういえるかどうか疑問ですが）の幻影（げんえい）をうちくだこうとしています。なぜSMが、悪の名で呼ばれ、悪

書とか、毒書とか、不健全と呼ばれるか。これはさつき書いた良風美俗を善とする見方からすれば、つまり結婚が、善良忠実なる国家の一員として、その時の支配層に何のうたがいももたず、子供を生み、健全な社会人として国家に奉仕し、停年をむかえ、おいはれて死んで行く事。日本国民の99%が、命ぜられてゐる事。(資本主義の国にあっては、それに反逆の心をいだく者は国賊であり、中共にあっては心にブルジョアジーの心をもつのが国賊であります)

妻というものは、一々それを国から命じられてゐるわけではありませんが、子供の頃から男というものの自由人として原始的感情にはみ出て行くものの、手綱を引きしめるべく教育されてきた存在であり、夫が、良風美俗に反して、良風美俗論者がいうところの変質者(?)的にならぬ様につかわされた尖兵であります。夫婦間でSMについてのトラブルが(私をふくめて)よく書かれますが、本当の姿はそこにあります。

SMプレイで仲の好い夫婦の妻の立場は、国家が良風美俗の守り手として使わした尖兵が、心ならずも、麻薬取締官が、買人^{ばいじん}になったり、麻薬中毒者になってしまった様な裏切

り者であり、かつもし妻が、あく迄良風美俗を楯にとつて、夫の良風美俗に反する行為に干渉し、圧迫を加える時、それは昔の特高より、けいしちようより、恐ろしい存在となり(マグマ大使を思い出して下さい。何しろ一緒に食事し、寝おきを共にしているのですから)生き地獄のありさまとなります。

明治時代のそれと現代の良風美俗の内容ははるかに変わったといつても、SM的行為は未だ、良風美俗とは言われず、やはり悪にぞくします。(彼らからみれば)

三ない運動など、最近の動きと共に、又妻は險悪化してきました。又ぞろせつかくためた奇クをびりびりにやぶかれるかもしれせん。社会の動きからいって、これはいよいよはげしさをますことでしょう。良風美俗(平和に子供を育て、大人しい社会人として、善良無比たるパパをのぞんでいる妻)に生きる妻と、これに反逆しようと企てる夫の姿は煉獄の世界です。

一方、人間が古代からいってきたSM感情は、むしろ国家、戦争、宗教の圧力、官憲によって行なわれたものが大部分であり、個人の犯罪(当然の事として、きびしい刑をうけますが)は断罪されても、何十万を単位

とした拷問、火あぶり、殺害の方は、国家、宗教の名のもとに正当化され、はなはだしい面は歴史の正史から消されるしくみになっています。正史からは消されても、人々の心にそれは裏の歴史として口から口へつたえられます。

悪書追放運動をよく魔女裁判^{まじよ}にたとえられますが、魔女狩りの歴史は、どんな正統な歴史書にものっていません。しかし一三二四年にインノチウス三世の発した異端糾明宣言から、三百年間にわたって全ヨーロッパにふきあれた、魔女狩りは、百万人を下らぬ美女拷問、火あぶりの歴史を作った事はミシュレ他数々の作品で紹介され、ローマ法皇の魔女狩り禁止令までつづき、正統の歴史書からは消されて終わりました。サドのほんのかるい一、二回の事件や、獄中で書いた諸作品が、まるで悪鬼の様に言われますが、三百年の恐ろしい事実と、サド一人のたわいない一生を棒にふった「作品」と一体どちらが悪鬼の所業であつたか。この歴史をふまえないと、サドの作品の意味もつかめないでしょう。日本の歴史も同じ、数かぎりないSMの代官やら、官憲の歴史。一つだけあげましょう。大東亜戦争で捕虜になった日本軍人がオーストラリアのカウラで、集団自殺に等しい反乱を起し、

ほとんどが殺され、墓参を許されず（公にされるかすれば、別の英雄的な名目で発表されるでしょうが）地下に、ねむっているといわれます。彼らを反乱に走らせたものは何であったか。恐らくその一つは、あの時代の軍人の精神は、捕虜として日本にかえされた以上、間違いなく自分達をまちうけている屈辱エタとか、部落民とかいわれて、理由も理屈もなく圧迫され、村八分にされる（表面上はともかく、この習慣は立派に今も残っています）のと同様な、否、それ以下の運命が、わ

かり過ぎるほどわかっていただけに、堪えきれなかったのではないか（当時、一旦戦場に臨んだ日本軍人は戦死を最高のものとし、捕虜の汚名をきて祖国に帰ることは許されなかった）と思う。加害者は英軍ではなく、日本国内の問題であった（あの頃、日本国民はそう教育されていたことは周知の事実）。カウラの反乱は、一種の「自殺行為」であったのではないか。

話を自分にもどしましょう。

家庭生活において、善良にしてノーマルな

るパパになることをもとめられ、妻に監視されている男は、どうしても煉獄の世界をそこにみてしまう。

「良風美俗」を完全に撤廃することは、国家を国家でなくす事であり、国家を保つ以上、保安機構は決してその取り締まりをおろそかにすることはありますまい。ただ最少限の範囲内で「人間の自由」として泳がせておくぐらいのところでないだろうか。

屈伏するか。ひそかに生きるか。生を絶つか。……以上で「煉獄」を終わります。

【告白】

愛 禪 記

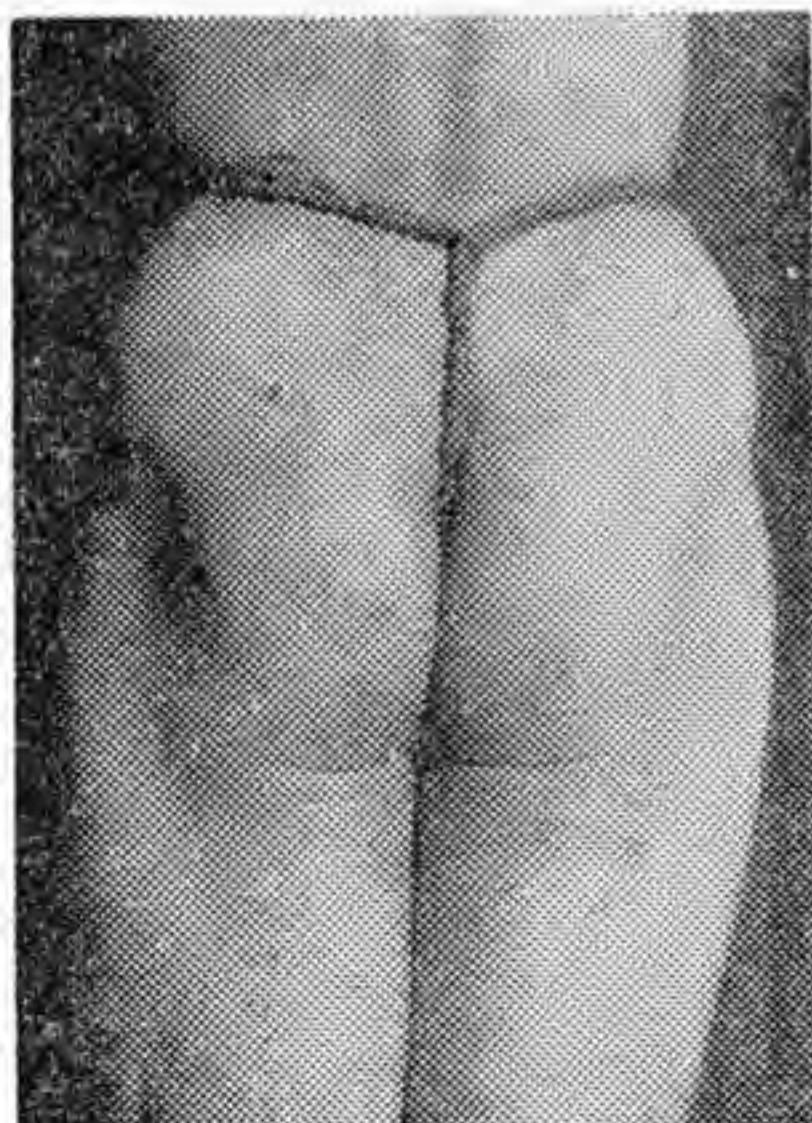
会 津 太

わたしは禪が大好きだ。どんな動機で禪が好きになったのか覚えていない。生れた時からもう好きであつたらしい。親ゆずりだろう

か、それとも赤ん坊の時のオムツの懐しさからだろうか。

小学校にあがる前のまだほんの子供の頃、

風呂屋で初めて禪をしめた人に出会ったときから、何とも言えない魅力を感じた覚えがある。その頃は今とは違って風呂屋へ行くと禪



をしめている人が必ず一人や二人はいた。

禪といっても越中禪は後が帆かけ舟のようであらなくて、わたしには魅力はない。越中禪ならばむしろ今のようないびつちりしたブリーフの方がまだましである。禪姿の美しさは六尺禪に限るのである。同じ六尺禪でも、年をとってだぶついた体に、太いのをゆるゆるに巻きつけ、前垂れをたらしめたようなのは全然、魅力を感じなかった。若くよく引きしまった体軀に、細目の真白い晒木綿を、肌に喰い込むほどきつくしめ上げた姿に、初めて見た瞬間から子供心に、とてもりりしく美しく思えた。とくに、その上に胸高に真白い晒木綿の腹巻きを巻いた姿には、最高の男らしさの魅力を感じた。腹巻の下から細いタテミツがもりもりと盛り上った尻に深く喰い込んだ後姿、キリッと引締っていかにも男性的な感じがする正面の姿、叩けば音がしように張り切った太股、等々、何とも言えず小さい胸を躍らせたものだった。そういう人を見て禪のしめ方を覚え、家に帰ってあり合わせの布で禪をしめて見た。腹部がキツチリと締まる快い圧迫感、尻に喰い込むような充足感。すっかり禪の魔力にとりつかれてしまった。それ以来、ひまさえあれば禪をしめるように

なった。しかし子供のくせに禪をしめるのは何だかはずかしく、早く大人になって、正々堂々と禪をしめられるようになりたいと思っ

た。
小学校に入ると、プールで泳ぐときは皆赤禪をしめることになっていった。見つけやすいためと、溺れたときに禪をつかんで助けるのに便利なためだからである。そんなわけで、夏になると家では一日中、赤禪一本きりのはだかで遊びまわっていた。家の女中が、赤い禪がとても可愛らしいというので得意になっていた。臨海学校に二週間程行って来ると、真っ黒に陽灼けし、禪のあとがくっきりと白く浮き立った。風呂屋に行ったとき近所の小母さんが、その禪のあとがまた可愛いとほめてくれたのが、とても嬉しかった。夏も過ぎやがて秋になると、いつしかその白い禪のあとがだんだんうすれて来た。それがまた残念に思えて、禪一本で時に日光浴をしては、黒さを保つように努力したこともあった。
学校で長距離のランニングをやったときのことだった。例によって赤禪をパンツの下にしめこんでいたのだが、ちよつとゆるみかけていたのを、しめなおすひまがないままにスタートラインについた。その以前に、禪がき

つすぎて走っているうちに痛くなり、おくれをとったことがあったので、少しゆるくしめていたのがまずかった。走っているうちにだんだんゆるんできて、ついにパンツの下口から禪の端が顔を出してきた。それを手でおさえ走っているうちに、皆に見つかってしまった。先生が大笑いして「ゆるふんじゃ勝てっこないぞ。しっかりしめなおしてこい」と言って、その場でしめなおさせられたのだが、それからというもの「赤フン」のニツクネームを頂戴してしまった。

海女に興味を持ち始めたのもその頃だったであろうか。それも禪をしめて潜る海女がいることを知ったからである。鮎倉島、刈馬、鐘ヶ崎、大浦、エラブ島、等々の海女はみな禪姿である。二分も三分も息の続く限り海にもぐって、時には海底で思わぬ外敵とも戦わなければならぬ、それこそ命がけの仕事をやる海女にひきつけられた。しかも寒い冬の海、身もこごえそうな冷たい水の中に、禪一本で潜る海女。おもりをつけて三十尋もの深海に、命綱一本に命をたくして潜る海女。ちよつとでも引き上げるタイミングが遅れればもう命はない。こらえにこらえて息も絶え絶えになって浮き上って来るともあるとい

う。そうした命がけの作業のさまを聞くと、禪の魅力が更に加わって、女性の最高の魅力に思えた。

近頃のように、ゴムの服を着たり、ヒレをつけたり、酸素ボンベを背負ったりしたのは魅力はない。メガネもない方がよい。しかし一糸まとわぬ完全なヌードより、禪一本をキリリとした、いわば一糸まとったヌードにこそ美の真髓があるように思う。

そうした海女の魅力にひかれてからというもの、何とかして息を長くし、肺活量を大きくしたいものと、毎日洗面器に顔をつっこんでは息を長くする練習をしたりした。寒さに強くなりたいためには、冬でも下着はランニングシャツ一枚で通したり、靴下もはかないでがんばった。

中学校に入ってから寒中水泳をやりたいばかりに水泳部に入った。その頃の学校では泳ぐとき、一般の生徒は白禪を、水泳部員は黒禪をしめるきまりであった。そして半巾の狭いものでなければいけなかった。それがまたわたしの好みにもびったりだった。しかし練習はともきびしく、一年中、部員としてしごかれたものだった。その頃は水泳の選手は練習のときは禪一本、レースの時にはその

上に水着を着ていた。サポーターの代りにみな禪をしめているのが普通になっていた。

偶然にも、その頃わたしの家にいた女中が漁師の娘で、海女もやるというので、いろいろ海女のことを聞く機会があった。海女の仲間では息の長いのがやはり自慢だそうで、二分以上潜れるのはそう多くないのだそうだ。

息を長くするためには小さいときから練習し、顔色が真青になるまでがまんするのだという。腰におもりをつけ、命づなをつけて舟からもぐる海女は、フネドと呼ばれ、夫や兄弟に綱でひき上げてもらうのだが、おもりのために自力では浮き上がることはできない。

万一の場合はおもりを海刀でたち切り、身を軽くして浮き上るのだそうだが、そんなことをすると仲間から軽蔑される。途中で息が切れ、気を失って上がって来て、仲間にかいほうされるようなことがあると、その海女はたちまち皆の尊敬をかちうるのだそうだ。

そんな彼女が、あるときわたしを、彼女の故郷の浜に招いてくれた。頃は二月、まだオーバーにマフラーを着ている寒い頃だった。海女を見せてくれるという。早速彼女と二人で舟をこぎ出した。彼女は紺木綿のカスリの着物に赤い帯をしめ、素足に草履ばきのいで

たちだった。たけはようやくヒザのあたりのミニスカートばかりだった。脚を開いてふんばり、櫓をこいで沖へ向う。着物の裾は風にはためき、太股までまかれて、浅黒いがよくひきしまった形のよい脚に、筋肉の動きが眼にまぶしいばかりである。とある沖合まで来ると、目盛のついたいかり綱を海中に投げ入れた。二十三尋ばかりもあった。彼女は潜る身支度をする。身支度といっても着物をぬぐだけだった。細帯をとき、着物一枚ぬぐともう裸だった。そして細い禪をしめていた。この寒空に素肌に木綿の着物一枚しか着ていなかったのだ。小麦色に陽やけた肌に、禪がとてもよく似合っていた。禪はごく細いもので、乙女の肌に快いくびれを見せていた。よく発達して半球形に盛り上った尻に、可愛いエクボが窪みをつくり、タテミツが深く喰い込んでいた。禪をさらにキリリとしめなおすと、水で体をぬらし始めた。『ずい分深いけど、底まで潜れるか』ときくと、『何とか頑張って見る』と言って、体を十分にぬらすと、海中に身を躍らせた。水中に手を入れて見ると水は痛い程つめたかった。

彼女は真冬でも海にもぐっているのだそうだが、海の水は真冬よりもかえって春先の方

が冷たいのだそう。軽く泳いでウォーミング・アップをすると、『行ってくるわ』と叫んで尻をくると見せると、まさかさまに海底へ潜って行った。海中に逆立ちをする、さながら人魚が泳ぐように、白さが水にかすんで美しい絵のように見えた。

自分も舟の上と一緒に息を止めて見た。わたしは訓練をしているのでかなり息が長い自信があったが、そのわたしが次第に苦しくなってくるにつれて彼女が心配になって来た。

水はともよくすんでいるのだが、待てどくらせど彼女の姿は見えてこない。とうとう息がつきてしまった。どこか他の海面に浮き上って来たのではないかと周囲を見まわしたがどこにも彼女の姿は見えない。どうかしたんじゃないか、飛びこんで様子をみようかと思いは始めたころ、ようやく彼女の姿が海中に見えて来た。それから彼女が浮上するまでどんなに長く思われたことか、手を出して引っぱってやりたかった。もぐって行くときよりも、浮き上る方がむずかしいのだそう。やっと海面に顔を出した。さすがに彼女は息をはずませている。海底にまで行って来た証拠に貝をとって来たのを見せる。わたしも服をぬぎすて、愛用の禪一つになると、冷たい

海中に身をおどらせた。氷の張ったプールで寒中水泳をやって鍛えていたわたしには、冷たい海もかえって快いほどだった。それから二人は泳いだり潜ったり、水の冷たさも忘れて時を過ぎた。今でも忘れられない楽しい思い出である。

禪もその材料によってしめた感じが大分違う。昔からの晒木綿のほかに、麻やクレープデシンのサラサラした感じ、ポプリンのちみちな感じ、絹の柔かい感じ、ナイロンの強靱な感じ、ウールの独特な感じ、デニムのゴツゴツした感じ、など、みなそれぞれ特色ある感覚があって、どれも捨て難い。常用にはならないが、相撲のミツも下腹がよくしまって気持がよく、透明なビニールも特殊の効果があって面白い。色も白のほか、そのときの気分に応じていろいろな色物や柄物を用いるのも気分が変っていいものだ。わたしの青春は情熱のはけ口を常に禪に求めたし、時と場所をきらず湧きあがる熱い血潮も、禪があるというだけで何か安心できて心強く、サポーターとしてわたしには常にかかせないものになった。

禪の魅力は下腹の快い緊迫感、キツチリと身体を引き締める緊張感にあるのだから、タ

テミツのしまりの悪い越中禪やモッコ禪では効果は薄く、サポーターには前袋はあっても、後のタテミツがないので効果は半減、バイクも何か頼りない。やはり禪は古来の六尺禪にとどめをさす。わたしは一巾の広いものより、半巾の細いものが好きだし、タテミツの部分をしめるときにより合わせた方が、圧迫感が増して効果が高まり、痛いほどきつくキリリとしめ上げるようにしている。前袋は上向きにするか、下向きがよいかは、それぞれ感じが違い、締める人の好みもあろうが、わたしはもっぱら上向きにしている。

禪一本きりりとして、裸で大地をふまえてすっと立ったとき、生命の充実感が一杯にみなぎり、『ふんどしやよくぞ男に生れけり』の感が深い。わたしにはかくして今や六尺禪は片時も肌身はなせぬものとなったのである。

然し、考えてみると、我国古来の伝統を誇ってよい筈の「禪」を、こと改めて「好きである」とか「手離せない」とか、独り、きばっていわなければならぬのがオカシイ。いくら下着の変遷があっても、女性の着物姿が現在もてはやされているように、禪ももっと見直されて愛用されるべきだと思う。

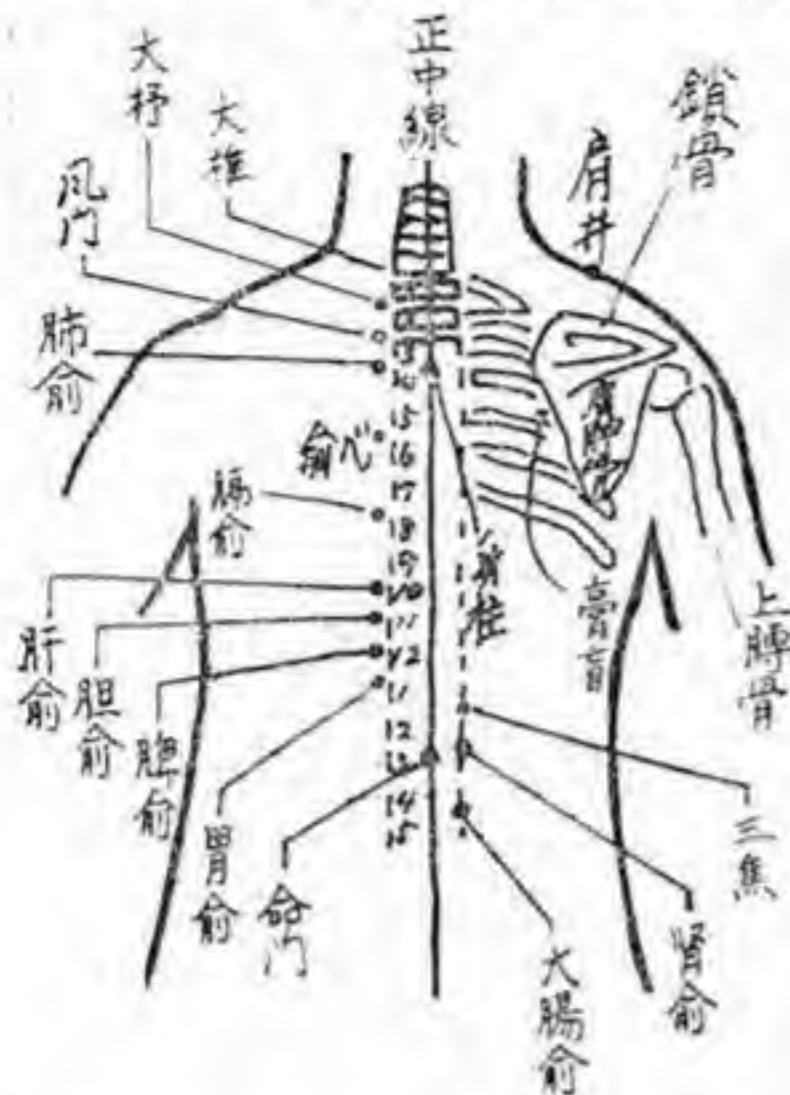
責めと灸の研究

川崎進一

灸が何時頃から行われたか、確実な記録はないが、約千四百年前、欽明天皇の頃、支那から伝来したものとされている。

江戸時代、元禄の頃、後藤良山のような名

(灸穴)(第1図)



医が出「百病ハ因ル一氣ノ留滞ニ」との説の下に、大いに灸の効能をといてから、益々盛に行われるようになった。

しかし、明治に入って西洋医学が輸入されるや、舶来欧化思想のため、漢方医学としての灸は、民間療法の一隅に追いやられてしまったのである。

ところが、最近に到って、現今の医学の及ばざるところに灸の力を借りようとする研究が起り、灸の生理的影響効果についての科学的証明がなされるようになってきた。殊に、最近の東洋、殊に日本研究熱の盛んなアメリカ医学界において、灸の関心が高まって

きたことを見逃すわけにはいかない。

さて、灸に依る療法は焦ってはいけぬ。

俗に灸百日というように、辛抱強く、規則正しく施灸せねば効果がない。

「忌ミ房事ヲ前三日ヨリ、遠ニ避ケテ勞役ヲ、防キ風寒ヲ、節シ飲食ヲ、勿レ憂愁忿怒スル。而シテ灸後七日ノ間ハ、食レヒ淡キヲ、遠ニ避ケテ厚味酒肉ヲ、止メテ房事勞役ヲ、補養ス」

と、古人はその療養中の心得を嚴重にいましめているのである。

灸に艾は欠くべからざるものであることは言うまでもない。本草綱目には、

「艾ハ味苦ク、無シ微温毒。司ル灸スルヲ百病ニ」とある。艾はよもぎの葉を陰ぼしにし、臼でつき、細かなふるいにかけて綿のようにしたもの、乾燥させたものであるが色が白く、混り物のないものが良い。

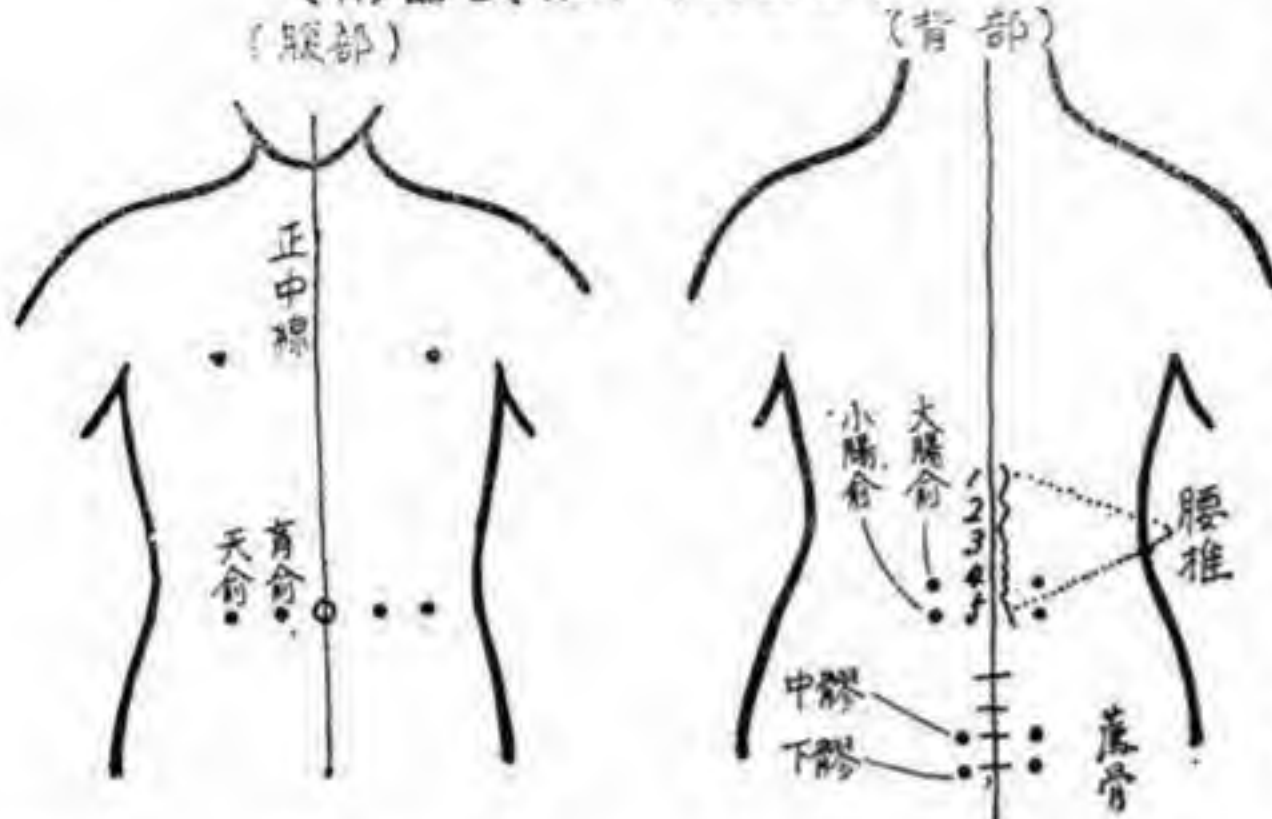
艾の大きさは、勿論、太く長い程熱感が強く、責め材料としては、指頭大も考えられるが、療法としての灸と、責めの場合とは絶対に混同してはならない。一般には市販されている程度の米粒大が普通である。弘法灸のような巨大な灸に、若い女性などが、身体を硬直させ、息を殺して耐えているというような状態は、マニヤを喜ばせることはあっても、

医学的には、灸痕の化膿等の弊害の方が重大と考えられる。『千金方』という古医学書には、「灸の大きさは三分でないと効果が無い」とあるが、灸責マニアにとっては嬉しい一語ではあるが、乱用はやはり慎しむべきであらう。

灸の火数については、灸療の本には必ず、穴毎にいくつと書いてあるが、これは勿論標準であって、年令により、病気の軽重、熱の有無或いは責の軽重により、手加減するのは当然である。灸数

については、火数だけでなく、艾の大小、穴の数と共に、この三つが、刺戟の分量となるのであることは勿論で、大体は慢性病では火数は多く急性では少くが原則であり、責では——これは他言を要しないと思う。灸は、相当の高熱をもって直接に

〔常習便秘〕（第2図）



皮膚を焼くものだが、艾の成分からいって、一般の火傷とは違って、殆ど化膿するというようなことがなく、万一化膿しても、その治癒は驚く程早いものである。この点、責めとしての要素も充分備えているものといえるだろう。

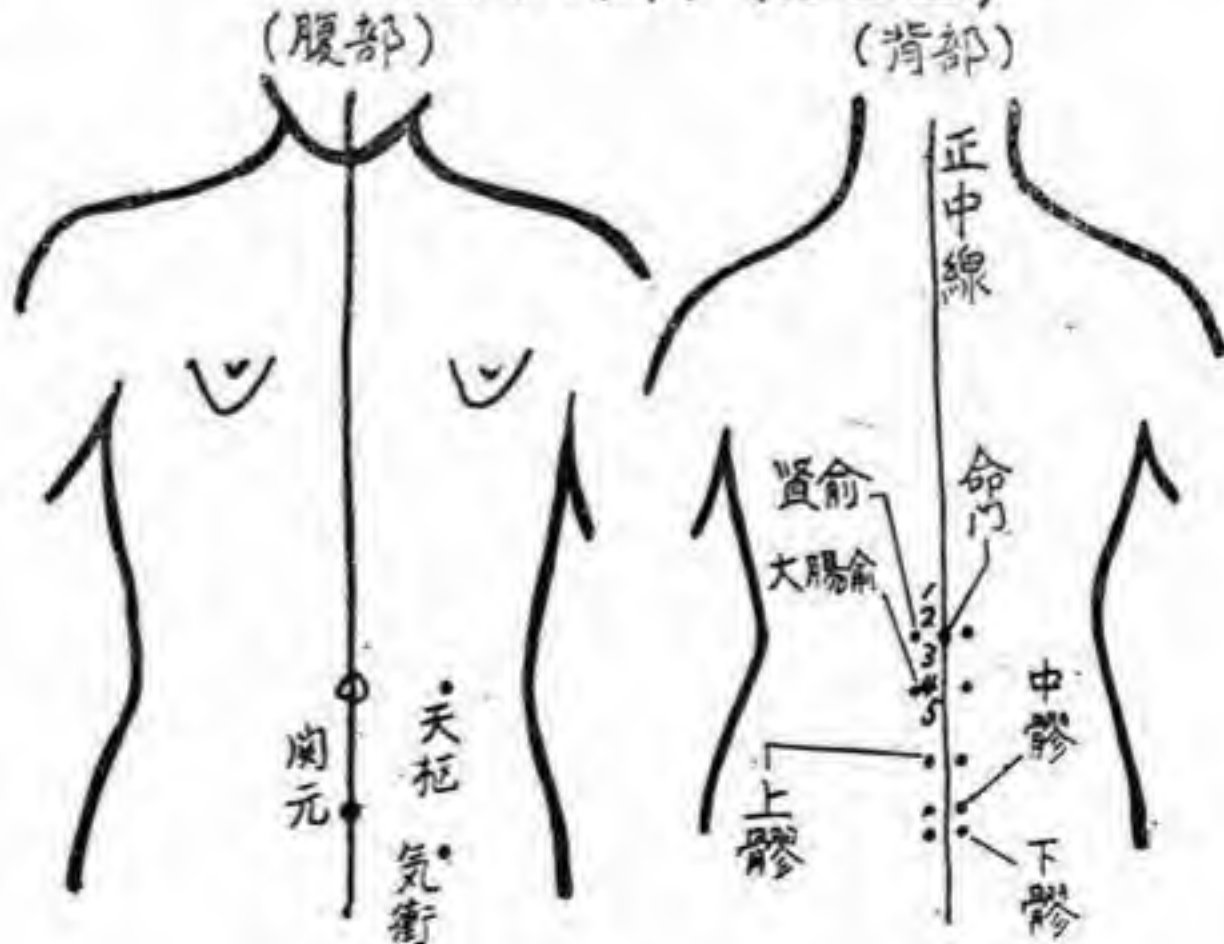
灸で一番問題となるのは灸穴（つぼ）の点を正確につかむことである。ヘッド氏知覚過敏帯と、灸穴は一致する。と最近の医学では言われるが、理論的にはそうであっても、我々には知覚過敏帯をいちいち知り、指摘することは容易には出来得ない。

灸穴は、患者自身の指の長さと同幅を以て計る。即ち、中指を曲げて節から節の間の長さ、或いは親指の第一節の横幅を、その人相応の一寸と定める。古書には、

「量ニ分寸ヲ一定ニ灸穴ヲ、以テ手ヲ推スニ穴処ヲ、手ノ下窪ミテ痛ミ、所ニ快ク達スル病人ノ心ニ、是レ的ニ灸穴ニ也」

とあるように、適確な灸穴に当たった箇所を指先で指圧すると、患者は快い圧痛を感じるものである。

〔月経不順〕（第3図）



る。

灸穴の正確を期すには、示された寸法を身体に正しく当り、この圧痛点を探し求めるのであって、灸穴さえ正しければ、可成り過重な灸を施しても、害はないものであるから、灸責マニアとして、もしこれを行わんとするならば、灸穴だけは心得ていたいものである。「責めのルール」としても必要な条件であらう。

基本的な灸穴を説明すると、灸は普通背中

にすえることが多く、その灸穴は、胸椎第六、第七の中間左右二寸、とか、胸椎と腰椎の間という具合に示される。

この頸椎、胸椎、腰椎、薦骨、尾りよう骨などの位置は大体次のようにして知り得る。まず、首をずっと前に突き出した時、首の付根、背骨の上端にポツカリととび出る骨が頸椎の第七で、それより上へ、頸椎第六、第五と教え、下へ胸椎第一、第二と教える。肩胛骨の下端を横に直線で結ぶと、丁度、胸椎第七となる筈である。これらを目標として上下左右、前記の寸きざみに依って計るのが普通である。

胸部の方は、乳頭、鳩尾、臍、恥骨など自然に備わった目標により、容易に灸穴の位置を知ることができる。(第一図)

〔痔〕(才4図)



一、二例示すれば

(例一) 常習便秘 (第二図)

背部では、腰椎第四、第五の各下左右一寸五分(大腸筋、小腸筋)、薦骨の左右六、七分(中髎、下髎)

腹部では臍の左右五分(盲腸)、更にその一寸五分の天枢に夫々七火ずつ。

(例二) 月経不順 (第三図)

背部では、腰椎第二の下の命門を中心としてその左右一寸五分の腎俞。腰椎第四の下左右一寸五分の大腸俞。薦骨第一、第三、第四の両側で正中線から六分から八分の上髎、中髎、下髎。

腹部では臍の両側二寸の天枢、臍の真下三寸の関元、鼠蹊部内で天枢の下五寸の氣衝に夫々七火ずつ。

(例三) 痔 (第四図)

頭の百会。

薦骨第一、第三、第四の左右外方に八、七分と下狭まりに点じ、なお尾閥骨の尖端に一つと、計八穴。

最後に、医療としては勿論、マニアとしても注意せねばならない五ヶ条を灸を愛する者

として付記したい。

一、神経焼切

不用意な灸のために、神経を焼切ってしまった、一部神経不具となることがある。灸穴を定めぬ暴挙は絶対につつしみたい。

二、病勢悪変

原則として、熱のある時などの点灸は慎むべきである。思わぬ病勢の亢進することがあるから注意を要する。

三、過失死亡

例えば、盲腸炎など早急に切開手術すべき所を、灸治に頼るなどは愚の骨頂というべきであろう。

四、胎児流出

妊娠中は特に注意すべきで、過度の灸は流産の原因ともなる。

五、和合破壊

マニアにとっては、最も注意すべきことである。灸によって快感を覚え、施灸にふけて、夫をかえりみないなどの事があっては、いやあり得るといふことは今更言を左右するまでもないと思う。過ぎたるは及ばざるが如しとは、ここにも当てはまると思う。何事でも同じであろうが、灸というものの特質をよく知り、利用すべきだろう。

マゾ・ストーリー

母 娘 蜂

(おやこばち)



春 川 ナ ミ オ

直子は十八才になったばかりの瞳の美しい少女である。今春、高校を卒業したばかりとは思えない程そのすばらしい肉体は、はちきれんばかりに発達し、小麦色に焼いたその肌は、まばゆいばかりの輝きをもっていた。

直子の母親はバーを経営しているが、さすがにその洗練された美しさは、男性たるもの誰しもがその足もとにひざまずき身を投げ出したくなる錯覚に陥るのであった。一郎は平凡なサラリーマンであったが、い

っしか直子の母親明美のトリコになり、今は母娘二人と同居するという結果になってしまっていた。

そんな家庭に育った直子は、一郎を下男扱いにしていた。いや、それ以上に一郎は自ら奴隷としてその美しい母娘に飼育されて満足し、喜んでいた。明美がもちろん一郎の所有権を握っているのであるが、今夜は直子の一人舞台である。

明美からの電話で、帰宅が遅くなるというのである。直子の目は異妖に輝いている。その妖しい口もとからは、かすかに笑いらしきものが見える。

「今夜は、お前を、あたい一人の奴隷として思いきりいじめてやる。一郎、うれしいだろう。楽しみにしているのよ。あたいが、どんな凄い遊びを考えているか教えてやろうか。ふん、この野郎！」

直子は、いつのまにか男のような口振りになり、思いきり一郎の頭を蹴りとばした。一郎は、ぶざまにころがった。

「何をしているのさ、こっちへこい。さ、馬になるんだよ、早く！」

一郎は、そのすばらしく発達したはち切れするような肉体に、パンティ一つだけの姿で仁

王立ちになっている、その二本の巨大な柱の間に、しずしずと腹ばいになった。そして下から見上げるこんもりと盛り上った重量感のある偉大なヒップは、一郎をふるえあがらせた。

突然、二本の肉の柱がぐずれ落ちたかと思うと、一郎のやせぎすの体は、その巨臀の下でつぶれていった。

「ふん、何さ。これくらいなこと、もうのびてしまったのか。そんなお前を見ると、もっともっと、苦しめてやりたくなるのさ」

直子は立ち上ると、一郎の背中を思いきり蹴上げた。

「うっ！」

一郎は、なんとなく仰向けになっていた。

一郎の顔の上に仁王立ちになりながら、直子は以前より考えていた、もちつき遊びを思い出した。何のためらいもなく直子は、一郎の顔に巨大なヒップを近づけていった。一郎は得体の知れない恐ろしさと、これから始まる苦業とを想像しながら、目を睜った。

「さあ、覚悟おし、よいしょっ！」

どしん――

「むっ！」

一郎はその圧力に顔を押し潰されて、尻の

下に完全に隠れてしまった。直子はゆっさゆっさと巨臀を左右にゆさぶり出した。一郎の顔はそれにつられて、左右に前後にとゆれ動く。早く遅くゆっくりと尻だけを動かしながら、直子は征服感を楽しむかのように、その美しい瞳を静かにとじた。しばらくして動きを止めると、ぐっと両足をふんばり、エイッ！と気合を入れると尻に力を入れた。息が出来ないので苦しみのあまり一郎はもがく。もがけばもがくほど直子は面白そうに力を入れる。一郎は、もちろんはね返すことも出来ない。そのうち小刻みにふるえ出した。このまましていると死んでしまうかもわからないと気がついた直子は、その巨臀をわずかに離してやった。ぐったりした一郎は、口を大きく開け空気を思いきり吸った。と、その瞬間、またも巨臀が襲ってきた。

ドシン！うっドシン！うっ

いよいよ直子のもちつき遊びが始まった。

ドシン、ドシンと続くその圧力に一郎の小さな顔は見る見る赤くなっていく。静かな一室で、直子の時たまおこる笑い声と、ドシン、ドシンという音だけが、もうかれこれ十分も続いただろう。直子の目はいよいよよつり上り、その顔は恐しい程に見える。

「殺してやる、殺してやる。お前はあたいの尻の下で死ぬがいい。さあ、どうだ、これでもか。死んでしまえ、この野郎」

直子は気がくるったように、一郎の顔面を狙った。鼻血が移りついたパンティに包まれている巨臀は飽くことを知らずに責めぬいた。一郎の顔は鼻血で真赤に染り、口はカラカラになり、時たま汗がじっとり口の中ににじみ込む。

ふと我にかえった直子は、ようやく動きを止め尻を浮かすと、そのまま満足そうにグツグツと伸びている一郎の顔を冷やかに見下ろした。失心した一郎は口をわずかに開き、顔中鼻血だらけで目は半開きのまま、ぼんやりとしている。

「何さ、これくらいで失心しやがって。頼りない奴隷だわ」

直子ものどが渴いたのか、長椅子に横になりビールを美味しそうにかたむけた。一郎が気がつかないと見ると直子は何を考えたのか、一郎の足を持ちトイレまで引っぱって行った。そしてパンティを無造作に脱ぎ捨てた。

「お前の気つけ薬として、これが一番さ。うれしいだろう。ちょっとお前にはもったいな

「気がするけど、生ビールだよ」

それは滝のように激しい勢いで飛び散った。直子は本当に女王の気持になっているのか、一郎を人間と思っていないようだった。気がついたのか一郎は静かに目を開けた。

「この野郎！」

直子の足蹴で完全に正気に戻った。

「気がついたか、この馬鹿野郎。さあ、その

ままで口を開けな、もっと大きくだよ。お前

の一番好きなものを食べさせてやる。母ちゃんのとどっちが美味しいかくらべるんだよ。もちろんあたいのに決まっているけど、よく味わいな」

再び息も出来ない苦しみが一郎に襲いかかってきた。巨臀は、それ自体が別の魔物のように思えた。一郎の顔は見る見る苦痛にゆが

んでいった。

「美味しいか、美味しいだろう。そろ、まだまだもっともっと食べさせてやる」

直子は最後の止どめをさすと、身軽にバスルームにとびこんだ。一郎はその香りにむせびながら、また失心してしまった。

(カット・筆者画)

＜感想文＞

高村初子さんの

歌を讃える

保 藤 久 人

日ごろから、私が心ひそかに注目し、敬愛してやまない高村初子さんの文章を、八月号誌上に見ることができた。真実、うれしかった。

ようやく——という感が強い。

しかも、編集の都合のためか、私の拙い小説と頁を隣り合わせにしていた。

「真夏の悔恨」この文字は私の目に痛く、一読して、私は説明しようのない激しいショックをおぼえた。

が、その以後、一体何度読み返えしたとだろうか——。

私が、高村さんとおっしゃる未知の女性に対して、自分でも説明し難いような愛着を感じたのは、彼女の短歌が「奇ク・サロ」の片隅に、忽然と彗星の如く現われたその瞬間からだ。

別段、私には「歌づくり」の趣味がある訳ではない。それどころか、私には、短歌というものの良し悪しさえ、正確に判断することができない。ということは、私には「三十一文字」というものに対するセンスの乏しさと、知識のないことを証明していることになる。

それなのに高村初子さんの短歌は、いつも私に向かって、ひそひそとにかをささ

やきかけてくるのだ。

高村さんの短歌について、読者の反応の少いのもどかしく、不思議に思えて仕方なかった。

いつだったか、私は編集長宛にそのことを告げ、折あらば、彼女に語らいかけてみたいと言ったことがあるぐらいだが、どなたかが、私より先にそのことを果して下さった。

そのかたの、高村さんの歌を讃える文字を見たとき、私は、まるで自分のことのようにうれしく、そのかたに感謝したい気持ちで一ぱいだった。

なぜ、私はこうも強く、高村さんに惹かれるのだろうか、自分自身をいぶかったものだが、私の場合は、高村さんの歌を詠まれる姿かたちそのものに魅了されていると言ったほうが正しいだろう。

直接、肌を感じ取れるのだ。

彼女の歌にはそのような「実」がある。

毎月、サロン欄の片隅にひっそりと並んでいる文字だが、その一字一字は、偽りのない誠を、あらゆる人々に向かって語りつつ、訴えつづけているように思えた。

だが、訴えつづけているというのは、きっと、彼女にとっては気持の上で、真実ではないはずだとも思う。

現実の高村さんは、むしろ、わが身を謳歌なさっているのではないだろうか——？

彼女の歌について、いまさらここで一つ一つを取り上げて言うのは愚かしいことで、大切な誌上の浪費になるので避けるが——。

高村初子さんとは、一体どのようなかたなのだろう。と、詮策する気ではなく、当初、誌上で短歌を見たときから私はそう思った。

某氏の夫人ではないだろうか？

そんなふうにも思った時期もある。なぜかと言えば、短歌をあまり知らない私なのに、その作品から、生々しい、強烈な印象を受けたためである。

とにかく、才媛だといえる。

そして、毎月毎月、彼女の歌を異常なまでの楽しさで読むにつけ、自分でも何か訳のわからない愛着心にとらわれてゆき、現在に及んでいる。

ところが、はからずも今回、高村さんは、自分という人間のいくらかを、私たち読者に隙見させて下さった。そんな感じがした。

「真夏の悔恨」——だとかおっしゃる。

たしかに、綴られている文字をたどってゆくと、そこには痛ましく哀れな、世にも哀れな、不しあわせな運命に捉えられた女の姿を見出すことができる。

おそらく、高村さんの体験なさった禍事は、単に、高村さんだけでとどまらず、意外に多くの女性の「受難の記録」といえるだろうし、現実の実態は、目を覆いたくする悲惨事に相違ない。

それは、たしかに悔恨以外のなにものでもないと思う。

「転落の一途をたどって行った」

気になる、そして味わうに価する、深い意味のある言葉だ。

いや、人間としてなら、改まって言うまでもなく、不しあわせな女の道だったのに違いなからう。

たどって行った——。下降線である。

その行く先は、まるで、底なしの泥沼に足を踏み滑らして、身悶だえながらズンズン沈んでゆく。

その様子を「真夏の悔恨」の文字が如実に物語っている——。

が、しかし——。

高村さん！ 怒らないで下さい！

たしかにそれは転落の一途だったかも知れないけれども、あなたの「一途」は、下降であると同時に、また、新しい、未知の世界への道程の第一歩ではなかったのでしょうか？

そこは、通常の觀念や倫理では理解もできず、安易な妥協の許容されない異端の地だともいえるだろうが、同時にまた、異次元的な耽美を秘めた隔世の境地ではなかったか？

私などの第三者が、取沙汰すること自体が間違いで、そこにあるのは、きびしくもおどましい、限らない羞恥と屈辱と、そして、やりきれぬ憎悪と、憤懣と、さらに、それを上回る嫌悪も、確在するものと想像はできる。

しかし、いまのあなたは、そのおどましい境地のあたりに、新鮮な生を見出していらっしゃる——。

と、このように申し上げては、まことに非礼かも知れませんが、私はあなたの歌か

ら、そのような秘めやかな、蔭の歓喜を痛感するので。

高村さんの短歌から、じかになにかを肌身に感じ取り、胸の芯を熱くするのは、多分、女のかたに多く、男の私がこんなことを言うのは奇妙かも知れない。

けれども、私にはハッキリと感ずることが

かつて、たしか誌上でも述べたことがあると思うが、私の内部には、自分でも不可解なものが存在する。

それは、生れ変わるものならば女に——という、奇妙な心理である。と言っても、別に私は女装を好むものではなく、平凡な男にすぎない。それなのに、私は女に生れ変わりたいと思う。

女になれたなら「女」であるが故の羞恥と屈辱を徹底して味わいたいと思う。あほらしい夢想到すぎないが——。

「女」を罵り責められて、「女」であるために悩乱し、その悶えの中へ感溺してゆきたいとも思う。

元来が自称Mだが、私の中にはこのような幻妖があり、それが私という人間の、あるい

は、Mの本質の一部を表明しているのかも知れない。そしてその心理が、現在、男性の私に、「女」への崇敬心を駆り立てているとも言えそうである。

私はこのような短歌を詠めるヒトを、羨ましく思う。制限された文字の中で、心を現わし、憧憬を盛り上げる。真実に希求するものにして、はじめて可能な世界。

ともあれ、私は、短歌というものがわからぬにもかかわらず、高村さんの歌に惹かれ、それにつれて感情が、彼女への敬愛へとつながってゆくのを覚え、強まるのをどうすることもできない。

高村初子さん。サドチックな感情を抜きにした、私のような男が、あなたの歌を毎月楽しみにして、愛誦していることを、知ってほしいと思う。

不可思議な親近感をもって、奇妙に胸を踊らせながら、あなたの綴る短い文字を追ひ、感銘を新たにしている。

そして、これから、そこにあなたの本姿を見詰めることのできる歌を、詠みつけてほしいと祈ってやまない——。

高村さん！ 失礼を申し上げます。

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札三枚一組 略号△もえ▽ 四〇〇円

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号△もゆ▽ 四〇〇円

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号△もよ▽ 四〇〇円

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号△もす▽ 四〇〇円

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号△もせ▽ 四〇〇円

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号△もれ▽ 四〇〇円

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号△もる▽ 四〇〇円

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号△もて▽ 四〇〇円

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号△もな▽ 四〇〇円

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 略号△もね▽ 四〇〇円

関谷富佐子

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号△もむ▽ 四〇〇円

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 略号△もう▽ 四〇〇円

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号△もき▽ 四〇〇円

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号△もこ▽ 四〇〇円

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号△もみ▽ 四〇〇円

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 略号△はゆ▽ 四〇〇円

投げたす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 略号△はよ▽ 五〇〇円

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 略号△はて▽ 五〇〇円

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号△はお▽ 四〇〇円

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 略号△はの▽ 五〇〇円

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号△はひ▽ 四〇〇円

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 略号△はわ▽ 五〇〇円

全裸の女体エビ縛り

大手札三枚一組 略号△はふ▽ 四〇〇円

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 略号△はほ▽ 四〇〇円

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 略号△はあ▽ 五〇〇円

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 略号△はう▽ 四〇〇円

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 略号△はさ▽ 五〇〇円

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 略号△はめ▽ 五〇〇円

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 略号△はし▽ 五〇〇円

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 略号△はも▽ 五〇〇円

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 略号△へむ▽ 四〇〇円

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 略号△へめ▽ 四〇〇円

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 略号△へも▽ 四〇〇円

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 略号△へさ▽ 四〇〇円

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 略号△へし▽ 五〇〇円

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 略号△へす▽ 五〇〇円

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 略号△へせ▽ 四〇〇円

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 略号△へゆ▽ 五〇〇円

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 略号△へた▽ 四〇〇円

厳しき縛緊の正坐責め

大手札四枚一組 略号△へち▽ 五〇〇円

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 略号△へつ▽ 五〇〇円

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 略号△へて▽ 五〇〇円

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 略号△へと▽ 五〇〇円

大島 照代



私は貴誌奇クを永年愛読している者です。五月号のカメラハント「縄は知っている」で辻村さんの紹介された笹原八千子さんに関心を持っておりましたところ、引続いて山本章氏のカメラポ「この女と」で笹原八千子さんのことを書いておられるのを見て、大いに興味を抱きました。甚だ無縁ながらお願いがあるのです。笹原八千子さんとお会いできるよう編集長の御配慮をいただけないかと存じます。これまで、かかるお願いを申し上げたことはございませんが、若し許されるならば御指定通り、また先様に対し節度ある態度

で終始いたすことを御約束いたします。よろしく御高配のほど重ねてお願い申し上げます。

(尼崎市・本川博)

私は十一年来の貴誌の愛読者です。初めて読者通信欄にお便りします。私は或る大衆小説で武士の切腹場面の挿絵を見て強烈なショックを受け、それ以来貴誌を読んできつてゆきました。この頃山田悦子さんはどうしていらっしやるでしょう。先月号にも貴重な体験が報告されていましたが、中々勇気と慎重さのいることで心から敬意を表します。私は若い女性が悲愴な覚悟で或いは甘美な陶酔のなかで悲壮な最期を遂げてゆく物語をいきいきと書いた、今までの貴誌への投稿者の方々へ心からお礼を申し上げます。

(神戸市長田区・宮川雅弘)

自分は創刊号以来の御誌の愛読者です。今より十五年も前の27年五、六月合併号以降、三十年頃迄とその後の復刊号頃の御誌は東京(渋谷、世田谷、新宿附近)では殆んど入手困難、又仮りに有った場合は非常に高価なものとなって

います。自分はM特集増刊号を除き、39年頃までは全部所蔵し、時々とり出しては読み返すのを楽しみにしております。いつみても何度読み返しても倦きないのは、御誌の魅力のしからしむるところでしょうか。折を見てS分のみを統合したいと二、三年来思っているのですが、却って最近毎月分さえ読み通すことが出来ずに居ります。尚、自分は読み且つフォトを見るのみで、実施の経験は全くありません。尚、東京「カジバシ座」の実演は何回か見ましたが、緊縛感が全くなく、貴誌によく紹介される秋山夫妻、青木順子の舞台を一度見てみたいと思います。

(東京・久米明)

長い間、KK誌を愛読していましたが、今回が初めての投稿です。今までは第三者的立場で諸先生方の作品や読者の方々の告白などを読んで楽しませてもらいましたが最近になって読者通信でもよいから小生の気持を誰かに知ってもらいたくペンをとりました。小生の好みは女性の緊縛の一言につきますが、それも花嫁姿、ウエディングドレス、カクテルドレス、エト

「新版Mフォト分譲」

馬乗り女王様行状記

大手札四枚一組 略号 一〇〇〇円

花田沙登子 略号 八〇〇円

両足の首絞め責め

大手札三枚一組 略号 八〇〇円

花田佐沙子 略号 八〇〇円

肩車の臀部に喘ぐ

大手札三枚一組 略号 八〇〇円

花田沙登子 略号 八〇〇円

女の臀部をかかす

大手札二枚一組 略号 六〇〇円

花田沙登子 略号 八〇〇円

足舐めの強制

大手札三枚一組 略号 八〇〇円

花田沙登子 略号 八〇〇円

女王様の牝犬調教

大手札八枚一組 略号 一五〇〇円

花田沙登子 略号 八〇〇円

セトラ、つまり正装した若い女性の緊縛に大いに魅かれます。静岡近辺に中川恵子様とか河森真理子様などのような話せる人がいないでしょうか。小生の夢はプレイをしたり、SM談義などを気楽に話し合える友人が欲しいということ。毎月、読者通信を真っ先に読んでいます。が、なかなか現われません。関西地方には時々おられるのに、わが静岡近辺には前記の人達のように、勇気のある女性がおられないのは、どうい

けでしょう。東海地方のM女性からの便りを待っています。

(静岡市・若宮雄彦)

白表紙以前からの愛読者です。初めてお便りします。グラビヤがなくなったのは非常に残念ですが、永続させるためには涙をのんで我慢しましょう。最近では映画やテレビ、更に雑誌でもSM傾向のものが多く見られますが、先日、珍しくラジオで耳にしました。ラジオ大阪の深夜にアナウンサーコーナーという番組がありますが、三月十六日、厳密に言えば、十七日の午前零時から……に残酷映画特集と題して「甘い暴力」「禁じられた世界」「コレクター」その他マカロニ・ウエスタンの曲等、たっぷり聞かせてくれました。そのシーンが目に入り浮んできて楽しい一ときでした。ピンク・プロの映画等、封切前に判ればありがたいのですがこれは無理でしょう。古いところでは「女女女物語」のシーン、「日本拷問刑罰

史」の火あぶりシーン等。ステイール写真を手に入れたのです。が、どなたかおゆずり下さいませんか。SMの男女が互いに会うのはいいのですが、それを悪用する人には注意したいものです。SMのファンがふえ、明かるい雰囲気プレイが出来ますように、希望します。

(大阪・B生)

山下洋子様。七月号のお便りを拝見し、大変喜しく思いました。私の身近かに貴女のような方がいたという事は夢のようです。私はこの五月で二十三才になりました。S的男性です。K・K誌は、貴女より先に読んでいました。貴女は女子大生とありましたが、どちらの学校でしょうか？ 私は北光線を利用してありますが、この線に沿って女子大が二校あります。時々一緒に乗り合わせる女子大生の中に、もしや貴方が？と夢のような事を考えています。貴女はアパートの一人住まい。そして、自分の体

縛り、K・K誌を読み「花と蛇」や「痴人の糧」「SMカメラハン」等に出て来る、縛られた主人公を自分と結びつけ、主人公と同じように「M」の恍惚に陥る。しかし、貴女の「M」は満足しない。貴女は、本当の「M」を求めているのです。貴女は「逆吊り」「乳房しぼり」「浣腸」等を好んでいらっしゃるようですね。その貴女の望みを、ぜひ私にかなえさせて下さい。必ずや貴女の満足を得るものと思います。勿論、秘密は絶対守ります。貴女と二人で、二人のプレイを撮したフィルムを引伸機で拡大し、次のプランをねる。思っただけでも胸がわくわくして来ます。貴女も写真技術が身につけられる。一石二鳥ではないでしょうか？ ぜひお便りを下さい。

(北海道札幌市・前原勉)

豊中の村中豊子様。私は七月号で貴女のことを知り、この人なら私と思っている事は同じだと思いき早くお便りする次第です。私は一人で文化住宅に住む二十七才のサラリーマンです。奇巧を読む度に何時も思うのですが、私も文中の人のように、女の人を自由自在に

縛ることが出来たらどんなにか人生が楽しいことだろうと。しかし仲々その機会がなく、又気弱さも手伝い、思うようにはなりませんでしたが貴女の文を読み思い切つて筆をとりました。長くもない人生を有意義に生きていくためにも好きな事をして楽しみたいと思います。私は一人です。で昼夜いづれでも結構です。もしこの文を御覧になってこんな私にでもお気があれば、他の同好の皆様からのお便りもお待ちしております。

(神戸市・若原生)

五月号の「サロン展望台」で紹介されて居りました桃源社刊「快樂の女性」を読みました。オーストラリアや婦人の全身の刺青は実に驚異に値します。日本でもあるそうです。が、昨年理容院で主婦に耳環を見せたところ、痛いことありませんかと聞かれましたので、こんな孔の一つや二つ、刺青する事を思えば何でもないかと答えました。すると、その老母が向かいの銭湯で背中一面に刺青をした婦人に度々会うと云って居ました。四十年前程前カフエー盛んな頃、女給がインシヤルを入れて居たのを

◎分譲品総目録◎

分譲品満載の豪華な目録を只今作成中です。切手五十円同封

の上、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号箕田京二宛御予約下されば完成次第第一号を直ちにお送りいたします。

十人程見ました。中には耳朶にハ
ートのかくし彫をしているのも見
せてくれました。又、その頃の新
聞の社会面で十五才のズベ公が十
三才の時、腕に星の入墨を情夫に
入れられて「流れ星のお梅」と自
称して盗みをしていて警察に捕え
られたという記事や、感化院に入
っていた十八才のズベ公が自分で
情夫のイニシャルを入れている処
を院長に見えられ叱責されて脱走
したという事が載っていたのを記
憶して居ります。三月号には表紙
と目次扉に鼻責があり、七月号に
も裏表紙に鼻責がありますが画が
小さいので十分に表現出来てい
ないのが物足りません。数年前の
「潰滅の前夜」の耳鼻環責めは鮮
明によく見えます。尚、橋本氏提
唱の鼻責の特集号、及び鼻責の同
好会については私も賛成致します
「快楽の女性」で私には意外の収
獲がありました。一八三頁の解説
の中にオーストラリア美人の刺環
(穿孔)耳と鼻に環を嵌めている
フォト記事がありました。又東京
周辺で本格的に穿孔している女性
があると出ていましたが、私は外
出の際は行ききずりの女性の耳朶
を見て形のよい垂跡の美しい豊か
な耳を見ると堪まらない衝動を受

けますが、戦後二十二年で穿孔し
ている女性は僅か十人足らずで、
何れも引揚者らしいです。去年の
秋は神戸で二十才位の女性が穿孔
していました。又最近の週刊誌の
アクセサリーという記事フォト
で二人見つけました。

(京都・耳鼻環生)

「これ下さい」と云った時、声が
ふるえ、顔が上気してくるのを自
覚しました。書店の片隅に隠すよ
うに置かれた雑誌の中から奇ク七
月号をふと手にした時から私の前
には新しい世界が開かれました。
大急ぎで帰宅した私は一息に読み
下しました。友人と好みが多少異
なる事は薄々感じていましたが、奇
クによって私の隠されていた性向
を、二四才にして始めて眼前に晒
された気がしました。各記事、興
味深く読ませて載きました。特に
辻村氏及び山本氏になるルポを
読んだ時は、その情景が想像さ
れ体がふるえる感じでした。後で
読み返してみても同じような興奮
を覚えます。今後の両氏に一層の
期待をして居ります。その他「花
と蛇」「拷問屋敷」「縄のある蜜
月」どれも皆面白く読ませて載き
ました。同じ、S的フィクション

〔最近作緊縛傑作フォト〕

開股竹棒羞恥責め 大手札三枚一組 略号「ねろ」 中河 恵子 四〇〇円	逆エビ責め手足縛り 大手札三枚一組 略号「ねき」 中河 恵子 四〇〇円	竹棒開股強烈繋り 大手札三枚一組 略号「ねく」 中河 恵子 四〇〇円	鼻責めと鼻孔大写真 大手札三枚一組 略号「ねけ」 中河 恵子 四〇〇円	首縄後手強烈縛り 大手札三枚一組 略号「ねこ」 中河 恵子 四〇〇円	全裸開股膝頭縛り 大手札三枚一組 略号「ねさ」 中河 恵子 四〇〇円	菱縄縛り竹棒責め 大手札三枚一組 略号「ねし」 中河 恵子 四〇〇円	柔肌に喰込む縄目 大手札三枚一組 略号「ねす」 大島 照代 四〇〇円	豊満な全裸を弄る 大手札三枚一組 略号「ねせ」 大島 照代 四〇〇円	逆エビに痛める魔手 大手札三枚一組 略号「ねそ」 大島 照代 四〇〇円	黒髪をいたぶる手 大手札四枚一組 略号「そや」 大島 照代 五〇〇円
強烈後手縛りの狂態 大手札四枚一組 略号「そき」 大島 照代 五〇〇円	牝犬奴隷の醜態 大手札四枚一組 略号「そよ」 大島 照代 五〇〇円	全裸二つ折り縛り 大手札四枚一組 略号「そむ」 中河 恵子 五〇〇円	菱縄しばりの表情 大手札四枚一組 略号「その」 中河 恵子 五〇〇円	八の字開股羞恥責め 大手札四枚一組 略号「そか」 中河 恵子 五〇〇円	菱縄縛りの全裸を晒す 大手札四枚一組 略号「そえ」 中河 恵子 五〇〇円	奴隷捨札開股縛り 大手札三枚一組 略号「きむ」 木村 洋子 四〇〇円	菱縄強烈開股縛り 大手札三枚一組 略号「きま」 木村 洋子 四〇〇円	竹柱立縛り晒し者 大手札三枚一組 略号「きみ」 木村 洋子 四〇〇円	柱宙縛り苦痛表情 大手札三枚一組 略号「きめ」 木村 洋子 四〇〇円	猿轡股間縛り歩き 大手札三枚一組 略号「きも」 木村 洋子 四〇〇円

でも「ミモザ館」は少し残酷にすぎ、私の嗜好には合わないようです。女性の羞恥心を踏みにじりながら体に傷をつけずに、様々な拷問で責めたてるのが理想です。今後の注文としては、文献誌としての奇クが、より具体的に実行及び応用可能な記事を多く掲載されるよう望みます。山下洋子様。孤独に苦しむ仲間が同じ土地にいる事を読者通信で知りました。まだ異性は怖く、同性の相手をお捜しの様子ですが、似たような環境の下で、同様な悩みを持つ私と交際願えません。必ず互に理解し合ってお互の心の隙間を満たし合えるものと確信します。性急なおつき合いでなくて結構です。御返事をお待ちして居ります。

(札幌・K・S生)

目出鯛三です。毎号つたない雑文を投稿、厚意ある編集部の皆様のおかげです。何分にも文才のない小生であり、いくつかのエピソードを持ち乍らまとめることが出来ず、自分自身を情けなく思っている次第。今後とも別項「サロン展望台」続けて行きたく思っておりますので、よろしくお願い

申し上げます。さて、F、M、Eの皆様、又、S派の女性愛読者の皆様、すでに小生の投稿御一読のことと存じ詳細は省略申し上げますが、マニア同志の文通をお願いしたいものと存じます。如何でしょうか。又、女性ファンの中で、どなたかこの哀れなPANマニアの為に、あなたの使用済の汚れた下着かチリシをおゆすり下さる方はいないでしょうか。花原さまの名文、毎号楽しみに拝見させて頂いております。FでありMの小生女王様に御奉仕し、心ゆくまで存分にお楽しみ願うことを念願し夢想している目出鯛三です。どうか全国のS女性の皆様、あなたの尻の下に埋くまるのを最大の喜びと願望しているMFの小生にお声をかけては頂けないでしょうか。二十八才、独身の男性で容姿は十人並、決して見苦しい方ではありません。

(愛知・目出鯛三)

六月号は珠玉の短篇があった。この読者通信に載った神下信昌氏の作。これは先ず随筆というべきだが、初めて読んだ時には一個の小説として……それ程にこの文章は私を嬉しがらせた。先ず文章が

サラリと軽く流した感じで洗練されている。一カ所不満があったが先ずよく、後になるほど冴えて来るので、読み終わった時の感じが全く好い。この月は「花と蛇」さえも私には影が薄かった。さて、この材料で「懸賞」に応募していたとしたら、先ずこれ程のものは書けなかったでしょう。矢張り、彼はちよっとした短篇の随筆を書いた時に最上のもを觀せるのではあるまいか(あまり大胆な推論でしょうか)。どうでしょう神下さん。このような、ちよっとした随筆を毎月完結でもよいから連載しては。勿論、編集者諸氏が載せてくれる話だが、旨く行けば専用欄を設けてくれるかも知れないし、それが駄目でも毎月この読者通信に投稿すれば、楽しみにしていただけます。但し私の期待が負担にならない様。書けなければ結構。時を待ちます。未だ奇クより金を貰うわけでもないでしょうから。日浅い読者初めて投稿す。以上の事が言いたくて。

(愛知・知人知不言知事)

奇ク愛読者の皆様、お元気ですか。僕は、奇クを読みはじめてからもう八年ぐらいになる者です。

がプレイどころか奇クファンの方々に会って話したこともありません。僕はSなのですが、Mの傾向も下着フェチの傾向も、その他、色々まざっています。やはりSだと自覚しています。今日、読者通信へ投書したのは、やはりMの女性と、プレイまでは出来なくてよいから、せめて話相手になってくれる女性を求めています。出来れば岡山県内、又は福山地方の方、どうぞ御便りを下さい。

(岡山・三宅正)

五月号の菅野弘様、貴方の果てぬ夢、楽しく拝見させて頂きました。私も貴方と同じ様なことから流腸に興味を持ちました。ただ、私には流腸について話せるような知り合いがありません。特に女性は一人もいません。やはりマニアとしては、異性の流腸に対する考えなどを聞きたいと思うのは当然だと思います。奇クの誌上などで拝見すると、皆様の中にも私と同じように思っている方がいらっしゃると思います。その中の幾人かの方は、すでに他の方との文通や、プレイをなさっていらっしやるでしょう。私も、そのような方々のお仲間に入れていただき

たく思います。又、どなたかお便りを下さいますでしょうか。私は同じ年頃の二十一、二才の女性の方との文通を望んでいます。文通や実際にお会いして、浣腸についてのお話しやお気持ちをお聞きたいとおもっています。また、出来ればプレイもいたしたいとおもっています。浣腸に興味をお持ちの方、是非お便り下さい。

(東京・美津野卓史)

村中豊子様、小生は軽度のSですが、M女性の良きお相手があればと常々想っておりましたところ七月号にて貴女の御投稿を拝見、早速ペンを執ったような次第です。先ず自己紹介をさせて頂きませんが小生は三十四才の会社員、身長一六七センチ、体重五十七キロ、趣味は囲碁(四段)音楽(歌謡曲)卓球等です。誌上にての詳述は長びきますので、何れにしても一度拝眉の上にて、お互いが意気投合すればプレイをお願い致したく、日時、場所及び目印を指定させていただきます。是非御来所下さい八月五日(土曜日)午後四時〜四時半、梅田第一生命ビル一階、日本航空入口前。小生の目印は右手小指に包帯をし、蝶ネクタイ及

び眼鏡を着用しておりますので貴女も右手小指に包帯をされてお出で下さい。その方がお互いの目印になって好都合と存じます。尚、万一、御都合が悪くて来られなかった場合は、次週の八月十二日(土曜日)に同場所、同時刻、同目印でお待ち致します。では、委細拝眉の折、万々願ひ上げます。その日を楽しみにしております。

(大阪市北区・谷口生)

二十二です。男です。学生です。スポーツが好きです。高校時代、アメリカン・フットボールをやっていました。女の人が好きです。裸の美しさに憧れます。縛られていた女の人が好きです。その魅力は文字には書けません。奇くを店頭で見た時、夢かと疑いました。なぜなら、それまで夢見続けて来た事が奇くに載っていたからです。僕は今年二十二になりました。女性の緊縛写真を見ているだけでは満足できなくなりました。他人がプレイした話を聞いているだけでは、満足できなくなりました。僕は考えます。本の奇くは満足させてくれません。素敵な女性を見つづけることを考えます。同じ望みを持つ男性は多いようです。

読者通信の欄を読めばわかります。でも奇くに投稿して、僕の気持ちを伝える以外に方法はなさそうです。多くの男性の中で、しかも見ず知らずの僕の所に来てくれる女性はこの世にいるだろうか、ほとんどいないと思います。でも僕は書きます。万が一の可能性のために河森真理子様、貴女のような女性が欲しいのです。いつか、どこかで貴女と会っていたら、僕は夢見ずにはいられません。会ったとしても、貴女を知ることができようかと思ひながら……僕はある日、ある所で貴女が奇くを買っているのを見つけました。貴女はそれを小脇にかかえて足速に歩き始めました。僕は夢中で貴女の跡を追います。追いつこうと想えば追いつけませんが、何を言い出していいかわかりません。高なる胸をやっとの思いで押さえながら、貴女の後を歩きます。と貴女は立ちどまると後を振り返ります。そこには顔を赤くして息をはずませた男が立っています。その時、貴女はどうするでしょう。僕は何と云うことができるでしょうか。多分それで終り。そこから生まれるものは何もありません。小心さと、いくじのなさを悔みながら僕

「最新撮影Mフォト」

パンプスの下にあえぐ

大手札十枚一組 二〇〇〇円
新版Mフォト 略号ハわそV

首の股責め十態

大手札十枚一組 二〇〇〇円
新版Mフォト 略号ハわよV

緊縛虐待への過程

大手札十枚一組 二〇〇〇円
新版Mフォト 略号ハわたV

臀部の下にうごめく

大手札十枚一組 二〇〇〇円
新版Mフォト 略号ハわれV

は貴女の後姿を茫然と見送るでしょう僕の性癖を特に悪者には考えておりません。大声で吹聴し歩くことはありませんが、じめじめ、コソコソ隠すようなことはしておりません。僕の数ある趣味の一つと考えています。でも秘密にした人もあると思います。その時は守ります。秘密を。僕は男です。夢でプレイするのにくたびれました。だれか、素敵な女性が僕の前に現われないものでしょうか。以前、奇くが僕の夢を現実にしてくれたように。

(東京・上野俊秀)

○ 私は奇クを数年前から愛読いたしております。単なる読書の楽しみのみで、とうていプレイまでは実行する気は今の所ありません。小説では、無限の想像力で自由にこの世界で遊べますが、現実の生活にそれが入ってくると、種々の社会的制約で、その喜びが味わえるか疑問です。セックス(この場合、普通一般)にMSが刺激剤として加えられるのが、社会人の正しい生き方だと思います。その点夫婦プレイ出来る方は、理想的だと思います。MSは生活の一部で全部であるなんて事は不幸だと思います。私も、小説が好きですが読んでいる間のみで、普通、町を歩いていて、あの女をムチ打ってみたいとは別に思いません。私はSですが、文通を望まれる方がございましたら誌上でお知らせ下さい。奇クの発展を祈ってペンをおきます。

(大阪城東・西条道夫)

○ 六、七月号と内容は充実して来ましたが、妊娠美に関するものが一つもないのは、淋しい限りだ。増田夫人が妊娠中は、毎号すばらしい写真やレポートで、楽しませてく

れたが、それ以後、どうもパツとしない。われわれとしては、愛知葉子さんの臨月写真に期待したのだが、全然、姿をみられなかったのは、なぜだろう。編集部あたりで、もっと「新人」を開拓してほしいものだ。妊娠美は、純粹のSやMとはちょっと質を異にするが、古来、これを女性美の極致とみなす人は少くない。ピカソにも確か妊婦を描いている作品があったと記憶している。奇クの読者の中にも、おそらくこの妊娠美ファンも多いと思うが、どなたか写真をプライベートにとられている方で分譲して下さい。人はおられないだろうか。謝礼はできるだけ致したいし、また小生のもっている資料や写真でご希望のものがあつたらおゆずりしてもいいと思っています。

(津阪・S M生)

○ 二、三年前より奇クを愛読しております。以前より読書通信に私の希望をと思いながら実行にうつすだけの勇気がありませんでした。が、今ここに思い切って心を高ならせながらペンを走らせました。本誌の写真、カメラハント等を見て私にも撮影をする機会がほしいなあと常に望んでおります。理由

は、女性美の追求にあります。しかし、あいにくモデルになつてくださる女性がなく、のぞみを果すことが出来ずにいます。写真の撮影の技術には自信があります。狭いですが、暗室も持っております。ので、現像も自分で出来ます。モデルになつてくださる女性の方がおらないでしょうか。また、二十——三十才ぐらいの女性の方で貴女の美と若さを写真にしようとめておきたいと思つてその機会に恵まれていない方、どうかよろしくおねがいいたします。私は二十二年の学生です。故に時間的に自由がきます。御返事おまちしております。

(大阪市・森一夫)

○ 前略、毎号、楽しく読ませて頂いております。最近誌面の充実ぶりが特に感じられ、心強い感じがります。編集部におかれても、いろいろの新企画をされていることと思ひますが、それにつきいささか私見を申し述べたく、何かの参考にしていただければ幸いです。一、対談、七月号の秋山氏との対談は読みごたえがありました。是非おねがいしたいものとしては辻村氏——団氏の対談です。辻村氏は「ハント」者としての心理を

団氏には「花と蛇」創作上の苦心(責めのアイデア)を語っていた。二、小説、現在M系統が特に弱いと思います。かつての「ヤプー」ほどでないにしても、今少しガッチリした本格物がほしい(できれば連載物を)。団氏のような準プロ作家の登場が望ましいのですが、無理でしょうか。三、資料、斎藤夜居のものは力作ですが映画、テレビ、雑誌、絵画、文学等に現われたSMに関連した資料の紹介、解説など。四、分譲品、(1)外人モデルの活用はできないものでしょうか。外人ヌードとして各ストリップ劇場に出演しているような女性に交渉できませんか。(2)特殊な分譲品として、ヌード写真、オブションブックス、ポルノグラフィなど。秘蔵限定版(値段はいくら高くてもいい)で「確実」な読者にのみ頒布する。普通の通信販売では当局にバレるおそれがあるから、絶対安全な方法を考えていただく。(3)現在の分譲写真、絵画は説明文だけで詳しいことは分らず、送ってもらってから失望することが多いので、別に粗悪なリプリントのようなものを各項目別(S、M、フェチなど)に作成していただき(カタログのような

もの)定価の二―三割程度の価格で頒布してもらいたい。そうすれば、こちらのほしいものだけ要求できるし、全体としてさばける量も多くなると思います。(4)、(2)の一方方法として本誌への寄稿者(本文と奇クサロン)にまず限定をされてはどうでしょうか。五、外国文献、アメリカを始め、ヨーロッパ諸国にも奇クに類似した文献、雑誌などの出版物が多いと思うのですが、我々ではその方面になかなか手がまわりかねるので(調査の方法も分らないので)編集部において調査、連絡、あっせん、紹介などを行っていただきたいのです。特に写真(グラフ)、絵画などは、外国語の読めない読者にも歓迎されると思うのですが。

(E・T生)

河森真理子さん、貴女が独身の男性を紹介してもらいたいという文をカメラハントで拝見。余りにも多すぎるS男性群の中で、貴女を得る幸運のむつかしさを知りながら、一応名乗りを挙げておきます。自己紹介しますと、私は二十三才、身長一六八センチ、四国出身、大阪の大学を卒業、現在金融機関勤務、アパート住いです。辻

村さんの説によれば、仕事とか将来の道に進まざるべき年なれど、僕のS性は、人生の空虚さを満たすような、趣味的、片手間のようなものではなく、もっと本質的、根本的なものだと思います。M女性を手に入れること、これなしには、いかに出世しようと金を得ようと僕の人生は失敗でしょうし、反対なら成功といってもいいでしょう。我々は、宿命の星の下に生まれており、この運命に忠実であるべきだろうと思っています。実際はS的欲望を満たしてくれる相手なしには一生の計も落着いて建て難いという方が正直な気持。糖尿病のおじさんと違って、若いスタミナ充分、毎月でも貴女の乳房を縛とパイプレーターで責め、一匹の獣にして悶えさせてみたいものです。今まで二十八才の女性を縛ったことがあります、Mでなかったもので僕も相手も十分満足というわけにはいきませんでした。僕はあゝ意味ではフェミニストらしく、女性の意志は尊重します。のんびり期待しながら待つというのは好みませんので、この通信が載った日の次の金曜日とその次の金曜日午後七時、我橋の道頓堀側、交番の前にはいますから少しでもそ

最新撮影総天然色 カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てきV

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てかV

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てくV

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てこV

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てまV

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てみV

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てむV

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てめV

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てもV

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てんV

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てるV

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円
大塚 啓子 略号八うおV

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦・大塚 略号八うてV

真紅の腰巻着用縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八うこV

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るむV

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るのV

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るおV

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るまV

羞らしいの真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るけV

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るふV

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るやV

の気があれば来て下さい。勤務が
終っていなくても、一寸抜け出し
て。貴女は独りよがりの妄想を描
くと笑うかもしれませんが、これ
以外に僕にどんな方法が残されて
いるでしょう。平凡な見合結婚で
満足しますか。少々の冒険は快楽
にとって必要だと思いませんか。

(大阪市住吉区・大森)

毎月、大変楽しく拝見致してお
ります。以前に二回程、通信して
おりますゴムマニヤです。私も妻
を得て毎日楽しく暮しています。
七月号の「憂愁の紅かほる夫人」
の皆様、ゴム下着が数多く発売さ
れているのを御存知ですか。ニュ
ーポート社では、色もピンク、黒
アメ色の数種類のゴムパンティ、
ゴムビキニ、バタフライ、ゴムス
リップ、ゴムタイツ、ゴムレオタ
ード、ゴムガードル、ブラジャ、
大人用オシメカバーも三種類、ゴ
ム製メンスパンドも二枚で、メン
スパンドで変ったものはメンス用
オシメカバーでアメゴム製、普通
のオシメカバーを少し小さくして
体にぴったりと合うようにし、股
の所は二重にゴムがあります。私
も妻にゴムパンティ、オシメカバ

ー、メンス用カバーとゴム製下着
三枚使用させています。なおニュ
ーポート社にはゴム下着の他に、
ナイロンの透明生地の種類下着が
数多くあり、カタログを見ている
だけで楽しいものです。最後にゴ
ムマニヤの皆様の投稿を楽しみに
しています。

(京都・奥村勇次郎)

女装した私を掃除、洗濯、その
他、雑用に使って下さる女性の方
にお便り下さい。私は下着から、そ
っくり女装し、可愛いエプロン
をしめて一日女装して働き通した
のです。或る時、主人(貴女)
は私につききりでこき使い、時々
無理な仕事を与え、わずかな手落
ちでも私を柱に縛りつけ、猿ぐつ
わをしてせっかんしたり恥ずかし
めたりするのです。もし意気投合
した方があって実現したならば、
私は、この平凡な人生にすばらし
い生きがいを感じることでしょ
う。又、女性同志として貴女と静
かにお話がしてみたいのです。女
装する品は持っていないので、
貴女に助言等していただき徐々に
揃えたいと思います。秘密は厳守
して下さい。お便りおねがいしま
す。返事は必ず書きます。

股間縛りの開股姿態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れよV

豆絞りの猿ぐつわ縛り
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村 洋子 略号八れむV

羞らいの股間縛り
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れにV

柱宙縛りに喘ぐ刺青女
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やかV

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れやV

高手小手に悶える全裸
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やきV

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れゆV

緊縛に映える入墨の肌
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やくV

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 略号二〇〇〇円
増田みゆき 略号八れえV

脱がされた緊縛刺青女体
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やもV

黒縄縛りの媚態

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れぬV

縄にのたうつ入墨裸身
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やしV

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村 洋子 略号八れぬV

腰巻一つで縛られる刺青女
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
山原 清子 略号八やみV

開股された股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
木村 洋子 略号八れのV

女相撲迫力投業連続動作
大手札十二枚一組 略号五〇〇〇円
大塚・東浦 略号八なるV

(東京・一男性)

奇クの読者層は広い。僻地でも
創刊当時から読者がいる。二十
六年頃までの奇クはすばらしいも
のであった。今は希小価値、当時
のものをひもといてみるのも楽し
み。しかし残念ながら自分は持つ

ていない。借りて見るだけだが、
さし絵が実によく書けている。S
M党の諸氏から旧誌の話も伺いた
いし、また裸のままの真実な交誼
を願う次第である。写真あれば書
面とともに本誌発行後一カ月間に
新宿区四谷局止中村宛にどうぞ。
全国の男女年令に関せず、SM談

義に花を咲かせたい。いかが。

(東京・中村生)

○ 杉津初江様、私はS的な二十三才の青年です。七月号、読者通信欄で、杉津様のお便り楽しく拝見いたしました。私がSを自覚いたしましたのは十九才のときからです。それ以後、いろいろな本などを読んで自分なりに空想してみたりしていましたが、なんだが物足りなくなり、今までプレーをするチャンスにめぐりあわずにおります。最近では、バスや電車の中で女性を見るたびに、この女性にはどんな縛り方がいかなどと思ったりしています。杉津様、この様な私ですが、出来ることなら文通を通じてお互いに理解を深めたく思います。なお、杉津様のプライバシーは絶対厳守いたしますから。お便りの来ることを楽しみに待っております。

(鹿児島・S生)

○ 前略、編集のお仕事をされている皆様、お元気いかがですか。私は奇クを読み始めてまだ日は浅いのですが、毎月発売日を一日千秋の思いで待っています。一男性愛読者です。数年前からS度を自覚

いたしまして一度もプレイをするチャンスにめぐりあわず今日にいたっております。七月号読者通信欄で兵庫県杉津初江様のお便り拝見いたし、文通をと思い手紙を出したわけです。まことに勝手ながら杉津様の住所がわかりますからお手数でしょうが同封の手紙を廻送して下さい。もしそれがかなわぬことでしたら、そちらの都合の良い時でいいですから、同封の手紙を開封して読者通信に載せてもらえれば幸いです。まことに勝手なお願いはかりでしたが最後に編集部の皆様の御健康をお祈り申し上げます。

(北九州・A生)

○ 大阪・小山公子様へ。前略、先月の奇譚クラブを拝見し、偶々、貴女の読者通信、大変興味深く拝見しました。私も貴女と趣味も性格も大変よく似ていて、こんなことをお便りするのにも大変な時間を費して今やっとお便りする決心をした次第です。つまり非常に貴女のような趣味を持ち乍らだれにも言いだせず、そのくせだれかにしてほしい、又だれかにしてあげたいという気持は人一倍強い方なのです。家内にも時々なぞをかけますが一向にのってくれず、まだま

だ貴女のようにするには時間と教育がいりそうです。貴女のお便りを見て、とびつく思いでお便りを書いてくる次第です。今後いろいろのことを御教示ねがいたくぜひお便り下さいますよう、くれぐれもお願ひ申しあげます。私は当年四十才、公社につとめる中堅社員、堺市に住み大阪市内に通勤しております。なお、お便りにありましたレスポンス云々は何かのことでわかりません。ぜひ御教示下さい。ではお便りお待ちしております。今後ともどうかよろしくおねがい申し上げます。豊中の村中豊子様、先日奇譚クラブの読者通信、大変興味深く拝見いたしました。私もSMファンですが大変おつくうで、考えるだけで今だに何も実行したことがありません。貴女のお便りで矢もたてもたまらず実行にうつしたくなり筆をとった次第です。ただし、私は時々K誌に掲載される浣腸記事に非常にひかれます。それも興味があるというだけで、だれとも相手をしたことがありませんので、よろしければ何でも御指導下さいませんか何しろ気が弱い性分で、こんなことを書くだけでも大変な勇気がいるぐらいで、ドキドキしながら書いて

ています。幸い貴女は方々へセールスにまわられるとのこと、私も大阪市内へ勤めておりますのでいつでもお会いするには都合がよいかと存じます。始めてのお便りで何を書いてよいかわかりませんが、ただもうだれかに実際に教えてほしい気持が一ぱいで筆をとった次第です。どうか御返信下さいますよう、くれぐれもお願ひ申し上げます。

(大阪市西淀川・大山正三)

○ 奇クの編集部及び読者の皆様お元気ですか。お便りしようと思いつく御無沙汰いたしておりますことをお許し下さい。いつも読者通信は楽しく皆様の声を聞かせて頂いておりますし、今回出た七月号「妖縛の果」も「誘拐」も大変面白く楽しいものでしたが(時世的に、むずかしいと思うが)もっとクスグリ責め、浣腸責め等がふんだんに取り入れられていたら私は、もっと楽しいものになったと思います。もっと夢など書きたいが、又、次の機会に告白として書かせて頂きます。奇クの御発展を祈っております。

(長野・茅野生)

暑い気節になりました。貴社様にはお交りごさいませんか。私は毎月出版の私の友の本、奇クを待ち遠しく思いながら見せていただいております。本日に目新しいアイデアで私をなぐさめていただいてうれしく思います。七月号を見

中河恵子新趣向写真

大手札印画紙極鮮明焼付フオート

片脚挙げて晒す裸身

大手札三枚一組 略号△とは 四〇〇円
中河 恵子

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組 略号△とは 四〇〇円
中河 恵子

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号△とは 四〇〇円
中河 恵子

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号△とは 四〇〇円
中河 恵子

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号△とは 四〇〇円
中河 恵子

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号△とは 四〇〇円
中河 恵子

乱痴騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号△とは 四〇〇円
中河 恵子

て私の思ったこと、私の希望などを述べさせていただきます。先ず「奴隷妻」のグラビヤですが、よくとれております。ただ縄を沢山かけて、まるで荷造りしたようです。後手縛りと股間縛り、すべて一文字ぐらいのがよいと思いまし

菱縄縛りで床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号△とは 四〇〇円
中河 恵子

八カ月の妊婦に革具責め

大手札四枚一組 略号△へぬ 五〇〇円
増田みゆき

九カ月の妊婦に首枷責め

大手札四枚一組 略号△へぬ 五〇〇円
増田みゆき

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号△とは 四〇〇円
中河 恵子

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号△とは 四〇〇円
中河 恵子

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号△とは 四〇〇円
中河 恵子

浣腸責めの美態開陳

大手札三枚一組 略号△とは 四〇〇円
中河 恵子

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号△とは 四〇〇円
中河 恵子

た。又、「煙草責」もまるで一ぶくしているようで、画面に迫力が少なすぎます。股間の縄がゆるんで見えます。もう少し考えて下さいね。いいたいことははっきりいいます。これも愛読者として、貴社の奇クがかわいから申します。のでどうか気にとめないで下さい。七月号にはナミオ様の画がないので物足りなく思いました。ぜひ次号にはのせて下さい。私が先日、見たことをお話しします。これが貴社様に役に立つことであつたら幸せと思います。私が山に珍石を探しに行ったときのことです。あちらこちらと探しましたが思つた石が見つからず、日も少し西に傾むいたので帰ろうとしてひよいとどての草むらを見ました。すると十米ほど先に、年の頃は二十才ぐらいの若い女性が立っていました。そして右手になにかつかんでいます。私は少し近づいていきま

した。先方は気がつきません。その人のつかんだものが動くようなので、よく見ると蛙です。私も変な女性だと思ひながら物好きにもじつと見ておりました。するとその女性は、その蛙を服の中に入れてその場に腰を下ろしました。そして空を見てうっとりしている様子です。私は帰りがおそくなるのでその場を気づかれぬようにそつと立ち去りました。しかし後で考えたのですが、その女性は生きた蛙がぴちぴち動く感触を楽しんでいたのではないかと思います。このような人は、なんというのですか教えて下さい。先日お便りを書きました。私は大きい女性に引かれます。私自身は小男ですが少し肥っており。大きい女性も三十才までの人なのです。読者通信にも意見が述べられています。モデルは大きく肥った女性になるべくして下さい。迫力があつてよいのです。私は文学とかむつかしいことはきらいです。ざっくばらんで行きたいのです。私の夢をかなえて下さる女性は本当におられないでしょうか。お便りでも出来たら……と思います。御連絡下さいますように、おねがいいたします。(M生)

私、昭和三〇年頃より貴誌を愛読、KK通信なども楽しく読ませていただいております。さて私はビル経営のかたわら、運命学の一つである四柱推命を研究いたしております。以前よりSなりMなる性癖をもつ人々の運気を研究した

く存じていました。がチャンスもなく今日まで過しましたが、何とか研究したくとも材料もなく、御相談するわけであり。四柱推命というものを御存知ないかもしれませんが、運命学の中でも最も確率の高いものですが、修得がきわめてむずかしく手相、易のように一般大衆化していません。私も「現代四柱推命直訳」という著書があり、いささか研究しているものであります。運気判断は生年月日と生時で行います。未だSなりMなりの性格判断の研究をやっている人はおらず、私なりにその研究をやってみたく思っています。出来ればSなりMなりの人の男女の別と生年月日時（生時が不明なればそれでも結構です）お教え願えれば幸甚なのですが如何でございましょう。少なくとも五〇人なり一〇〇人位の統計を取れば大凡のけんとうはつくと思います。このろみにハッキリしているMなりSなりの人の男女別と、生年月日（時間）少なくとも四、五人お教え願えませんか。折りかえし判断をして御知らせしたいと存じます。しかし正確な生年月日ではないと困ります。如何なものでしょうか。（東京渋谷・森一夫）

○ 奇クファンの皆様、ご無沙汰をしました。その後お変わりなくそれぞれの職場で活躍のことと存じます。最近余りにも好天気が続き少し許り雨が恋しくなってきました。三〇ミリの位の雨量で二日許り総てがカサカサに乾ききつており思わぜぶりの蟬の小便位とチラリと覗く雨雲。サテ本題に。又、私の体内に潜伏していたM害虫が暴れさわぎ出しまして通信通信と申しますので、止む得ず（本当か）というわけで書かせてもらいます。どうぞよろしく。毎月の通信を楽しく拝見させていただいております。新しい方も通信しております。ことは私達にとりましてうれしいことです。又、呼びかけに対しての応答うらやましくもあり、反面私には美樹生様よりございましたが、その他はなく、どこか自分自身に判らない欠点でもと淋しいかぎりです。S女性+器具責衣+M II 快楽の公式ですが、SさえおらなければMの存在なんて成り立たず、奇クもないでしょう。けれどこの地球上のすべての生物の中に形こそ違いますが存在しています。私みたいなM害虫にも毎日なやみがあります。へたくそな過去の、

増田みゆき双胎臨月蛙腹 大手札印画紙極鮮明焼付 〔双胎臨月蛙腹鑑賞〕 増田みゆき 略号 八りけ 五〇〇円		〔仰臥する臨月の蛙腹〕 増田みゆき 略号 八りね 五〇〇円	
〔明瞭な臨月の妊娠線〕 増田みゆき 略号 八りき 五〇〇円		〔亀甲縛りの妊孕美〕 増田みゆき 略号 八りた 五〇〇円	
〔全裸の臨月腹鑑賞〕 増田みゆき 略号 八りす 五〇〇円		〔臨月後手縛り引き回し〕 増田みゆき 略号 八りし 五〇〇円	
〔双胎臨月腹の威容〕 増田みゆき 略号 八りて 五〇〇円		〔臨月の乳房縛りで弄る〕 増田みゆき 略号 八りさ 五〇〇円	
〔垂れた太鼓腹の陳列〕 増田みゆき 略号 八りな 五〇〇円		〔乳房緊縛の臨月腹〕 増田みゆき 略号 八りち 五〇〇円	
〔臨月蛙腹のアップ〕 増田みゆき 略号 八りに 五〇〇円		〔浣腸される臨月妊婦〕 増田みゆき 略号 八りひ 四〇〇円	
〔便々たる臨月蛙腹〕 増田みゆき 略号 八りは 五〇〇円		〔双胎の臨月剝玉子腹〕 増田みゆき 略号 八りふ 五〇〇円	
〔蛙腹に腹帯をする〕 増田みゆき 略号 八りへ 五〇〇円		〔臨月妊婦豆絞りの猿ぐつわ〕 増田みゆき 略号 八りの 五〇〇円	
〔誇示する双生児腹〕 増田みゆき 略号 八りま 五〇〇円		〔臨月腹に革具装着〕 増田みゆき 略号 八りむ 五〇〇円	

あわれなほどの通信（呼びかけ）を、ファンでしたら嫌や？というほど目にとまり読まれたと思います。貴重な誌上をわけていただき、あまりくどくはしるしませんが、お裁縫以外でしたら、一般のお手伝いさんに負けません。昔風の呼称で女中さん、男中でしょう。す

なわち拭き掃除、お料理、お洗濯、運転、お仕事の合間に鼻鎖で拘束か又手足のいずれかを鎖でつないで下さい。あまり、いや正式のプレイはまだですが、色々の奉仕をしたり、強制も勿論あるでしょう。女性みたいな曲芸切り等は駄目です、当然なことですが。それ故、未来の御主人様には健康であってほしいのです。私とて年四回の定期健診で、普通の健康状態でした。ただし低血圧です。先方では生まれつきとなくさめられました。それに加え、少し気管支が弱いんです。先方の年令には制限なんて大それた気持はありません。私の年令と少しばかりの内容は再三記しましたが、距離が一つの大事な点でしょう。私なんて平凡な者で、お呼びかけ下されば御主人様の住所宛、指定の場所に私に関する詳細を報告させてもらいます。一回はテストして下されば好都合です。よく誌上で、秘密厳守、プライベートに関しては……とありますが、今更奇クファンである以上、不見識な行為をする筈はないのです。あたり前のことが守られない世の中ですが良識に従って、但し一部には通信を悪用するものもおりますが、奇クでは難

しいでしょう。一流新聞でもインチキな広告を載せている現状ですが、みんなで立ち入る余地を与えないようにしなくては……。私は一部からだに変わったことをしており、毎日鋭意努力中です。一見して、なんだそんなのは、といわれるでしょうが。京都市の耳鼻環生様、久しぶりです。通信を楽しく拝見いたしました。少しいいわけのようにもなりますが、鼻孔につきまして伊勢湾台風の翌年？より穿孔を開始しまして、多分五ミリぐらいの時に孔が縮少いたしましたので、火ばしの先端を一センチぐらいにまげて焼いて孔に挿入、内側を焼きました。二回くり返し苦痛で鼻水と涙でクチャクチャになりました、孔の周囲も白くそしてかたくなりました。数日後、化膿しましたが、それから径を大きくし最大十四ミリになりました。縮少防止のため特製の鼻栓を挿入しましたが、最初、穿孔の位置が前すぎ、鼻障子の先がちぎれそうになりました。やはり鼻の軟骨にかけて穿孔すればと、今になって後悔いたしております。普通なら縮少するはずですが現在の私の焼いて肉体の組織が破かいされましたので、多分、栓

を抜いても縮少しないと思えます。けど栓を抜いて二日も過ぎたこともなく、会社、家庭、通勤バス等でわかると困りますので挿入したわけです。バスの中では左右に女性がおりますと、窓上の広告を見る風に顔をあげたりします。すると横から見ると鼻栓がわかります。しかし、ハテ何んだろう、ぐらいに思うだけです。けれども同性の場合は、その反対です。相手にわからぬように出来るだけうつむいて顔を新聞などでかくすようにします。又、私は一時太腿の内側に二ミリの針を通して管を通しましたが、化膿しそうになり抜きました。私は本当にM害虫でしょうか。六月下旬から九月上旬まで、谷間、山林での樹木や小川、柿の木、岩、水車などを利用してプレイをすることを夢みていた始末です。では、これにて失礼します。(名古屋・ME生)

○ 拝啓、貴誌ますます御隆盛の段お喜び申し上げます。奇クを毎月たのしく愛読いたしております。なかでも辻村隆氏のカメラハント山本一章氏のカメラポなどおもしろく拝見、毎月どのような女性が登場するか楽しみで、奇クの発売日が待ち遠しく首を長くして待っています。又、山口氏の「地底の国」一郎、啓子、和子、典子、洋子の五人が今後、ワスピアンメリーとリーナにどのような実験台にされるか興味のある読物です。どうか今後とも楽しい読物、興味ある写真、挿画を掲載して下さい。本誌の発展を祈ります。(和歌山・A生)

○ 六月号、とても楽しく読ませてもらいました。特に一番初めに読む「花と蛇」ですが、空手を使う気強い京子が、二人のシスターポイによってだんだんと責められ普通では味わえない喜びを感じるようになって、二人がいなくは生きていけない女になりつつある姿がよく出ていました。いつも読むたびに僕も、この「花と蛇」に書いてあるようにして、女性を責めてみたいと思っています。誰にもいえないこの胸の内をわかってくれる女性がいたら、どんなにすばらしいことでしょう。先月号に道内の方に呼びかけましたが、全然音信がありません。僕は決して不真面目な男でないことを皆さんにわかってほしくてたまりません。ぜひ文通なり、一度お会いして確

次号(十月号)は、八月二十五日に発売します。

かめて下さい。きつとわかると思います。SMプレーによって、真の自分を生かそうではありませんか。又、夫婦の方に少しでも手助けをしてあげたいと思います。今までにプレイの経験はありませんのでこの機会にぜひ実験させたいと思っています。それから内地の女性の方、浣腸、縛り等の体験話などお便りを下さい。必ず返事は差し上げます。

(旭川市・芳村一郎)

私は奇クの愛読者です。はじめにおたよりいたします。私は奇クをよんでおむつマニアの案外多いことにおどろきました。私とおむつとのつきあいは十七の時から始まります。十七才の時、交通事故で右足を骨折し、そのとき、用便の時の便器になじまなく、そしておしめカバーをされ、その時より、そのみりよくにとりつかれ、そしてわすれることが出来なくなつたのです。私は今はある商社会社に事務員としてつとめています。が、会社がおわるとすぐ家に帰りおしめをしてそれからおもむろに

すいじをします。夜はおしめをあてたまねてあくる朝になると、そのおしめをはずし、そうじをしてから、しまい、こんどは浣腸をして十分ぐらいがまんしてからトイレへ行き、そしてそうかいな気分では会社へでかけます。ざっとこんなぐあいですが、なお、現在使用中の物でよければさしあげます。さしあげるものは、おむつカバー3枚、おむつ20枚、浣腸器三〇〇cc 2本、二〇〇cc 3本、どなたでもおたより下さい。無学のため乱筆おゆるし下さい。

(神戸市兵庫区・山下和子)

始めてお便り致します。私も奇クファンの一で読み出してから五年になります。実にすばらしい本で、毎月二十五日が楽しみです。前からお便りを出そう出そうと思いつつなかなか出せずにいましたが、今度思いきって書いてみました。私は女性の下着がとても好きです。それでよく体につけております。ここ一、二年前から女性をいじめてみたいと思う様になり近頃は毎日の様に思っております。

す。それで一度女性とプレイ致したく、いやがる女性の衣服をぬがしブラジャーとパンティだけにした後、股間縛りにして足でふみつけてころがします。そんな女体をつねたりくすぐったりします。

この様な事を思うと体中がかつかと熱くなってきました。6月号の手記で「かなわぬ夢」を見た私は、自分もあの様な責めにあってみたいと思いました。女学生の服を着せられ後手に縛られてころがされたり又通勤着に黒のブルマーをはかされ、エビ縛り、柱縛りにされる。今度はブラジャーに紫のパンティをはかされ、青い靴下、赤いガーターをはかされ後手股間縛りで眺めまわされ、ムチ打ち、つねり、足蹴にされ、縄の痛さでうめき苦しみます。次に両手を上に吊り上げて縛られ、爪先立って頭にネックチーフをかぶり、ブラジャーにパンティ、青いストッキングに白いガーターでムチ打ち、ムチの痛さと縄の痛さでうめき泣き出してしまいます。ああ、こんなに私をいじめてくれる人はありませんか。もしそうならば、どんなに幸でしょう。でもまだ一度もプレイした事がなく思っているだけです。私は二十六才、一六三センチ

四九キロ、色白で、ややせ型です。長々と書きましたが、どうか皆様私を笑わないで下さい。全国の奇クの皆様もお元気で、さようなら。(京都市右京区・栖川義正)

○

村中豊子様、七月号通信欄、面白く拝読しました。私は本年四十才になるサラリーマンですが、今までに緊縛プレイは何度も経験しております。貴女が初めてでしたら一度やってみませんか。私の好みは、どちらかといえば緊縛オシリで、責めも緊縛第一の責めしか興味をもちません。それだけに緊縛は相当自信があるつもりで貴女を落たんさせるようなことはありません。八月五日土曜日、午後三時三十分から四時半まで、名神豊中インターチェンジ出口、名神高速バス停附近で待ちます。目印は車の後部バンパーにSのテープを貼っておきますが、貴女もサングラスに週刊誌を丸めてもって下さい。(神戸・熊野一郎)

○

東から登場の横綱、安西五十鈴三十三才、五尺二寸、十八貫五百色あくまで白く見事に肥った女体長い髪をぐっとアップに結い上げて、こぼれんばかりの色気をただ

よわせての登場、対するは新進気鋭、弱冠二十才、今売り出し中の新小結、三沢みどり、五尺三寸、十三貫のすらりとした長身、きりっとした清楚な美しさ。さあ、立った！がんとぶつかる三沢、右から左とうまく差してずぶり双差し顔を横綱の胸へうけて喰い下がる横綱上手がとれず苦戦。そして、一分、二分、はげしい攻防がつづく。充分に喰い下り善戦健斗の新進三役。横綱十八貫余の肥体、一重、二重と大きくゆるんで乳房まで上がり、白い巨腹ははげしく波打ちつづけ、全く苦しげ。更に攻めつづける三沢の寄り吊り横綱の禪は結び目もほどけ始める……

「アアッ……」思わず悲鳴あがる横綱、ぐいぐいよる小結、遂にベテラン横綱の禪はするするとほどけ落ちて、十八貫の熟し切った肥体は一糸なき全裸へ。ここぞと強烈なすくい投げ一回、二回、遂に大横綱の巨体こらえ切れずもんどり打って大きく横転、ぶざまに転がる白い肥体！こんな女斗美の絵物語を書き始めてもう数十番にもなります。でっけい肥った中年の女性を徹底的に痛めつけ責めつけ責めさいなみたい私。たとえば水野香代夫人の艶姿を。同好の方がおられましたら、共に声を大にしてお水野夫人の分譲写真の実現を叫びましょう。なるべく全裸のも

のを。そしてより数多くを。

(京都・高峰剣一)

奇クを愛読されている女性の皆様、ご機嫌如何ですか。貴女方から声をかけて欲しくて、やむにやまれずペンを取りました、初めてする僕のお便りどうか最後まで読んで下さいね。あるステーション・デパートの書店で奇クを初めて見つけ片隅でそっとページをめくり立ち読みしたのはもう五、六年前のことです、他の雑誌にくらべ奇クは一度読み味を覚えるとやみつきになり、買わずにはおられない不思議な魅力を感じた類のない雑誌です、最近では月一回の

発売日が待ち遠しくて千秋の想いどころではありません。僕は子供の頃いたずらっ子で、母に叱られた手足やお尻にお灸をすえられたものです、愛煙家でもあった母は、タバコの火をあてたことも有りませんでした、その故か知らないが、今ではお灸にたまらない魅力を感じています、又、駅の待合室や喫茶店等でタバコを吸っていられる若い女性を見ると、すごく興奮してくるのです、片田舎をぬけ出し加賀百万石の城下町金沢で安定した職場を見つけ、目下一人暮らしの楽しさにとろけている次第です。

(金沢市・吉田生)

本誌既刊号在庫一覧表

申し上げます。

既刊雑誌在庫案内

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、39年に発行のものについては在庫の僅少な御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担してまいりましたが、今後は三カ月以上予約注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包Vにて発送

昭和39年6月号	(送共二七〇円)
昭和39年7月号	(送共三二〇円)
昭和39年8月号	(送共三二〇円)
昭和39年9月号	(送共三二〇円)
昭和39年10月号	(送共三二〇円)
昭和39年11月号	(送共三二〇円)
昭和39年12月号	(送共三二〇円)
昭和40年1月号	(送共三二〇円)

昭和40年2月号	(送共三二〇円)
昭和40年3月号	(送共三二〇円)
昭和40年4月号	(送共三二〇円)
昭和40年5月号	(送共三二〇円)
昭和40年6月号	(送共三二〇円)
昭和40年7月号	(送共三二〇円)
昭和40年8月号	(送共三二〇円)
昭和40年9月号	(送共三二〇円)
昭和40年10月号	(送共三二〇円)
昭和40年11月号	(送共三二〇円)
昭和40年12月号	(送共三二〇円)
昭和41年1月号	(送共三二〇円)
昭和41年2月号	(送共三二〇円)
昭和41年3月号	(送共三二〇円)
昭和41年4月号	(送共三二〇円)

昭和41年5月号	(送共三二〇円)
昭和41年6月号	(送共三二〇円)
昭和41年7月号	(送共三二〇円)
昭和41年8月号	(送共三二〇円)
昭和41年9月号	(送共三二〇円)
昭和41年10月号	(送共三二〇円)
昭和41年11月号	(送共三二〇円)
昭和41年12月号	(送共三二〇円)
昭和42年1月号	(送共三二〇円)
昭和42年2月号	(送共三二〇円)
昭和42年3月号	(送共三二〇円)
昭和42年4月号	(送共三二〇円)
昭和42年5月号	(送共三二〇円)
昭和42年6月号	(送共三二〇円)
昭和42年7月号	(送共三二〇円)
昭和42年8月号	(送共三二〇円)

☆編集後記☆

○原稿の締切を若干早めることを通知して依頼しておいたところ、東西奔走の多忙の中をさいて『鬼六談義』を送って呉れた。既に割付を終っていたトップの作品と入れ替え印刷に間に合うことが出来た。読者の評判もよく筆者も楽しく筆を走らせているという、この『八談義』を味読されたらと思う。

○本誌愛読者の美女左近麻里子嬢を偶然のきっかけからキャッチした山本章氏のカメラルポは、辻村氏の言うように、今面白くて仕方ない油の乗りきったところで益々快調。今後のハッスルを大いに期待したい。

○永らく中絶していた芳野眉美氏の連作『水中花』がスランプを脱した氏の手によって久

方ぶりに脚光を浴びた。再び往年の才筆が誌上を賑わすか否か。氏の復調を願うや切。

○真摯な研究家斎藤夜居氏の『人風俗資料入門』は掲載以来、その資料性を高く評価されオールドフアンの郷愁をかきたてているが、若い人達にも参考になることが多いと思う。

○懸賞応募作品の投稿が漸次増加してきたので、これはと思うものは、努めて掲載してゆきたいと考え、今月号でも若干発表した。読者の方々の御批評を得たいものと願う。尚読者投稿の『告白』も短いものながら、整理のついたものから掲載してみた。

○黒淵嬰一氏の『海嘯の譜』は力作なので一挙に掲載したかったのだが、枚数の都合で他を圧迫すると考えられたので残念ながら二回の分載にした。

◎懸賞原稿募集

△体験、告白、手記▽

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語▽

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のものに限り、若し引用する部分がありましたら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

△感想、論評、批判▽

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンにまとめて下さい。採用篇

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する希望の方には、代理部分譲品の中から御指定下されば、贈呈いたします。

☆本誌御購読の榮☆

一月分(1冊)三五〇円△送20円▽
三月分(3冊)一〇五〇円△送共▽
半年分(6冊)二一〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。毎月二十日前後、印刷完成と同時に重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

九月号

〔第二十一巻第九号〕
〔通刊第二三二号〕

昭和四十二年八月二十日 印刷
昭和四十二年九月一日 発行

編集人 箕田 京二
発行人 北村 俊夫
印刷人 北村 俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

△振替口座大阪四二七八三番▽
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大局特別取扱承認誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうち、本誌は充分に注意して編集いたしております。本誌成人向として発行を企図しており、下す関係上、十八才未満の方には絶対販売下されません。特にくれぐれもお願ひ申し上げます。